
ペルソナ 3 滅びの意志

三尺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3 滅びの意志

【Nコード】

N0464U

【作者名】

三尺

【あらすじ】

2010年3月5日、世界の終わりを食い止めた一人の少年が息を引き取った。だが如何なる運命の悪戯か、彼は戦いを始めた最初の時まで戻らされてしまう。果たして彼に何が起きたのか……。これはアトラスのゲーム「ペルソナ3」の二次創作小説です。ゲームをプレイしていないと、かなり分かりにくい話になると思います。ご注意ください。

止まる時（2010/1/31、3/5）

タルタロスと呼ばれる奇妙な塔――

月に向かって伸びるその巨大な塔は、いくつかの層に分かれて構成されている。ある層では世間に普通にある学校の内装のようであり、またある層では目も眩むような派手な装いを見せている。そして最も上に位置する第六層では、氷河期の地球を思わせる寒々しい白さに覆われていた。

その第六層の最上階には、この世で月に最も近い場所である屋上へと至る階段がある。その階段の手前で、上半身裸の一人の男が大勢の行く手を塞いでいた。人数的な不利を感じていないのか、それとも別の理由があるのか、浴びせられる敵意を前にして男は表情を動かさない。

氷河に溶け込むような白い肌、風雪に晒された枯れ木のように細い体格。ウェーブのかかった長髪と、額に巻いた縄。男は救い主を連想させる容貌でありながら、見る者に禍々しい印象を与えてくる。そう感じさせる要因はいくつかある。例えば両腕に刻まれた杖と蛇のタトゥーや、ジーンズに差した拳銃だ。

そして無表情――

男とその敵が操る能力の呼び名そのままの、仮面のような無表情だ。

対する集団の側は、その多くが内心の思いをありありと顔に出していた。ある者は怒り、或いは恨み。またある者は使命感。中には若干の罪悪感を伺わせる表情の者もいる。

そんな彼らは、ここで議論を戦わせていた。目前にまで迫った人類の滅亡、或いは生命の滅亡。白い男が祝祭と呼ぶそれは、何故訪れたのか――

「これは『総意』なのです」

白い男、タカヤは最後にそう言った。

「ある訳ない！ 人が自分でニユクスを欲しがったなんて……！」

槍を持った少年が反論した。十歳を少し過ぎたばかりの少年は、年に不相応な激しい感情を見せている。少年の言葉は、集団の側の全員の意見を代表している。と、傍からは見えるかもしれない。だが、必ずしもそうでない。

「だけど……確かにそうかもしれない」

白い装甲で全身を覆った、金髪の少女が俯きながら呟いた。人が経験しうるあらゆる悲しみを既に知っているかのような、心の最奥を覗いた事があるかのような表情を浮かべている。

目的を探さない緩やかな生、緩やかな死。苦しまずに生きようとする事。それが正しいか間違っているかは分からない――

少女がそう言うと、集団の側に戸惑いが目に見えて走った。滅びに立ち向かう為にここまで来た彼らにとって、少女の言動は全体の目的に反するように聞こえたのかもしれない。固い絆で結ばれた彼らであるが、だからこそ看過できない言葉というものはある。

「みんな、違うぞ」

集団の先頭に立っていた少年が口を開いた。全員の視線が彼に注目する。

「滅びは総意じゃない。ニユクスを呼んだのは一人だけだ」

少年は一步前に進み、タカヤに正対した。少年の声には力が込められ、なおかつ鮮明で良く通る。断固たる意志を聞く者に感じさせる、堂々とした話し方だ。彼はこうした説得的な口調が得意だった。

「ほう。では、誰がそれを為したのです？」

「俺だ」

「……」

沈黙が降りた。深海の水圧のように質量さえ感じられるタルタロスの冷たい空気が、沈黙の形で全員の頭上に降りてきた。

「宣告者の事を言っているのですか」

「……」

数秒の間を置いてタカヤが尋ねるが、少年は黙ったままだ。

「なるほど。彼は貴方と不可分の存在。ニユクスを呼んだのは彼、即ち貴方……。正しいとは言えませんが、なかなか面白い表現ではありますね。ですが、それならどうしてニユクスと戦うのです？」

「自分の行動に責任は取る。それだけだ」

この時だけ、少年の口調は若干ではあるが早口になった。

「なるほど」

それまで表情のなかったタカヤは薄い笑みを浮かべた。傍から見れば皮肉なそれではあるが、本人としては親近感を表す微笑みのつもりのようなのだ。対する少年も、ほんの僅かに微笑んだ。

こいつとは、もう少し話をしてみたかった――

少年、坂本義之はそんな事を思った。柄ではないと思いながらも、タカヤと通じるものを己の内に感じたのだ。だが今は話している暇はない。いつもの通り、時間は無限ではないのだ。

義之は議論を打ち切るように、右手に持った剣をタカヤに向けた。それと共にタカヤも腰に差した拳銃を抜いた。

2010年1月31日の影時間、タルタロスの頂上に舞い降りたこの世の終わりを、一人の少年が止めた。

文字通りの意味で、止めたのだった。

皆と再会を約束した日、坂本義之は月光館学園の屋上で懐かしげに空を眺めていた。頭を乗せたアイギスの膝枕は少々硬いが、気にする事はない。

まるでこの世に自分たち二人しかないかのように、静かな午前だった。この一年間は望むべくもなかった、穏やかな時間が流れている。ここしばらくずっと体を蝕んでいたさでさえ、心地よく感じられるほどだ。

「私、春を感じるのは初めてです」

日付は3月5日。春と呼ぶには風がまだ肌寒い。だが日の光には、新しい季節を表す麗らかさがある。誕生して以来、初めてその身で春を迎えるアイギスの目は、屋上から見る町の景色に新春の鮮やかさを十分に映している事だろう。

今日は高校の卒業式だ。ちょうど今は答辞が述べられている頃合だろう。そんな日にサボって屋上に来るような生徒は、流石にいない。だから今は二人きりだ。

命と引き換えに守った世界の中で、たった二人きりでいる――
そんな錯覚を義之は感じた。

それは心を許した相手と共にいる幸福感から来るものか、それとも終わりが近い事から来る寂寥感の裏返しか。義之は自分の心の動きの原因に、一瞬だけ迷った。だが敢えて考える事は止めた。考えれば後者が本心だときっと結論づけてしまう。

選ばれなかった他の道、あり得たかもしれない他の結末。そうし

た『もしも』を求めてしまっ。

義之は目を閉じて、思考を強制的に切り捨てた。自ら選んだこの結末に、後悔を抱いてはならない。やるべき事はやった。そう思わなければならない。それよりも最後の時間を使って、もう一度彼女の姿を――

そう思っで目を開き、視線を空からアイギスに移す。

（ああ……）

だが駄目だった。既に視界は霞んできている。人間以上に人間らしくなつた彼女の青い瞳は、泣いているかのようにぼやけている。

「アイギス……」

かろうじて口はまだ動く。だがそろそろ駄目だ。次の言葉が最後になるだろう。

「はい」

「泣くな……」

本当はもつと伝えたい言葉がたくさんある。だがこれが精一杯だ。

「義之さん……」

ほとんど見えない視界の中心で、アイギスはまだ何かを言おうとしている。だが声はもう聞こえない。目と口に続いて、耳もその役目を終えようとしている。間もなく心臓も止まるだろう。

（卒業式の日にもまた会う……約束は守れないな。でも、もう一つの約束は守れたか……）

自分の最期を看取ってもらう――

その約束だけは守れた。そんな小さな満足一つを抱いて、目を閉じた。

止まる時（2010/1/31、3/5）（後書き）

初投稿になります。色々と至らぬ点があるかと思いますが、長い目で見てやってください。

シーシュポスの神話（2009/4/9、4/19）

（ん……？）

何かが目の前で起きている。人型のレリーフが施された板を首からいくつもぶら下げ、動物の頭蓋骨のような仮面をかぶった黒い怪物がいる。怪物は足元に転がった無数の黒い手を、執拗に切り刻んでいた。その度に不快な音が繰り返され、緑色の空気に反響する。

緑色――

見慣れてはいるが、空気の色としては通常はあり得ない。

（これは……そうか。去年の4月の……）

人は死の直前に一生を思い出すと言うが、どうやら本当のようだ。これは去年の4月9日、自分がこの土地に戻って来て最初の満月の日。初めてペルソナを召喚した時だ。オルフェウスを召喚し、次いでタナトス、即ちファルロスが暴走したのだ。

（確かこの次は、ベルベートルムで……）

やがてテレビのチャンネルを変えたかのように、場面がふつと青い部屋へと切り替わった。思った通りだ。これから人生最後の一年間を、走馬灯のように振り返るのか。

と、思いきや――

「お久し振り、と申し上げるべきでしょうか」

走馬灯は急に途切れた。テーブルの向かいのソファ―に悠然と座

る謎の老人、イゴールははっきりとした言葉でもって出迎えてきた。その隣に佇む美貌の女性、エリザベスは言葉は発さなかったが、にっこりと微笑んだ。

（夢……じゃない？）

いや、ベルベートルームは夢と現実、意識と無意識の狭間に存在する部屋だという。現実とはもちろん異なるが、夢や幻でもない。ならばこういう形の訪問も、不思議はないかもしれない。つまりここは、死後の世界でもあったというわけか。

「そうだな」

ここを訪れるのはニクスと戦って以来だから、一か月以上ぶりとなるか。あの日から影時間もタルタロスも消えてしまったし、ポロニアンモールの裏路地にあった入口も消えてしまった。もっとも死んだ後では時間の概念などあつてないようなものだろうから、一か月も何もないかもしれない。久し振りなのかそうでないのか、いささか判断に迷う。どうでもいい話ではあるが。

視線を浮かせて室内を見回してみたが、ベルベートルームの装いは前と全く変わらない。床やカーテン、テーブルなどの調度品は全て青色で統一されている。正面は透かし扉になっているが、外の景色はそこから見えない。部屋自体が高みへ昇っている事を示す為だけに存在するかのような、延々と続く暗い壁が下へ下へと落ちていく様が見えるだけだ。そして扉の上には、光の速さで針が回る金色の時計がかけられている。

1月31日の決戦の時もここを訪れたが、その際にエリザベスは最上階に到着したと告げた。だがこの通り、ベルベートルームはな

おも上昇が続いている。タルタロスよりもなお高い遙かな上方、地上から32万由旬の宇宙にまで昇る、神秘なる軌道エレベーターとでも言ったところか。

最後に首を後ろに回して自分が座っている椅子を見てみると、それも元のままだった。色はやはり青色で、形は豎琴に少し似ている。

豎琴――

自分が初めて召喚したペルソナ、オルフェウスの持ち物だ。ギリシャ神話に登場する吟遊詩人で、冥界の番犬をも虜にするほどの名手だそうだ。ちなみに神話ではなく科学的な話においては、オルフェウスとは原始の地球に衝突した小惑星の名であり、月が誕生した原因となっただけらしい。

思考が脱線した。そんな事は今考える必要はない。

差し当たっては――

「俺はこれからどうするんだ。ここでベルボーイでもするのか？」

「まあ……」

エリザベスは顔を赤らめた。初めて会った時は無機質な印象のあった彼女だが、近頃はすっかり人間的になった。変わり幅の大きさで言えば、アイギスといい勝負だ。

自分の死が無念でないとは言わない。だが死後の生をここで過ごすのなら、そんなに悪くはないかもしれない。

しかし――

「いいえ。貴方様には再びの戦いが待っております」

幾許かの邪念を含んだ淡い期待を、イゴールは首を振って否定した。

「は？」

思わず間の抜けた声が漏れた。あの世でも戦えと言っただろうか？　そもそも、あの世に出てくる敵とはどんな敵なのだろうか。同じような死人同士で戦うのか、それともペルソナのオリジナルたる、伝説上の神や悪魔と戦うのだろうか。どちらにしても、勘弁してもらいたい。面倒くさい事この上ない。自分はそんなにケンカ好きなのではないのだ。

「少しは休ませてくれよ」

「お気の毒とは存じます。ですが、これから私どもは貴方のお手伝いを致しますので、どうかお励みください」

気の毒などとは絶対に思っていない。一見してそう分かる、含みのある笑みをイゴールは浮かべた。文句を言いたくなってくるが、口を開く間もなく意識が遠のいていった。

（え？　この感覚は……）

ベルベットルームで意識が遠のくとは、目覚める前兆だ。

「では、ご機嫌よう……」

イゴールの別れの挨拶が耳から消えると同時に、目が自然と開いた。視線の先には、白い天井がある。知らない天井ではない。見上げるのはかなり久し振りだが、それでも知っている天井だ。

（病院……だな）

近くに人の気配がする。首を動かしてみれば、見知った顔がそこにあった。

「あ……気が付いた？ 気分は……どう？」

ピンクのカーディガンを着た少女、岳羽ゆかりだ。病室のベッドのすぐ脇に置かれた椅子に座っていた。

「俺は……生きてるのか」

死んだとばかり思っていたのに、どうして生き延びられたのだろう。生きている事それ自体を喜ぶより、疑問の方が先に頭に浮かんでくる。そんなに生命力に溢れた体を持っていただろうか、と。

ベッドから起き上がろうとして、入院服に包まれた体の節々が悲鳴を上げた。全身が妙に重たい。だが卒業式の頃に感じていたような、死の前兆としてのものではない。単に疲れているだけの重さだ。

「良かったあ……やっと起きたよ！ 十日も眠ったままだったんだもん。心配したよ……」

「十日……」

「あの……ごめんね。あの時は何もできなくて……」

僅か十日。普通なら眠りすぎだが、やはり意外に感じる。死んだ
と思っていたのに、たったそれだけで目が覚めるとは、一体どうい
う事だろうか。神話のオルフェウスよろしく、冥界から帰還したと
でも言うのだろうか。神話と違って連れ戻すような妻はいないが、
自分自身だけは帰って来られたとでも？ そんな疑問に意識を捉わ
れていたからか、ゆかりの話に耳を傾ける事ができなかった。

「あのさ……私も貴方と一緒になんだ」

「……？」

どこかで聞いたようなセリフで、意識の向かう先が内心からゆか
りへと移った。聞いてみれば、ゆかりは身の上を簡単に話し始めた。
父親を事故で亡くし、母親とは疎遠になっているとか。

そんな事はとうに知っている。父親の遺言のビデオを見ているし、
電話越しに母親とケンカするところも見ている。おかげで一緒に母
親と会って欲しいと頼まれたくらいだ。ある意味では、ゆかり以上
にゆかりの親を知っているつもりでさえいる。それなのに、どうし
て今さらこのような事を言うのだろうか。

「……ゆかり」

「え……な、何？」

ゆかりは驚いた顔をしている。やはり妙だ。話す内容もそうだが、
態度が奇妙に他人行儀だ。名前で呼ばれたくらいで動揺している。
まるで出会って間もない頃のようなゆかりの姿が、猛烈に嫌な予感
を与えてきた。

「今日は何日だ？」

「あ、ああ…… 19日よ」

「3月の？」

言いながら、それはおかしいと思った。自分が死んだはずの日は3月5日だ。今日が3月19日なら、眠っていたのは十日ではない事になる。

「ちよつと、大丈夫？ 今日4月19日よ。貴方、始業式にも出たじゃない」

案の定と言うべきか、ゆかりは怪訝な顔をして答えた。3月ではなかった。しかも始業式とは、一体いつの始業式の事を言っているのだろうか？

嫌な予感が更に膨れ上がってきた。たとえて言うなら、散々苦勞して山の頂上まで岩を運び上げたのに、その途端に問答無用で麓まで突き落とされたような。不条理の概念そのものが形になって襲いかかって来たような、とてつもなく嫌な予感がする。

「何年の、4月19日だ？」

「ねえ…… 本当に大丈夫？」

ゆかりはますます怪訝な顔をした。眠りすぎて頭がおかしくなったのかと思っているのだろうか。失礼な、と普段なら言うべきところだが、むしろ本当におかしくなったのだと自分でも思いたい。

「答えてくれ」

「2009年に決まってるじゃない。いくらなんでも、一年も二年も眠ったりしないわよ」

「ふざけるなあ!」

重たい体は無視する勢いで跳ね起き、腹の底から叫び声を上げてしまった。この一年間で初めて、いや恐らく全人生でも初めての雄叫びだ。理不尽は飽きるほど経験しているが、流石にこれはやり過ぎだ。

（2009年の4月19日だと!? 十日間眠ってた!? まさか初めてペルソナを召喚してぶっ倒れた、あの時に戻ってきたってのか!?!）

ベッドから飛び降りて備え付けのカレンダーを見ると、確かに2009年4月のページがかかっている。続いてハンガーにかけられた自分の制服を手に取り、ポケットから携帯電話を取り出した。待受画面の日付表示は4月19日だ。

「マジかよ……」

訳が分からない。いや、そんな生易しいものではない。一体この神話の登場人物にされたのだろうか。死の間際に悪夢を見ているに過ぎないのなら、どんなに良い事か。

「あの……坂本君?」

「ああ……悪い。寝起きでちょっと混乱しただけだ。もう大丈夫」

壁を見つめて、ゆかりに背を向けたまま、咄嗟に開いた口からこんな言葉が出てきた。心と言葉が一致しない事には慣れているが、この時ばかりは自分の口が呪わしい。

少しも大丈夫ではない。心の中は大嵐だ。困惑と怒りが混ざり合っ
って渦を巻いている。振り返ってゆかりと目を合わせる事すら億劫だ。

数秒間の沈黙の後、ゆかりは寮に帰って美鶴に知らせてくると言
って、病室を後にした。居心地が悪そうにそわそわとしている様子
が背中越しにも伝わって来たが、それにフォローはしなかった。自
分の事だけで精一杯だ。病室の引き戸が閉まる音を聞いてから、よ
うやく義之は振り返った。

（夢落ち……じゃないよな）

夢なら記憶が鮮明すぎる。ゆかりの話も、聞く前から知っていた。
何を言うのか予想がついて、その通りだったのだからただの既視感
ではない。

ならば、まずすべき事は――

（取り敢えず、あいつに聞いてみよう）

義之は制服に着替えた。ブレザーのポケットを確認すると、携帯
電話以外の持ち物もあった。ほとんど中身の入っていない薄い財布
やら、愛用の音楽プレイヤーやらだ。そして青く光る鍵も、そこに
あった。

辰巳記念病院を出て、その足でポロニアンモールに向かった。時刻は既に午後の遅い時間になっている。平日のこの時間帯であれば、この辺りには制服を着た月光館学園の生徒が大勢いる。特にゲームセンターやカラオケ店の周りでは、必ずと言っていいほど見かけるものだ。だが今日は、制服姿は自分一人しかない。そんな些細な事に、苛立ちを感じずにはいられない。

（卒業式は金曜だった。今日がその十日後なら、月曜のはずなんだから……）

歩きながら携帯電話を取り出し、待受画面を見た。そして思わず舌打ちをした。認めたくないが、断固として認めたくないが、画面の日付は2009年の4月19日を示している。曜日は日曜だ。

（実はやっぱり2010年の3月15日で、制服を見かけないのは春休みだから……って事はないかな）

そんな無理やりな言い訳めいた事を考えながら、すぐさまそれはないと思った。三学期の終業式は3月20日だ。学校の行事日程などを無駄に覚えている、己の記憶力が恨めしい。

歩くことに募っていく苛立ちを何とか表に出さないようにしながら、早足でモールの奥へと向かう。中央の大きな噴水を横目に通り返け、改装中の骨董屋と交番の間にある裏路地に入った。

人気のない路地の最も奥まった場所、繁華街の喧騒がやけに遠くに聞こえる袋小路で、義之は立ち止まった。普通の人間には何もなただの壁にしか見えないが、義之の目には青く光る扉が見える。

義之はポケットに手を入れ、扉と同じ色の鍵を取り出した。

契約者の鍵――

もう二度と使う事はないと思っていたのだが。

僅かばかりの諦念と、それを覆い尽くさんばかりの苛立ちの渦を抱きながら、義之は鍵を差し込んだ。

「ようこそ、いらつしゃいました」

イゴールはいつものように、慇懃な言葉で迎えてきた。そして義之もいつものように、椅子に座っている自分を発見した。だが義之は挨拶もそこそこに、椅子から立ち上がって責めるような口調で問い質す。

「これは一体どういう事だ？」

病院で目覚める前、イゴールは『再びの』戦いと言っていた。聞いたその時は特に気に留めなかったが、よくよく考えればおかしい表現だ。タルタロスのシャドウやニクスとは別の何者かと戦うのなら、『新たな』か『次の』戦いと言うべきだ。

『再び』とは即ち、既にやった戦いをもう一度行う――

イゴールはあの時そう言った。つまりこの鼻の長い怪人は、自分を襲ったこの意味不明な事態を理解している。

まさかイゴール自身がこの事態の原因とまでは思っていない。だがそれでも苛立ちをぶつける相手が他に見当たらないので、つい口調が厳しくなる。だがそんな義之の八つ当たりを、イゴールはさら

りと受け流す。

「さてさて、どういう事でございましょうな」

「ユニバースの力なのか？」

人生を暗示するタロットの大アルカナの終着点に位置する、世界または宇宙のカード。ニクスと戦う直前に、義之はそれを得た。何事も奇跡でなくすとまで言うその力であれば、このような事態をも引き起こせるかもしれない。

即ち、時間を戻す――

もつとも義之自身はそんな事を望んだ覚えはない。少なくとも、意識的には。

「ユニバースが今の貴方と全く無関係……とは申しますまい。何故戻ってきてしまったのか、その答えは貴方様ご自身で得られると良いでしょう」

相変わらず謎かけの好きな老人だ。苛立ちを通り越して、逆に気抜けしてしまう。

「はあ……」

怒りや困惑はため息となって、体から流れ出て行った。それと同時に、肩や膝に入っていた力も抜けて姿勢が崩れそうになる。張り詰めた気が抜けて、疲労感が改めて襲ってきた。

分かっていた事ではあるが、イゴールをいくら問い詰めても無意味である。初めての2009年の4月からずっとそうだったが、イ

ゴールはこちらが何かを聞いても、ほとんど何も答えてくれない。思わせぶりの言葉だけで、煙に巻いてくる。いや、正確にはごまかしたりはぐらかしたりしているのではなく、最低限の情報だけ与えておいて、真相が向こうから立ち現われてくるのを待つのがイゴールのやり方だ。

だから物事をストレートに聞いても、絶対に答えてくれない。遠回しに聞けば、更に遠くへ追いやろうとしてくる。

答えは自分自身で得る――

要するに自分の責任で物事を進めさせようとしている。それが即ち、『契約』だ。

「一つだけ忠告致しましょう。時が戻ってきたと申しましても、全てが前と同じとは限りません。運命とは決まっているようでいて、決まっていないもの。前とは異なる絆を築く事もありましょうな」

「ああ、そう……」

せつかくの忠告だが、生返事だけを返してイゴールに背を向けた。これ以上物事を考えるのは、本気で嫌になってしまった。

愚者と死神（2009/4/19）

日が暮れる頃、ポロニアモールから巖戸台分寮にたどり着いた。元はホテルだったらしい寮の重厚な扉の前で、義之はしばらく立ち止まっていた。

入りたくない――

この扉を通ってしまったえば、何かを失ってしまうような気がしてならない。だがいつまでも玄関で佇んでいるわけにはいかない。意を決して、ではなく半ば以上の投げ遣りさを込めて、重い扉に手をかけた。

寮の一階のラウンジの様子は、記憶の通りのものだった。寮生の名簿が置いてある受付のカウンターが向かって左手にあり、右手にはローテーブルを囲む四つのソファが置いてある。高校生が生活する空間にしては、高級感のある佇まいが随所に演出されている。

義之は寮生と顔と合わせたくない気分だったが、幸い誰もいなかった。早足でラウンジを通り抜け、階段を登って自室に向かった。

二階の一番奥にある自室の様子も、ラウンジと同様に記憶の通りだった。本当に初めてこの部屋に入った時から死んだ日まで、義之は部屋の模様替えなどは全く行わず、ものを置く事もなかった。備え付けのベッド、机、棚、テレビ、洗面台があるだけの、元通りの殺風景な部屋だ。

ただベッドの上の壁に貼られたカレンダーだけが、最後の記憶と異なっている。2010年の3月だったはずが、2009年の4月

になっていた。

「……」

カレンダーから目を外し、そのままベッドに仰向けに寝転んだ。電気もつけず、着替えもせず、携帯音楽プレイヤーのイヤホンすら外さないままだ。色々な意味で疲れていた。他人と話したくはないし、身の回りの事もしたくない。眠りすぎた体は重たいし、心は無気力状態だ。シャドウに精神を奪われた影人間という意味ではなく、言葉通りの意味で。

人間は追い詰められると本性が出ると言うが、本当だ——
部屋天井を見上げながら、そう思った。

死ぬ前の一年間は、むやみに忙しく過ごしてきた。シャドウとの戦いのみならず、運動部、文化部、生徒会、同好会を掛け持ちし、校外でも友人を何人も作り、定期試験で学年トップを取るほどに勉強もした。実は過労で死んだのではないかと疑えるほどの、八面六臂の大活躍をした一年間だった。傍から見れば、無気力という言葉から最も縁遠い人間であつた事だろう。

だが本当は違う。そうした振る舞いは、全てペルソナだった。イゴールに褒められるほどの、仮面を使い分ける名人だったただけだ。本来は内向的で人と話すのが嫌いで、万事が投げ遣りな、言葉通りの意味での無気力症。

全ての仮面を剥ぎ取った、本当の自分はそうした類の人間だ。月光館学園に転入してくる前の自分自身を省みれば良く分かる。

そして現在。あの一年間が無に帰した事で、地が出ている——

（もう……どうでもいい）

義之は目を閉じ、再びの眠りに自身を落とした。目が覚めたら2010年の3月になっている事を期待して。この状況が悪夢ならそれでいいし、丸一年眠り続けるのでも、この際だから構わない。

数時間ほどたって、義之は目を覚ました。電気をつけていない部屋は真っ暗だ。リピートに設定していたプレイヤーのイヤホンからは、まだ音楽が流れている。

寝転がったまま上着のポケットに手を入れ、携帯電話を取り出した。日付は2009年の4月19日で、時刻は23時を過ぎたばかりである。

「……」

残念だった。だが普通に眠ったせいかな、少しは物事を考える気力が出てきた。仮面は何も他人に対して付けるだけではない。自分自身に対しても付けられる。そうして無気力症状を抑え込み、自問自答を始めた。

（どうする……）

2009年の4月まで時間が戻ってしまった。それはもう事実として認める他にない。では時間が戻った原因は、一体何であるのか。そして、これからどうするか。

卒業式のあの日、目を閉じれば自分は死ぬ事を知っていた。だが慌てる事はなかった。1月31日の最後の戦いの時から、或いはその前から分かっていたから。本来ならニユクスと刺し違えて死ぬはずが、3月5日まで生きられた事さえ不思議なくらいだったのだ。

猶予をもらった一ヶ月余りの間に、覚悟は決めていた。決めたつもりだった。

だが――

（未練があつたのかな……）

やるべき事はやったとの思いはある。だが一片の悔いもないかと問われれば、答えは否だ。悔いはある。例えば荒垣の死、桐条武治の死、ストレガの三人の死。では、自分の死はどうだろうか？

（俺、死にたくなかったのかな……。だから戻ってきてしまったのか……。？）

最期の頃の自分を思い返すと、それほど生に執着があつたとは思えない。例えば決戦に挑む直前、進路相談を受けた。あの時、進学か就職か決めていないと言った。あれは単なる怠惰や先送りではなく、予感があつたからだと義之は自分自身を分析している。

ニユクスに勝っても勝てなくても、自分は生きて帰れない――

そんな風に漠然と感じていたから、ニユクスを倒した後の将来の事など、ろくに考えていなかった。同じ日、生きる事の意味を語ったアイギスほどにも。

（アイギス……）

誰よりも深く自分を想ってくれた、機械の乙女。彼女の事を思うと、胸が締め付けられる気がする。自分が死んだら、彼女は生きてはいけなйдらう。機械の心に多くの感情を染み込ませて、せつかく『生きる』事を覚えたというのに。

卒業式の日、屋上で、彼女に膝枕されながら自分は死んだはずだった。その最後の記憶の中では、彼女は泣いているように見えた。

あの時の自分は、何を思っていただろうか？ 何かの『もしも』を求めてはいなかっただろうか。例えばあの日から何十年も生きて、普通に年をとって、ただの人間としてのありふれた死を彼女に看取ってもらうとか。

（そう……だったのかな？）

そのまま更に考え続けていると、やがて周囲の気配が一変した。イヤホンから流れ続けていた音楽は急に途絶え、空気が緑色に発光した。首を動かして窓へと視線を向ければ、異様なほどに巨大な月がその断片を覗かせている。影時間だ。

「はあ……」

消したはずの異界の領域も蘇っていた。まさにイゴールが通告した通り、再びの戦いが待っている。本当に不条理の権化に襲われた事を思い知って、暗鬱な気分になってしまふ。そんな時、慣れた気配がした。

「やあ、久しぶり」

ベッドの脇に、十歳くらいの少年が立っていた。白黒の横縞模様

の囚人服を着た、愛嬌のある少年。十年前、自分の中に封じられた死神の化身。ファルロスだ。

「久しぶり……だな」

「ふふ、また君の中に戻ってきちゃった」

戻ってきた――

ある程度予想はしていたが、案の定だった。ファルロスは『前回』の事を覚えている。流石に自分自身と不可分の存在だ。

義之は役に立たなくなったイヤホンを耳から外し、上体を起こしてベッドに腰掛ける姿勢になった。背の低いファルロスと視線を真っ直ぐに合わせ、少しばかり懇願するような口調でもって話しかけた。

「俺はどうすればいい？」

「さあ……どうすればいいんだろうね？」

ファルロスは困ったように肩を竦めた。言い方が漠然としすぎていたようだ。イゴールのように他人事な態度ではないが、先行きをファルロスに委ねる事はできない。相談するにしても、大まかな目標や方針くらいはこちらで用意せねばなるまい。

それが即ち、自分の行動に責任を取るという事だ。
気を取り直して、筋道を立てて話を始めた。

「整理しよう。俺の目標は、来年の3月以降も生き延びる事だ」

『前回』の終わりの頃は、特別生きたいと意識した覚えはない。だが生に未練が全くないと言えば、やはり嘘になるだろう。それに仲間たちの気持ちを考えれば、死ぬより生きた方が良いに決まっている。特にアイギスの気持ちを考えれば。

そしてそれ以上に、シーシュポスの神話に陥ってしまったては堪らない。『前回』と同じ結果に終わっては、また時間が戻ってしまうかもしれない。充実した一年ではあったが、無限に繰り返すのは流石にやっていられない。

「うんうん。そうだね」

「やり方は二つ。お前をデスとして復活させないか、ニユクスと戦って死なないかだ」

「そうだね」

「順番に考えよう。満月のシャドウはあと十一体。こいつらを倒さずにおくのはどうだ？ 例えばここを離れて、どこか遠い所に逃げるとか」

「それは駄目だと思うな。だって、奴らはもう君を見つけちゃってるよ。君がどんなに遠くに行っても、きっと追いかけてくる」

「そうなのか……じゃあ満月の影時間を適当にやり過ごすのは？」

「それも駄目だろうね。倒さないまま影時間が過ぎれば、次の満月にまた現れるだけだよ。その時に出てくるはずのシャドウと一緒にね」

シャドウや影時間に関して、ファルロス以上に知っている存在はこの世にいないだろう。そのファルロスがこう言うならば、まず間違いはあり得ないと思っていい。要するに、消極的な方法では事態は解決しない。

「なら、倒したシャドウを取り込まずにできるか？」

「無理だと思うな。僕だって、分かかって奴らを取り込んだわけじゃないんだ。息をするみたいなので、倒したら勝手に取り込んだじやうよ。僕の意志は関係ないね」

「俺以外の奴が倒しても駄目か？」

「駄目だね。倒されたシャドウは、君がどこにいても僕に取り込まれるよ。それに君の仲間たちだけじゃ、奴らを倒すのは無理だって」

「ったく……何か方法はないのか？」

起きてから考え続けてひねり出した案は、ことごとく却下された。普通の高校生よりは図太い神経を持っているつもりだが、ここまで外れが続くと気分が落ち込んでしまう。だがファルロスは笑顔を深めた。

「あるよ。一つだけ」

「何だ？」

「僕を殺せばいい」

言いながら、ファルロスは更に笑みを深めた。にっこりと、とい

う表現そのままの、何とも子供らしい笑顔だ。

「……」

義之は沈黙した。『前回』に同じ事を聞いた時は、驚きの余りに顔をなくした。だが『今回』は聞く事自体が二度目であるから、驚きで言葉が出て来ないわけではない。一瞬、ファルロスの笑顔に見惚れたのだ。

『前回』の12月3日、綾時はやはり自身を殺せと勧めてきた。義之はその時の綾時の表情を、永遠に忘れる事はできない。文字通りこの世の終わりそのものを迎えるような悲しみを、或いはそれをも超えて、愛しい人を手につけなければならぬかのような、感情の深淵まで至った者の顔をしていた。

それとは対照的に、ファルロスはいつそ愛くるしいまでの笑顔で言う。見る者の心を癒す少年の無邪気さで殺人、否、自殺の言葉を口にする。異様を通り越して、美しいとさえ言える。

彼岸の美――

まさにファルロスは死神だ。綾時とは違う意味で、今日のファルロスを忘れる事はできないだろう。

「前も言ったよね？ 君だったら僕を殺す事ができる。多分だけど」

「それは駄目だ」

「どうして？」

「分からないか？ あの時のお前は綾時になっていた。つまり俺の

外に出ていたから、殺す事もできたんだ。今のお前を殺す事は、俺にもできない。やったら多分、俺も死んでしまう」

ファルロスを殺せば、義之も死ぬ――

これと言った明確な根拠があるわけではないが、義之は確信に近いものがあつた。ファルロスの存在は義之の心に深く根を下ろしている。ここで言う『心』とは感情や思考という意味だけではなく、心臓や脳のように身体的な意味さえ持っているかもしれない。なればこそ、殺す事はおろか外に出す事さえ無理だろう。心臓を取り出して生きていられる人間など、この世にいない。

11月4日の朝には、ファルロスは何事もなかったかのように義之から分離したが、あれは十二のシャドウを取り込み終えて、ファルロスが完全に個体として独立する存在となったからできた事だ。

今の時点でファルロスに殺す事は、義之にとって自殺行為に等しい。と言うより、自殺そのものをしなければファルロスを殺す事はできない。たとえ死なずに済んでも、精神を失った影人間になってしまうだろう。

ついでに言うと、義之が普通に死んだ場合は、ファルロスは死なない。十年前と同様に、不完全な状態で外に出てくるだけだ。そうでなければ、満月のシャドウは義之を殺そうと襲ってくるはずがない。

「そつか……そうだね」

「それに、お前を殺したくはない」

「どうして？」

「友達だろ？」

義之はこの日、初めて笑った。望み通りの表情を作る事は得意だが、これは演技ではない。

坂本義之は『愚者』である。自分自身の意志というものを持たない事が、その本質だ。だから性格が全く違う大勢の人たちと、親密なコミュニケーションを築く事ができたのだ。相手に合わせる事によって。

つまり義之は『前回』に築いたコミュニケーションの人々に対して、実は心からの感情を抱いていない。少なくとも、相手ほどには。

しかしそんな薄情な男にも、数は少ないが例外はある。その一人がファルロスだ。正体を知らなかった時でさえ、不思議と本音で話せた。今にして思えば、自分自身と不可分の存在であったからだだろう。

大晦日の日に綾時を殺さない事を決断したのも、事態の解決に繋がらないとか記憶を失うのが嫌だとか、皆が言っていたような理由ではなかった。ただ真の意味での友情を感じた綾時即ちファルロスを、殺したくなかった。事態の大きさに比較して極めて個人的な理由だが、それが本当のところだ。

「ふふ……そうだね」

「お前をデスにしない事は無理だ。ならニユクスと戦って、生き延びる」

「どうやって?」

義之は初めてファルロスから視線を外し、床に落とした。

「……分かん」

そう。どうやればいいのか分からない。『前回』はニクスに何をしたのかも分からない。ユニバースの力で何かを行った事は確かだが、具体的に何をしたのは覚えていない。自分でやった事であるのに、当時の記憶が何やら曖昧なのだ。

「前の俺は、一体何をやったんだ?」

「さあ? 君が覚えてない事は、僕だって知らないよ」

ファルロスは肩を竦めた。嘘を言っているようには見えない。と言うか、ファルロスが嘘をつくはずがない。どうやら本当に知らないようだ。

「それは困ったな」

いざその時が来れば思い出すかもしれないが、それでは『前回』と同じ結果に終わる可能性が高い。そうなれば、3月にやはり死んでしまっだろう。

「もっと早い時期にユニバースを手に入れる事はできるか?」

あらかじめ力を得てそれに慣れておけば、死なずに事態を解決する方法も見つけられるかもしれない。

「それはちよつと難しいね。ユニバーズは絆の集まりだよ。あの時は世界の終わりが来て、みんな怖がってたでしょ？ 覚えてる？」

それは覚えている。ニユクスの来訪で町はパニックに陥り、やがてコミュニティの人々の声が聞こえてきた。

「人間は死の恐怖に直面すると、何かに縋りたくなるものさ。君の友達たちは、あの時みんな一斉に君に縋ったんだ。それで君が持っていた絆の力が一時的に膨れ上がって、ユニバーズになったんだよ。ああいう事が起きないと、ユニバーズは手に入らない」

「そんなものかよ……」

それでは困った時の神頼みが集まった結果が、ユニバーズという事になる。それを友情と呼ぶには、いささか不純な気がする。もっとも不純と言え、これ以上なく不純な『愚者』が言えた義理ではないが。

「そんなものだよ。でも絆は持っておいた方がいいよ。今の君は絆を何も持っていないしね」

「そうなのか？」

「もちろん。だって僕たち以外の人は、誰も前の事を覚えていないんだから」

（そりゃそうだ。またコミュニをやり直すってわけか。だが……）

義之は考え出した。『前回』築いた数多くのコミュニティを、再びやり直す。面倒ではあるが、別にやっても構わないと思う。どう

せ毎日タルタロスに通って修行三昧な生活を送る事などはできないのだから、コミュニティでもやらないと退屈なだけだ。無為に過ごすには一年間は長すぎる。問題はコミュニティの向かう先を、どうするかだ。『前回』と同じように振る舞って同じ結果を得るか、それとも――

（ちょっとは考え直すべきだろうな……特に女だ）

『前回』の自分自身は、客観的に見て色々とまずかったところがあつた。少しは反省が必要だ。

「まあどっちにしても、僕は友達だよ」

ファルロス再び微笑んだ。義之も吊られて、自然と笑みが浮かぶ。

「そうだな。友達だ」

こちらの事情を知る者がいるというのは、ありがたいものだ。ファルロスとはいつでも話せるわけではないが、それでもいるのといないのでは違う。しみじみと友情を実感していると――

『我は汝、汝は我……。汝、遂に真実の絆を得たり。ここに死神の力はその最奥を開かれたり……』

（お……）

頭の中に声が響いた。何度も聞いた覚えのある、他人との間に育まれた絆を教える声だ。

『前回』の死神のコミュニティは6月12日に始まり、11月4日に極まった。だが『今回』は絆が築かれると同時に極まった。無論『前回』にそんなコミュニティはなかったが、今の状態では道理であろう。既にファルロスとは、これ以上ないほどに分かり合っている。

絆を教える『我』がどこの何者なのか、はつきりした事は分らない。恐らくは心理学で言うところの集合的無意識に属する、何かしらの存在であろうが。だが何にせよ、ファルロスとの間にある絆は『我』のお墨付きを得たという事だ。

愚者と死神（2009/4/19）（後書き）

連続投稿してみました。これにて一区切りですので、次回からは週一くらいで更新する予定です。

なお、

？主人公が港区を離れても、満月のシャドウは追いかけてくる

？シャドウを倒さず満月の影時間が過ぎると、次の満月にまた現れる

？倒したシャドウは自動的にファルロスに取り込まれる

？主人公以外の人が倒しても駄目

？ファルロスを殺せば主人公も死ぬ

？主人公が普通に死んでも、ファルロスは死なない

この辺りの事は、全て作者の独自解釈です。そうしないと話が前に進みませんので……。

読んでくださり、ありがとうございました。

永遠の謎（2009/4/20）

死神の絆を再確認した翌朝。身支度を整えた義之は一階のラウンジに降りてきた。すると、ゆかりと目が合った。

「あ、おはよう」

義之も挨拶を返すと、ゆかりはちょうど玄関へ向かおうとしているところだった。このままだと、一緒に登校する流れになる。

（そう言えば……）

義之は『前回』の今頃を思い返した。転入してきて最初の日、4月7日はゆかりに案内してもらって登校したのだった。転入早々、校内で高嶺の花のように言われている岳羽ゆかりと連れ立って登校してきたけしからん男、とか何とか少々噂になった。

『今回』の記憶は4月9日の影時間から始まっているが、今現在の時間そのものは、『前回』の4月8日以前の状況と繋がっているはずだ。つまり、『今回』も自分とゆかりは校内で噂的になっている事が推測できる。

ならば――

「岳羽」

「何？」

ゆかりは振り返った。そこに昨日の病室で下の名前で呼んだ時のような、動揺の色はない。敢えて名字で呼ぶと、普通の反応が返っ

てきた。

「俺が入院している間、ずっと見舞いに来てくれていたのか？」

「え？ う、うん……」

ゆかりは異性に対するガードが非常に固いが、一方で変に無防備なところがある。今の時点ではゆかりは自分の事を特別何とも思っていないはずだが、毎日見舞いに来ていたようでは、周囲はそうは見ないだろう。『前回』の自分はこの状況を放置していたが、今に思うと後々の為によろしくない。

「なら、しばらく一緒に登下校するのは止した方がいいな。また順平辺りが噂を掻き立てそうだ」

「そ、そうね……。その方がいいかも」

そう言つて、ゆかりは急ぎ足で寮を出て行つた。それを見送つてしばらく時間を置いてから、義之は寮を出た。

ゆかりの他にも、風花、美鶴、千尋、結子とは少し距離を置くつもりでいた。最低な事に、『前回』は彼女ら全員と特別な関係になつてしまった。これにアイギスとエリザベスも加えれば、もう大変な数だ。

卒業式の日、死を受容できたのも、これで修羅場を巻き起こさずに済むと逃避めいた考えがあつた事は否定しない。あの日以降も生きるつもりなら、女関係は普通にしておかないとまずい。せつかく世界の終わりを生き延びても、女に刺されて死んだりしたら目も当てられない。

授業を終えると、義之は寄り道せずすぐに寮に戻った。この日は四階の作戦室に来るように言われているが、その時刻まではまだ余裕がある。空いた時間を使って、義之は朝から考えていた事を紙に書いてまとめる事にした。

計画書（極秘）

今回の女関係の方針をまとめる。目標は誰とも特別な関係にならず、親しい友人に留まる事。友人関係さえも不要なら無視するのが最も簡単だが、コミュニケーションは築かないとニユクスに勝てなくなる可能性がある。よって、これは極めて重要な課題である。

男と女に友情があるのかどうか。これは永遠の謎であるが、あると信じて進める。

ケース1：結子

結子が自分を意識するようになったのは、子供たちに『コーチとかれし』とか言われたからだろう。ならばコーチをしなければ良いのだが、結子を買って出る事は恐らく不可避。そこで宮本を使う。膝のリハビリを早い段階で決意させ、コーチが始まったら気晴らしとしても称して宮本を巻き込み、結子ともども引き取ってもらう。子供たちには、彼氏はあつちだと軽く煽ってやれば流れに乗せやすい。

ケース2：千尋

男性恐怖症の克服は実は大した問題ではない。何度か一緒に下校

すれば十分。手を繋いだりして過度に意識させない事が重要。

問題は教材費の一件。時期を見計らって竹ノ塚に注意してやれば事件を未然に防げるが、その後の展開が読めなくなる可能性がある。また、千尋を他人に引き取らせる為には敢えて起こさせ、解決させるのが最善。教師の不祥事の為、生徒会役員が適任。生徒会で有望な男といえ、小田桐しかいない。性格が合いそうもない二人であるが、そこは重要でない。とにかく自分以外の男と接点を持たせる。

ケース3：美鶴

対処が最も容易な人物。引き取り手は、言うまでもなく真田。美鶴は他人を下の名前で呼ぶ事に、特別な意味を持たせている事は明白。荒垣は名字で呼んでいる事から、真田に対しては単に付き合いが古い以上の好意を抱く下地が既にある。

問題は桐条武治を生存させた場合。引き取らせるきっかけを得られなくなる可能性が出てくる。だが父親が健在なら、そもそも真田さえ不要かもしれない。状況を見ながら判断すべき。

ケース4：風花

相手として有望なのは荒垣。料理ができる男は素敵との風花本人の発言もあるので、見込みは高い。料理を教えてやれと荒垣を巻き込んでやれば良い。前は6月に始まったコミュニティを、荒垣が加入する9月に合わせて始めればなお良い。女教皇のコミュニティは外的な事件がない為、時期が異なる事による問題は少ないと推測できる。

問題は荒垣の生存。10月の天田の復讐それ自体は、知ってさえいれば未然に防ぐ事は十分可能。より問題なのは荒垣自身に生きる意志が乏しい事と、制御剤の副作用で元々余命が少ない事。前者はそれこそ風花に任せられれば最善だが、自分も何かしらの手を打つ必要がありそう。後者の対処には、桐条グループの協力が不可欠。

ケース5：ゆかり

対処が最も難しい人物。引き取り手が見当たらない。美鶴と風花も同様であるが、特別課外活動部のメンバーは生活の中で戦いの占める割合が非常に大きい為、仲間同士でないとインパクトに欠ける。順平は見込みが低い。特にチドリを生存させた場合は、他の女には見向きもなくなると考えられる。仲間内では天田が残っているが、相手にはならない。将来はまだしも、今の時点ではいくらなんでも早すぎる。

よってゆかりとの関係は、純粹に友人として仲を深めなければならぬ。幸いゆかりは母親に対する反発から、結婚せず恋人も持たず、一人で生きていく事を目標にしている。その方向性をずらさずに友情を築く。その為には、自分を異性として意識するきっかけになるポイントを、一つ一つ潰していく必要がある。長期的なスパンで考えなければならない。

（やっぱり基本は、誰か男を利用する事だな）

自室の机に向かいながら、義之は書き上げた計画書を読み直した。普通に考えれば、どれも困難極まりない作業だ。ゆかりを除いて、四組もの男女を結びつけなければならない。ローマ神話のクピッドじやあるまいし、ただの高校生にできる事ではない。

しかし――

（まあ、何とかなるだろう）

義之は楽観的だった。何しろ普通の高校生と違い、未来を知っているのだから。これは大変なアドバンテージだ。今後一年間でいつ何が起ころかは、ほとんど覚えている。そして彼女たちの性格や嗜好も把握できている。

我ながら記憶力の良さに感心する。常に先を見据えて計画的に行動すれば、事態の主導権を握り続ける事は可能はずだ。

最後にもう一度読み直して頭に叩き込んでから、紙を破いた。更にハサミを使って細かく切り刻む。万が一これを他人に読まれたら一大事なので、念を入れて処分する。

実はこの計画は、次々と起こる想定外の事態により前提の段階から崩れ去ってしまうのだが、今の義之には知る由もない事である。

永遠の謎(2009/4/20)(後書き)

最低ですね、この人。

愚者と道化師（2009/4/20）

女関係の検討を終えた後、義之は寮の四階の作戦室に向かった。

ドアを開けてみると、役者は既に全員揃っていた。促されて席に着くと、最初に三年生の真田明彦を紹介された。当然見知った顔だが、『今回』会うのはこれが初めてだ。知っている事を表に出さないように注意しつつ、挨拶を済ませた。

柔らかいソファに腰を沈めながら、義之は改めて全員を見回した。真田の他、『前回』共に戦った仲間である桐条美鶴とゆかりがいる。そしてもう一人、眼鏡をかけた四十代半ばくらいの男が上座に座っている。

上座の男は、一日は二十四時間じゃない云々と、話を切り出した。その語り口は立て板に水を流すように、すらすらと淀みがない。

「我々は、特別課外活動部。表向きは部活って事になってるけど、実はシャドウを倒す為の選ばれた集団なんだ」

男、幾月修司はこう言って一旦話を区切った。人の良さそうな、いかにも善良な大人といった具合の微笑みを浮かべている。そんな笑顔の裏側を覗き込もうとするように、義之は話の間、ずっと視線を幾月に合わせて続いていた。

「……」

義之はこの日の集まりに当たって、幾月と顔を合わせたらどんな思いを抱くかと、自分自身に少し心配をしていた。もちろんこの場

で幾月を叩きのめしたりとか、裏で企んでいる事を暴露したりとかの、無茶をするつもりは毛頭ない。ただ内心穏やかでいられるか、少なくとも敵意を表に出さずにできるかと心配していた。

表情を消す事は得意だが、幾月相手にまでそれができるか、義之は自信がなかった。

だが――

（何と言つか……不思議な気がするな）

意外にも、怒りや憎悪で心が滾るような事はなかった。その代わり、死を見届けた人間が生きて動いている事に、奇妙な感慨を抱いた。

『前回』の幾月は11月4日に、タルタロスの天文台で桐条武治と相撃ちになって死んだ。

死んだはずの人間が、生き返っている――

（いや……生きてて当然だろ）

冷静になれば、その事自体は今さら驚くに値しない。過ぎたはずの時間と共に蘇ったのは、何も幾月だけではない。荒垣や桐条武治も生きているだろうし、ストレガの三人も生きているはずだ。何より義之自身が生きている。

問題なのは、そうした生き返った人々とどう向き合うかだ。だから幾月の裏側を覗こうとしているのだが、何も見えなかった。『前回』多くの人々とコミュニティを築いてきた経験から、義之は観察力には自信がある。それでいながら、幾月の表情に裏を伺わせる点には、何一つ見つけられなかった。

（大した役者だよ。全く……）

義之は内心でそんな事を考えていたので、続けて美鶴が語り出したペルソナや影人間などの話は、ほとんど頭に入れなかった。どうせ既に知っている事柄ばかりなので、敢えて耳を傾ける必要はない。ただ適当に相槌を打つだけだ。為に話は誰にも遮られる事なく進んでいく。主に美鶴が話し、時々幾月が補足しながら。

「君の力を貸して欲しい」

話の最後に、美鶴はこう言ってきた。言葉だけなら頭を下げられているようでもあるが、断る事はできそうもない雰囲気作戦室には漂っている。

幾月は物腰柔らかく、美鶴は断固とした調子で、真田は楽観的に構え、ゆかりは期待と心配が入り混じった表情でいる。それぞれ種類の異なるプレッシャーを四方向から浴びせられては、よほど強靱な精神の持ち主であっても己の意志を貫くのは至難だろう。四人のうち誰かに同調して流されるか、もしくは『前回』の義之がそうだったように、どうでもいいと投げ遣りになる他あるまい。

だが『今回』の義之は、そのいずれでもない気持ちでいた。若干の申し訳なさを感じながら、視線を美鶴に向けた。

（力を貸して欲しいのは、俺の方だよ）

昨日にファルロスと話し合って確認した通り、義之はどう足掻いてもシャドウから逃げられない。ならば立ち向かうしかない。だが一人でできる事ではないから、仲間の皆の協力は欠かせない。だから

ら義之はこの集まりの前から、『今回』も特別課外活動部に参加する事は決めている。既に結論が出ている事だから、考えるまでもない。

「分かりました」

考えなければならぬのは、『生き返った』人々をどうするかである。幾月を含めて。

もし『前回』と全く同じように振る舞えば、荒垣や桐条武治はやはり死んでしまうだろう。だが彼らの行動や背景を知っている『今回』ならば、生き延びさせる事は不可能ではない。いや、むしろ特別難しい事とすら言えない。十分に可能である。上手くやれば、ストレガの三人さえ死なせずに済ませられるかもしれない。

（やっぱり、そうするべきだろうな。でも……）

義之は視線を美鶴から幾月に戻した。相変わらずの穏やかな大人の表情が浮かべられている。これが仮面であるとは知っていても信じられないほどに、善良な顔が板についている。

「そうか、感謝するよ。ああ、そうそう。君の寮の割り当てだけだね……」

（こいつは駄目だな）

荒垣や桐条武治は助けたいと思う。ストレガにも思うところは色々ある。だが幾月は駄目だ。優秀な研究者であつた幾月が、どうして滅びの思想に取りつかれたのか。そうした背景の事情には興味がある。

だが、助けたいとは思わない。説得する気にもなれない。

『前回』はずっと騙され続けてきた事に絡んで、恨みを抱いているのだろうか――

（いや……そういうのじゃないな）

恨んでいるのなら、顔を見るだけでも心が騒がしくなるはずだ。だが面と向かって言葉を交わしても、そうした暗い感情は湧いてこない。

何故だろうか――

（まあ……どうでもいいか。幾月を破滅させても、俺は後悔しないだろうから……）

義之自身はどうすれば、来年の卒業式の日を越えて生き続けられるか。今のところは、この問題の解答はアイディアの一つすらない。だがそれとは別に、やはり助けられそうな人は助けるべきだと思っている。単純な善意もそこにはある。だがより切実な問題として、義之はこの二度目の一年間に後悔の種を残しておきたくない、という考えがあった。

悔いを抱いたまま死んでは、死後にまた時間が戻ってしまうのでは――

そんな危惧を拭えないでいた。荒唐無稽だが、杞憂に過ぎないと切り捨てる事はできない。時間が戻った原因がユニバーズであるならば、十分にあり得る事だ。

だから助けられる人は助けたい。そして助けなくても後悔を感じ

なさそうな人は、助けない。

余談であるが、集まりが解散となった際に、義之の頭に声が響いて愚者のコミュニティが発生した事を告げた。その時、義之は特別課外活動部のアルカナが自身のそれと同じである事に、今更ながら感慨を持った。

同じアルカナ――

即ち特別課外活動部は、『義之の』コミュニティである。ならば現場リーダーとして表を仕切るのみならず、裏も自らコントロールしていかねばならない。そしてその為には、裏を仕切る幾月をどこかで必ず排除しなければならない。

愚者と道化師（2009/4/20）（後書き）

前の話とくつつけようかとも思いましたが、主旨が異なるので分割しました。

おかげでどちらも短くなっていました。

一話ごとの長さを揃えるのって、難しいです……。

崖へ向けて（2009/4/21）

夜の時間、昨日に続いて作戦室に集合がかかった。クラスメイトの伊織順平が特別課外活動部に参加すべく、寮にやってきたのだ。数日前の影時間にコンビニで泣いているのを、真田に目撃されて適性が発見された、との話だった。もっとも本人はそれを覚えていないらしい。

「記憶の混乱とか、ありがちらしいんだよね。君たち、そういうの知ってた？」

作戦室に大荷物を持ってきた順平は、軽そうな笑顔でそう言う。

「……」

義之は少し考えた。影時間への適性やペルソナ能力に覚醒した当初は記憶障害が起きやすい、とは確かに言われている。だが自分はそうした事はなかった。

『前回』の4月9日に初めてペルソナを召喚した時の事は覚えている。マジシャンの攻撃でゆかりは召喚器を落としてしまい、自分はそれを拾ってオルフェウスを召喚し、更にそれが変容してタナトスが発現した様を覚えている。『今回』のその時も、死の直前の走馬灯かと思ったりしたが、タナトスがマジシャンを滅多切りにする光景とかは、しっかり覚えている。ペルソナ使いの中でも特殊なワイルドの能力を持つ為か、それとも単に記憶力に自信がある為か、とにかくペルソナ覚醒時の記憶の混乱はあまりない。

ただ『前回』の経験の中で、記憶から抜け落ちている箇所が一つ

だけある。1月31日にニクスと相対した時だ。ベルベツトルムでコミュニティの人々の声を聞き、宇宙のような空間を飛翔してニクスの懷まで行き、ユニバースを発動させた。そこまでは覚えているが、ユニバースを使って具体的に何をどうしたのかは覚えていない。

それは何故か――

(ユニバースの覚醒に伴う記憶障害……って事か?)

特に根拠はない。ふとした思い付きに過ぎないが、そんなものかもしれない。

ついでに言うと、2009年以前の出来事では『前回』からずっと消えている記憶がある。十年前のムーンライトブリッジで起きた事故だ。両親が死んでデスを封じられたその時の事を、何も覚えていない。ひよつとすると、それが影時間の適性の覚醒に伴う記憶障害なのかもしれない。

「今夜0時から、いよいよタルタロスの探索を始めようと思う」

義之が考え事をしている間に、幾月がこう言って今夜の出撃が決まった。ただし怪我をした真田は、タルタロスまで同行はするが探索はしない。幾月はそもそもペルソナを使えない為、寮に留まる。ここまでは『前回』と同じだ。

「先輩の分は俺がバッチリ、カバーしますって！」

「不安だな……」

そして順平がやたらと張り切っているのも、ゆかりが不安そうに

しているのも同じだった。ただ『前回』は義之も漠然とした不安を感じていたが、『今回』はそれがない。

（心配いらないさ）

今日の探索は小手調べで、危険などないに等しいものである事が、あらかじめ分かっているから。

23時59分に、メンバー全員で月光館学園高等部の正門前まで来た。何故ここで、と順平は訝しがるが、美鶴は見ているとだけ言う。

残り数秒の普通の時間の間、色のない夜の空気の中で全員が沈黙した。誰のものか、時計の秒針のコチコチと鳴る音が奇妙な鮮明さを持って耳に届いてくる。嫌に長く感じる数秒が過ぎて、0時になった。

瞬間的に空気が緑色に変わり、夜空に浮かぶ月が元の数倍に巨大化した。そして校舎が鳴動し、地面から無数の塔が生えてきた。それらはいずれも天空へと高く伸び、やがて一本の歪な建造物として収束した。順平やゆかりは絶句しているが、何度も見てきた義之にとってさえ異様に感じる光景だ。

タルタロス――

ギリシャ神話では原初の神の一柱であり、冥界の最奥に位置する奈落そのものである。内部は神々すら恐れる暴風が吹き荒れており、ヘカトンケイルやティターンなどの巨人族が幽閉された牢獄でもある。シャドウの巣窟の呼び名としては、これ以上相應しいものもな

かろう。

ただ、神話ではタルタロスは大地に開いた穴とされている。それなのに、現実には塔として聳え立っている。これは一体どういう事なのか。

（実はやっぱり穴で、地上が奈落の底だから……か？）

人間の世界こそが冥界の底の底。いわば地獄。

よってタルタロスとは地獄と天、即ち月を繋ぐ穴――

ストレガのタカヤが聞いたなら、まさにその通りと完全な同意を得そうな事を閃いてしまった。

（いや、神話とは関係ないだろ。きっと桐条グループの誰かが、適当に名付けたんだろ）

義之はおかしな方向に進みそんな思考を矯正した。神話のタルタロスと今ここにある塔は、名前こそ同じだが別物のはずだ。例えば自分たちのペルソナはギリシャ神話に登場する神や英雄の名で呼ばれるものが多いが、だからと言ってペルソナは神話の存在そのものではないはずだ。

ペルソナ召喚はゲームなどでたまにある、悪魔召喚とは違うのだ。心の海から呼ばれた精神の一形態が、ビジョンとなって立ち現れた姿だ。神の名で呼ばれるのは、神話もまた同じ場所から汲み取られたイメージを元に行っているからだろう。つまり起源が同じだから、名前も同じに過ぎない。

「おい、ボサツとしてないで行こうぜ！」

いつの間にか立ち直っていた順平に催促されて、義之は我に返った。見れば他のメンバーは、既にタルタロスのエントランスへと向かっていた。

タルタロスのエントランスは、一見するとそれこそギリシャ風の神殿のような装いがされている。ただそうした雰囲気と明らかに異なる要素として、時計のモチーフが随所に見受けられる。

例えば何故か治療の機能がある時計台とか、周囲を取り囲む黒い壁に浮かんでいる歯車の模様とかだ。そしてエントランスの中央に置かれた長い階段の先にある、巨大な扉はまさしく時計そのものの形をしている。

美鶴から簡単な説明をされてから、二年生の三人はシャドウの巣窟への入り口である、その時計扉まで向かっていった。

三人の先頭に立っていた義之は、扉の前でしばらく立ち止まった。無念さに似た感情が湧き上がるのに耐えながら、眼前の時計を見つめた。

「……」

幾度も通ったこの扉を再び開かねばならない日が来るとは、『前回』の2月以降は思いもしなかった。時間が戻ってしまった事の理不尽さを、改めて実感させられる。しかも戻ったのはタルタロスだけではない。

義之は右手に目を落とし、寮から持ってきた剣を見た。何一つ特別なところのない、ただの金属の塊だ。束を握り直してみれば、腕から湧き出る力は僅かばかりのものだ。普通の高校生より少々強い程度の力しか備わっていない。

そして目を閉じて自分の心の中を覗いてみれば、オルフェウスがいるだけだ。それも『前回』の終わり頃に得た『無色の仮面』たるオルフェウスではなく、初めて召喚した時そのままの非力なペルソナだ。

いや、よくよく探せばもう一体、極めて強大な死神のペルソナが心の中にいる。だがそれを召喚する事はできそうもない。召喚する為の、自分の力が足りていない。

時間に合わせて、せっかく鍛えた力まで戻ってしまった。様々な意味で、あの一年間の苦労が無に帰してしまった。これ以上の理不尽があるうか。

「いつまでそうしてんだよ」

後ろから声をかけられて、義之は振り返った。順平は大剣を肩にかけ、からかうように口の端を持ち上げていた。

「ビビっちまったのか？ リーダー、代わってやろうか？」

『前回』と同じく、タルタロス探索のリーダーには義之が指名された。そしてやはり、順平はそれが不満のようである。

「俺に怖いものはないよ」

おお凄え、と冷やかす順平の声を振り切るように、義之は扉に向き直った。

怖いものはない――

嘘と本音が半々と言ったところだ。仲間が傷つけば後悔する事もあるし、自分が傷ついても痛みくらい感じる。だが恐れる事はない。敵を恐れはしないし、死も恐れない。人間が最も恐れるものは己の死だ。だが死神を体の中に住まわせている人間が、死を恐れる道理はない。

即ち、坂本義之は恐怖を知らない。だから得体の知れない怪物とも戦える。

恐れを知らない者。それは即ち、愚か者だ。崖へ向かって歩く人間の事だ。

人生を暗示するタロットの大アルカナの最初に挙げられる、愚者のカード。

正位置では自由、可能性、天才。
逆位置では逃避、無責任、愚行。

（全く……俺そのものじゃないか）

『前回』を惜しむのは、もう止めよう――

愚か者は死を恐れない。ならば苦痛や徒労も恐れまい。そんなものは、どうでもいい。余計な感情など焼き尽くしてしまえ。

義之は自身の心を重く沈殿させる無気力症状状態に区切りをつけ、決意を固めた。そして扉を開けた先にある、崖へと向かって踏み出した。

タルタロスの探索が始まった。義之を先頭に、ゆかりと順平が後に続く。

第一層は学校の廊下や教室を思わせる装いになっており、見た目だけは昼間の面影を残している。ひよっとすると自分たちの教室の辺りなのでは、と思ってしまう事もしばはあるくらいだ。ただ所々に血溜りができていて、見た目の身近さと相まって、かえって不気味にも感じる。敢えて日常をベースにする事で、非日常を演出するとも言おうか。

もしタルタロスを設計した者がいるのなら、最初にこれを持つてくる辺り、そいつはなかなか意地が悪い――

などと意味のない事を考えていられるほど、義之は余裕を持つて構えていた。だから通信機から聞こえてくる、タルタロスに関する美鶴のレクチャーも適当に聞き流していた。表情だけは聞いている振りをして。

「習うより慣れろだ」

「もう……何か勝手だな」

レクチャーが終わって通信が切れてから、ゆかりは不満をこぼした。

「……」

そんなゆかりを見て、義之は思う。美鶴に対するゆかりの不信感
は、この頃から始まっていたのだと。

ゆかりは父親が死んだ十年前の事故の真相を知る為に、特別課外
活動部に参加している。だがこの通り、成り行きでタルタロスの探
索に狩り出されてしまっている。しかも実際のところは、タルタロ
スの探索はゆかりの目的と直接繋がらないのだ。

その一方で、義之はほぼ全ての真相を知っている。だが闇の中で
手探り状態の二人の仲を、取り持ってやるつもりはない。

ゆかりに目的があるように、美鶴にも譲れない事情がある。結果
的に美鶴がゆかりを利用するのも、今の時点では仕方のない事だ。
だが二人はいずれ、利害を超えた親友になれるはずである。下手に
義之が間に立つより、当人たちで解決させた方が良い。
それに今は――

「出てきたぞ。集中しろ」

早速のお出ましだ。前方に現れたシャドウはまだこちらに気付い
ていないが、今いるこの通路は一本道だから回避する事は無理だろ
う。戦いになる。

「う、うん！」

敵を目にして、ゆかりは弓を持ち直した。その両手は小さく震え
ており、顔には冷や汗が浮かんでいる。完全に緊張している。隣の
順平を見てみれば、そちらも同じような様子でいる。無数の戦いを
経験した者としては、少々危なっかしく感じる。

（二人はこれが初めてだからな。まあ、それでも何とかなるんだが）

集中すべきではあるが、探索そのものには義之は楽観的だった。『前回』に培った力は失われ、武器は気休めのようなもので、ついでに金もないのに。もっともこれらは失われて当然だ。病院のベッドで目が覚めたら、神話で語られる武器や大金を持っていた、何て事があるはずがない。今の義之がアドバンテージとして持っているのは知識だけだ。それでも楽観的だった。

何故なら知識こそが最大の武器だからだ。対シャドウ戦は単純な力押しでは決まらない。彼我の特性を踏まえた上での、戦術の組み立てが最も重要なのである。義之はタルタロスに出現するほとんどのシャドウの特性を覚えているし、自分の指揮能力にも自信があった。

そして何より、『前回』は知識さえない状態でこの迷宮の制覇に成功したのだ。ならば知識のある『今回』で失敗するはずがない。

要するに、義之にとって重要なのはニユクスの来訪と、その後を見据えた全体の戦略なのだ。よって日々のタルタロス探索における小粒なシャドウとの戦いなど、勝って当然。改めて考えるまでもない、片手間の作業に過ぎなかった。

だが――

（こいつら、こんなだったか！？）

敵が強い。とにかく強い。要所ごとにいた番人でもない、その辺をうろついているシャドウがやたらと強い。どれくらいかと言うと、

攻撃を二発も受ければ瀕死になるほどだ。うつかり不意打ちなど食らおうものなら、一瞬にしてこちらは壊滅状態になるだろう。

「って、おい！ まだいんのかよ！」

最初のシャドウの群れは何とか倒した。だが次から次へと湧いて出てくる。

出現するシャドウの種類は『前回』のこの日に戦ったものと同じで、長所や弱点も同じだ。だが強い。『前回』よりも遥かに強い。姿が同じなだけで、実は別物なのではと疑ってしまう。

「わっ……今度は大勢！？ 四匹もいる！」

死闘になった。

「三人とも、大丈夫か！」

通信機から聞こえる美鶴の声は、常になく切迫している。小手調べのつもりの初回の探索で、メンバーを三人も失っては堪らないだろう。

「ええ……ギリギリで」

義之は壁にもたれかかりながら、疲れ切った声で返答した。シャレや皮肉ではなく、本当にギリギリの戦いだった。幸いにもオルフェウスの特性が、敵シャドウに強いタイプだったので何とか勝てた。敵がこちらに強いタイプだったら、或いは敵の特性をあらかじめ知

っていなかったら勝てなかっただろう。

「つ、疲れたっす……。あちこち痛えし……。もう戻ってもいいですか？」

順平は大剣を杖替わりにして、肩で息をしていた。『前回』のタルタロスデビュー時は、暴れ足りないかと強がるくらいの余裕があったはずだが、『今回』は立っているのもやっとの風情だ。

「ああ、今日の探索はこれで終了だ。戻ってきてくれ」

「は、はい……。了解です」

ゆかりも疲労困憊の状態だ。もはや美鶴に文句を言う元気すらない。

「そこから戻る…….と思う」

幸いにして三人のすぐ近く、義之が指差した先に脱出ポイントがあった。もう敵が出てこない事を祈りながら、三人は這うようにそちらへ向かった。

むやみに強いシャドウ。これが最初の想定外だった。そして最後まで様々な方面に影響を及ぼす、ある意味で最大の誤算であった。

崖へ向けて（2009/4/21）（後書き）

引き継ぎ要素なし＋敵が異様に強い

主人公はMANIACSモードに迷い込んでいました。

原作では難易度によってストーリーが変化する事はありませんが、本作ではあちこちに影響が出ます。

魔術師 1 (2009/4/23)

授業が終わると、一人のクラスメイトが義之の席までやってきて、いささか唐突に話しかけてきた。

「俺、ラーメン食って帰るけど、お前も行かない？」

まともに制服を着る生徒が少ないこの学校にあつて、皺一つ作らずに着こなす事ができる珍しい人物だ。本人によると、制服は綺麗に着るのが最もカッコいいそうである。ファッションと女とラーメンが好きな少年、友近健二だ。

(来たか)

義之は声に出して了承を伝えると共に、内心でも頷いた。この日に友近に誘われるのは、『前回』と同じだ。

義之は『今回』も友近を始めとする友人たちと仲を深めるつもりでいる。人との繋がり、即ちコミュニティの力はペルソナ能力に直結するからだ。それがあるのとないのとは、戦力が段違いになる。そして戦いの最終段階、ニクス戦ではコミュニティの結晶であるユニバースが欠かせない。

だから『前回』同様、友人は大勢作らねばならない。何とも打算的であるが、仕方がない。

ちなみにコミュニティの活動に関しては、若干の不安要素はありつつも義之は大して心配していない。特に男相手のものは、何も難しくない。何しろ展開が読めているのだ。友近のケースでは、この

日以降も度々一緒にラーメンを食べに行き、やがて恋愛の相談を受けたりして友情を築いていく。全体の流ればかりか、友近からいつどういう話を振られて、いつ何が起こるかの詳細に至るまで、ほぼ全てを義之は覚えている。

簡単なものだ、と思いきや――

「お、はがくれか？ 俺も行くー！」

「おお、いいぜ」

何故か順平が割り込んできて、友近もあっさり受け入れた。

（あれ……？）

予想外の展開だ。『前回』は順平と放課後を一緒に過ごす事は、ほとんどなかったのに。呆氣に取られているうちに、友近と順平はさつさと教室の外へ向かう。やがて我に返った義之は、慌てて二人の後を追った。

巖戸台駅前商店街にある、鍋島ラーメンはがくれに三人でやってきた。

「な、分かった？ ここのスープ、凄くねえ？」

友近はちよつと得意そうだ。義之としては良く知っている味だが、やはりうまい。何度食べてもうまいと感じるのは、本当にうまい証拠であろう。

「多分、スープに何か入ってるね。普通は絶対に入れないようなも

の……この店名と関係あんのかな？」

そう言っただけは少し怪訝な顔をする。

この店名の由来は、武士道は死ぬ事と見つけたり、という言葉で有名な江戸時代の思想書であろう。だがそれとラーメンの味が、何か関係があるかどうかは不明である。また、このスープはコーゲンたっぷりで美容にいいとの噂もあるが、それと店名の関係も不明である。

（待てよ……。美容にいいものを男が揃って仲良く食うのって、何か変じゃないか？）

義之はふとそんな事を思った。ひよつとすると友近がここに頻繁に通うのは、ラーメンで魅力を向上させようと企んでいるのではなからうか。もっとも効果がどれほどあるのかは、甚だ疑問であるが。

「ところでお前、岳羽さんと仲いいんだって？」

そろそろ食べ終わろうかという頃、友近が言ってきた。

（やれやれ……）

予想していた質問だが、義之は内心で面倒に思う。始業式の日と一緒に登校してきた事と、入院している間に頻繁に見舞いに来られた事などがある為に、現在も自分とゆかりの仲は少々噂になっている。退院後は一度も一緒に登下校していないが、噂はまだ消えていない。『今回』はゆかりと特別な関係になるつもりはないので、迷惑な話である。

だが友近との関係に限っては、この噂は役に立つ。そもそも友近が自分に興味を持ったのは、ゆかりとの噂が原因であろう。友近は恋に恋する少年である。ただ恋の相手は誰でも良いわけではない。しかしながら、公言しているように年上限定でもない。

友近の年上好きは、実は個性派の女優や歌手のファンになるなどと同様の事で、友近なりの自らの個性の演出に過ぎない。つまり友近にとって恋はファッションであり、ありふれた形のものには興味を持たない。だから彼女持ちの男は他に大勢いる中で、噂の相手が校内のアイドルである自分に興味を持った。『前回』の付き合いから、義之は友近の心理をそう分析している。

「別に。子供に興味はないね」

以上のように分析した上で、敢えてこう答えた。今の時点では、友近は自身の恋愛に関する思いがどういうものか理解していない。『前回』それを理解したのは、魔術師のコミュニティが極まった時だ。

エミリが好きだったのか、先生との恋愛が好きだったのか、考えただけで分からなかった。口ではそう言っていたが、後者が真実だと気付いていた。義之はそう見ている。

だが今の友近は自分自身を年上好きと見なしている。なればこそ、ガキに興味がないと言える共感を得られるはずだ。
しかし――

「何だよ、クールなツラしちゃってまあ！」

友近より先に、順平が食いついてきた。

「するとあれか？ 桐条先輩とか、ああいうのがタイプか？ 実は狙っちゃってる？」

「お、そっちな？ そっぴやお前ら、あの生徒会長殿と同じ寮なんだよな。男女が同じ屋根の下っていいのかよ？」

「いやあ、それがねえ……」

義之を置き去りにして、二人で話が盛り上がってしまった。寮での暮らしに始まり、昨日の美鶴の生徒会会長就任の演説まで話が進んでいく。

（あれ……？）

訳が分からないまま、時間が過ぎて行った。やがて二人の話が一区切りすると、友近はふと時計を見て――

「おっと、ドラマの時間だ。先に帰るわ。じゃあな！」

唐突に席を立ち、一人で先に帰ってしまった。レジで金を払って店を出るまで、あつと言っ間だった。こちらを振り返りもしなかった。まだコミュニケーションが発生していないのに。

（おいおい……）

何も起こらないまま、順平と二人で店に残されてしまった。一体どうしろと言っのдарう。呆然と店の出口を見つめていると、順平が話しかけてきた。

「あいつさ、結構いい奴だぜ。俺と宮本……って分かるか？ いったもジャージ着てる奴。三人合わせてF組三馬鹿トリオ！ とかゆかりツチに言われちゃったりするけどさ！」

振り返ると、ヘラヘラと効果音を発しそうないつもの軽い顔がそこにあった。確かに友近も宮本も馬鹿には違いな。しかもそれぞれタイプが異なる、バリエーション豊かな三人組だ、などと思っていたら、順平は急に真面目な表情になった。

「前も言ったかもしんねえけど、俺も中二ん時に転校してきてさ。最初はさ……色々難しかったんだわ」

その話は聞いている。経験上、転校生の気持ちが分かるから初日に最初に話しかけてきたりと、順平なりに気を使ってくれている事は分かる。今日同行してきたのも、その一つなのだろう。

「だからよ、俺がいて良かったろ？ 寮だってよ、同じ学年の男がいた方がいいだろ？」

そう言って、再び笑顔になる。ただし一見すると何か含むところのありそうな、意図的に胡散臭さを醸し出しているシャレのきいた顔である。

順平の良く言えば世話焼きな、言い方を変えれば馴れ馴れしいところは、面倒に思う事は『前回』から度々あったが、別に不快ではない。だが今日に限っては、面倒どころか完全なありがた迷惑だった。コミュニティの発生を邪魔してくれた。

（明日以降、改めて友近を誘わないと駄目か？ ったく、無駄な時間を使わせて……）

「でもまあ、まさかお前とあんな事になるとは想像もしなかったぜ。背中を預ける仲っての？ メチャクチャしんどかったけど……悪くねえんじゃない？」

そう言っ、順平は肩を叩いてきた。晴れ晴れとした、裏表のない明るい笑顔に切り替えて。短い間に何度も印象が変わる、なかなか忙しい顔だ。

などと思っていると――

「ま、よろしく頼むわ！ 頑張ってこうぜ！」

『我は汝、汝は我……』

(！?)

全く予期せぬタイミングで、頭の中に声が響いた。『前回』に何度も聞いた、新たな絆が生まれた事を告げるあの声だ。水が乾いた砂に吸い込まれるように、ゆっくりと、かつ儼かな響きでもって頭の隅々まで浸透する。

その声は始まったら最後、誰にも止める事はできない。影時間以上の鮮烈さでもって、時間そのものが停止してしまう。謎の存在である『我』が放つ、問答無用の宣告である。抵抗は一切できない。カードの形をした絆が心に食い込んでいくのを、義之はただ見つめる事しかできない。

思考を動かせるようになるのは、全てが終わった後である。

(順平とコミュが発生した……？ 何故!?)

コミュニティのアルカナは魔術師だ。順平のペルソナと一致する。その点では違和感がないが、まさか友近から移ってしまうとは。完全に予想外の出来事だ。

（参ったな……。どういう展開になるんだ、これ？）

義之は戸惑いを禁じ得なかった。何しろ『前回』は影も形もなかったコミュニティだ。順平の性格は把握しているが、戦いと直接関係のないコミュニティの展開は読み切れない。それに月日が進むと、順平とは少々仲違いをする事になる。それがコミュニティで抑えられるのか、それとも拍車をかけるのか。色々な方面に影響を及ぼしそうだ。

魔術師1 (2009/4/23) (後書き)

初のコミュ話です。

タイトルがアルカナの名前+数字になっている話が、コミュ話だと思ってください。

なお、数字は原作で言うコミュランクとイコールではありません。

(一つのコミュ当たり、十話も書いてられません……)

予定では、各コミュごとに四話から五話くらい書いていくつもりです。

戦車1(2009/4/24)

順平との間に魔術師のコミュニティが発生した日の翌日、義之は体育館へと向かった。この日から運動部の追加募集が始まるので、『前回』と同様に剣道部に入部するつもりなのである。

同じクラスの宮本一志は既にジャージに着替え、部活へと向かっていった。走って。部活のない日はモノレールと競走する健脚の持ち主だけに、その足は非常に速い。

だが程なくして宮本は膝を故障し、走るのはおろか歩く事にも不自由する事になる。それを義之は知っている。そればかりか、自分が原因の一つになってしまふ。

故障の主な原因は長年に渡る疲労の蓄積であろうが、止めを刺したのは義之との稽古である。宮本は次期主将と目されている実力者だが、互角以上の動きができる義之に対抗して余計に無理をして、元から怪しかった膝を決定的に悪化させてしまったのだ。

そうした今後を知らながら、また故障させるのかと思うと申し訳ない気持ちにもなるが、仕方がない。そうしてもらわないと、戦車のコミュニティは前に進まない。世界の平和の為に、少々苦しい思いをしてもらおう。どうせ月日が進めばリハビリを決意するようになるし、その甲斐あって3月には全快するはずなのだ。しかも『今回』は、マネージャーの結子を引き取ってもらうつもりでいる。

(いい事だよな……誰にとっても)

宮本自身はゆかりに気があるようだが、どう考えても上手くは行

くまい。それよりは結子の方が絶対に馬が合うだろうし、周囲も納得するはずだ。何となれば、月高ベストカップル賞（そんなものがあればだが）を進呈してやっても良い。その辺で許してもらおう、と義之は自分自身に言い訳をして、両開きの扉を開いて体育館に入った。

だが――

（あれ……やけに人が少ないな。しかも何で女子がいるんだ？）

義之は違和感を抱いた。この学校には女子剣道部もあるが、練習は男子とは別のはずだ。だが体育館の中には、防具を着て竹刀を振り回している女子生徒が男子に交じって何人かいる。と言うより、女子の方が多い。それでいながら、全体の人数は少ない。

怪訝に思っていると、横から声をかけられた。

「あら、あなた新入生？ 入部するの？」

（叶？）

入り口脇の壁に背を預けて立っていた、妙齡の女性。倫理の叶だ。友近の想い人で、女子生徒にはない大人の雰囲気醸し出している、或いは意図的にまき散らしている問題教師である。

剣道部の顧問は物理の竹ノ塚のはずなのに、どうして叶がここにいるのだろうか。竹ノ塚もこの学校の教師の例に漏れず色々いい加減だが、顧問としてはなかなか優秀だった。少なくとも部の仕事をサボって他の教師に押し付けるような事は、『前回』は一度もなかったはずなのだが。

「え、ええ……二年ですけど」

「そう。岩崎さん！」

言われて一人の女子生徒が面を着けたままやってきた。叶はその生徒に面倒を見てやってくれと伝えると、気だるげな表情で去っていった。

（宮本じゃないのか？　と言うか、誰だこいつ？）

女子生徒は面を外したが、その顔に見覚えはなかった。いや、どこかで見ているかもしれないが、記憶には残っていなかった。『前回』は色々と忙しすぎて、コミュニケーションと関係のない生徒とは、ほとんど話した事もなかったから。

「ようこそ剣道部へ。歓迎するわ」

利発そうな雰囲気のあるその女子生徒は、岩崎理緒と名乗った。義之と同じ二年生だが、部では男女を含めてリーダー役をしているらしい。無論、『前回』の剣道部にそんな女子はいなかった。

こちらにも名乗ってから、改めて体育館を見回してみたが宮本の姿はない。自分より先に教室を出たはずなのに。そして結子も見当たらなかった。それに留まらず、ここにいる面々はほとんど全員知らない。そして皆、下手だった。

（どうなってんだ？　これは……）

『前回』とは明らかに異なる状況に戸惑っていると、岩崎から体育館の隅にあるドアを示された。そこが更衣室で予備の防具が置い

であるから、着替えてくるようにと言われた。

「じゃあ取り敢えず、打ち合ってみましょうか」

防具を付けて竹刀を手に持った義之が戻ってくると、体育館の中央に立っていた岩崎がそう言って手招きしてきた。それを聞いて、義之はまた内心で戸惑う。

新入部員に対していきなり打ち合いからスタートとは、かなり無茶な練習法である。だがそれは別に構わない。時間と共にペルソナ能力も初めの状態に戻ってしまったが、それは元より普段の体力や運動神経とは別物である。『前回』のこの頃から剣道にはそれなりに自信があつたから、初手から打ち合うくらいの無茶は気にならない。気になるのは、それとは別の事だ。

「君と？」

今まで女子を相手に稽古をした事はない。どこまで本気でやって良いものなのか、いささか迷うところである。

「女だからって舐めないでね。男子にも私より強い部員はいないんだから」

面越しに岩崎は不敵な笑みを見せてきた。どうやら腕に自信があるようだ。

「……お手柔らかに」

何だか訳の分からない状況になっているが、取り敢えず今日はこ

ここで練習せざるを得まい。成り行きに任せて蹲踞の姿勢を取り、竹刀を正眼に構えた。

そうして岩崎と稽古をして、勝った。十本やって、十本とも取った。

「あ、貴方強いわね……」

互いに礼をして面を外すと、岩崎は感心したように見上げてくる。

「君こそ」

義之の目から見ると、岩崎は女子としてはまあまあ強い。強豪校でもレギュラーにはなれるレベルだろう。だが宮本には及ばないし、まして早瀬とは比べるべくもない。『前回』の剣道部のエースとして彼らと張り合ってきた義之は、岩崎程度の相手には一本とても取られる事はない。

だが本人が言っていたように、部内で一番使える事は確かなようだ。改めて体育館を見回してみると、皆が岩崎に劣るレベルだ。しかもそうした他の部員からは、やる気もあり感じられない。楽しくやれればいい、くらいのつもりでいるようだ。

「部員はこれで全員？」

「本当はもうちょっといるんだけど……幽霊も多いから」

「……」

義之は悩む。どういう事なのか分からないが、『今回』の剣道部は『前回』とは違うようだ。ありのままに言つと、『前回』はかなりの強豪校だったが、『今回』は全然だ。そもその部員数が少なく、幽霊部員もいて、顧問はやる気なし。弱小校の典型だ。また、マネージャーの類もないようだ。

「こんなんで明王杯出れるかな……」

運動部はそれ自体はもちろんだが、他のコミュニティが派生して生まれる為、かなり重要なコミュニティである。マネージャーの結子は言うに及ばず、他校の生徒である早瀬と知り合ったのも部活の延長上の事だ。だが今のままでは、明王杯に出場して早瀬と会うのは到底無理だ。

あの大会は学校としての実績がある程度必要で、個人の實力だけでは出場できない。早瀬本人は巖戸台商店街に時々現れるが、面識がないまま一方的に話しかけても、コミュニティは築けないだろう。無論それは結子も同様だ。

（いや、待て。この様子だと宮本と結子は別の部なんだろう）

そうであるならば、何も無理して剣道をやる必要はない。明日にでも宮本にどこの部に入っているのかを聞いて、改めてそちらに入り直した方がいいだろう。既に募集を締め切っている可能性もあるが、美鶴にでも頼めばねじ込んでもらう事も可能はずだ。ひよつとすると、早瀬も剣道以外のスポーツをしているのかもしれない。

「明王杯？」

岩崎が振り返ってきた。知らず声に出してしまったようだ。岩崎

はどこか気恥ずかしそうに俯いたが、すぐに顔を上げて笑顔を見せた。

「うん……今のままじゃ難しいけど、頑張ろう！ 坂本君がいればきつと出れるよ！」

何とも爽やかな、スポーツに打ち込む若い女に良くある健康的という表現がぴったりの笑顔だった。

そして――

『我は汝、汝は我……』

（あっ！）

昨日に引き続き、余計なタイミングで頭の中に声が響いた。そして響いた時には、もう遅い。絆と呼ばれる無形の力が、心に侵食してくるのを止められない。こちらの意志は無関係な辺り、まさに侵食と呼ぶ他にない。

岩崎との間にコミュニケーションが発生してしまった。アルカナはもちろん戦車だ。

（ああ……やっちゃった。星と剛毅はどうすればいいんだ……）

やってしまった。順平の時もそうだったが、あれよりも良くない結果だ。競技こそ同じだが実態がまるで異なる部活で、しかも担い手は『前回』全く接点がなかった人物だ。

岩崎がどんな性格なのか、今日の事だけではまだ把握できていないし、今後に何が起こるのかは予想がつかない。しかも下手をする

と、星と剛毅のコミュニティは手に入らなくなってしまつ。一年間の計画に相当な狂いが生じる事は避けられない。

ついでに言うと、女子というのがなお良くない。

翌日の放課後、教室で宮本を捕まえて聞いてみた。どこの部に所属しているのかと。

「ん？ 俺はテニス部だけど」

「……似合わねえ」

思わず本音が漏れた。昔懐かしい根性系熱血漢の宮本がテニス。ちょっと想像がつかない。

「悪かったな！ まあ……球技より陸上や水泳とかの方が似合つて、良く言われるけどよ。でもな、自分で言うのも何だが、俺は強いんだぜ！ 去年は新人戦で優勝したからな！」

違うスポーツでも、やはりなかなかの実力者のようだ。宮本ほどの体力と精神力をもつてすれば、何をやらせても人並み以上には行くだろうから、当然の事かもしれない。

「興味があんなら見学に来いよ……と言いたいところだが、悪いな。うちはもう募集締め切つてんだ」

「もう剣道部に入つたから」

宮本はそうか、とだけ答えて教室を走って出て行った。その後姿を見る限りでは、今のところ膝は問題ないようだ。『今回』は故障するのかもしれないが、それは心配すべき事柄ではなかった。

予想外だったが岩崎との間に戦車のコミュニティが発生してしまった。一度発生したコミュニティは取り消しがきかない。『我』の声を聞いてしまった以上、もはや部活は剣道を続ける他にない。

（しばらくは気合入れて部活やって、他の部員を鍛えないとな……）

昨晚に携帯でネットを少し調べてみたら、早瀬は『前回』と同じく剣道をやっていて、去年の明王杯で優勝しているようだ。こうなると、剛毅は他の部員との間に発生する事を期待して、星は明王杯に何とか出場して手に入れるしかない。

こうして今後しばらくの間、義之はかなりの頻度で剣道部に顔を出す事になる。そして数の少ない男子部員に、稽古をつける事に出すのである。傍から見ると、シゴキと言っても間違いではない厳しさで。

戦車1(2009/4/24)(後書き)

P3Pをプレイされた方はもうお分かりでしょうが、本作では主人公のコミュが発生します。

なお、キーワードにP3Pを入れていますが、本作のP3P要素は基本的にはコミュしかありません。ですので、女主人公やテオは今後も登場しません。あらかじめご了承ください。

また、男女の主人公で担い手が同じコミュも発生はしますが、作中では一部を除いて描写はしない予定です。

隠者 1 (2009/4/29、5/8)

「なあ、N島とY子って知ってるか？」

今日は4月29日、昭和の日である。商店街にある古本屋から戻ってきた義之は、寮のラウンジで順平にいきなりこう言われた。

「いや、今日久しぶりにネットゲームやったのよ。デビルバスターズオンラインっての。そこで一緒になった女の子とチャットしたら、話が盛り上がってさ。相方指定されちゃったわけよ。俺がN島で、その子がY子！何か元ネタがあるっぽいんだけど、分かんなくてさ」

それは日本を創世した、原初の神の二柱。日本の国土のみならず、天地の間にある万物をも生み出した、偉大な神の夫婦である。ちなみに夫の方は、亡くした妻を求めて黄泉の国まで下って行ったが果たせなかったという、オルフェウスと似た神話の主人公でもある。

日本とギリシャ。地理的にかけ離れていながら物語として似ている為、比較神話学の対象としてよく引き合いに出されている。まさに人間の無意識の普遍性を暗示しており、非常に興味深い。

ではなくて――

「……昔のゲームの主人公とヒロインだ」

「そうなの？ 何てゲーム？」

輪廻転生がテーマのとある小説が原作で、2コンにマイクがついていた時代の、とか詳しい事は説明する気になれなかった。突っ込

んでくる順平を適当にあしらいながら、義之は困惑していた。

（そうだ、忘れてた……。前は確か昨日に順平からゲームをもらって、Y子と会ったんだった）

それが何故か順平はゲームをくれず、自分を差し置いてN島になってしまった。順平はノリの良さではY子といい勝負だろうから、それなりに楽しくやっていけるだろう。互いに正体を知ったら、大変な事になるだろうが。だがそんな事はどうでもいい。

問題なのは――

（俺はどうすればいい？ 隠者はどうなるんだ！）

声には出さずに、内心で叫んだ。記憶力には自信があるのに、どうして忘れていたのだろう。近頃、こんなばかりだ。事態の主導権をまるで握れていない。

5月8日の昼休みの時間、担任のY子、もとい鳥海いさ子が教室に予告なく現れた。そして義之の席のところまでやって来て、意外な事を言い出した。

「委員会？」

校内にいくつかある委員会に入れとの事だった。

「そ、義務だから」

最初は欠員が出たとか何とか言っていたが、話の途中で義務にす

り替わった。もちろんそんな義務があったとは、『前回』は聞いた事もない。

「もう生徒会に入ってるんですけど」

生徒会には先月の27日、『前回』と同様に美鶴に頼まれて加入した。ちなみに生徒会の面々は『前回』と同じで、会長の美鶴の下で小田桐が風紀委員を、千尋が会計をしていた。そして小田桐との間に、皇帝のコミュニティを無事築く事ができた。魔術師や戦車のように訳の分からない状況にはならず、ちよつと安心したものだ。

「いいのそれは。っていうか貴方、生徒会に全然出てないって聞けるわよ？」

「……」

不覚にも一瞬言葉に詰まった。何事につけ面倒くさがりで、投げ遣りな鳥海にしては良く調べている。その通りなのである。

義之は皇帝のコミュニティを築いた初日以降は、生徒会に一度も出ていない。理由は剣道部の活動日が『前回』と違って、生徒会と完全にかぶってしまった事だ。明王杯に出場して早瀬と会う為に、他の部員を鍛えようとこれまでずっと部活を優先してきた。本格的に生徒会に参加するのは、二学期以降にするつもりだったのだ。

ちなみに一学期はほとんど参加できない事は、美鶴の許可を得ている。そもそも事情に通じた人間を生徒会に欲しくて義之を推薦した美鶴は、不本意そうな顔をしていたが。生徒会は義之を常時拘束するものではなく、都合がつく時だけで構わないとの美鶴本人の発

言を盾にする事で承知させた。

思考が脱線した。それはそれとして、生徒会も委員会の一種のよ
うなものだから、義之は既に義務とやらを果たしているはずである。
第一、そうした類の活動を全くしていない生徒も大勢いるのだから、
彼らに振れば良い話であろう。

そう言っただけで断ろうとしたが――

「はい、じゃあ入ってね。今なら選ばせてあげる。保健委員と図書
委員、どっちがいい？」

選択肢を聞いて、頭が急激に回転し始めた。
数秒間考えた上で――

「保健委員で」

男が保健委員というのも何か間違っている気がするが、保健室の
主をもっと間違っている人物が務めているのだから、気にするところ
ではなからう。

「よろしい。それじゃあ今日から早速だから。放課後、保健室に行
ってちょうだい」

そう言っただけで、鳥海は満足そうな笑顔で教室を去っていった。足取
りも目に見えて軽やかである。

「適当だよな、あの先生」

「」愁傷様……」

そんな声と共に、教室にいた一部の生徒から同情の視線を送られてきた。仕事を押し付けられたわけだから生徒の反応は当然だが、義之はむしろ幸運に感じていた。ここ数日悩まされていた、問題の解答が与えられた気がしたのだ。

義之が保健委員を選んだ理由は三つある。友近に言わせるとサボり撲滅作戦の江戸川が主である為、保健室を訪れる生徒は限りなく少ない。サボり目的の健康体は皆無。本当に怪我や病気であっても、勇気が試される怪しげな薬を出される為に敬遠する者が大半。よって保健委員は暇だろうと推測されたのが、最初理由である。

二つ目の理由は、最初と矛盾するようだが江戸川と話す機会を増やしたかったからだ。駄目教師ばかりのこの学校の中にあつて、ある意味最も駄目な教師だが、別のある意味では最も優秀な教師だ。江戸川の魔術に関する知識は、並大抵のものではない。そしてペルソナ使いの戦いとは、まさに魔術師の戦いだ。

だから『前回』は総合学習の授業を真面目に聞いていたし、夏休みの補習でもそれを選択して、突っ込みどころがあると褒められた(?)ものだ。タロット占いでも魔術の歴史でもいいが、とにかく魔術や宗教の知識は深めておく必要があると思っていた。

そして三つ目の最大の理由は――

(隠者のコミュを江戸川と築けるかもしれないしな……)

ネットゲームをやりそびれてから、『今回』の隠者に当てはまる人物が誰かいないか考えていた。思いつく中で有力な候補が、江戸川だったのだ。何しろY子よりずっと隠者らしい人物である。実は影時間やシャドウの事も知っていると、昔は桐条の研究者だった

とか言われても驚かないだろう。

「今日から保健室のお仲間ですよ。二年F組の坂本君」

その日の放課後に早速保健室へ向かうと、怪しい笑いを浮かべる江戸川に他の委員に紹介された。案の定、保健委員は女子生徒ばかりである。そして見知った顔はいなかった。

「今日の当番さんは誰ですかね？」

「あ、はい。私です」

言われて一人の女子生徒が進み出てきた。やはり知らない顔だが、大人びた雰囲気を書き、物静かな印象を与えてくる生徒だ。三年生であろうか。

江戸川は義之に委員の仕事を教えるようその生徒に頼むと、奥の部屋に去っていった。

そして義之は長谷川沙織と名乗った上級生と思しき生徒に、保健委員の仕事を説明された。とは言え、放課後に保健室の番をするくらいで、特にこれと言ったほどの仕事はないようだ。昼休みに推測した通り、やはり保健委員は暇なようである。

また、怪我や病気の生徒が来ても委員が診察する事はできないから、する事と言えば江戸川を呼びに行くだけである。その江戸川は普段は裏の小部屋にいるらしいが、入室は禁じられている。

「入った生徒は二度と帰ってこない……何て噂があるくらいだから」

長谷川は冗談のように言うが、あり得そうな噂である。あの江戸川が籠るくらいだから、果たして何をしているのやら。部屋の中では、常人では想像も及ばない異界の領域が広がっているかもしれない。

だが――

（コミュを築くなら、入るしかないだろうな）

江戸川が去って行った、裏の小部屋に繋がる扉を見て思う。『前回』怪しげな薬を散々飲まされた経験から、義之は少々のもで怯んだりしない。床に魔法陣が描かれていようが、見た事もない動物がホルマリン漬けにされて棚に並んでいようが、驚かない自信がある。今日にでも早速突撃してみようか。いや、念の為に召喚器は用意しておくか――

などと考えていると、他の委員がおずおずと長谷川に話しかけてきた。

「あの、長谷川さん……」

「あ、済みません……気付きませんで。今日はどうぞ帰ってください。後は私がやっておきますので」

言われるまま、他の委員たちは帰って行った。

（白けたのか？）

義之は彼女らを見送りながら、女ばかりの委員会に男が紛れ込ん

で来て白けたのであろうか、などと考えた。例えばゆかりと風花が二人で話しているところに順平が割り込んで煙たがられる様子などは、『前回』に見ている。女同士の仲と言うものにあまり詳しくないが、それと似たようなものかもしれない。だが義之の標的は江戸川の為、他の委員には歓迎されなくとも一向に構わない。

「あ、別に皆さん、歓迎してないとかじゃないのよ？」

(?……)

凶星を突かれたような気がして、一瞬面食らった。振り返れば、長谷川は穏やかに微笑んでいる。

「別に。気にしてませんよ」

「あ……言ってなかったわね。私、貴方と同じ二年生だから。敬語は使わなくていいわ」

「なら、さっきの人たちは？」

確かに長谷川は三年生かと最初は思った。だが帰って行った他の委員は、長谷川と互いに敬語で話していた。ならばこの委員会は年次に関係なく、誰とでも敬語で話す慣習なのかと思ったのだが。

「……気が付いた？」

義之の指摘に長谷川はばつが悪そうな顔をした。何でも長谷川は以前に留学、もしくは休学していて、年齢は義之より二歳上らしい。つまり学校の生徒の中では最年長になってしまっている為、同級生ばかりか上級生にまで敬語で話されているそうである。

「止めて欲しいんだけど……もう諦めたわ。でも、できれば普通に話して欲しいな……」

「構わないぞ」

何気なく、ごく自然に義之は答えた。相手に合わせて口調を変えるのは得意だが、内心では誰でも呼び捨てである。寮の上级生や学校の教師に対してもそうだ。口を滑らせた事は『前回』を含めて一度もないが、それでも心と言葉が一致しているに越した事はない。

「そう？　ありがとう……」

長谷川は再び微笑んだ。先ほどまでより、少々身近に感じる。ただの礼儀としてのそれから、本心から嬉しく思う表情へと変化したからかもしれない。そんな長谷川を今までより少し詳しく観察してみると、左目の下にほくろがあるのに気付いた。どこかの誰かを連想させる位置だ、などと思っていると――

『我は汝、汝は我……』

（え？）

頭の中に声が響き、新たなコミュニケーションが発生した事を告げられた。アルカナは隠者。担い手はもちろん目の前にいる人物、長谷川だ。未だ部屋に籠ったままの江戸川ではない。

（うわあ……誤算だ。ってか、何回目の誤算だよ、これ……）

相手が予想とは異なったが、取り敢えず築けた。築けた事それ自

体は良い。良いのだが、長谷川はほとんど未知の人物だ。コミュニケーションで今後何が起るかは分からないし、性格もまだ把握していない。江戸川の方が性格や趣味を多少なりとも把握できている分、まだマシだった。そして江戸川と比べて、明らかに良くない点がある。それは――

（岩崎に続いて、また女が……）

余計な厄介事を抱え込んでしまいそうな予感に襲われた。女と言えば『前回』の隠者の担い手だったＹ子もそうだが、あれは特に問題なかった。

卒業式の前日、ふとした事から義之は正体を明かしたが、教師の立場がある為に鳥海はそれなりに自制できていたから。たとえ『前回』あのまま生き延びても、鳥海と特別な関係になる事はなかっただろう。だから4月に女子のコミュニケーションの進め方を検討した時もＹ子は数に入れなかった。だが長谷川には、そうした立場的な防壁がない。

特別な関係にならずにコミュニケーションを進めるには、どうすれば良いのか――

難題が増えてしまった。

処女懐胎（2009/5/9）

二度目の満月の日が来た。『前回』のこの日は、試練が来るとあらかじめファルロスに言われていた為、授業を終えるとすぐに寮に戻った。そして『今回』もそのようにして、寮に戻ってきた。

『前回』のこの頃はファルロスの言動をほとんど理解できず、その正体に至っては見当もついていなかった。だがそれでも忠告には素直に従って、寮で待機する事を選んでいた。忙しくなり始めたコミュニティの活動もせずに。今にして思うと、この時期から半ば無意識的に分かっていたのだろう。ファルロスは味方だと。この理不尽な戦いに巻き込んだ張本人であるのに。

（俺はあいつに署名させられたんだよな……）

義之は自室のベッドに腰掛けながら、契約者のカードに署名した時の事を思い返した。あれは『今回』が始まる前の出来事だから体感的には丸一年ほど前だが、その時の様子ははっきりと覚えている。

自分の行動に、責任を取る――

4月のその時は、ほとんど何も考えないまま流されてカードに署名した。だが後悔した事はないし、ファルロスを恨む事もなかった。

普通に考えれば、恨んでもおかしくない相手のはずである。この戦いに自分を巻き込んだのは、ファルロスに他ならない。契約をさせただけではなく、そもそもペルソナを得たのはファルロスの影響だ。更に言えば、ファルロス即ちデスの存在こそが影時間とタルタロスの発生原因である。まさに諸悪の根源だ。

そして十年前、ムーンライトブリッジで両親が死んだ事故の原因でもある。それでいながら、恨む気持ちは全く湧いてこない。

（そりゃあな……。覚えてもない事故の為に、恨んだりするか……）

義之は十年前、デスとアイギスの戦いに巻き込まれて両親を失っている。だがその時の様子は覚えていない。デスを封じられた事も覚えていない。『前回』の12月3日、綾時から事の真相を聞いてさえ、全く思い出せなかった。完全に記憶から抜け落ちている。だから自分自身の事でありながら、実感が持てないのだ。

事故後に親戚中をたらい回しになった事に対しては、恨む気はあったかもしれない。だがそれは運命を恨むと言うべき事だ。ファルロスやアイギス本人に対しては、暗い気持ちはまるでない。意識して恨もうとしても無理なくらいだ。むしろ逆に親愛の情を感じている。自分自身と言うものを持たない『愚者』でありながら、彼らには不条理なまでに心からの感情を抱いている。

（そう言えば……。俺ってファルロスの為には、何もしてやれてなかったな）

『前回』は遂にその正体に気付かないまま、11月4日に別れを迎えた。その翌週には綾時となって再会したが、それでもやはり気付かなかった。己の鈍感さが恨めしい。気付いていれば、せめて優しい言葉の一つくらいは与えられただろうに。進路相談の日、屋上でアイギスに言ったような。

死神に優しくする――

傍から見れば、物凄いお人好しである。

柄でもないのにこんな風に思うのは、体の中に住まわせていた事と関係しているのかもしれない。たとえば言うなら、妊娠した女が腹の中の子供に対して抱く感情のようなものだろうか。

（ん……妊娠？ そんな訳あるか！）

我ながら無茶な連想だ。ファルロスが自分の体の中にいる事は確かだが、だからと言って妊娠はないだろう。自分は男なのだから。

（馬鹿馬鹿しい。少し寝よう）

おかしい考えを振り切るように、義之はベッドに仰向けに寝転んだ。今夜の戦いに備えたペルソナは既に用意してあるし、作戦の段取りも考えてある。後はただ、本番に備えて体を休めておくだけだ。

影時間になると、作戦室に召集がかかった。モノレールに現れた大型シャドウが、美鶴の探知に引っ掛かったのだ。街中でシャドウが暴れたりすると、そこに矛盾が発生する。よってどうしても倒さなければならぬとして、出撃が決まった。ただし4月に負った怪我が完治していない真田は、今日も留守番を言い渡された。

「仕方ないな……。現場の指揮を頼む」

真田はそう言って義之を見て、美鶴も認めるように頷く。ここまでは『前回』と同じ展開である。

そして――

「やっぱ、そう来るんすね……」

順平が小声で呟くのを、義之は聞き逃さなかった。

『前回』のこの時は、このまま義之がリーダーで固定になりそうだと不満を漏らしていた。今にして思うと、やがて起こる順平との仲違いはこの頃に最初の伏線があったのだと分かる。

義之としては、もし順平との関係が『前回』と全く同じであれば、ここで妬まれても別に構わなかった。どうせ月日が更に進めば和解できるし、順平も実戦の現場にまで嫉妬心を持ち出して足並みを乱すような事はなかった。今日この日を除いて。

だが『今回』は何故か順平との間に、魔術師のコミュニティが発生してしまった。コミュニティが今後どう展開していくのか、そしてそれが順平の内面や行動にどう影響を及ぼすかは読み切れない。だが可能な限り、円滑に進めていきたいと思っている。

ここであまり順平に悪い印象を持たれては、事によってはコミュニティまで壊れてしまうかもしれない。コミュニティの破綻は義之自身の戦力の低下に繋がるし、最悪の場合はニユクス戦にまで響きかねない。だから何とかして、順平が余計な感情を抱かないように仕向けたいのだが――

（取り敢えず、今日は作戦通りに行こう）

今日の戦い方は既に考えてある。順平の気持ちにも多少は配慮した形で。それを頭の中でもう一度確認して、義之は作戦室を後にした。

バックアップ用の機材をバイクに積んだ美鶴とは駅で別れ、三人で線路の上を歩いた。周囲を遮るものがない線路上から見える景色は、影時間の緑の空気の中では不気味さが際立つ。街の明かりは全て消え、普段の数倍も巨大に見える月が煌々とその存在を主張する様は、写実性を排除した抽象絵画を思わせる。

絵の中心にあるのは、もちろんタルタロスだ。どこから見ても目に入ってしまうし、どこにあっても中心になる。三人が歩いている場所からはかなりの距離があるが、文字通り天を衝くその巨大さは、構図上の配置を無意味に感じさせるほどの迫力がある。

程なくして、線路上に停止したモノレールに辿り着いた。三人から見て手前側、最後尾の車両のドアは、招き入れようとするように開いている。

（ここで気付くべきだったな）

まさしくドアは招き入れる為に開いているのである。義之は『前回』の経緯からそれを知っているが、敢えて皆に注意はしない。奥の車両に目を向ければ、注意しても無意味な事が分かる。

（他のドアは開いてない。先頭車両まで線路を歩いていくのは駄目だ）

シャドウは基本的に自意識を持たないが、今日に限ってはこのような罫を仕掛けている。だがこちらに選択の余地はない。罫を承知で、敵の懷に飛び込む他にはないのである。だから義之は何も言わず、

先頭に立って車両に乗り込んだ。

三人がモノレールに乗り込むと、途端に全てのドアが閉まった。乗客が象徴化した棺桶が並ぶ車両の中に、閉じ込められた。見た目の上でも、かなり嫌な状況だ。予期していた義之は平静を保つが、ゆかりと順平は慌てだした。

「ちょっ……ハメられた!？」

「どうした! 何があった!」

通信機から美鶴も切迫した声を届けてくる。

(近頃の美鶴の通信は、いつもこうだな)

義之はふとそんな事を思った。『前回』はこの日はともかく、普段のタルタロス探索などでは美鶴はいつも冷静だった。だが『今回は慌てる事が多い。』とは言っても、別に美鶴の性格が変わっているわけではない。『前回』も機会は少なかったが、美鶴が慌てるころは通信越しに何度か聞いている。例えば一つのフロアに長居し過ぎて、死神が出現した時などだ。ただ『今回』は頻度が高い。

義之たちは4月21日の初回の探索以降も何度かタルタロスに通ったが、行くと共に死闘の連続である。誰か一人は瀕死の状態に追い込まれるし、本当に死の間際まで行く事もあった。そうした時の美鶴は、今のよう慌てている。

何が起ころうと常に冷静でいる事。内心は別としても、少なくとも外向きには。これはリーダーに求められる資質の一つである。『

『前回』は真田や美鶴が前線に復帰して以降も義之が現場リーダーを務め続けたし、『今回』もそうなるだろうが、ある意味当然の人選と言える。

義之は本当に何が起ころうと、冷静さを保っていられる自信がある。外向きには、少なくとも。美鶴はその点がいささか甘い。

『前回』の経験から判断した美鶴の性格は、冷静沈着なようである。て実は感情の起伏が激しい女、である。

美鶴は特別課外活動部の面々を、己の目的を達する為の駒として扱っている――

本人にその自覚はあるだろうし、ゆかりなどは既にその辺りに気付いている。

だが義之の目から見ると、実態は異なる。美鶴の非情な顔は、心理学で言うところのペルソナに過ぎない。それも所々に隙間があつて、事あるごとに本心が垣間見える程度の半端な仮面である。『前回』美鶴と特別な関係になった義之には、その心理は手に取るように分かる。

事情をろくに説明する事もしに他人を巻き込んでいる事に、美鶴は美鶴なりに悩んでいる。それでいながら、美鶴本人はバックアップが不可欠な対Shadow戦の条件上、現時点ではサポート役に回らざるを得ない。メンバー内で最も責任のある立場にしながら、自分自身は安全な場所にいるに等しい。そうした現状を歯がゆく思っているからこそ、今のよう慌てるのだろうか。

だが義之はそんな美鶴を、頼りないと思う事はあっても悪くは思わない。非情に徹する事ができないのは、一種の人間らしさだ。言

い方を変えれば、可愛げだ。

（美鶴を責める筋合いは……俺にはないな）

他人を己の目的の為の駒として扱っているのは、自分も同じだ。しかも自分は特別課外活動部ばかりか、コミュニティの人々さえそうだ。

全ては来年の3月を越えて生き延びる為。

そして再び時間が戻る事がないようにする為――

そうした真意を一切表に出さないよう、表情や言動を自由に操れる自分のような人間の方が、むしろ異常なのだ。そしてその分だけ、この事態に対して負うべき『責任』は、美鶴よりずっと大きい。

「注意して進んでくれ」

そこまで思った頃、美鶴の通信が終わった。義之は内省を打ち切り、前へと向き直った。

三人は先の車両へと歩いて進む。だがシャドウは出てこない。三人の足音だけが、影時間の静かな空気を薄く揺らしている。

「何だよ。拍子抜けだぜ……」

二つか三つの車両を越えた辺りで、順平が呟いた。それを合図とするように、義之は周囲に気を配り始めた。

（そろそろだな）

そう思った矢先、シャドウが一体現れた。女教皇のアルカナに属する、ティアラの形で宙に浮いているシャドウだ。だが戦う構えは見せず、先頭車両へ向けて逃げて行く。

「あ、待て！」

シャドウを追って順平が駆け出した。それから一瞬遅れて、義之も動く。

「こら、順平！　って、坂本君まで！」

義之は順平を止めはしない。一緒になって車両を走る。ただし全力ではなく、少し余裕を持っている。

「おい、二人とも待て！」

背後からゆかりが、通信機から美鶴が制止するが、聞いている時間はない。『前回』も今のように挑発に乗った順平が一人で突っ走り、シャドウに取り囲まれてしまった。あの時は援護が間に合って事なきを得たが、『今回』それをやったら順平はただでは済まない。

何故かは分らないが、『今回』のシャドウは『前回』より遥かに手強い。一人で複数のシャドウに取り囲まれてもしたら、あつという間に袋叩きにされるだけだ。ここで『前回』のように悠長に美鶴の指示を待っていたら、援護が間に合わずに順平が死んでしまう危険がある。

そうかと言って、順平を押し留めて慎重に進むのも得策ではない。何故ならこの5月の満月は、時間との勝負だからだ。シャドウが挑

発して奥へ逃げていくのは、逆にターゲットとの距離を詰める好機なのだ。とにかく先頭車両に少しでも近づく為、敢えて順平に同調した。

「岳羽！ 遅れるな！」

走りながら背後のゆかりに声をかけた。文句を言いながらも追いかけてきた事を足音で確認してから、義之は足を速めた。最初に飛び出した順平に、付かず離れずの距離を保つ。前後の二人のいずれにも注意を払いながら車両を走った。

そうして車両を二つばかり越えたところで、逃げるシャドウは動きを止めて振り返った。それと同時に、義之は足を少し緩める。対する順平は、そのままのスピードで走りながら大剣を振りかぶった。

「先手必勝！」

順平の攻撃がシャドウを捉えた。そして義之は後ろを振り返る。二人で背中をかばい合う形になった。

（やっぱりな）

案の定、順平の背面、振り返った義之から見れば正面に新たなシャドウが現れた。挟み撃ちにするつもりだったのだろうが、こちらは『前回』の経験から読んでいる。そしてシャドウの更に背後から、ゆかりが追い付いてきた。

「撃て！」

「う、うん！ 当たれ！」

ゆかりは急いで弓に矢をつがえ、後ろから放つ。こちらを挟み撃ちにするつもりのシャドウを、義之とゆかりで逆に挟み撃ちにする形ができた。

「どりゃっ！」

順平も先手を取った事が功を奏したか、正面のシャドウは反撃の暇を与える事なく倒せた。『今回』のシャドウは強いが、決して敵わないわけではない。理由は全く分らないが、シャドウは『前回』と比べて臂力や魔力は段違いに高いが、耐久力や敏捷性はほとんど変わらないのだ。先手さえ取れば、完封も不可能ではない。

かくして最初のシャドウの群れは、危なげなく殲滅できた。作戦勝ちだ。陣形の段階で勝負はついていた。

「二人とも、無謀すぎるぞ！」

戦いが終わると、通信機から美鶴の叱責が飛んできた。義之としては計算づくだが、傍から見れば無茶な戦法だろう。だがそれを説明する事はできない。時間も無い。床から伝わり始めた小刻みな振動が、それを告げている。

「列車が動いています」

「何！？」

やがて誰にでも分かるくらいにはつきりと、モノレールが前に向かって進み出した。だがこれも予期していた義之は、すぐに行動を開始した。

「走れ！ 運転室だ！」

走り出してから順平とゆかりに声をかける。二人は一瞬呆気にとられたが、やがて追いかけてきた。こうした非常時には、率先して動く人間に吊られて周りも動くものだ。義之があらかじめ考えていた作戦通りに、事態は進んでいく。

三人に合わせて、これまで隠れていたシャドウも一斉に動き出したようだ。先頭車両に向かって走る三人の行く手に、わらわらと立ち塞がってくる。だが義之は敵を見るや即座にペルソナを召喚し、的確に対応する。美鶴の分析を待つまでもない。

「雑魚には構うな！ とにかく走れ！」

今日の戦いは、とにかく時間が問題だ。一秒を争うのだから、タイムロスを極力避ける戦術に徹した。その一環として、モノレールに出現するシャドウの弱点を突けるペルソナを、あらかじめ揃えておいたのだ。もちろん敵に合わせてペルソナを付け替える必要はあるが、それは『前回』から得意だった事だ。走りながらも、付け替えの失敗はしない。

義之がシャドウの弱点を突いて足止めし、順平とゆかりにはとにかく先を急いでもらう。殲滅する時間さえ惜しいので、ひっくり返ったシャドウはそのまま放置して、前へと突っ走るのみだ。小粒なシャドウは視力がほとんどないので、一定以上の距離を置けば目標を見失う。だから放置したシャドウに後ろから襲われる心配はない。

「次の車両から、大きなシャドウの反応がある！ 注意してくれ！」

モノレールの先頭から二両目の一番奥まで到達したところで、美鶴から通信が入った。時間を無駄にしない作戦は成功した。『前回』と比べても、かなり早く到達できたはずである。後は倒すだけだ。

「行くぞ」

扉を開けた先では、異様に長い髪の毛が車両中に張り巡らされていた。中には後方へ向かって伸びる髪もある。髪の毛の蜘蛛の巣の中心には、体の左半分が白、右半分が黒の巨大な女の怪物が鎮座していた。十年前の事故で飛散した十二のシャドウの一つ、プリーステスだ。

「何か……凄え事になってるな」

プリーステスの姿に順平は目を見張っている。確かに凄い有様だ。両足を思い切り広げているところなど、特に。

女教皇のアルカナ――

タロットカードの図柄では、頭に冠を乗せた女性の絵が描かれる。教皇と呼ばれるわけだから、キリスト教の聖職者だ。つまり描かれる女性は処女と考えられる。しかしそうであるならば、この体勢は何であろうか。

ついでに言うと、女性が高位の聖職に付けないカトリック的な解釈では、女教皇とはあり得ないものの象徴でもある。あり得ないものと処女性。この二つの要素を合わせると、何になるか。

(……マリア?)

タルタロスにはマリアという名の、女教皇に属するシャドウが出現する。あれは台座に座って瞑想する女の姿をしている。名前の由来は、もちろんキリスト教の聖母だろう。そして聖母と言えば、処女懐胎。性によらずして子供を産む。あたかもファルロスのように――

（何、馬鹿な事を考えてんだ。こんな時に……）

夕方に思いついた、ファルロスは自分の子供なのではとの連想と結びつけてしまった。だがそんなはずがない。馬鹿馬鹿しい考えを瞬き一つで追い払い、剣を構えた。

「岳羽は回復優先、手が空いたら弓！ 順平は力を出し切れ！」

満月のシャドウは大半がそうだが、プリーステスには特にこれと言った弱点はない。耐性は氷結に対してあり、攻撃方法もそれである。そして幸いな事に、ゆかりと順平は氷結に弱くはなく、使えない。よってこのモノレール先頭車両での戦いに、細かな戦術はない。基本方針だけを決めて、後は臨機応変にやるしかない。

「分かった！」

「おう！ 行くぜ！」

順平は大剣を上段から豪快に振り下ろし、義之は片手剣を肩の高さから突き出す。ゆかりも矢を放つ。三人の同時攻撃から、この日最後の死闘が幕を開けた。

(くそっ……手強い！)

『今回』この日までに戦ったのは、タルタロスに出現するシャドウだけだ。それらはいずれも、やたらと強い。だが外で出てくる満月のシャドウはどうか。ひよっとすると、奴らだけは『前回』と変わらないのでは、という期待を義之は密かに持っていた。

と言うのも、満月以外でも外に現れるシャドウはいるのだ。イレギュラーと呼ばれるそれらとは、義之が来る前から真田や美鶴は戦った経験があるはずである。そしてそれらが異様に強かったという話は聞いた事がない。

だが期待は裏切られた。満月のシャドウもタルタロスのそれと同じように強い。プリーステスには『前回』もかなり苦勞させられたが、それに輪をかけて苦勞する。ひよっとすると『今回』が始まった4月9日を境に、全てのシャドウが一斉に強化されたのかもしれない。何故そんな事になったのかは、見当もつかないが。

「うぐっ……！」

何度目かの吹雪が襲ってきて、順平が膝をついた。

プリーステスの耐性や攻撃のパターンは『前回』と変わらない。髪の毛の束で襲ってきたり、氷結の魔法を放って来たりだ。だが一つ一つの攻撃が重い。一発で行動不能にまでは流石に至らないが、あと一歩というところにはまでは容易く追い詰められる。

そうすると――

「岳羽、回復！」

自然と守勢に回らされる事が多くなる。元からゆかりは回復を優先させるつもりだったが、初手で攻撃できた以外は、味方の手当しかしていない。しかも一人で三人分を賄うのは無理があるので、義も手数の半分くらいは防御か回復に割かざるを得ない。

攻めに専念できるのは順平だけだが、それとて適宜回復してやらなければ、満足な攻撃は仕掛けられない。結果的に、こちらは攻め手が不十分になる。それはつまり、時間がかかるという事になる。

「急いでくれ！ もう時間が！」

戦いの最中に美鶴から通信が入った。眼前の敵ばかりに集中していると忘れそうになるが、この戦いは時間制限つきである。前を行くモノレールに追突するまで、残り時間はもうあと僅かしかない。二分もあるかどうかだ。

「く、くそお！ さっさと倒れやがれえ！」

順平は焦りを隠そうともせず、とにかく大剣を振る。対するプリーステスは多少弱ってはいるものの、未だ健在だ。このままでは負けるか時間切れか。どちらにしても死ぬ。誰の目にも、死が明らかになってきた。

（ヤバいな……）

恐怖を知らない『愚者』の額にまで、冷たい汗が浮かんでくる。本当に本当の死を感じた瞬間、時間が止まった。

影時間はシャドウとペルソナ使いを除いて、世界の一切が動きを止める。言うなれば、時間が止まった状況に等しい。そんな通常の

二十四時間が停止した影時間にあつて、影そのものまでが動きを止めた。限りなく無に近いその瞬間に、義之の頭に声が響いた。絆を教える『我』の声ではない。もっと親しげで、子供らしい声だ。

『僕を呼んでよ』

そう言われた気がした。
しかし――

(……駄目だ！)

義之は子供の声を振り切り、身を屈めて前方へ突進した。そして影時間は元通りに動き出した。

「ちよつと！ どこ行くの！」

ゆかりが声をかけてきたが、答えている暇はない。前方の扉に体当たりするようにして、義之は運転室に転がり込んだ。そして車掌と思われる棺桶を蹴り飛ばし、運転台に備えられたレバーの一つを左手で思い切り引いた。慣性の法則に従って体が前のめりになり、それと同時に金属がこすれあう不快な音が足元から響いた。ただし、その音は小さい。

「そつか、ブレーキ！ 坂本君、ナイス！」

(別にナイスじゃないんだよ……)

左手をブレーキのレバーにかけた状態のまま、義之は上体を起こして振り返った。すると案の定、髪の毛が群がってきた。

ブリーステスを倒す前に運転室に入り、ブレーキを引く。この作戦は事前に考えてはいたが、できればやりたくなかった。

そもそも影時間に列車が動くのは、ブリーステスが操作しているからだ。つまり運転室には初めからブリーステスの手、ならぬ髪の毛が伸びている。そしてブレーキをかけても列車の駆動は止まらない為、結局のところ列車は走り続ける。少々スピードが落ちるだけだ。

更に悪い事に、このモノレールは一人で運転する型だから運転室は狭い。象徴化した車掌の棺桶も考えると、運転室に入れるのは一人が限度だ。狭い室内でブレーキをかけながら、一人で髪の毛の攻撃を防がなければならない。しかも機械を壊さないようにしないといけないし、棺桶を傷つけたら車掌を死なせてしまうかもしれないからペルソナは使いにくい。そして運転室の一人は客席側に残る二人と分断される形になる事は、言うまでもない。

リスクが大きい割にメリットが少ない為、できればこの手段は取りたくなかった。だが今の状況ではやむを得ない。運転室と客室を仕切るガラス窓越しに、大声をかけた。

「とにかく攻めろ！」

「お、おう！ 任せろ！」

順平は少し元気を取り戻したようで、改めて大剣を構え直す。それを見て、義之は運転室で剣を振り回して髪の毛を防ぐ。だが片手が塞がっているは大して防げないし、順平とゆかりも自分がいなくては攻め手をより欠くだろうと思っていた。

しかし――

（あれ……攻撃が緩いぞ？）

意外な事に、群がってくる髪は動きが雑で、量もそう多くない。片手で十分防げる。客室側を見れば、順平だけでなくゆかりまで攻撃に加わっている。

（そうか！ 奴にすれば、意識を二手に割かないといけないから！）

こちらは分断されたわけだが、相手から見れば挟み撃ちにされているに等しい状況だ。つまり陣形の利がこちらに生まれた。誤算だが、嬉しい誤算だ。ここは一気に攻める時だ。

義之は勝負を賭けて右手から剣を離し、召喚器を抜いた。

「ペルソナ！」

この日最大の気合を入れて引き金を引き、運転室から炎の弾丸をブリーステスへ向けて放った。炎はガラスを突き破り、後頭部に命中した。

「今だ！ やれ！」

背後からの攻撃を受けたブリーステスは、項垂れて両手を床に付いた。体勢を大きく崩している。今なら全員で一斉に攻撃できる。

「うおおお！」

「このおお！」

順平とゆかりが突撃した。後の事を考える暇はない。とにかく攻めるのみだ。順平は大剣を叩きつけては薙ぎ払い、ゆかりは矢を連続して乱れ打つ。義之も運転室から炎を立て続けに放つ。

やがてプリーステスは天を仰いだ。止めの一撃が誰の手によるものかも分からない乱戦の中、手を頭上へ差し伸べて倒れ伏した。そして周囲から立ち上る黒い霧に飲み込まれ、水をかけられた火のような音を立てて消滅した。他の全てのシャドウと同様に、跡も残さず消え去った。

「やったか……つて、前の列車！ もうすぐそこ！」

まだ最後の恐怖が残っていた。義之は客室の二人の叫び声を聞きながら、レバーにかけたままの左手に力を入れた。既にブレーキは一杯までかけているから意味はないのだが、それでも力を入れ直した。

「きゃああ……！」

シャドウが消滅した為、モノレールの駆動は既に止まっている。急激なフルブレーキの甲高い音が影時間に響き渡った。数分にも感じられる数秒間に渡って、車輪と線路がこすれる音が緑の空気を揺らした。

「止まつ……た？」

「あ、ああ……俺ら、生きてる？」

モノレールは無事止まった。前に行く列車は、文字通り目前まで迫っていた。

「疲れた……」

義之はブレーキのレバーから手を話し、床に座り込んだ。ギリギリの戦いだった。先頭車両に辿り着くのはかなり早かったはずだが、倒すまでの時間は予想より大幅にかかった。『前回』得た知識を総動員して、嬉しい誤算もあって、それでようやくだ。

（先が思いやられる……）

今日の戦いはまだ序盤である。1月31日のニクスとの決戦まで、今日より厳しい戦いはいくつも残っている。それら全てを乗り越えなければならぬと思うと、気分が滅入ってしまうのを止められない。

処女懐胎（2009/5/9）（後書き）

以上、5月の満月でした。

本作の主人公は基本的に酷い人ですが、何故かファルロスには妙に優しいです。その辺りの事情はいずれ明らかにするつもりですが、果たしていつ頃に投稿できるのやら……。

初投稿から約一か月たち、当初の想定よりやや速いペースで書けているつもりですが、物語はまだまだ序盤です。今後とも長い目で見てくださいと嬉しいです。

読んで下さり、ありがとうございました。

マニアの報い（2009/5/10）

満月の戦いを終えた翌日、5月10日は日曜日である。猛烈に疲れた戦いの直後だけに、義之は外出せずに自室でほとんど寝て過ごした。死を至近距離まで感じる戦いは『今回』のタルタロスでも何度かやっているが、昨日の戦いはとりわけ凄まじかった。

後で聞いたところによると、ゆかりと順平もこの日は同じように寝て過ごしたらしい。『前回』を知る義之でさえ大変だったのだから、二人に至っては生きた心地がしなかった事だろう。

そんな風に何もしない一日の終わる時、影時間の自室に慣れた気配が現れた。

「こんばんは」

親しげな声と共に、いつもの囚人服を着たファルロスが現れた。義之はベッドから体を起こし、その姿をしばらく無言で見つめた。

「……」

愛嬌のある大きな瞳。左目の下にある、小さなほくろ。改めて観察してみると、綾時と良く似ている。同一人物なのだから当たり前だが。では自分とは？

（似てない……よな？）

「どうしたの？」

少し気恥ずかしくなり、視線を逸らした。

「何でもない」

義之は昨日に閃いた事を思い返していた。諸悪の根源に等しいファルロスに、どうして親愛の情を抱くのか。その理由として、妊婦が胎児に抱く感情のようなものと昨日は思ったりした。だがこうして当人を目の前にすると、無茶な思い付きだと改めて思う。ファルロスは自分の子供ではない。そもそも男が子供を孕むはずがない。

それくらいで思考を打ち切り、改めて視線を合わせようと顔を上げると、今度はファルロスが目を逸らした。

「試練を乗り越えて、おめでとう……って、お祝いするべきなのかな？」

「微妙だな」

「倒しちゃったね……二体目のシャドウを」

視線を合わせないまま、ファルロスは幾分辛そうに言う。

満月のシャドウは倒す他にない事は、4月19日に話し合っているから既に互いが理解している。だがそれでも、ニユクスの来訪が一步近づいた事を誰より実感できるファルロスからすれば、嬉しい事のはずがなからう。

「ああ、取り込んだか？」

「うん。取り込まずにできないかと思ったけど、駄目だった。やつ

ぱり僕の意志じゃ止められないよ」

「仕方ないさ」

アルカナの名を持つ十二のシャドウは、そもそもデスを創造する為に集められたものだ。つまり存在意義のレベルにおいて、デス即ちファルロスに取り込まれるように宿命付けられている。人が己の意志で心臓を止める事ができないように、ファルロスが自身の意志でシャドウを取り込まずにおく事は不可能だ。

「でも、昨日は危なかったね」

「ああ……だが昨日だけじゃない。何で今回出てくるシャドウは、どいつもこいつもあんな手強いんだ？」

今にして思うと、予備知識もなく乗り越えられた『前回』の戦いなど、子供の遊びのようなものだった。だが『今回』はとにかく過酷である。下手をするとニユクスの来訪を待つまでもなく、日々のタルタロス探索や満月の戦いで命を落としてしまうかもしれない。いや、下手どころか普通にやっても、死の危険は十分すぎるほどある。余程上手にやらなければ、来年の1月まで生き延びる事さえ困難だ。

そんな深刻な悩みを抱えた義之に対して、ファルロスはおかしな事を言ってきた。

「君がマニアックだからじゃない？」

「何だそりゃ？」

「うん……何だろうね。僕も分からない。ひよつとすると、誰かが僕に言わせたのかもしれない」

ファルロスは肩をすくめ、ばつが悪そうな顔をした。言ってる事が意味不明だ。何か変な電波でも受信したのだろうか。

「どうでもいい……」

そう。自分で聞いておいて何であるが、シャドウが強い理由など全くもってどうでもいい事だ。問題なのは、その事実を踏まえた上でどう行動するかだ。日々のタルタロス探索と、残る十体の満月のシャドウとの戦いにどう臨むか、綿密な計画を立てなければならぬ。単純に鍛練を多めに積むとかの対症療法ではなく、戦う状況の段階から優位に立てるように、戦略的な行動が必要になる。

「やれやれ……」

「大変だね。でもさ、僕を呼んでもいいんだよ？」

「……」

モノレールの戦いの最終局面での事だ。時間が停止した影時間が更に停止したかのような感覚の中で、頭に声が響いた。自分と呼べと、声はそう言っていた。やはりあれはファルロスだったか。

「4月もそうだったじゃない？ こう見えても、僕は強いから」

確かにファルロスを、即ちタナトスを使えば満月のシャドウを倒すくらいは容易いだろう。昨日のプリーステス程度の相手なら、ものの数秒で八つ裂きにできたはずだ。11月のハングドマンでさえ、

一対一で十分勝てる。死神のアルカナの最奥に位置するタナトスは、それほどに強い。

だが――

「駄目だ」

「どうして？」

「お前を……というか、タナトスをペルソナとして扱うには、まだ俺の力が足りない。今の俺がタナトスを召喚したら、確実に暴走する。シャドウもろとも仲間たちまで皆殺しにしてしまうさ」

ファルロスとタナトスは本質的には同じ存在だが、ペルソナとして発現したタナトスは、ファルロスの意志で動くわけではない。飽くまでも、使用者である義之が制御しなければならぬ。4月の満月では、それができなかった。おかげでタナトスはマジシャンを単に倒しただけでは飽き足らず、バラバラに切り刻んだり凶暴極まる振る舞いを見せていた。あの場にいたゆかりが巻き添えにならなかったのは、運が良かったとしか言いようがない。

ならば単独行動中なら召喚しても良いかと言うと、そうもいかない。タナトスを召喚すれば、4月の時のように直後に気を失ってしまふ可能性が高い。周囲に仲間がいない状況で気絶などしたら、小粒なシャドウに襲われただけで死んでしまう。

最悪の場合、義之自身さえタナトスに殺される可能性もゼロではない。勢い余った死神の剣で斬られたりするかもしれないし、召喚しただけで力を使い果たして死んでしまう事もあり得る。

「そうかな……」

「お前が悪いわけじゃない」

ペルソナはそれこそ無数にあるのだろうが、ワイルドの能力を持つ者でも扱えるものには限りがある。心の海から個体として認識できるものである事が、最初の条件だ。そしてペルソナ使い自身の力量が第二の条件となる。

ここで言う『力量』とは、腕力や体力の事ではもちろんない。極めて精神的なものである。しかしながら集中力や忍耐力などの、いわゆる精神力とも異なる。それはまさしく『ペルソナを扱う力』としか言いようのないものであり、シャドウとの戦いの蓄積によってのみ得られるものである。既存の宗教の用語で言えば、功德や業、罪の概念に近いものだ。時間が戻ると共に、義之は『前回』積み上げたこれらのものを失ってしまっている。

この『力』が及ばないペルソナは、認識できても制御はできない。ベルベツトルームで新しいペルソナを生み出す際にも、義之が扱えないほど強いものはイゴールに止められる。身の丈を超えたペルソナは、召喚そのものが甚大な危険を伴うからだ。

タナトスを使いこなせるようになるのは、『前回』くらいのペースで力を上げて行っただとして、来年の1月までかかるだろう。どんなに鍛練を積み重ねても、12月後半くらいまで待たないと無理だ。今やれば、天田の母を殺した荒垣のカストール状態になるのが落ちだ。

ついでに言うと、カストールもかなり強力なペルソナである。荒垣自身に見合わないほどに。荒垣の生来のペルソナがポリデュークスやペンテシレア程度のものであれば、話に聞く二年前の事故も起

きなかったかもしれない。残念な事である。

「まあ……何とかするさ。次の満月までに、作戦を考えておく」

こうして坂本義之は、『前回』よりもずっと多くの事柄に考えを巡らすようになる。言い方を変えると、陰謀や悪巧みを始めるようになる。だが事態はほとんど常に義之の予想を超え、かえって何もしない方が良かったのではないかと思えてくるのだが、それはまた後の話である。

マニアの報い（2009/5/10）（後書き）

ファルロスが何かメタな事を言ってます。

ファルロスとタナトスに関して、若干の独自設定を入れました。ファルロスが体内にいる限り、主人公はいつでもタナトスを召喚可能です。

ただしこの時点ではゲームで言うところの主人公のレベル（業とか何とか言ってますが、要するにレベルです）が足りない為に制御できず、4月の満月の時のように暴走させてしまうので、滅多な事では召喚できません。

ちなみに、原作のタナトスはレベル64と最終盤ではちょっと物足りないですが、本作では主人公の使える全ペルソナ中で屈指のランクとしています。

2011/11/9：誤字修正

戦車2(2009/5/13)

中間試験の開始まで残り一週間を切っている。真面目な生徒は勉強に集中し始める頃合いだが、義之は剣道部に顔を出す事にした。何故なら、試験勉強など改めてする必要はないからだ。

『前回』の義之は、定期試験の成績は概して優秀だった。転入前は学業にあまり身を入れて来なかったが、美鶴に学生の本分云々と良く言われた事もあり、普段から勉強はまめにやっていた。また、時には夜に寮を抜け出してゲームセンターのクイズで全国のプレイヤーと正解数を競った事も、関係があるようなないような。おかげで一学期は十位以内の成績を収め、二学期には学年トップも取って美鶴に褒められたものだった。

時間が戻ると共に、義之は『前回』に培ったペルソナ能力を失ってしまった。だが『前回』経験した出来事はほぼ完全に記憶しているし、シャドウに関する知識も保っている。それと同じように、授業で学んだり自分で勉強した事などもすっかり覚えている。つまり、学力は維持できているのだ。しかもそれに加えて、定期試験で出題される問題までも覚えている。我ながら、素晴らしい記憶力である。

だから『今回』は特に何もしなくても、年間を通じてトップを取り続ける自信がある。よって試験が近い事など気にする必要はなく、コミュニティの活動に精を出せるというわけだ。

そうして体育館にやって来たのだが、どこか妙な雰囲気漂っている事に、足を踏み入れてすぐに気付いた。

何が妙なのかと言えば、人が少ない。『今回』の剣道部は元々人数が多いとは言えないが、この日は普段より更に少ない。男子は一人もおらず、女子は岩崎を含めて三人。試験が近いとはいえ、少々極端だ。しかもそのうちの一人は部員ではなかった。

（結子？）

ジャージを着た色黒の少女、西脇結子だ。『前回』は剣道部のマネージャーを務めていて、剛毅のコミュニティの担い手だった。だが『今回』は何故か剣道部に所属しておらず、会つのはこれが初めてだ。

体育館の中央近くで、部員である眼鏡をかけた女子生徒と岩崎が何か言い合いをしており、結子がそれを宥めている。だが二人とも収まる気配がない。

「もう帰る！ あんたたちについて行けない！ 坂本と二人でやってればいいでしょ！」

眼鏡の部員は憤然として岩崎に背を向け、扉口にいた義之と目が合った。だが何も言わずに鼻を鳴らし、早足で去って行った。

岩崎と結子はその場から動かない。初めから妙だった雰囲気、気まずいものへと変わっていった。

「何があつたんだ？」

二人に近付いてどちらにともなく聞くと、結子が振り返ってきた。

「ああ、坂本君……だよな？」

結子によると、女子部員たちはどこで話を見つけたのか皆で合コンに行ったらしい。テーピングを借りに体育館に来た結子は、岩崎も知っているものと思って話を軽く振ったところ、実は内緒だったらしい。それで岩崎は怒り出して、唯一来ていた眼鏡の女子部員と口論になったそうである。

「ちょっとね、言葉がエスカレートしちゃったって言うか……」

元々剣道部では、熱心な岩崎とそうでもない他の部員たちとの間で温度差があった。そこへ来て、最近の岩崎は更に熱を入れるようになっていた。おかげで女子部員たちの間ではかなりの鬱憤が溜まっていたのであろう。売り言葉に買い言葉で、あっという間に決裂と相成ったわけである。

「男子は？」

そう聞くと、結子は目を逸らして言いにくそうにした。剣道部の男子部員から直接聞いたわけではなく、人づてに聞いた話だと前置きした上で――

「一人だけレベルの違う、新人のシゴキについて行けない……ってさ」

（俺のせいだよ……）

思わず頭を抱えなくなった。

明王杯に出場する為、義之は入部して以来男子部員に稽古をつけてきた。筋力トレーニングやランニングで基礎体力をつけさせる事

から始まり、素振りを一日何百本もやらせたり、その上で代わる代わる打ち合いをさせたりと、かなり激しいものだった。義之としては『前回』の剣道部より少々厳しい程度のもりだったが、部員からすれば緩い部活に突然降って湧いた、理不尽なシゴキに他ならなかった、というわけだ。

そして岩崎が前以上に熱心になったのも、義之に刺激された為なのであろう。要するに、男女ともにボイコットされてしまったのである。どちらも義之を原因として。

「ねえ岩崎……よその部に首突っ込むようで悪いけど、仲直りした方がいいと思うんだ」

結子は心配そうに言うが、岩崎は背を向けたまま振り返らない。

「悪いの、向こうだから」

「そうなんだけどさ……ね、坂本君」

結子はこちらに一步近づき、小声で話しかけてきた。

「岩崎ね、坂本君が入って喜んでたのよ。全国に行けるかもしれないって。こんな状況だけど、支えになっちゃってくんないかな……。あの子、真っ直ぐすぎって言うか、不器用だから……」

（支え、ねえ……）

義之は考える。岩崎はコミュニティの担い手である以上、元より仲は良好にしていきたいと思っていた。首尾よく二人揃って明王杯に出場して、それなりの成績も残して、部活を通じた友人になれ

は良いと思っていた。飽くまで友人に留まれば最良だった。

だが精神的な支えになるというのは、どうなのであろう。同性ならともかく、異性でそうした相手と言うのは。

「さつきね……眼鏡の子にちょっとキツイ事言われちゃったのよ。息抜きで合コンとか、恋愛した事ない人には分かんないでしょ、とか」

(う……)

義之は僅かに眉根を寄せた。嫌な予感がする。『前回』特別な関係になった結子の口から恋愛がどうか言われると、余計に嫌な予感がしてしまう。

「君は……岩崎と仲いいの？」

その予感を払拭してもらおうと試みてみた。だが結子は少し困った顔になった。

「暇を見つけたら、様子見に来るつもり。でもあたしはテニス部で普段は校庭にいるから……岩崎の事、お願いできる？」

(駄目か……)

二人の様子を見る限りでは、結子と岩崎は以前からの友人である事が伺える。ならば結子が支えになってくれないかとの願いを言外に込めてみたが、虫のいい期待はあっさり外された。

結子は『前回』から面倒見のいい性格だったが、自分の部のマネ

ージャーをしながらよその部までまとめるのは流石に無理であろう。
これは子供相手のコーチとは訳が違うのだ。

「悪いけど、一人にして欲しいんだけど」

岩崎は義之と結子に背を向けたまま、体育館の奥の演壇を見つめている。その背中からは、普段より小さく見える。

「じゃ、よろしくね」

そう言って結子は体育館から去って行き、二人で残されてしまった。

季節は春の盛りであるのに、人がいない体育館の空気は妙に冷たく、床に直接触れている素足から温度が抜け落ちていくような感覚がある。この寒々しい雰囲気は、先行きがどう転ぶかが今まさに決まるのだと告げているようだ。勝負の前の緊張感というものに、少し似ている。

この状況にどう応じるか、義之は再び考え込む。言葉に甘えて今日はこのまま帰る事もできるが、先々を考えれば良い手ではない。だが更に先の事を考えると、残るのはより良くないかもしれない。
だが――

数秒間考えた末、義之は床に置かれた岩崎の面を拾い上げ、無言で差し出した。

「……」

岩崎は両手を下ろして面を見つめたまま、受け取ろうとしない。

義之がただ一言、着けるとだけ言つと、ようやく受け取った。

「貴方つて……変な人ね」

悲しみや悔しさで一杯だった岩崎の表情に、ほんの一点だけ嬉しい色が灯る。だが義之はそんな色を打ち消そうと、敢えて甘さを排除した厳しい声色を作った。

「余計な事は考えるな」

義之は色々な方面に考えを巡らせた結果、取り敢えず今日は残る事にした。戦車のコミュニティの今後の為もあるが、結子に頼まれた事が大きい。

『今回』は剛毅のコミュニティを誰と築けば良いのか。剣道部に入部して以来のこの問題に、解答は未だ見つかっていない。他の部員との間に築ければいいと思っていたが、この状況では難しくなった。

だが結子が時々でも剣道部に顔を出すのであれば、上手くいけば再び結子と築けるかもしれない。その為には、頼まれた事を無視するわけにはいかない。そんな打算の元に、義之は黙々と稽古を続けた。

「面！」

岩崎と打ち合いながら、義之は思う。面越しに向けられる視線の中に、異性としてのそれはない。知り合ってからまだ日が浅いのだから当然だ。もちろん世の中には感情の発展が速い人間もいるが、

岩崎はそういうタイプではない。

だが男女二人だけで部活をしている、この状況はどうなのだろう。人間関係は本人同士の気持ちだけでは決まらない。元々そんな気がなくても、シチュエーションによって気持ちに変化が訪れる事はある。何かまかり間違って、岩崎と特別な関係になってしまったらどうしようか。

（頼むから、俺をそういう目で見るなよ……）

知り合った異性からは、ことごとく好かれてしまう――

常識的に考えれば、物凄く無茶な話である。世間の男が聞けば、蹴りの一つも入れたくなるだろう。だが義之にとっては、杞憂でも自惚れでもない。『前回』は五人もの女と特別な関係になってしまい、Ｙ子や舞子にまで好かれた実績（？）を思えば、むしろ当然するべき心配である。

意図して彼女らを口説いていたわけでもないのに、いつの間にか好意を寄せられてしまう。断る隙もない。無理に断ろうとすると、容易く関係は破綻してしまう。コミュニケーションはペルソナ能力に直結する為、一度築いた関係は壊すわけにはいかない。そうやって成り行きに任せていたら、部屋に連れ込まれて長い時間を過ごしてしまう。

そんな事があっていいのだろうか。男と女に友情は絶対にあり得ないのだろうか。

（いや……『我』のせいじゃないのか？）

絆を教える『我』が、相手に何かを刷り込んでいるのではなからうか。いわゆる吊り橋効果のような、無意識に働きかける何かを。たった今思いついた事だが、案外正解かもしれない。

羨ましいと思われるかもしれないが、本人にとっては決して良い事ではない。現代日本ではハーレムは非難の対象にしかないのだ。

コミュニティとは、一体何なのであろうか。この日、義之は『我』を本気で恨めしく思った。そしてそんな義之に、『流されるお前が悪いんだ』と言ってくれる声はなかった。

戦車2（2009/5/13）（後書き）

誰かこいつに蹴りを入れてやってください。

主人公のステータスに関して補足します。本作の主人公は『一周目』のレベルや武器などは一切引き継いでいませんが、ステータスだけは一部残っています。

主人公はチート級の記憶力の持ち主との設定にしているので（そうしないと生き抜く事もできません）、最低限、学力だけは引き継がせざるを得ないのです。勇気も失わせるには理由付けができませんし、失わせる意味もありませんので。

イメージとしては、現時点で天才・光っている・漢と言ったところ
です。

魅力は校内での評判なども含むものでしょうから、若干落ちている
のだと考えてください。

星1(2009/5/25)

中間試験を終えた翌週の最初の昼休みの時間に、廊下の掲示板に結果が貼り出された。予想していた通り、義之は学年トップだった。平均点は97点を超えている。

周囲からは尊敬の眼差しで見られたが、義之自身は不満だった。元から試験問題を知っていたのだから、トップを取るくらい当然である。密かに全科目満点を狙っていたのだが、ちょっとしたケアレスミスがあつたりしてそれを逃してしまっていた。だから本人としては、むしろ良くない結果であつた。

(何事も完璧、ってわけにはいかないな)

人間のする事なのだから、完璧などそうできはしない。義之もそれくらいは理解しているし、テストの点数など完璧である必要もないのだから、本来は気にする事柄ではない。だが一つのミスが命取りになる事をしている身としては、試験結果が何かを暗示しているような気にもなる。

(シビアだよなあ……)

試験の最終日だった先週の土曜にもタルタロスに行ったが、その時の事を思い出す。毎度の事であるが、やはり死闘の連続だった。

『前回』の戦いは少々失敗しても取り返しがついたが、『今回』はそうもいかない。タルタロスに出現する敵シャドウの特性は全て覚えているつもりだが、たまには間違つて効果のない攻撃を仕掛けてしまう事もある。そうした失敗をやってしまった時は、一気にギ

リギリまで追い込まれるのが常である。試験と違って、戦いは負ければ次はない。

この日の放課後、義之は誰とも一緒にならず一人で過ごしていた。試験が終わって部活や委員会の類も再開され、またコミュニケーションの活動を行えるようになったのに。

本来なら月曜は剣道部の活動日だが、この日は出なかった。部員のボイコットは現在も継続中で、出てくるのは岩崎だけである。二人だけで部活するのは、決して良い事ではない。岩崎と特別な関係になってしまったら色々と困る、と義之は自分自身に言い訳をして部活をサボっていた。

彼のこの考えは一応間違ではないが、だからと言って部の状況を放置しても問題は解決しない。だから本当は何か動かねばならないはずなのだが、この日はとにかく面倒だという気分に襲われていた。

不本意な試験結果を契機として、彼の本来の性格である無気力症がまたぞろ頭をもたげてきたのかもしれない。何しろこの二度目の日々は、何も知らずに毎日を過ごしていた『前回』と比べて、気苦労がとにかく多い。たまには心が折れる事もある。

だから月曜のコミュニティは部活以外にも生徒会があるのだが、そちらもサボった。一日くらいは何もせず、うまいものでも食べて過ごそうという気になっていた。

だが無為徒食が容易く許されるほど、彼に課された運命は甘くな

い。

義之は巖戸台商店街にあるラーメン屋、はぐくれにやって来た。定食やハンバーガーも悪くないが、この町でうまいものと言えば、やはりここであろう。

魚介系スープの濃厚な香りが染み付いた暖簾をくぐって店の中に入ると、いつも通り大勢の客で賑わっている。空いた席がないかと店内を見回してみると、向こうから声をかけられた。良く知っている声で。

「おう、坂本か」

4月に負った肋骨の怪我から復帰したばかりの真田が、店の奥のテーブル席に座っていた。だが一人ではなく、テーブルの向かいにジャージを着た若い男がこちらに背を向ける形で座っていて、ラーメンを啜っていた。

「知り合いか？」

男が真田に話しかけた。意外にも、こちらで聞き覚えのある声だった。

「ああ、寮の後輩だ」

こちらを振り返った男と視線が合うと、義之は内心で驚いた。精悍という表現がこれ以上ないほどにじっくり来る、逞しさに満ち溢れた顔だった。

（早瀬！？ 何で真田と一緒に？）

『前回』星のコミュニティを担った他校のエース、早瀬護だ。高校生でありながらスポーツ雑誌に活躍ぶりが掲載されたりもする、全国的に有名な選手である。

「紹介しよう。剣道の超高校級選手の早瀬君だ。名前くらい聞いた事ないか？」

慌てて二人の席に近づくと、真田から紹介された。名前ばかりか家庭の事情まで知っているが、『今回』会つのはこれが初めてだ。

「え、ええ……坂本です」

「早瀬だ。よろしくな」

「こいつも剣道をやっているな。うちの剣道部は弱小だが、こいつは強いぞ」

真田は義之を指差して、にやりと笑った。剣道部に真田が顔を出した事はないが、噂くらいは聞いているのだろつ。すると早瀬も笑顔を見せ、義之を見上げた。

「へえ。君が言うくらいなら、相当なんだろうな」

早瀬はそう言って丼を傾け、未だ湯気が立っているスープを飲み始めた。早食い自慢の早瀬らしく、あっという間に丼は空になった。

「じゃあな。いつかどこかの大会で会おう」

早瀬はそう言って口元を拭い、席を立ててレジへと向かった。早瀬はこの商店街ではタダで食べさせてもらっているはずだが、それでは悪いと思っているのでは時々は払っているそうである。そして今日は払う日のような日だった。律儀な事である。

義之はそんな後姿を見送ってから早瀬がいた席に座り、改めて店内を見回してみた。混雑した店内には、他に空いている席はない。そして向かいの真田の元には、まだラーメンが来ていない。状況から見て、早瀬が元からいたこのテーブルに後から真田が来たのだと推測できた。

「知り合いなんですか？」

『前回』の8月、明王杯への出場を控えた義之に、真田は早瀬という選手には注意しろとか言っていた。だが二人に面識があったとは聞いた事がない。

「いや、顔と名前くらいはお互い知ってたが、会ったのは初めてだ。偶然相席になって、話してみたら妙に気が合ってたな」

確かに気の合いそうな二人ではある。競技は違えど互いに有名な高校スポーツの選手で、ストイックを体現したような孤高の男。ついでに言つと、どこかずれた性格をしている。短い時間でも、きつと大いに盛り上がった事であろう。

（これは……もう明王杯に出る必要はなくなつたか？）

取り敢えず面通しはできたし、多少なりとも興味を持たれたようだ。これなら今後に商店街で会つても、話に応じてくれるだろう。

次に会った時に、たこ焼きの早食い競争でも何でもいいからとにかく勝負すれば、ライバル認定してもらっ事もできるだろう。

真田がいい仕事をしてくれた。無論本人にそんなつもりはあるまいが。心の中でグツジョブと言っておこう。

「俺はさっき注文したところだが、お前は何を食う？ 特製の大盛りくらい奢るぞ」

いい仕事ついでに、珍しく先輩らしい事まで言ってきた。想定外の幸運に恵まれて急に気を良くした義之は、無気力症を振り払うと共に少し調子に乗った。

「頂きます。ついでに、はがくれ丼も」

「ん？ 何だそれは？」

「ここの裏メニューですよ」

元々はグルメキングの末光が考案したらしい、白米にチャーシューを乗せたシンプルな丼物である。ただし裏とは言っても常連限定というわけではなく、知ってさえいれば誰でも食べられるものである。なのだが、真田は聞いた瞬間に血相を変えた。

「何！？ 俺が知らないメニューを、転入したてのお前が既に知っているだ！？ 親父、はがくれ丼を追加だ！」

早瀬も食べる事に関してはかなりのこだわりがあるが、真田もなかなかノリがいい。

やがて注文の品が運ばれてくると、二人揃ってかなりの速度で食べる事になった。早食い勝負をしているつもりはないのだが。

「食いつぶりがいいな。それでいい。何はなくとも、まずは体力だ。飯をたくさん食う奴が強い」

食べ終えた後でそう言われたが、真田の方こそ大した食いつぶりだった。大盛りラーメンと丼物のセットを軽々と胃袋に収めて平然としている。もう一杯食べようと言っても応じそうな勢いだ。

ボクサーと言えば食事を制限するイメージがあるが、真田はそうしたところがまるでない。自分で買ってきた牛丼を寮のラウンジで食べている姿などは、『前回』から頻繁に見ている。ラーメンもそうだが、牛丼もボクサーの食べ物として相応しいとは思えないのに。

「減量はしなくていいんですか？」

「ああ、それはいいんだ。俺はいつも本来より上の階級で試合をするからな。体のキレを良くする程度には絞るが、本格的な減量はした事がない」

「マジですか？」

真田は事も無げに言うが、これはメチャクチャな話ではなからうか。好きなだけ食べて、上の階級で試合をする。それで十六戦無敗。苦しい減量に耐えているであろう他の選手たちには、何と言ってやれば良いのだろう。ヘビー級でもないのに、こんなボクサーがいていいのだろうか。真田はこと食に関してだけは、普段のストイック

さが欠片もない。

（と言うか……禁欲してる分だけ、欲望が全部食欲に回ってるのかな？）

そんな失礼な事を考えていると、真田はテーブルに肘をついて身を乗り出してきた。そして小声で言う。

「それにな……俺の戦場はリングじゃないからな。奴らには階級なんか関係ないんだ。減量で体力を落とすわけにはいかん」

（ああ……）

それは一理ある。真田は5月1日に検査入院した際に、ゆかりに聞かれてボクシングをやっている理由を話した。曰く、素手の格闘技なら何でも良く、ボクシングそのものに特に思い入れはないとの事だった。たまたま習ったのがボクシングだっただけで、それこそ空手でも柔道でも何でも良かったのだらう。自分には剣道しかないと強いこだわりを持っていた早瀬とは、真田はその点が違う。

つまり真田は特定の競技に情熱を注ぐスポーツマンではない。戦う事それ自体が重要なのである。そしてタルタロスでの戦いと、高校生相手のボクシングのどちらがスリリングか。そんな事は聞くまでもない。

何とも真田らしい――

だが身を乗り出したままの真田は、意外な事を言い出した。

「俺が復帰してからもリーダーをお前に任せてしまっているが、何も楽しようってわけじゃないぞ。お前が一番いいと思ったからだ。

下手な奴が指揮を取れば、チームの危機に繋がる」

（ん……？ どうしたんだ？）

確か『前回』のこの頃の真田は、リーダーをお前がやってくれれば自分はトレーニングに専念できるとか言っていた。だがこの口振りだと、そうした楽観的な考えではないように聞こえる。

「俺たちの敵は想像以上に手強い。だが、ここが気合の入れどころだ。頼むぞ」

かなりの近距離にある真田の表情は、真剣そのものだ。この様子は『前回』に接して感じた印象からは、なかなか結びつかない。

（確かにシャドウは手強いが……）

義之は真田の発言に違和感を抱きつつも、言う事そのものは間違っていないと思った。何故かは分からないが、『今回』のシャドウは『前回』よりも遥かに手強い。一昨日に真田の復帰戦として行ったタルタロス探索では、他のメンバーと同じように真田もしっかりボロボロになった。トレーニングがどうか、そんな悠長な事は言っていられないほどに。

それで自身の強さにしか興味のない真田らしからぬ、こんな発言が出てくるのか、と思っただけ——

『我は汝、汝は我……』

（へ？）

頭の中に声が響き、新たなコミュニティが発生した事を告げられた。アルカナは星だ。魔術師の担い手が友近から順平に移ったように、早瀬から真田に移ってしまった。いや、順平のケースよりも訳が分からない。

（どうなってんだ？ 真田のペルソナは星じゃないのに……）

ポリデュークスのアルカナは皇帝だ。そして皇帝のコミュニティは既に『前回』同様、生徒会の小田桐との間に築かれている。だから順平の事があった後でも、真田とコミュニティが築かれる事はないだろうと思っていた。それなのに、こうなってしまった。一体何がどう捻じ曲がったのだろうか。

（超高校級の『スター』選手繋がり……ってか？）

だとしたら、絆を教える『我』は幾月よろしく下手な洒落が好きと見える。

星1（2009/5/25）（後書き）

これまでセリフすらほとんどなく、空気化が著しかった真田をやつとメインに置けました。ちなみに真田が本来より上の階級で試合をしているというのは、本作の独自設定です。

いつも読んで頂いている方も、今日初めてお読み頂いた方も、ありがとうございます。

私事ですが、今週末から作者はしばらく家を空ける為、次回投稿は8月半ばくらいになる予定です。ご感想を頂きましても、返事が遅れてしまう事になると思います。ご了承ください。

戦車3(2009/5/27)

予想外の事だったが、一昨日に真田との間に星のコミュニティが築かれた。よって明王杯に出場する必要は完全になくなり、他の部員に稽古をつける必要もなくなった。つまり部活絡みの問題が一つ解決した。

もっとも問題は他にも残っているし、星のコミュニティは今後の展開が読めないという問題が新たに発生してしまった。だが取り敢えず事態が動いた事で義之は気を取り直し、一昨日はサボった剣道部に今日から再び顔を出す事にした。

そうして授業を終え、教室の自席でカバンに荷物を詰め込んでいた義之に、後ろからかけてくる声があった。

「坂本、お前って剣道部だったよな？」

友近だった。4月に順平を含めた三人ではがくれに行つて以降は、話をする機会はあまりなかった。だからこれは珍しい事である。

「そうだが、何だ？」

「今日つて、叶先生は来る？ さっき職員室に行つてみたんだけど、先生いなかったんだわ」

(ああ……そう言えば、今くらいの時期だったな)

義之は思い当たった。『前回』の友近は叶に恋をして、その相談を何度か義之に振っていた。そしてちょうどこの頃から、友近はア

タックを開始していたはずである。

その時は義之のおかげで踏ん切りがついたとかで、妙な具合で感謝されたりした。だが義之にしてみれば、それは自分の手柄でも何でもない。単に友近自身の行動力の問題だ。

未熟さを象徴する魔術師らしく友近は一種の子供だが、他人に背中を押してもらわなければ何もできない類の子供ではない。むしろ行動力は旺盛な方である。だからコミュニティが築かれていない『今回』でも、友近は一人で行動できている。そういう事なのである。

ならば――

「先生に用なら、一緒に行くか？」

「うーん……そうだな。じゃ、ちょっと邪魔するわ」

友近を連れて体育館に行くと、岩崎は既に素振りをしていた。だが他の部員はやはりおらず、叶もない。やって来た二人の姿を認めると、岩崎は動きを止めた。

「あれ、お前だけ？」

友近は何気なく、極めて自然体声をかけた。岩崎に、である。

「他に誰が見えるなら、心霊体験ね」

対する岩崎も普通に答えた。いや、普通と表現するにはいささか

言葉に棘がある。それとも逆に、この二人は棘を放つのが当然の間柄なのであろうか。

「かわいくねえの……」

「知り合いなのか？」

尋ねてみると、友近は肩を竦めた。

「ああ、理緒とは幼馴染でね。腐れ縁って奴？」

意外な繋がりだった。だが確かに友近の交友関係など、他のクラスの生徒相手のものまでは義之は知らない。『前回』のコミュニケーションの担い手について、本質はともかく枝葉の事では未だ知らない事が多そうである。当然と言えば当然の事ではあるが。僅か一年の付き合いだけで、相手の全人生まで知ってしまえるはずがないのだから。

「何の用よ」

岩崎は呆れ顔だ。練習の邪魔をされて鬱陶しがるのと、相手をするのも面倒という気持ちかはつきりと顔に出ている。

「ああ、叶先生が欲しがってたチケットが手に入ったからさ。一緒に行きたかったんだけどなあ……」

「もう帰ったのかもな」

「やっぱそうかな……残念すぎて今日死ぬかも、俺」

なら死ね、と普通であれば言つてやるべきところかもしれない。
だが義之は一步踏み込んだ。わざと無遠慮に。

「先生が好きなんだな」

「ええ！？ 言っちゃうの！？ お前、いきなり核心突いちゃうの！？ まだ誰にも言つてないのに！」

友近は動揺した風を見せている。ただし本気で慌てているわけではなさそうである。言われた事が、かえつて嬉しそうでさえある。

「何なら入部したらどうだ？ 少しは接点が増えるぞ」

叶は何故か剣道部の顧問をやっているが、練習にはほとんど来ない。ルールさえまともに知っているか、怪しいものだ。だから今日もきつと来ないだろうと思つてはいたが、敢えてそこは伏せて友近を体育館に連れてきた。最近の悩みの種である、岩崎と特別な関係にならないようにする為に。

これまでの言動を見る限り、岩崎は自分を異性として見てはいない。それはいいのだが、二人だけで部活をしている現状そのものを義之は心配していた。

転入早々にゆかりとの仲が噂になったように、恋愛話は得てして当人よりも周囲の方が熱しやすい。他に誰もいない体育館で、男女が二人だけで打ち合ったり押し合ったり、などと聞けば想像を逞しくする者も必ず出てくるだろう。ゆかりとの噂は既に収束しているが、岩崎とは部の状況が変わらない限り、噂が立つのを止める事はできない。

ならば誰か一人だけでも部員が増えれば、と思つて友近を誘つたのである。もちろん真面目に部活する事など友近にはまるで期待できないが、いないよりはマシであろうと考えたのだ。

「うつん……そつか。それもありかもな。盲点だつたぜ」

友近と叶の仲は、『今回』もまず間違いなく上手くはいくまい。たとえ友近が剣道部に入部したところで、結果は変わらないだろうと義之は思う。だがそれは問題ではない。むしろ少々稽古をつけてやるくらいの事は、友近の人的な成長の為にも良いだろう。と、義之は自分自身に言い訳をしながら友近を巻き込もうとしていた。戦車のコミュニティを安全に進める為に。

だが意外なところから意外な方向で、横槍が入った。

「好き……なの？」

岩崎だ。先ほどの呆れや面倒くささが、何故かすっかり消えている。それどころか、表情そのものが消えている。

「何の為に好きなの？」

「はあ？ 理緒さんはガキですな……。いい？ 何の為とかじゃないくて……」

友近は芝居がかつた素振りで、大きなため息をついた。
そして胸を張り――

「恋は落ちるもんなの！」

広い体育館に響き渡る大きな声で宣言した。いつそ気持ちいいくらい、堂々と。爽やかにとさえ言っても良いくらいだ。

「落ちる……?」

そんな友近とは対照的に、岩崎の声色に僅かだが陰りが差した。それと共に、視線に含まれる色も微妙に変わっている。

（ん? これは……）

義之はこうした変化を『前回』に見た事がある。生徒会の後輩である伏見千尋が教材費を盗んだ疑いをかけられた際、美鶴がその疑いを晴らす為に動こうとした時だ。他人の耳がない場所で相談する為、美鶴は寮の自室に来るよう義之に持ちかけた。それを聞いた千尋は血相を変え、いきなり職員室に乗り込んで担任の竹ノ塚に詰め寄ったのだった。

あの時の千尋のような気配を、今の岩崎から感じる。ただし千尋よりずっと穏やかではあるが。そしてその分だけ、岩崎本人も自身の感情を自覚しているのかどうかは疑わしい。

そこまで分析したところで、友近が話を振ってきた。

「坂本は分かるだろ? お前って岳羽さんと……いや、あの噂、そろそろ立ち消えになって来たか」

「岳羽さん……?」

「ああ、もうこの際だから限定しなくていいや。お前って、好きな人はいるか?」

友近はニコニコと面白そうに笑いながら、思い切りストレートな質問をぶつけてきた。想い人を暴露された仕返しと言ったところかもしれないが。

(こいつ……)

思わず苦笑が顔に現れた。内心を隠す事が得意な自分にしては、珍しい事である。友近のくせに、こちらの虚を突いてくるとは生意気だ。だが敢えて許してやろう。重要なヒントを与えてくれた礼として。

昨日までの状況であれば、色々考えて答える必要があっただろう。岩崎の共感を得るように答えるべきか、もしくは敢えて距離を置くように答えるべきか。だが岩崎の気持ちがどこを向いているかが読めた今は、嘘を吐く必要はない。ならば正直に答えよう。

「いないさ」

そう。自分に好きな『人』はいない。『前回』特別な関係を築いた五人の女たちに対してさえ、心からの感情は抱かなかった。最低だと自分でも分かっているが、本当にそうなのだ。むしろそれだからこそ、あんな離れ業ができたのだ。

客観的に見れば、彼女たちは誰もが非常に魅力的だった。正常な神経の男なら、誰か一人とだけでも特別になれば、他の女とは一緒に帰ろうとも思わないだろう。浮気性な男でも、せいぜい二人。三人は無理。四人や五人はあり得ない。甲斐性とかいうレベルではない。

とは言っても、別に彼女たちが嫌いなわけではない。そもそも『嫌い』と呼べる人は、好きな人より更にいないくらいだ。ただ、彼女たちを自分のものになりたいとか、自分が彼女たちのものになりたいという感情を持たないのだ。それはやはり、好きとも愛しているとも呼べないであろう。

何にも属さない、数字のゼロのような存在を示す愚者のアルカナ。それが坂本義之の宿命だ。だから男女を問わず、誰にも真実の想いを抱かなかった。

だがそれでも真実を、或いはそれに近いものを抱いた相手はいる。例えばファルロスだ。そしてもう一人、場合によっては更にもう一人、そうした相手がいる。だが彼女らは、いずれも『人』ではない。

「おいおい。空気読めって、お前……」

友近は呆れ顔だ。腰に手を当てて眉を寄せ、処置なしと言わんばかりである。

「嘘を吐けない性格なんでね。で、入部するか？」

「うーん……止めとくわ。汗臭いのって嫌いでしょ？ 大人の女性はやさ」

そう言っただけで友近はまた爽やかに笑う。わざわざ体育館に連れてきた当てが外れたわけだが、今となっては全く構わない。むしろ今後しばらくは頻繁に岩崎と顔を合わせない方が、かえってやり易いくらいだろう。

「つか、先生の事は秘密よ？ マジ言わないでね？ 理緒も、坂本

も！」

友近は体育館から去って行った。その後ろ姿を、岩崎は僅かながらに暗い色を含んだ視線でもって見つめている。僅かすぎて本人の自覚は追いついていないであろうが、確かにそういう色が浮かんでいる事を、改めて義之は確認できた。

義之は観察力には自信がある。『前回』に数多くのコミュニケーションを築いてきた経験から、表情の動きや声色だけでも人の気持ちを察する事ができる。特に『今回』は誰とも特別な関係になるまいと日頃から気を付けているので、恋愛に関する他人の心の動きはより理解できるつもりでいる。

「落ちる……ものの？」

岩崎は心ここにあらずといった風情である。

「そつらしいな」

そついうものと、義之は理屈としては分かっている。自分自身は落ちた経験があるとは言いにくいだが、落ちた人を何人も見ているから。

「私、落ちたりなんかしない……」

そしてまた、落ちた人を見つけた。

「練習しよ！ あんなのに構ってられないし！」

そつ言って岩崎はまた竹刀を振り始めた。だが落ちた心に合わせ

るように、この日の練習は剣も足さばきも乱れっぱなしだった。

（よし……見通しが立った。やっぱり基本は、誰か男を使う事なんだな）

先月から計画していた、女子のコミュニティの進め方だ。これらを安全に進める為には、誰か他の男に引き取ってもらうのが最善である。美鶴は真田に、風花は荒垣に。それと同じように、岩崎は友近だ。

友近と叶の関係はどういう経過を辿ろうとも、叶が九州へ転勤する二学期には終わりを迎えるはずである。狙い目はそこだ。失意のどん底まで落ちた友近の元へと、岩崎を差し伸べてやれば良い。

岩崎は想いを遂げ、友近は真面目に付き合える相手を得て、自分は安全な絆を持てる。誰もが幸せになる、最高の結果が見えてきた。

戦車3(2009/5/27)(後書き)

久しぶりの更新になります。

しばらくコミュニケーションが続きましたが、次回から本編に戻る予定です。
ご意見、感想などお待ちしております。

悪巧み（2009/5/29）

放課後の遅い時間、運動部の部活も終わって無人となった体育館の前に、女子生徒が何人が集まっていた。背の高い色黒の女子を中心とした柄の悪そうな数人と、怯えた表情を見せる背の低い女子が一人だった。

彼女らは何事が言い合い、怯えた女子を体育館へと入らせた。そして外から鍵を閉めた。残る数人は大きな声で一頻り笑い、やがて去って行った。それらの一部始終を物陰から見張っている男子生徒がいる事には、気付かずに去って行った。

見張っていた男子生徒、もちろん義之は、それから若干の間を置いてから扉の前にしゃがみこんだ。手には小さな針金を持っている。そして鍵穴に針金を差し込み、押したり引いたり作業をしばらく繰り返した。

ピッキングをするのはこれが初めてだが、された事は二度くらいある。された時の事を思い出すと、ふと苦笑が漏れてしまう。何の悪気もなく寮の自室に不法侵入してきた『彼女』ならば、この体育館の扉も特に苦勞する事なく、あっという間に開けてしまうのだから、うな、と。

そんな事を思いながら針金を細かく動かしているうちに、鍵穴の奥からピン、と音がした。意外と構造は簡単だった。長い時間をかけずに済んだ事に義之は少し安堵しつつ、針金をポケットにしまつて立ち上がり、扉を開いた。

体育館の空気には細かな埃が宙を漂い、窓から差し込む夕暮れの

日差しがそれを照らしている。染み込んだ汗の臭いと相まって、高校生らしい生活感が空間そのものの中にある。毎晩0時になる度に現れる異界の建造物とは、どこを探しても似た点が見つからない。

扉から少し離れた位置に、一人の女子生徒がいた。小柄で線が細く、儂げな風情がある。女子生徒は体育館に入ってきた義之を見ると、反射的な動作で上体を僅かに仰け反らせた。両手は何かから己の身を守ろうとするように、胸の前で組まれている。

傷つけられる事が日常となった人間には良くある事だが、彼女は人を見れば怯える。その顔をよくよく観察してみれば、目元が少し赤い。今の今まで、泣いていたのであろう。思わず同情の念が湧き上がってきてしまう。

「おや、何してるんだい？」

何があったのかを知って同情まで抱きながら、義之は笑顔でこんなセリフを言った。自由に動かせる顔と口は、こういう時に便利である。

「あ、す、済みません……。えっと……」

「二年F組の坂本だ。君は？」

本当は聞くまでもないのだが、敢えて聞いた。自分だけでなく、相手にとっても知り合いになるように。

「や、山岸です。E組の……」

「こっ、もうすぐ閉めるよ。帰ろっ」

義之はそう言って、『前回』共に戦った仲間である女子生徒、山岸風花を促した。ただし部活の終わった遅い時間にどうして体育館にいたのか、といった事は口にしなかった。聞かれても答えにくい話であるうし、名前と違って敢えて聞き出す必要のない事であるから。

二人は体育館から廊下に出て、扉を閉めた。鍵はかけず、両開きの扉を単に閉じただけである。

「あの……鍵は？」

「俺は持つてないよ。そのうち先生が来て閉めるさ」

体育館に限らず、校内の施設の戸締りは教職員が行うのが原則である。もともと実際にそれが守られているかは、甚だ疑問であるが、現に今日などは生徒が鍵を持ち出しっぱなしにするわけだから、管理体制がどうなっているかが良く分かる。

「で、でも……」

風花は困惑顔で義之を見上げる。鍵を持つてないならどうやって開けたのだ、と聞きたそうにしている事が見て取れた。

「何？」

そんな相手の疑問を察しながら、義之はわざと疑問形で返した。優しい笑顔と共に。

「な、何でもないです……」

風花は慌てて疑問を飲み込んだ。それを聞いては、そもそもどうして鍵のかかった体育館に一人でいたのかを説明しなければならなくなる。そうした極めて個人的な事情は余程の事がない限り、他人には話したくないものである。まして初対面の男に話したい事柄では断じてない。

従って細かな経緯に疑問を持ったところで、追求する事はできない。月日が過ぎればともかく、現時点の風花では無理だ。よって実は元々鍵がかけられていなかったか、もしくは扉を塞ぐ形で物が置かれていただけ、とでも考えて自己解決するであらう。

共に戦った仲間であるばかりか、特別な関係にまでなった風花の性格を良く知る義之にとつては、こうした反応はあらかじめ織り込み済みである。

二人は連れ立って学校を出た。影が長く伸びる校門前に、他の生徒はほとんどいなかった。

やはり生徒の姿をあまり見かけないモノレールの車両の中で、二人は並んで吊革に掴まって外の景色を眺めていた。赤い夕陽の差す海上を、心地よいほど静かな駆動音で滑りゆく列車から望む光景は美しい。人によってはロマンチックな気分にもなるだろうが、二人の間の空気は今一つ気まずい。会話がまるで弾まない。

だが当然である。『今回』の風花から見れば、義之はほとんど未知の人物だ。しかも人に見られたくないところを見られている。そんな相手と会話が弾むはずがない。だが義之の方は、そんな気まずさは始めから問題にしていらない。今日の時点では、特に打ち解けて

おく必要はないからである。むしろ下手に打ち解けてしまつてコミニティが今日発生するような事があつては、今後の計画に支障が出る。

ただ一つ、風花の口から言わせなければならない事がある。

「ところで山岸さん。体が弱くて休みがちだつて聞いた事あるけど、元気そうだね」

「あ、はい……。学校はよく休みますけど、別に体が弱いわけじゃ……」

風花は言葉を濁した。嘘を吐けず、かつ他人を悪く言う事もできない風花らしい受け答えだ。

今月初めの真田の検査入院の時、特別課外活動部は初めて風花の存在を認識し、中間試験を終えた23日に皆に周知された。これは『今回』も『前回』と同じだった。しかし病弱で学校をよく休むくらいなので、加入は無理との結論に一旦は達した。だがその情報が誤りである事を、『前回』の経緯から義之は知っている。知った上で、敢えて本人の証言を取った。

「そうか。俺はここで降りるから、また今度な」

タイミングよく必要な事を聞き出したところで、モノレールは巖戸台駅に到着した。

「あ、はい……。ありがとうございました」

風花は思わず零れ落ちた礼の言葉と共に頭を下げ、しかもしばら

く下げたままにしていた。駅のホームで振り返った義之はそんな風花を見て、ごく僅かににやりと笑った。やがて車掌のアナウンスと共にドアが閉まり、夕暮れの中を再び滑り出したモノレールが視界から消えるまで見送った。

（これでよし。簡単なもんだ）

『前回』の風花は今日のように同級生にイジメられ、体育館に閉じ込められた。そして十日後の6月8日に義之たちが救出するまでタルタロスに迷い込む事になったのだが、『今回』は未然に防いだ。

義之としては『前回』の通りに十日間風花を放置しておく事もできたが、敢えて最初の影時間が来る前に助け出した。それは別に風花の身を案じたわけではない。今後の為には風花の能力は絶対に欠かせないが、その能力のおかげで十日くらいタルタロスにいても大した危険はない。放置した場合に危険があるのは、他のメンバーだ。

（これで十日後に万全の状態で戦える）

『前回』は折悪く、風花の救出と満月のシャドウとの戦いが重なってしまった。その結果、特別課外活動部はかなりの危機に見舞われる事になったのだ。

いつになく熱血した真田の発案により、義之、真田、順平の三人で体育館で影時間を迎え、風花が迷い込んだのと近い場所を狙って侵入するという荒業を行った。侵入そのものは成功したが、タルタロス内でバラバラになって合流に時間を取られ、拳句にエントランスに残ったゆかりと美鶴は、当初二人だけで大型シャドウ二体に襲われる羽目になったのだ。

『前回』はゆかりと美鶴はボロボロになりながらも、全員戻るまで何とか持ちこたえた。だが『今回』のシャドウの強さを思えば、間に合わずに二人が死んでしまう危険がある。それを回避する為、今日の内に風花を助け出したのだ。これは5月の満月において、モノレールで突っ走った順平に敢えて同調し、各個撃破される危険を回避したのと同じ理屈である。

そうして義之は寮に戻った。そして夜の時間に美鶴が帰ってくる、今日の事を報告した。他のメンバーには聞かれないよう、わざわざ作戦室に美鶴を呼んで二人だけで。

ただしイジメの件は話がややこしくなりそうなので伏せ、一緒に下校した事と、健康に問題がない事だけを話した。

「では、山岸は病弱ではないのか？」

「ええ。病院のカルテでも調べれば、裏も取れるでしょう」

そうなのである。風花の健康状態は、通っていた辰巳記念病院を調べればすぐに分かるはずである。それもせず、恐らくイジメを隠す為に流布されたであろう病弱という話を鵜呑みにしたのは、お粗末である。

「ブリリアント！ 実にいい知らせだ」

（計画通りだ）

今日の帰り道で、義之は風花に影時間やシャドウの話は一切していない。それは話が唐突すぎるとか、そういう事ではない。最初は

遠回しに話を振って寮に連れ込み、影時間になるまで引き止めるとか、やろうと思えばできない事ではなかった。

それをせず、健康の事だけを確認するに留めたのは、風花の勧誘を美鶴にやらせようと思ったからだ。

『前回』は風花の加入に真田と順平は喜んでいたが、ゆかりは消極的だった。むしろ強引に風花を巻き込んだ美鶴に反感を抱いたくらいだ。ここで自分が風花を特別課外活動部に勧誘しては、ゆかりの印象を悪くする。『今回』ゆかりと特別な関係になるつもりはないが、それでも悪く思われるのは得策ではない。

だから美鶴を使つたのだ。そして案の定、美鶴は簡単に乗つてきた。この様子ならば数日中にでも、風花が特別課外活動部に加入する段取りがつくだろう。

（悪いな美鶴。ゆかりとはそのうち仲直りできるから、今は恨まれてくれ）

やはり未来を知っているとは、大変なアドバンテージだ。危険を回避して最善の状況を作り出す為、あらかじめ色々な手が打てる。計画が順調に推移している事に、義之は密かな満足を得た。

ただ今後に関して言うと、一つだけ問題がある。今日の救出劇で、風花が自分に余計な恩を感じる可能性だ。『前回』と異なつて『今回』は自分しか動いていない為、これを原因として『前回』より感情の発展が速くなる可能性がある。

風花と特別な関係にならないようにするには、今日の行動は決して良い事ではない。だが仕方がない。次の満月でゆかりと美鶴を

失う事に比べれば、それくらいのリスクは軽い。それに既に対策は考えてある。

（そこは荒垣に何とかしてもらえばいい）

思えば荒垣と初めて会ったのは、入院した真田に風花のクラスの名簿を持って行った5月1日だ。奇妙な符号もあるものである。風花は荒垣に引き取ってもらう、今後の予定を考えれば。

そして翌日。寮に戻ると『前回』はなかった作戦室への集合命令がかかった。何事かと訝しがるメンバーを前に、美鶴は胸を張っている。

「山岸だ。我々に協力してくれる事になった」

そう紹介されて、風花が作戦室に入ってきた。

「あ、あの……。よろしく願います……」

（仕事が速い……）

義之の予想を超える、僅か一日の早業だった。美鶴の行動力を褒めるべきか、狙った獲物は逃がさないと恐れ入るべきか。

内なるパトスのままに（2009/5/31）

風花が早期に加入した翌日、5月31日の日曜日。夜に寮を抜け出した義之は、ポロニアンモールのクラブ・エスカペイドにいた。天井の中央から下げられたミラーボールの光が乱反射するフロアの中で、ステージ上で演奏されるテクノ音楽が際限なく流れている。

本来なら高校生が入れるような場所ではないが、ここのチェックは平日に制服姿で来ても特に何も言われないくらい甘い。まして私服を着ていれば、たとえ中学生でも平気な顔で居座っていられるであらう。

だが言い方を変えれば、エスカペイドは未成年がいられるくらいトラブルの少ない、平穏なクラブだという事だ。突飛や予測不能という意味を持つ店名とは裏腹に。だが今日ばかりは様子がいつもと違う。独創的なセンスの青い服を着た、様々な意味で人間離れた一人の女性が君臨していた。

「ああ！　これがクラブ！　内なるパトスのままに踊る、光と音の地下庭園！　夜にお誘い頂いた甲斐がございました！」

義之はこの日、エリザベスの依頼でポロニアンモールを案内しているのだった。『前回』も案内はしたが、昼間で営業時間外だった為にクラブに入らず、酷く悔しい思いをしていた。『今回』はそのリベンジという事で、夜にと頼まれたのだった。

「あ、あの子、何者だよ……」

「どっかの芸能人か？」

遠巻きに見つめる客たちは、いずれも口をぽかんと開けている。ただしエリザベスに呆れているのではなく、見惚れているのが大半である。特に男はほとんど一人の例外もなく当てられていた。

エリザベスはクラブに入った途端、文字通り狂喜乱舞してフロアの中央に陣取り、音楽に合わせて踊りだした。最初はテンションの高すぎる一見さんに周囲は不審がったが、あっという間に皆が乗せられてしまった。

と言うのも、どこで練習したのかエリザベスはダンスが上手かった。いや、恐らく玄人の目から見れば、上手いとは必ずしも言えない。技術は優れているが、何か足りない。言うなれば、『精巧』な踊りだった。だがクラブに集う者たちは、何もプロのダンサーではない。技術だけでも人目を惹きつけるには十分だ。そして何より、彼女の美貌がそうした足りないものを補って余りあっていた。

「美しいお嬢さん。僕と踊ってください……」

エリザベスは男の理想をそのまま形にしたような、まさにアニメの化身と言ふべき姿をしている。何もせずただそこにいるだけでも魅了の魔法をまき散らしているようなものだ。本人が意図してやっているのかは不明だが。

だから恍惚とした男が、代わる代わるやってくる。そしてエリザベスはいずれも断らない。そうしてひたすら踊り続け、いつしかエリザベスを中心とした巨大な輪がクラブに出来上がった。まるで女王蜂とそれに従う働き蜂の群れだ。

（クイーンエリザベス……ってか）

ポートアイランド駅の外れにあるバーで作られた、彼女と同じ名前のカクテルがある。あれは爽やかな味わいのノンアルコールカクテルだが、もしあのバーテンが今の彼女を見たら、きっと誰もが酩酊せずにはいられない、強烈極まる酒をイメージする事であろう。

「下は何だか、えらい盛り上がってるねえ……」

「凄い人がいるみたいで」

義之は二階でクラブの常連である破戒僧、無達と話していた。一階の雰囲気飲み込まれる前に、さっさと避難してきたというわけである。

手摺越しに一階を覗いてみれば、もはやバーテンやウェイターさえも仕事を放り出して輪の中に加わり始めている。ステージ上のバンドはどこか焦点の合わない泳いだ目をして、ギターやキーボードをメチャクチャに弾きまくっている。もはや曲の体を為していない。

間違いなくクラブ開業以来の未曾有の混沌が、フロア一帯に渦巻いている。たとえ今ここでシャドウのような異形の怪物が現われたとしても、何の違和感もなさそうだ。あのサバトに合わせられる仮面は、流石の義之にもちよつと持ち合わせがない。

「わしゃこの連中に、純粹に踊りや音楽に興じている奴なんかいるんかいと思つとつたがよ。どうやらあの姉ちゃんの本物みてえだな。惜しいねえ。わしがあと三十年若けりゃあ……」

無達はそう言って邪な笑みを浮かべた。片手に葉巻を持ち、もう片方の手でブランデーを煽る生臭坊主には、とても似合う種類の笑

顔である。

だが――

「若ければ、何でございますの？」

「おわ！」

背後から突然かけられた『本物』の声に、無達はソファーから転げ落ちそうになった。思わず取り落とした葉巻とブランドーグラスは、床に落ちる前に義之が受け止めた。

「ど、どっから湧いて出やがった！ 坊主を脅かすたあ、罰当たりな……」

いつの間にか背後に立っていたエリザベスに、無達は泡を食う。悟りには寸毫も至っていないとはいえ度胸は並外れている破戒僧の虚を突くとは、まさに神出鬼没である。無達にすれば、何があつたのか理解が追いつかないだろう。

だが義之は見ていた。エリザベスは一階から二階まで、文字通り『跳んで』来たところを。察するに、自身の噂をされているところを聞きつけたのであろう。エキセントリックな知り合いは大勢いるが、このエレベーターガールは色々な意味で規格外だ。

「義之様、踊られないのですか？」

そんなここの店名通りに予測不能な彼女は、改めて誘いの言葉に向けてきた。

「……」

義之はこのクラブには『前回』から度々足を運んできたが、踊った事は一度もない。今日のように無達と話すか、ママと呼ばれている謎の占い師に見てもらうくらいである。やろうと思えば踊れない事もないが、この客は無達以外にコミュニケーションの担い手がない為、敢えて店の雰囲気自らを合わせる必要を感じなかったのである。

だが嫣然とした微笑みを浮かべるエリザベスを見れば、どうやら断る選択肢は与えられていない感じがする。

「無達さん、ちょっと降りてみませんか？」

義之は葉巻とグラスをテーブルに置き、立ち上がった。

「お、お前……」

困惑する無達に向けて、義之は邪な笑みを作った。俗に言う、暴悪大笑面である。

クラブに立ち現われた混沌の輪は、未だ勢いを衰えさせない。その中心付近で、己の年齢を忘れたらしい無達は袈裟の裾を持ち上げてステップを踏んでいる。しかも意外な事に、なかなか上手かった。昔はデイスコと呼ばれていた、こういう場所で鍛えた経験があるのかもしれない。それを見届けた義之はこっそりと輪から離れ、バーテンのいなくなったカウンターで一息ついた。

（疲れるな……）

エリザベスの相手をするのは、色々な意味で疲れる。何しろ絆を教える『我』が間に立つコミュニケーションの担い手ではないから、仮面で相手に合わせる『愚者』の常套手段が通用しない。

しかもそれは言い方を変えると、仮面で接すれば良いコミュニケーションの担い手と違って、エリザベスには事と次第によつては心からの感情を抱いてしまいそうになる、という事にもなる。それを自覚している義之は、できればエリザベスと親密になりすぎるのは避けたいのである。だから無達を生贄として残した上で、混沌の輪を一人で抜け出てきたのだ。

ちなみにそんな風に思っているながらエリザベスをクラブに連れてきたのは、依頼の報酬が目当てである。『前回』より遥かに厳しい戦いを強いられる『今回』は、他では手に入らない報酬の品々は一年間を生き抜く為に欠かせないものがあるのだ。

（因果なものだ……）

そうして時間が戻った理不尽さを改めて感じていた義之に、後ろからかけてくる声があった。

「ねえ、あんた」

振り返ると、見覚えのある色黒の少女がいた。手にはグラスを持っている。

「ああ、やっぱり。あんた坂本でしょ。F組の」

「ああ。E組の森山さん……だっけ？」

疑問形で尋ねるまでもなく知っているが、敢えてこう言った。『今回』はお互い顔を合わせるのも初めてだ。風花をイジメていた生徒たちのリーダー格の少女、森山夏紀だ。まさか鉢合わせとは思わなかったが、場所を思えばここで会うのは不思議ではない。

「そ。良く知ってるね」

森山はそう言っただけで持っていたグラスをカウンターに置き、バーテンはどこに行っただとぼやいた。グラスは既に空になっているが、かすかに感じる匂いからアルコール入りだと義之は察した。もちろんそれを咎める気など、義之にはない。

ここの客には服装に関わらず一見して未成年と分かるような、いかにも背伸びして入ってきたと言わんばかりの者もいる。だが森山はポートアイランド駅近くの溜り場に入っただけであって、クラブの雰囲気にも馴染んでいる。だから酒を飲んでいようと何の違和感もない。

「ね、何なのアレ？ 気晴らしに来たのに、訳分かんない……」

森山は混沌の輪を指差した。森山はクラブに馴染んでいるとは言っても、それは普通のクラブの話であって、今の魔界の如き惨状からはむしろ浮いている。そして今日の森山の顔をよく見てみると、疲れが滲んでいる。察するに、嫌な事があって気晴らしに来たのに来てみたらこの有様だったので余計に疲れた、と言ったところなのであろう。

「さあ……」

義之は改めて混沌に目を向けた。よくよく観察すれば、輪の中に

いる女は女王だけで、他の取り巻きは男ばかりである。ひよつとするとエリザベスの魅了効果は、男にしか効かないものなのかもしれない。そんな事を思っていると、森山は唐突に話題を変えてきた。

「ところでさ……あんたのトコの寮に新しい子が来たでしょ。山岸って、小動物っぽいの」

（ああ……）

これまで会った事もない森山が突然話しかけてきた理由を、義之は察した。

昨晚の土曜日、風花は『今回』初めて寮を訪れて特別課外活動部のメンバーへの面通しを済ませ、引越しの作業は日曜の今日に行われた。従って嗜好きな順平辺りが学校で言いふらしたりする時間は、まだないはずである。だが人の口に戸は立てられない。風花を勧誘した美鶴が話を広めるはずはなからうが、入寮の手続きくらいは昨日の間に学校で行ったはずだ。その辺りから情報が漏れたのだろう。

何しろ巖戸台分寮は生徒会長的美鶴やボクシング部主将の真田がいるせいで、良くも悪くも異質で目立つ。そんなところに入るとなったら、その日のうちに噂となってもおかしくない。まして大人しいタイプでイジメられっ子の風花が、ともなれば尚更であろう。

だから風花の入寮を森山が既に知っている事は、不思議ではない。ついでに言っと、その目立つ寮の住人である義之の事を森山が知っていて、やはり不思議ではない。

「ああ。君と同じクラスだったね。仲良くしてやってくれよ」

風花の早期の加入に関して、実は未解決の問題が一つあった。風花と森山の関係だ。『前回』の6月の満月の時、森山は失踪した風花を案じて一人でタルタロスにやって来て、風花の覚醒を促した。その後、森山は影時間の記憶を失ったが無意識の領域に何かしら残ったのか、風花と親友の間柄になった。『今回』はその機会を奪ってしまった為、今後の二人の関係がどうなるか、少々不透明だ。

だが義之は大して心配していなかった。風花と森山の関係が実際のところどのようなものだったのか、『前回』に詳しい事は聞いていない。だが大方は察しがついていた。二人は一種の似た者同士なのだ。表向きの性格は正反対と言っていいほど違うが、根の部分で良く似ている。簡単に言うと、家庭的な面から生じる陰、即ち孤独だ。

『前回』を含めた義之の交友関係でたとえるなら、綾時との関係に近いものがある。要するに、影時間の体験などなくても、二人は親友になれる素地が元からあったのだ。

ただ加入前の風花はエネルギーが内向きであった為、外向きな森山から見て気に障ったのである。そんな調子だから、風花が特別課外活動部に加入して気持ちの充実を得れば、放っておいてもそのうち仲良くなると思っていた。

「冗談でしょ。だってあいつ……」

しかし昨日の今日では、二人の関係が急に变化する事は流石にあり得ない。仲良くしてくれなどと言われた森山は、きつい目をして睨んできた。だがセリフは言い終える前に、突然現れた闖入者によって中断された。

「ご案内、ありがとうございました」

エリザベスが戻ってきた。かなりの長時間に渡って踊っていたはずだが、磨き抜かれた白磁の肌には汗一つ浮いてない。こうしたところでも、彼女は人間とは一線を画している。

「もういいのか？」

「ええ。それでは戻りましょう。あら……」

エリザベスは森山を見つめている。無遠慮なくらいに、しげしげと。もつとも彼女が遠慮するところなど、滅多にお目にかかれないが。

「何？ あたしの顔に何かついてる？」

「いえ……お気をつけください、お嬢さん。と申しましても、お忘れになってしまわれるでしょうが……」

「は……」

エリザベスが踵を返すと、森山の目から急に力が抜け、何もない中空を見つめて呆然としてしまった。フロアに目をやれば、先ほどまで踊り狂っていた人々も足を止め、皆が一樣に呆然としている。まるで象徴化せずに突然影時間に迷い込んだ、適性のない人間のようである。だが時刻はまだ0時になっていない。

「どうしたんだ？」

義之はエリザベスに尋ねた。ただし人々が急に自失してしまった事ではなく、森山に言いかけた事を尋ねているのである。

「申し上げても詮無い事でございます。皆さん、私の事は覚えておれませんか」

「そうだったな」

エリザベスは時間の流れの存在しない、ベルベートルームの住人である。そんな彼女は存在そのものが、実は影時間のそれに近いのである。

普通の人間は影時間に何か体験してもその記憶を保てず、何か別の事に置き換わって認識される。それと同様に、エリザベスと接した人間は彼女に関する記憶を保てない。常人はおるか、ペルソナ使いさえ例外ではない。彼女の事を覚えていられるのは、『契約』した人間のみである。

事前にそう説明されたから、エリザベスをクラブに連れてくる気になったのだ。そうでなければ、いくら報酬が貴重とはいえ依頼を断っていただろう。こんな異常に美しい女を連れてクラブに、などと噂が立ったりしたら特別課外活動部のメンバーやコミュニティの人々との関係にどれだけ影響を及ぼすか、想像もつかない。

しかも『前回』は彼女とも色々あった。もしそれを他人に知られでもしたら、一大事だ。

内なるパトスのままに（2009/5/31）（後書き）

また独自解釈が出て参りました。

エリザベスの存在を記憶できるのは、契約者のみとしております。
だってそうでないと、あんな人を学校に連れて来たりした主人公は、
その日の内に噂の的になったり質問攻めに遭うだろうと……

目に見えないもの（2009/6/1）

月が明けた6月1日の月曜日、学校で妙な噂が流行りだした。行方不明になった女子生徒が校門前で倒れているのが見つかり、怨霊の祟りだとか。登校途中の義之の耳にも、声の大きい生徒の噂話などが勝手に入ってくる。

（始まったか）

風花が無事な現状でもこの噂が流行り出す事は、義之はある程度は予想していた。何故なら件の女子生徒は、影人間になったに過ぎないのだから。

『前回』のこの時期、風花をイジメていた生徒が立て続けに影人間になったが、それは風花がタルタロスに迷い込んだ事と直接関係はない。『前回』彼女らが風花を探しに深夜の学校に来た事は事実だが、だからと言って影人間になるのに夜の学校にいる必要はない。

来年の1月末まで発生し続ける影人間の数を考えても分かるように、学校の外にいても影人間になる時はなる。そして夜の学校にいれば、必ず影人間になるわけでもない。もしそうなら、深夜まで学校にいる警備員などは全員犠牲になってしまう。要は適性のない人間がシャドウの『声』を聞けば、影人間になってしまうのだ。

そしてイジメていた生徒たちはシャドウの声を聞いた。聞いた事それ自体は、風花の失踪とは無関係だ。ただの偶然である。だから『前回』と同様に、生徒が影人間になり始めた。それだけの事である。

ただ『前回』は風花が死んだものと思われた為に、昔からある怪談話と結び付けて考えられたが、『今回』はそれがない。だから怪談が流行しない可能性もあったわけだが、そうはならなかった。何故だろうか。

（みんな噂が好きなんだな）

学校という空間では、噂話が広まるのは得てして速い。そして広まるに従って真相とは少しずつずれていき、やがて全くかけ離れたものになってしまう。ただそれだけの事であろう。

別に自分の行動に関わらず『前回』と同じ状況になるように、何らかの運命的な強制力が働くわけではない——
義之はそう判断した。いささか楽観的に。

授業を終えて寮に戻ると、寮生全員が作戦室に集まった。最初の話題は新規加入した風花についてだった。既に美鶴による簡単な調査によって、風花の能力の種類は分かっている。

「山岸のペルソナは敵の探知や解析に優れている。知っての通りそれらは私も一応できるが、山岸の方が上だろう」

「なるほど、サポート特化型か。確かに美鶴のペルソナは、本来は戦闘型だからな」

「あ、はい……。桐条先輩に代わりまして、これからは私が皆さんのお手伝いをします」

タルタロスのエントランスに残ってフロアの地図情報組み立てや敵シャドウ解析など、搜索チームのサポートをする役割が今後は風花の担当となるわけだ。一見すると地味だが、絶対に欠かせない役である。サポートの有無によって、探索の効率は段違いになるからである。

「そういう事だ。今まで君たちにはかり苦勞を掛けていたからな。今後は私も前線に復帰する」

「お、おお……。頼もしいっすね！」

「ああ。タルタロスは一筋縄ではいかないが、お前なら必ずやっていけるさ」

「……」

充実感のある微笑を浮かべる美鶴に対して、順平と真田はそれぞれ賛意を表す。だが一人ゆかりだけは難しい顔をしている。察するに、風花を連れてきた美鶴に思うところがあるのだろう。風花の加入を契機として、ゆかりの美鶴に対する不信感が増幅していくのは、『前回』もそうだった。

しかも風花がペルソナに覚醒した様子を皆が目撃した『前回』と異なつて、『今回』はそれがないままいきなり加入してきた。義之と美鶴以外のメンバーからすれば、何の脈絡もない青天の霹靂に見えるだろう。

実際のところは、自分に何か役に立てる事があると知った風花が、積極的に志願したのであるうが。『前回』の6月11日に改めて勧誘を受けた際に、加入を即答したように。

だがそうした背景の事情や風花の内面を知るはずのないゆかりにすれば、どんな強引な手を使って風花を巻き込んだのだ、と疑っても仕方がない。だが二人の仲を取り持つつもりのない義之は、ゆかりにフォローはしない。今後の二人の衝突は、義之の計画に既に組み込まれているからである。

ただ義之の目から見ると、それよりも気になる点がある。一見すると自ら戦える事が嬉しいかのような、今の美鶴の表情だ。

（一応、確認しておこう）

「リーダーはどうしますか？」

「うむ……。それは今後も君にやってもらいたい」

（それならいい）

義之は頷き、了承の意を表した。

美鶴の前線復帰に関して、義之は少し心配の種があった。『今回のタルタロス探索がどれだけ厳しいものであるか、これまでサポート越しに見ていただけの美鶴はどこまで正確な認識を持っているか、少々不透明である。無論樂觀視はしてしまいが、厳しい分だけ美鶴は責任を過剰に感じて、己の身を顧みない行動に出たりしないか、という危惧を義之は持っていた。例えば自ら現場リーダーを務めて先頭に立ち、チームに危機が迫ると真っ先に死のうとするとか。

美鶴は普段の冷徹そうな言動に反して、実は非情になりきれない。或いはそれを通り越して、自己犠牲的などころがある。父親亡き後

のグループの将来を案じて、望まない結婚を受け入れようとした事などに、それが現れている。『前回』の付き合いからそれを知っている義之は、美鶴を少し心配していた。だがリーダー役を引き続き義之に任せるところを見れば、そこまで無鉄砲な事は考えていないと見える。

取り敢えず最初の心配は解消できた。すると次の心配は、部長の美鶴を差し置いてリーダーを務める事になった義之に対して、順平がどのような反応を示すか、という事なのだが――

「そう言や、ゆかりツチさ。学生用のネット板とか見てる？」

順平へ視線を送ると、既に次の話題に移行していた。こちらは見てもいなかった。

「先週、E組の子が校門で倒れてんの見つかったっしょ？ あれ、怪談に出てくる怨霊の仕業じゃねえかってさ」

「怨霊とか、マジ止めてよ……。嘘くさい！」

もし話題に上らなければ、義之が自ら話を振るつもりだっただけに、ここは手間を省いてくれた順平に感謝すべきだろうか。

（まあ、順平らしいと言えづらいが……）

これまでの話の流れを完全に無視した、この唐突な話題の転換は何であろうか。好意的に解釈すれば、ゆかりへの順平なりのフオロ―なのかもしれない。順平は色々余計な事を言うが、空気は読めるタイプである。だから今日のゆかりの様子が、少々おかしいところに気付いても不思議はない。

その点、目的意識が強すぎる余りに視野狭窄に陥りやすい美鶴や朴念仁の真田よりも、順平は高いコミュニケーション能力を持っていると言える。ただ読んだ上で取る行動が間違っている点が、非常に残念なのだが。

「その怪談というのは、どんな話だ？」

「興味ある。話してみろ」

嫌がるゆかりを余所に、美鶴と真田が興味を示してきた。上級生が食いついてきて気を良くした順平により、例の時間が始まった。

「どうも、こんばんわ。伊織順平アワーのお時間です」

どこから持ってきたのか懐中電灯まで用意して、順平はもっともらしく語り出す。こうした悪ふざけが、順平の間違ったところである。

「ご存知ですか？ 遅くまで学校にいと、死んだはずの生徒が現れて食われるよって怪談……」

話が進むに連れ、ゆかりは目に見えて怯えた。額に汗が浮き、肩が少し震えている。そんなゆかりが面白いのか、順平は更に熱を入れて語りだす。

「倒れていたE組の彼女……食われたんですよ、死んだはずの生徒に！」

順平はここで一気に話のトーンを盛り上げた。だが怖がっている

のはゆかりだけで、美鶴と真田は時々腕組みをしたり足を組み替えたりして、動揺している素振りはない。そして『前回』はこの場になかった風花はと言うと、肩を竦めて目を伏せている。

一見すると、怖くて話を耳に入れないようにしている様子に見えるが、実は違う。『E組』という言葉のところで、肩が僅かに震えたところを見逃さなかった義之は、風花が聞き耳を立てている事を確信した。

（まあ、そうだろうな）

義之は内心で頷いた。ここまでは計画通りである。

やがて怪談は終わり、順平は懐中電灯を消した。すると美鶴と真田は互いに向き直り、感想を言い合う。ただし順平の喋りに対してではなく、怪談話そのものについてである。

「どう思う？ 明彦」

「怨霊かはともかく、調べる価値はありそうだな」

「あれ？ 俺が熱演した件はスルー？」

そう言っただけで順平は義之に視線を送ってきた。だが義之は気付かない振りをした。コミュニティの担い手へのフォーとして拍手の一つくらいしてやっても良いのだが、敢えて突き放した。すると順平は唯一いい反応してくれた相手へと標的を向けた。

「しかしゆかりッチさ。お化けが苦手とは、ちょい情けないよな」

（そう、それだ）

義之は順平から目を逸らしたまま、またも内心で頷く。ここで話をゆかりに振る事が重要なのである。今夜の集まりで最も盛り上がるポイントは、実は順平の熱演ではなくてここである。

「な、情けないって言った!？」

ゆかりの暴走が始まった。揶揄一つで恐怖は怒りへと反転し、激な攻守交代の瞬間である。

傍から見れば、ゆかりは立派なお化け嫌いだ。見ようによっては一種の可愛げであるが、ゆかりにしてみれば過去の経験からくるトラウマに近いものである。だからゆかりの暴走は無理からぬ事とも言える。少々極端ではあるが。

その点をまだ理解していなかった『前回』の一週間後、夜の職員室のガサ入れ中に軽い気持ちでからかったら、猛烈に怒られたものだった。懐かしい話である。

（それはそれとして……）

『前回』と違って客観的にこの状況を観察できる義之は、暴走が収まるのを待つついでに、別の視点からゆかりの発言を考察してみた。

怨霊なんて嘘――

果たして本当にそうだろうか？

確かにこの世界は決してファンタジーやメルヘンではない。魔法

使いが箒に乗って空を飛んだりしないし、その辺の洞窟に竜が住み着いて財宝を貯め込んだりもしていない。普通の人間が万物の霊長として地球上のあらゆる生物を支配している、紛う事なき現実だ。

だがそんな現実にも、シャドウやペルソナのようなファンタステイックな要素は確かに存在している。つまり怪物も超能力も現実なのである。ならば怨霊だって現実にいるかもしれない。

更に言うならば、実はシャドウとは怨霊であるのかもしれない――

何事につけ、目に見えるものだけが真実とは限らない。目に見えないものを恐れているだけでは、真実を理解する事はできない。もっとも世の中には理解する必要がない、もしくは理解しても意味のない真実というものも存在するのだが。

そんな事を一人静かに考えながら、義之はひたすら黙っている。そうこうしているうちに、ゆかりの徹底的な調査宣言で場が締められた。

「怪談なんて、絶対嘘に決まってるし！」

「ええ……？ マジ？」

ゆかりは完全に興奮してしまい、順平は毒気を抜かれている。そんな中、それまで義之同様に黙っていた風花が口を開いた。

「うん……私も調べてみる」

「風花……ありがとう」

『前回』はいなかった味方を得た事に、ゆかりは感動の面持ちだ。目がキラキラと輝いている。対する風花は幾分辛そうだ。ただし調査自体が辛いとか面倒とか言うのではなく、倒れた生徒が自身と無縁ではないからだろう。

こうして怪談の調査に風花も参加する事になった。義之にとっては期待通りの展開だが、若干の不安がある。

（かえって混乱するかもな。でも風花にもやってもらわないと困る）

風花は人から噂話を聞いて回るような、足を使った調査は不得意であろう。そうなると、得意のパソコンを使ってネットから情報を集めるだろうと推測できる。実際、今後一週間に渡って学校関係の掲示板などに怪談話が満載される事は想像に難くない。だがそれらの噂は、デタラメばかりになるはずだ。つまりガセ情報の海の中で、ありもしない真相を探す羽目に陥る事になる。情報が増える分だけ余計に惑わされ、徒労感だけを得る結果になりかねない。

だが義之はそんな二人を手伝ってやるつもりはないし、止めるつもりもない。義之にとって最も重要なのは、次の満月である6月8日にタルタロスを探索せず、大型シャドウに集中する事である。そして噂の真相は影人間である。失踪者ではなく。

タルタロスを探索しても、既に影人間になってしまった人はどうする事もできない。満月のシャドウを倒す事だけが、彼らを救う唯一の方法である。探索して救助する必要があるのは、迷い込んでしまった人である。つまりエリザベスから電話で連絡される失踪者だ。

そしてこの時期は、まだ失踪者は出ない。最初に出るのは、次の満月を過ぎた6月18日だ。考えようによっては『前回』は風花が

最初の失踪者と言えるが、『今回』の風花はこの通り、ここにいる。だから8日にタルタロスを探索する羽目になって、シャドウとの二正面作戦を強いられる危険はない。

それが既に分かっているから、怪談の調査など義之にとっては無意味である。しかし調査そのものは無意味でも、その副産物には意味がある。よってゆかりと風花を止めはしない。

（溜まり場の件まで、ちゃんと辿り着けよ……）

「それは助かる。気味の悪い話だからな。だがタルタロス探索も忘れるなよ」

「じゃ、よろしくな」

美鶴と真田はそう言って席を立ち、作戦室から去って行った。そんな二人にゆかりはもう目もくれず、風花の手を取って意気込んでいる。

「絶対真相を解き明かそうね！」

「うん……」

「ねえ、何なの？ このノリ？ ちょっとおかしくね？」

事態の急展開に一人ついていけない順平の声だけが、熱気に当てられたような作戦室に取り残された。後でフォローしてやろうと思いつきながら、義之も席を立った。

魔術師 2 (2009/6/4)

部活や生徒会のない木曜日の放課後、義之は順平と二人でラーメン屋のはがくれに来ていた。『前回』は順平と二人で連れ立ってどこかに行く事はほとんどなかったが、『今回』は放課後の時間を度々一緒に過ごしている。

義之にすれば、順平はコミュニティの担い手だから折に触れて誘っているのだが、順平も大抵は応じてくる。順平からどこかに行こうと誘ってくる事もあるし、義之も他に予定がない限りは応じるようにしている。

そんな調子だから、級友たちからは仲の良い二人組、と言った具合に見られている事であろう。『前回』その役割を担ったのは友近と宮本だったが、彼らとコミュニティを築けなかった『今回』は、現在のところクラスで最も親しく接しているのは順平である。

一時期は仲違いした『前回』を思えば、これは大きな変化と言える。ひよつとすると、『今回』はずっと良好な関係のまま最後まで行けるかもしれない。これも絆を教える『我』が裏で何かしているのだろうか。

コミュニティの担い手が友近から移ってしまった4月はどうしようかと思ったものだが、実はより良い絆を持てたと言えるかもしれない。

ついでに言うと、男相手のコミュニティは女相手のそれより概して気楽である。何しろ特別な関係になる恐れがないのだから。無論、世の中にはそっち方面が好きな男もいるが、知り合いにそういうタ

イブはいない。いないはずである。多分。

敢えて言うなら通販会社社長のたなかは、そっちの気があるかもしれない。しかし、たなかは商売以外の事に関しては意外と良識がある。だから一時期は義之を養子にしようと考えていたようだが、世間に何と思われるかと心配して撤回していた。運のいい事だ。

「お前、ちゃんと怪談の事、調べてる？」

ラーメンを啜る合間に、ふと順平が話しかけてきた。月曜に行われた伊織順平アワーの成果として、怪談話の真相を調査する事になった件である。あれからゆかりは部活にさえろくに出ず、生徒たちに噂を聞き回っているようである。そしてその確認会は明日に予定されている。

「全然」

これは本当である。『前回』はそれなりに人に尋ねたりもしたが、『今回』は何もするつもりはない。怪談の真相など、既に分かっているからである。

「そうだよな。噂ってなあ、女の子の領分だもんな！ 二人に任せときゃいいよな！」

そう順平が言う通り、調査しているのは主に二人。ゆかりと風花である。

（「苦勞様、と言ったところか」）

そんな二人には残念な事であるが、いくら調査しても真相に辿り

着く事は無理だろうと義之は思う。

「岳羽も変だよな。夜の学校は平気なくせに、お化けは怖いんだから」

これは冗談である。傍から見れば確かに変だが、『前回』にゆかりと深い付き合いをした義之はその心理に察しがっている。

『前回』の確認会で本人も言っていたが、ゆかりは目に見えないものを恐れる。目に見えないとは、広い意味では幽霊の類もそこに含まれるが、ゆかりが最も恐れるものは世間の悪意というものである。中傷とか陰口とか、肥大した自意識とか。

要するに、子供の頃に父親の件で世間から辛く当たられた経験が、実体が掴めないものを恐れる心理に繋がっているのだろう。だがそうした事情を、今の時点で他人に詳しく説明する事はできない。だから単に順平の気持ちを代弁するつもりで、冗談めかして言ったのだが――

「……」

予想していた笑いは起こらなかった。一瞬の沈黙の後、順平は声色を落として呟いた。

「ゆかりツチは……平気なのかな。夜の学校が」

（ん……？）

その後、順平はあまり口を聞かなくなった。始終喋っていないと落ち着かない順平にしては珍しい事である。急な重みが発生した雰

困気の中で食べるラーメンは、どこことなく油っぽい味がした。

はがくれを出た後、二人は真っ直ぐ寮には戻らず、長鳴神社に立ち寄った。順平の態度に引つ掛かるものを感じた義之が誘った為である。

巖戸台商店街から寮を素通りしてしばらく進むと、やがて大きな鳥居が見えてくる。そしてそれをくぐった先に、長い階段がある。真田などは普段から良くここを駆け上ったり降りたりしているらしい。曰く、階段ダッシュは心肺機能と下半身の強化に最適だそうである。もちろん二人にそんなつもりはないので、ゆっくり歩いて階段を登った。

階段を登りきると広場があり、その正面奥には神社の境内が鎮座している。本来は厳かな場所なのだが、向かって左側にはジャングルジムや滑り台などが置かれている。エリザベスに言わせると、真の聖域には形ばかりの厳かさなど不要、というものだそうである。

実際、他に人はおるか犬もない今の神社は、神聖さと遊び心が調和した、不思議な雰囲気を醸し出している。

順平は遊び場スペースの端にあるベンチに腰を下ろし、両肘を膝の上に置いて地面を見つめている。義之はそのベンチの脇に立ち、眼下の街並みを眺めている。

「ここって、結構遠くまで見えるよな」

「……」

順平は答えない。場所を変えても、雰囲気は重いままで変わらない。一見すると気まずい感じたが、その気まずさ自体がコミュニケーションの重要なポイントの到来を表しているように、義之には感じられる。

絆を教える『我』の無言の音が、普段の順平の軽い仮面を僅かにずらし、その下の内面をさらけ出そうとしている。そう言っても間違いではあるまい。女相手のコミュニケーションでは迷惑にも感じる『我』だが、こういう時には役に立つ。はぐれでの順平の最後のセリフを足掛かりに、一歩踏み込んだ。

「学校も見えるぞ」

「……」

順平はなおも黙ったままだ。だが顔を上げてベンチから立ち上がり、義之と同じ方向を眺めた。

二人の視線の先では、ムーンライトブリッジとモノレールの橋梁に挟まれた青い海が、傾いた日差しを受けて光を放っている。そしてその先の人工島にある、月光館学園の白い校舎が微かに見える。

「夜になると……あれがタルタロスになるんだよね……」

順平はそう言って再びベンチに座り込んだ。義之も吊られるように、自然な動きで座った。そうしてしばらく二人とも黙っていると、順平はおもむろに語り出した。

「俺さ……ペルソナがあるって知って、嬉しかったんだ。何か特別

な……ヒーローの使命みたいなもんが、俺にはあるんじゃないかって。でも最近は違うような気がしてよ……。でもそれを認めるのも嫌っつーか……」

（おや……）

『前回』にも薄々感じてはいた。順平はマンガやテレビのヒーローになったつもりで戦っていたが、やがてそれに疑問を持ち出した事を。

ただ『前回』はそれとなく感じていただけで、順平自身の口からこんなに直接的に話された事はない。これはやはり『我』が順平の無意識に何かを囁きかけた為に、より深く気を許すようになったのかもしれない。

だが重要なのは、内心を話してくる事それ自体ではない。疑問を持ち始めるのが早すぎはしないか、という事だ。『前回』は義之と順平の実力差が顕著になってきた頃、具体的に言つと7月の満月の辺りからだ。あの頃から順平の態度は硬化した。義之の見る限り、それとほぼ同時にヒーローに疑問を持ち出した。夏休みには態度は軟化したが、それは表向きだけだ。真の意味での信頼関係を築けたのは、1月になってからだ。だが今はまだ6月。

「どうしてそう思う？」

「だってよ……俺ら、いつも苦労しまくってんじゃん。タルタロス行けば毎回ボロボロになるし。マジで死ぬって思ったの、一度や二度じゃねえだろ？ んでもって、次の日はベッドから起き上がれねえくらいヘトヘトになった。んなヒーローっているか？ 俺らの使命って、どんなんだよ？」

(なるほど)

義之は得心した。思い返してみれば、『前回』のタルタロス探索は慣れれば意外と楽なものだった。要所ごとの番人や満月のシャドウには苦勞する事もあったが、それらは飽くまで例外だ。真の意味で死を覚悟させられるレベルの敵は、実は数えるほどしかいなかった。だから暇潰しにタルタロスに行こうなどと順平も氣楽に言えて、義之もそれに応じたりしてきたのである。

だが『今回』は違う。タルタロスでは一瞬たりとも油断できず、義之も順平も何度も死にかけている。無論ゆかりや真田もそうだし、今週から前線に出てきた美鶴もそうだ。チーム内の実力差など意識する暇もないほどの、激烈な緊張の連続だ。

現時点での特別課外活動部のメンバーの実力を客觀的に評価すれば、最も強いのは『前回』同様に義之だ。だがそんな背比べに、どれだけの意味があるだろう。井の中の蛙の最強など、現実の過酷さの前では虚しいだけだ。

「だからよ……もしかして、俺は使命なんかない……ただの捨て駒なんじゃねえかって、思っちゃうんだ」

その現実がもたらした結果がこれだ。『前回』の順平が抱いた悩みはチームのリーダーでない脇役止まりかも、という甘いコンプレックスに過ぎなかった。だが『今回』はより深刻な、純粹な死の恐怖。または犬死の恐怖か。

「……」

義之は『愚者』である。愚か者は死を恐れない。だから順平の気持ちや頭では理解できても、心では無理だ。だがそうした無理を曲げて相手の共感を得るのは、『前回』からコミュニティで何度もやっている事だ。

だからここで、気持ちが分かると嘘を吐く事はできるし、むしろ得意とするところなのだが――

「使命か……。そんなの、ない方がいいぞ」

「何だよ？」

「使命があつたら、逃げられないだろ？」

順平は眉を顰めた。滅多に見られない本気表情だ。下級生から口も頭も軽いと評される仮面の下にある内面に合わせるように、声色も低くなった。

「嫌なら逃げろつつつてんのか？」

「そうじゃなくて……。使命があるなら、逃げても無駄だ。使命の方から追いかけてくる。だから立ち向かう。でもそれじゃあ、強制されてやるのと変わんないだろ」

「えーと……。どういう事？」

順平は寄せた眉を解き、声色を普段通りに戻してきた。理解が追いついていない。もう少し噛み砕いた言葉が必要なようだ。義之は視線を順平から外し、学校のある方角へ向けてから言葉を連ねた。

「だから、使命があつたら逃げられない。ないなら逃げられる。逃げられるのに逃げない方が、勇気があるって事だろう」

これは口から出任せではない。順平は特別課外活動部の中で最も使命、と言つか戦う目的に乏しかった。しかし『前回』の順平は、ニユクスの来訪を知った時は激しく取り乱したが、結局最後まで逃げなかった。

普通に考えれば、ニユクスはおろかタルタロスで戦う事だつて恐ろしい事のはずなのに。『今回』に比べれば『前回』の戦いはずつと楽だったが、それでも死の危険はないわけではなかったのだ。そんな中で、最初から最後まで戦い抜いた。特にこれと言った目的がないのに。

敢えて言うなら、チドリに貰った命を無駄にしない為、というものはあつただろう。だがそれは使命や目的ではなく一種の意地であつて、そうした自分一人だけの内面を抛り所にして継続的な恐怖に立ち向かうのは、余程の精神力がなければできない事ではない。父親の目的を受け継いだ美鶴やゆかりとは異なるし、荒垣の遺志を二人で共有していた真田や天田とも異なる。

仲間たちの中で最も勇気があるのは、美鶴でも真田でもなく、実は順平である――
義之はそう思っている。

「カッコいい事、言ってんじゃねえや……」

順平は帽子のつばを押さえて、ベンチから立ち上がった。手と帽子で顔を隠しているが、不機嫌になっているところは見て取れた。コミュニケーションの活動としては、失敗の部類に属する結果だ。関係の

後退や破綻にまでは至らないが、仲が進展したとも言えない状況である。大嘘吐きの自分にしては珍しく、本音を言ってしまったのが良くなかったようだ。

（ちよつと失敗したかな……。俺らしくない物言いだつた）

使命があつたら逃げられない――

これは4月にファルロスと話し合つて確認した事そのままだ。自分分はシャドウから逃げられない。逃げてモシャドウは追いかけてくる。だから立ち向かうしかないのだ。そんな有様だから、逃げようと思えば逃げられる順平を心のどこかで羨ましく思っていたのかもしれない。

順平は道路へ降りる階段へと一人でさつさと向かい、義之がその後続く。前に行く背中から立ち上る不機嫌な気配が、後でどうやってフォローしようかと悩ませた。何しろ予定では、明後日に少々辛い思いをしてもらう事になっているのだ。

そんな事を思っていると、階段を降りた先で意外な相手を発見した。いや、場所からすれば意外でも何でもない。

（おや……。ちよつと散歩から戻ってきたところか？）

神社を住処とするアルビノの柴犬、コロマルだ。ぶち一つない真っ白な毛並みが、夕暮れの景色に映えている。

「お？ お前つて確か……」

「ワン！」

順平は地面に膝をつき、優しい手つきで頭を撫でた。コロマルも尻尾を振って、大人しく撫でられている。

「知ってるのか？」

「ああ、4月だったかな。ポロニアンモールで見かけた事あんだ」

『前回』義之がコロマルと初めて会ったのは6月20日で、場所は寮の玄関前だ。そこに居合わせたゆかりと風花は既にコロマルを知っていたようだが、この時期に順平も知っていたとは思わなかった。意外な繋がりがあったものだ。

「そう言えば……お前と会ったあの日だったな」

何がだと聞くと、順平は振り返って歯を見せて笑った。先ほどまでの本気の顔ではなく、いつもの軽い仮面に戻っていた。

「初めて影時間を体験した日！ 棺桶だらけのコンビニでマジベソかいてて、真田さんに目撃されちゃった日！」

（マジか？ 意外どころじゃないな）

順平は影時間の適性をいつ身に付けたのか、正確な日は聞いていない。だがまさかその日に、後に仲間となるコロマルと出会ったとは。これはもう運命的と言うべき繋がりだ。

「しかしお前、ここに住んでんのか？」

「ああ、そいつはな……」

義之は『前回』に通り返りの主婦から聞いた話を繰り返した。コロマルという名で、ここ長鳴神社の飼い犬だったのだが、半年ほど前に神主が『事故』で亡くなってしまった事。それ以来決まった散歩コースを夕方によく以外、事故現場であるここを動かないという事を説明した。ただその事故が実はタルタロスの外に出たシャドウの仕業である事は、この時点で義之が知っているのは不自然すぎるので話さなかった。

「この辺りじゃ有名な所ぞ」

「へえ、忠犬じゃねえか」

順平は再び歯を見せて笑い、コロマルの頭をがしがしと撫でた。

「ワフッ……」

「俺の親父は……酒ばっか飲んでた」

（ん……？）

順平の家庭事情は『前回』から少し聞いている。12月10日の会合の時、父親が不動産投機で失敗して酒に溺れるようになった事を、順平は話している。ここでその話をするのは少々脈絡がないのではと思いつつも、義之は黙って耳を傾けた。

「あの日も飲んだくれた親父と揉めて、家を飛び出してよ……。結局行くトコもねえから、コンビニで立ち読みしてたんだけどな。今に思うと、何かこう……つまんねえ現実をスパッと変えられるような、何かを欲しがってたのかもしれないな」

「それで力が目覚めたのか」

実際のところは、デスを宿す義之と接した事が覚醒の最大の原因であろうが。だがそれを差し引いても、義之の周囲の大勢の人々の中で順平が覚醒したのは、やはり家庭環境に起因する現実への不満が引き金となったのかもしれない。何しろ順平に限らず、特別課外活動部の面々は家庭に問題を抱えている者ばかりである。

「ま、目覚めたら目覚めたで、しんどいんだけどな！」

順平はコロマルから手を離して、立ち上がった。先ほどのまでの不機嫌さはすっかり消えている。

「悪いな、ちつと愚痴っぽくなっちゃった。女の子だって戦ってんのに、男の俺らが弱音吐いてちやいかんよな！」

「そうだな」

『今回』のタルタロス探索で死にそうな思いをしているのは、誰もが同じだ。そして過酷な分だけ、攻略の為の戦力はより必要になる。だから順平の力も『前回』以上に必要なのだ。父親への反発でも男の意地でもいいが、とにかく戦うモチベーションは維持してもらわないと困る。

もう少し月日が進めば、チドリとの出会いによって順平の内面には更なる変化が訪れるはずである。そして『今回』はチドリを死なせないつもりなので、順平は地の勇敢さに加えて明確な戦う目的をも得る事になる。それまでは、とにかく頑張ってもらえない。

（コロマルに礼を言うべきかな……）

コロマルとの予期せぬ遭遇が思わぬ形での追加の告白に繋がり、順平の機嫌を直してくれた。『前回』からコロマルの存在は殺伐とした戦いの日々に貴重な癒しをもたらしてくれていたが、今日もいい仕事をしてくれた。ある意味、絆を教える『我』より効果的かもしれない。

ついでに言うと、勇敢さという点ではコロマルも相当なものである。それこそ順平といい勝負だろう。

コロマルの加入は夏休みになってからだが、その時は高級ドッグフードでも買ってやろう。そんな事を思いながらコロマルと別れ、順平と二人並んで寮に戻った。

魔術師 2 (2009/6/4) (後書き)

原作ではコミュは本編とほとんど無関係に進みますが、本作では本編と相互に関連していきます。特に仲間相手のコミュは、その傾向が強いです。

2011/8/31：チドリに関して加筆

喧嘩師（2009/6/5、6/6）

「調べてみましたが、怨霊なんて全くのデタラメ。昔からある怪談話に似たようなものがあるけど、状況とか全然違います！」

「うん……怪談だと学校で死んだ生徒がって話だけど、誰も死んでないし……」

今日は6月5日の金曜日。『前回』同様、寮のラウンジで怪談の真相確認会が行われた。

ゆかりと風花の調査によれば、最近に死んだ、もしくは死んだと思われる状況にある生徒はいない。その代りと言っては何だが、意識不明になった生徒は一人ではなく三人いる。彼女らはいずれもクラスや部活は異なるが、頻繁に家出する共通点がある。その三人が良く出入りしていたのが、ポートアイランド駅外れの溜まり場である。

「よって更なる真相に近づくべく、明日現場取材を決行する事にしたから！」

（はい、結構）

『前回』同様のゆかりの宣言に、義之は内心で頷く。そして対照的に、順平は慌てだした。泡を食っていると表現しても良いだろう。

「あそこやバいって！ 女の子を二人も連れて行くような場所じゃねえよ！」

普通に考えれば、順平の反応が正常であろう。溜まり場がどんな場所かを知らないか、余程のケンカ好きでもない限りは。

「そうね……風花は来ないでいいよ。三人で行くから」

「ちよつ……そうじゃなくて！」

（おや……）

義之は少し意外に感じた。怪談調査に懸けるゆかりの熱心さは、特別課外活動部を駒のように扱っている、と思っている美鶴への反応と、溜まり場の実態を知らない事に由来するのだと思っていた。だがこのようなセリフが出てくるといふ事は、実は溜まり場の危険性は認識している。しかしそれでも自身が行く事は止めない。勇敢と言ふべきか、無鉄砲と言ふべきか。

それはそれとして、義之としては風花も溜まり場に来る方が良いのである。だからこの流れは少々まずい。しかしそんな義之の心中を知るはずのない風花は、自ら進んで首を横に振った。

「うっん……。私も行く」

「そう？　でも危ないよ」

「だーから！　危ないんだったら行くの止めようって！」

必死で懇願する順平を無視して、ゆかりと風花の話は進む。しばらく平行線が続いたが、やがてゆかりが折れた。

「分かったわよ……。でも危ないと思ったら、すぐ逃げてよ。男子

たち、ちゃんと風花を守ってね」

「……」

義之は一瞬、ゆかりのセリフをどう解釈すべきか悩んだ。風花の身を案じる優しさか、危険と知りつつ結局は巻き込む無責任か、はたまた普段のツッコミ体質から一歩進んで、順平を困らせる事に密かな楽しみを見出しているのか。

（難しい問題だな……）

ゆかりとは『今回』も恋愛のコミュニティを築くつもりでいるが、特別な関係にはならないようにしたいと思っている。ただ風花や美鶴と違って、引き取り手が見当たらない点が難しい。ゆかりの性格や嗜好は把握しているつもりだが、友人に留まる為には『前回』以上にゆかりの内面を理解する必要があるそうだ。

明日は特にゆかりに注意を払っておこう――

などと確認会の主旨とは完全にずれた事を考えていたので、義之は一言も喋らなかった。しかしとうとう順平が助けを求めて、肩を揺さぶってきた。

「なあ、黙ってないで何か言っちゃってくれよ！ あそこマジ、マンガみたいに荒れてんだよ！」

順平は本当に必死だ。良く見れば帽子の下から覗く目元に、光るものがあるようなないような。思わず憐憫の情を催しそうになるが、初めから溜まり場に行くつもり義之は、順平をフォローしてやらない。

「心配するな。シャドウより強い不良なんかいやしない」

「そりゃそうだけどさ！ ペルソナ使うわけにやいかねえだろ！」

「お前のスペシャルコレクションを持っていけ。あの釘の生えた奴」

最近手に入れた順平お気に入りの小道具、釘バットの事だ。野球のバッターのように得物を振り回す順平のスタイルに、驚くほど似合う武器だ。あれを持っていけば、人間の不良など容易く蹴散らせるだろう。

「馬鹿野郎！ あんなもん持ってたなら、ケンカのバーゲンセール中って看板立てるようなもんだぞ！」

その前に警察に捕まるだろうが。自分たちの事情を知っている黒沢巡査でも、あんなものを街中で持ち歩いていたら流石に見逃してはくれないだろう。

「男は度胸だ」

「うー……分かったよ！ 行きゃあいいんだろ！」

以上をもつて、確認会はお開きとなった。

怪談の真相など義之にとっては既知の事であるにも関わらず、教えてゆかりたちが調査するに任せたのは、明日に溜まり場に行くのだ。正確に言くと、溜まり場で荒垣と接触する為だ。

（先々の為に、明日会っておいた方がいい）

荒垣の特別課外活動部への復帰は、『前回』は9月2日だった。義之はこれを早めさせる気はないので、復帰は当分先の話である。だが今の時点でも、あの場で会っておく事にはそれなりの意味がある。

『前回』は仲間の多くが荒垣を高く評価していたし、特に順平は本気で尊敬の念を抱いていた。その理由の一つに、明日の溜まり場の一件がある事は間違いない。順平とゆかりは5月の真田の検査入院の際に荒垣の顔を見ているが、あれだけでは9月の復帰時に好意をもって迎える事は難しいだろう。何しろ荒垣は内面はともかく、外向きは無愛想の権化のような男なのだから。

今後の為に、ここで皆の荒垣に対する印象を良くしておくのだ。そうする事で10月の天田の復讐にも、それを生き延びた後の対処もやり易くなる。

そして風花も連れて行く事は、特に重要だ。風花と特別な関係にならないまま女教皇のコミュニティを進める為、風花は荒垣に引き取ってもらわねばならない。だからここで荒垣の良いところを見せしておく事には、大きな意味がある。

（許せ、順平。きっと荒垣が助けてくれるからな）

以上の理由により、義之は明日順平が殴られても、自分で助けるつもりはなかった。ただ心の中でだけ謝っておいた。誠実に極めて欠ける謝り方で。

この6月の満月に関連した、種々の計画は順調に進んでいる。しかも自分自身は風花を体育館から出した以外はほとんど動かないま

ま、事態をコントロールできているところが素晴らしい。義之は顔には出さずに満足の笑みを浮かべた。

確認会翌日の土曜日の夜、『前回』のメンバーに風花を加えた四人で溜まり場にやってきた。タバコの煙や安いアルコールの臭いが漂う空気の中で、数人の男女がたむろっている。階段や地面に直接座り込んでいる者が多い。どこの町にもこうした裏側というものは存在するが、殺伐の度合いがかなり強い。

「あん？ 何だあいつら……」

「制服？ 月高か？」

そんな溜まり場の雰囲気の中では、義之たち四人は明らかに浮いている。しかも制服姿というのが、なお良くない。傍から見れば、絡んで下さいと言わんばかりである。

ただもう少し月日が進むと、ここの雰囲気は大きく様変わりするはずである。元々の常連たちが子供に見えるくらい、超一級の危険人物三人組が頻繁に現れるようになるからだ。その頃であれば、見知らぬ顔が現れても関わり合いになろうとしないくらいの処世術を不良たちも身に付けていたかもしれない。だが彼らの姿がない今の時点では、そうした良識は期待できない。

「お前ら、遊ぶトコ間違えてんじゃねえの？ 帰れよ、ヒゲ男くん」

「……」

案の定、早速絡まれた。自分たちから見ても手前にいた、男女二人ずつのグループから男の一人が近づいてきて、順平に向けて威圧感を放つ。場所からすれば、むしろ不良の言い分の方が正論とさえ言える。だが言われた順平は無言のまま、返答したのはゆかりだった。

「ここ来るのに、なんであんたの許可がいるわけ？」

「ゆ、ゆかりちゃん……」

注意して聞いていないと分からないが、ゆかりの声は僅かに震えていた。そのゆかりの腕をいつの間にか掴んでいた風花の声は、注意しなくても分かるくらいに震えていた。

「大丈夫……怖がらないで。こんな連中に……」

「ああ!？」

風花を励ますつもりだったのであろう言葉は、割と小声だった。しかし不良たちの耳には、しっかり届いていたようである。座っていたもう一人の男と、派手な化粧の二人の女も立ち上がった。

「こんな連中、つつた？」

「つか、写メとか撮って流しちゃおうか？ パパとかが気失うような、セクシーポーズな奴！」

甲高い女の笑い声が湧き上がる。そしてそれが収まる前に、ゆかりは吐き捨てた。

「こいつら、サイッテー……」

（確かに最低だが……）

ゆかりに一応の同意はしつつも、義之はやれやれと額に手を当てたい気分になった。

こうして冷静に観察してみると、この溜まり場の一件の非はゆかりにあると思わざるを得ない。人にものを尋ねる態度では初めからないし、その後もわざわざ火に油を注いでいる。

ゆかりは『前回』にポートアイランド駅で財布を落とした際に、不良に絡まれて怖がっていた。その時と同じように、今も怖くないはずはないのだろうが、むやみに強気だ。どうもゆかりは恐怖を感じると、余計に無鉄砲になる傾向があるようだ。察するところ、恐怖や無力感などの自身の感情そのものに対して怒りを感じるのだろう。

つまり、ゆかりは良くキレるが、自分自身に対しても良くキレる。今後の為に参考になりそうな情報だ。

弁護する余地があるとすれば、ただ一点。不良の女の『パパ』という発言だ。父親に対する思いを逆撫でされたような気がしたのだろう。もっとも義之にすれば岳羽詠一朗については既に十分すぎるほど理解しているので、今更であるが。

「ヒゲ男くんも大変だ。こんなアグレッシブな子が一緒だと、さ！」

義之がそんな事を暢気に考えている間、不良の一人がセリフの最後に合わせて順平の腹を殴っていた。それなりにケンカ慣れしてい

るのであるう。なかなかいい音がした。

だが――

「く、くそつ……お、お前らなんかなあ！ シャドウに比べりゃ紙細工だぜ！」

順平は倒れなかった。そればかりか、不良に向けて殴り返した。だが拳は普段使い慣れていないせいかな、よけられてしまった。例のスペシャルコレクションを持っていれば、別だったろうが。

「お、やるのか？ ヒゲ男くん」

（あれ？）

『前回』はボディー一発でKOされた順平が、果敢にも立ち向かっている。三枚目の順平がどうしたのだらう。よもや風花がいるのだらうか。守ってやれとのゆかりの言葉を真に受けたか。思い返してみれば『前回』の順平は、女子のメンバーの中では比較的風花と仲が良かった。

「てめえもボサツとしてんじゃねえぞ！」

もう一人の男が義之に向けて殴りかかって来た。これはちょっとまずい。完全にケン力になる。

（鉄パイプでも隠し持って来るべきだったか）

相手のパンチをかわしながら、義之は埒もない事を思った。ケン力ではない本当の実戦を経験している分、素手でも一対一なら負ける気はしない。順平も気持ちさえあれば、一人くらいには勝てるだ

ろう。だが溜まり場の不良はこの場の四人だけではない。騒ぎを聞きつけて仲間が来れば、まずい事になる。

人間の不良などシャドウの足元にも及ばないが、ペルソナ使いとしても超人ではないのだ。殴られればそれなりに痛いし、ナイフで刺されたりすれば普通の人間と同様に死ぬ。丸腰で大人数を相手にすると、流石に分が悪い。

「岳羽、山岸を連れて逃げる」

男衆はともかく、ゆかりと風花はこれ以上は駄目だ。今後の計画に狂いが生じるが、仕方がない。だが声をかけながら二人の側へ顔を向けると、想定外の人物がそこにいた。見覚えのある色黒の少女が、風花の腕を掴んでいる。

（森山？）

「何してんの、こんなトコで！」

森山だ。風花は困惑した顔で何事が言おうとしているが、森山はかなりの剣幕だ。どうやら騒ぎを聞きつけて、逃がそうとしているようだ。

「ちょっと、貴女！」

突然の闖入者、それも見た目は不良と変わらない森山にゆかりが怒鳴る。だが森山はそれをも跳ね返す。

「あんたも早く行きな！ よってたかってヤラれたいの！」

「ヤラ……って！」

人は場所に合わせて、迫力が増減する事があるのかもしれない。場に馴染んでいる森山は浮いている二人にはもう有無を言わず、腕ずくで押し出すようにして駅の方面へと連れ去っていく。

(……どうなっただ?)

『前回』はなかった事が、こうも立て続けに起きるとは。そして最初に『前回』にない反応をした順平はと言えば、不良の一人とまだ殴り合っていた。結構いい勝負をしているようである。

「このクソガキが！」

「うおお！」

二人はどちらも次で決着をつけようと、拳を大きく振りかぶった。場所の空気と素手のケンカに慣れた不良か。場違いで得意な道具も持たないが、実戦の経験なら圧倒的に多い順平か。軍配はどちらに上がるか――

「その辺にしとけ」

勝負は行司預かりとなった。

いつの間にか行司、ではなくてニット帽をかぶってロングコートを着た大柄の男が、二人の間に割って入っていた。互いに突き出された順平と不良の拳を、片手一つずつで両方押さえている。ケンカの場合を相当に踏んでこななければできない芸当だ。この溜まり場の常連で、札付きの不良にも恐れられている男、荒垣真次郎だ。

「てめえ……荒垣！ 邪魔すんな！」

目当ての人物がやっと現れた事を確認して、義之はよける足を止めた。殴りかかってきていた不良も、乱入者の登場に気付いて手を下ろした。

「素人相手にムキになってんじゃねえ」

「ざけんな！ それで済むと思ってんのか！ てめえからやつちまうぞ！」

不良は言いながら押さえられた拳を振りほどき、荒垣に向けた。だが荒垣は頭を僅かにずらすだけでかわし、両手をぶら下げたまま一步踏み込んだ。

ガン、と辺りに響き渡るいい音がした。

「あが……」

大振りのパンチにカウンターの頭突きを綺麗に決められ、不良は地面に仰向けに倒れ込んだ。『前回』は逃げる余力があつたはずだが、一発で伸びてしまった。順平と殴り合ったせいで、既にダメーシが蓄積していたのかもしれない。

「まだやるか？」

「い、いえ……」

荒垣に睨まれたもう一人の男は、腰が引けてしまっていた。二人

の女もたじろいでいる。やがて不良たちは互いに顔を見合わせて、倒れた仲間を肩に抱えて去って行った。

「ひ、一睨みかよ。格が違い……」

順平は呆然と荒垣を見上げている。だがそんな順平に荒垣はじろりと怖い目を向け、頭を小突いた。

「痛っ！」

「馬鹿野郎が……」

加減はしていただろうが、順平より一回り体格が大きい荒垣の拳は重さが違う。順平は頭を両手で押さえて膝をついた。

「てめえら、わざわざケンカしに来たのか？ さっさと帰れ」

今度は義之に向けて言ってきた。その声色は凄むものではなく、裏に気遣いがあるものでもなく、単に呆れたという類のものだった。そしてこちらの返事を待つ事もなく、二人に背を向けて駅の方面へと去って行った。

身長に応じて歩幅も大きい荒垣は、歩くのも速い。背中は見る間に遠ざかっていく。順平も膝をついたまま、黙って荒垣を見送る事しかできない。

「……」

話を聞く間もないまま、荒垣に去られてしまった。ゆかりと風花も森山に連れて行かれたまま、戻ってこない。誰もいなくなった溜

まり場に、順平と二人で取り残されてしまった。完全に予想外の状況だ。

（何でこうなった……？）

一体何がいけなかったのだろう。日頃の行いがそんなに悪いのだろうか。決して否定はできないが。親に悪戯を叱られた子供のように、二人揃って手持無沙汰に佇んでしまった。一分ほども時間が経過してから、立ち上がった順平がようやく口を開いた。

「取り敢えず……帰ろうぜ」

「そうだな」

これ以上ここにいても仕方がない。また不良たちが戻って来たりしたら、いよいよ面倒な事になる。

溜まり場の周辺は、夜の早い時間であつてもかなり薄暗い。だがそこを出て裏路地を通り抜け、表通りに出れば市街地らしく街灯の数が多くなってくる。道路沿いの建物から零れてくる明かりの量も比例して多くなる。そして駅まで来ると駅舎や隣の映画館の照明によつて、夜の遅い時間でも人の顔がはっきり見えるくらいの明るさがある。まさに町の表の顔である。

「はあ……生還したか」

順平は大きなため息を一つ吐き出した。荒れ放題の空気が漂う薄暗い異郷から、自分たちが本来いるべき明るい場所へと帰って来た事を、光の量によつて実感できるようになった。

「お、皆いるな」

そんな町の表の顔の中心部、駅の改札へ向かう長い階段の隅の辺りで、四人の男女が集まっていた。荒垣とゆかりと風花、そして森山だった。

「あの人ってさ……確か真田さんの病室にいた人だよな」

「だな。荒垣さんって呼ばれてたな」

さも今気付いたかのような風を装って、義之は答えた。そして内心では、荒垣がまだ留まっている事に安心した。これなら溜まり場での失敗を取り返せる。

「何なんだ、てめえら……」

義之と順平が合流してくると、荒垣は再び呆れた声を漏らした。状況を見るに、帰ろうとしたところで、既に駅まで戻っていたゆかりと風花に捕まったのだらう。いかにも迷惑そうにしている。

だがそれでも無視はしない。5月に真田の病室で見た自分たちの顔を覚えていて、特別課外活動部に絡んだ事だと察したのかもしれない。

「あの、先輩。あたしはもう行きますね……」

そんな中で唯一、特別課外活動部と無縁の人物、森山がやや遠慮がちに声をかけた。荒垣に向けて、である。溜まり場に入り込んでいただけあって、二人は顔見知りのようである。

「ああ」

森山は駅の階段を登って行った。だが途中で一度だけ振り返り、こちらを見つめてきた。その視線の中には、かなりの不審の色が含まれていた。

「あ、あの……ごめんなさい。私たち、知りたい事があって来たんです」

やがてゆかりと風花が説明を始めた。校門前で倒れていた生徒の事を調べていて、彼女らは溜まり場に入りしめていた事を突き止めたのだと。

「あの……倒れた原因とか、何か知りませんか？」

「知らねえよ。怨霊の仕業だとか色々噂になってるが、どれも眉唾だ」

（そりゃそうだ）

『前回』はこの時に荒垣の口から、倒れた生徒たちは風花の怨霊に取りつかれたとの噂を聞いたし、『今回』も怪談めいた話はある。だがあれは風花が実際に行方不明になっていた為にまだ信憑性があったのであって、風花が普通に登校している現状では噂に当然その名前はない。結果的に噂の種類はより広範になり、真相からは遠ざかっている。

真相はいわゆる無気力症、即ち影人間である。倒れた三人はシャドウの『声』を聞いて影時間に落とされ、襲われたのだ。

ちなみに現時点の特別課外活動部は、シャドウは適性のない人間をどうやって襲っているのかを認識していない。『前回』それが発覚したのは明後日、件の女子生徒たちが『声』を聞いていたとの森山の証言からだ。だが影人間がシャドウの仕業である事は、既に美鶴を初め皆が認識している。

そもそもこの怪談調査を美鶴が黙認したのは、件の生徒は影人間になった事を初めから察していたからだろう。美鶴にすれば、シャドウが引き起こす問題をゆかりたちに調査を通じて実感してもらい、今後の戦いのモチベーションにしてもらいたい、とでも考えているのだろう。

だが特別課外活動部から離れて久しい荒垣が、真相を理解しているかは微妙である。たとえ理解していたところで、人の目が多すぎるこの場所では話さないだろう。

「俺はもう行くぜ。てめえらも帰れ」

荒垣は風花の脇を通り過ぎ、駅前の反対側へと去って行った。皆の誰も引き留めはしない。かくして怪談調査は終了である。真相には結局辿り着けなかった。

（「」苦労様）

一週間に渡って調査してきたゆかりと風花には残念な事であるが、義之としては荒垣と顔を繋ぐ事が目的だったのでこれで十分だ。状況が想定とはかなり異なったが、結果だけ見ればそれほど大きな問題は無い。順平は荒垣に一目置いたようだし、風花とも面通しをさせられた。荒垣のいいところを風花に見せられなかった事だけが残

念だが。

しかしそんな義之と違って、それでは収まらない人がいた。

「なあ、これって無駄骨って事？ ケンカまでして？」

今夜最も被害を受けた順平である。腫れが出始めた顔を、ゆかりに向けている。

「え、えと……元はと言えば、あんたが悪いんじゃない！」

「……」

順平は無言でゆかりを見つめている。珍しく冷たい目をして。

普段であれば順平は適当にボケて、ゆかりはそれにツツコミを入れるところである。二人のやり取りは、もはや日常と化した定番の漫才のようなものだが、今夜の騒動は笑い話ではない。流石の順平もここでボケはしない。

そして客観的に見れば、一番悪いのはゆかりである。だがこれをきっかけに、二人の仲が険悪になるのも良くない。そう思った義之はフォローを入れた。

「帰ったら怪我の手当をしてやれ」

「あ……うん。ごめんね……」

気性の激しいゆかりであるが、仲間を危険に晒しておいて自身の非を認めないほど子供ではない。ヤラれたのかと森山に言われた

事で、自身と風花がどういう類の危険にあったのかを正確に理解した事もあるう。

滅多に見られないゆかりのしおらしい風情に、順平はキラリと目を輝かせた。

「おお？ これってアレか？ ゆかりツチが白衣の天使でサービスって事か？」

「調子に乗んな！」

順平のボケに間髪入れず、ゆかりのツツコミが入った。切り替えの早い二人である。義之の顔にも、思わず微笑が浮かぶ。

「……」

そんな中でただ一人、風花だけは浮かない顔をしている。倒れた生徒たちについて、思うところがきつとあるのだらう。だが義之は、風花には敢えてフォローしなかった。

調査はこのままうやむやに終わる他にないし、終わって構わない。どうせ明後日のシャドウを倒せば件の生徒は回復するので、放っておいても噂は自然に収束する。シャドウの『声』に関する証言も、得られない事による弊害は特にない。

ただ風花と森山の仲だけは、自分でも少しは動いて取り持てやる必要があるかもしれない。だがそれは明後日が終わった後にやるべき事で、今の時点で風花にしてやれる事は何もないのだ。

迷い人（2009/6/8）

いよいよ満月の日が来た。少々の誤算はありつつも、計画は概ね順調に進んだ。『前回』より早く風花のサポート能力が加わり、美鶴も前線に復帰した。後は影時間に現れる大型シャドウを、総力を挙げて迎え撃つのみである。勝算は十分以上にある。

そのはずだったのだが――

目覚まし時計も眠ったままの朝の早い時間、義之の枕元で携帯電話が鳴った。番号は非通知だ。何だと思って電話を取ると、鈴が鳴るような美しい声が事務的な口調で語り出した。

「おはようございます。こちら、エリザベスでございます。タルタロスに迷い人がいらっしやいました。お早めの搜索をお願いします」

「は……？」

一瞬、何の事か分からなかった。朝に弱い体質である事もあるが、全く予想していない事を言われた為に理解が追いつかなかった。定期試験で学年トップを取る義之の頭脳も、意外性には十分な働きができない事もある。

もし日々を無計画にただ過ごしていれば、意外などそもそもあり得ない。だが計画を色々立てていけば、意外や想定外にどこかで必ず遭遇する。そして己の計画を万全と信じ、勝利を確信していた場合、虚を突かれると一瞬思考が停止したりする。

「また、迷い人は貴方のお知り合いのようです」

ここでようやく理解が及んだ。これは『前回』に何度もあった事である。影時間に適性のない人間がタルタロスに迷い込む、失踪者の発生を告げる連絡だ。交番の掲示板にも行方不明者として掲載されるが、連絡はいつもエリザベスの方が早い。

「ちょっと待て！ 満月は今日だぞ！」

思わず言葉を荒げてしまった。動揺している証拠だ。もっともこれが仲間やコミュニティの人々相手では、虚を突かれても内心の波立ちを声に出したりはしない。だがエリザベスが相手だと、こういう反応も何故か出てきてしまう。しかしそんな珍しい動揺に対しても、電話の向こうの相手は飽くまで事務的に答えた。

「ですから、お早めにと申し上げました」

「……」

言葉面だけだと、嫌味な言い方にも聞こえる。だがエリザベスに悪意があるわけではなからう。彼女は『前回』から色々と素っ頓狂な事はしてきたが、そこに自分を困らせる意図を感じた事はなかったから。今日になって電話してきたという事は、昨日の影時間に迷い込んだのだろう。

「前はこんな事はなかったぞ」

『前回』は何人もの失踪者を救助したが、救助可能な期間が満月当日しかないケースはなかった。だから満月のシャドウとの戦いと、搜索は常に別々の日に行えたのだ。この6月8日を除いて。

「運命とは決まっているようでいて、決まっていないものでしょ？」

ますから。それでは失礼致します」

そして通話は切れた。無機質な電子音を発し始めた携帯を耳元から離し、義之は頭を抱えた。

（参ったな……）

普通の影人間は満月のシャドウを倒せば回復する。月日が進むと回復しない者も出てくるが、この時期ならほぼ全員が回復するはずである。だがタルタロスに迷い込んだ失踪者は勝手が異なる。彼らを助けまいままでいると、満月後に影人間となって発見され、そして回復の見込みはほぼなくなってしまう。

シャドウとの戦いを優先して、失踪者を見捨てるという手も取れる。だがこのタイミングだ。しかもエリザベスによれば、自分の知り合いだと言う。誰が失踪したのか、嫌な予感がする。できれば当たっていて欲しくないが――

（取り敢えず、学校に行こう）

不安を抱えたまま、義之はベッドから抜け出て身支度を整えた。

この日、義之が在籍する二年F組では普段通りに時間が過ぎていった。教師は教科書を読み上げたり板書をしたり、生徒たちはそれを真面目に聞いていたり居眠りをしたりする、普段通りの授業である。ゆかりと順平も、そうした生徒たちの例に漏れない。

満月の夜に何が起こるのかは、月光館学園の一般の生徒や教員は

おろか、今の時点では特別課外活動部の面々すら知らない。今後1月まで死闘の連続となる、月に一度の忌まわしい周期を知っているのは義之だけである。

幾月は既に気付いているかもしれないが、この際それは関係ない。よって誰にとつても普段通りの授業風景がここにはある。普段と異なる様相を見せたのは、昼休み。

「坂本君、順平！　ちよつと来て！」

ゆかりが慌てた様子で教室に駆け込んで来た。義之と順平に向けて、急いで職員室に来いと言う。順平は何事かと怪訝な顔をしているが、問い質しはせずゆかりに続いて廊下へと出る。義之は朝から感じていた嫌な予感が確信へと変わるのを感じながら、順平の後に続いた。

職員室では、風花がE組担任の江古田に詰め寄っていた。風花は常になく必死な面持ちで、対する江古田はいかにも迷惑そうだ。そしてそんな二人を、美鶴が宥めている。

「あれ、桐条先輩も？　どうしたんすか」

順平の呼びかけに、美鶴は振り向いた。

「ああ、山岸に頼まれてな。先生に事情をお尋ねしているところだ」「事情と言ってもねえ……。森山は休んでいるだけだよ」

（やっぱり……）

順平とゆかりの後ろで二人の影に隠れるように立っていた義之は、誰にも見えない位置で密かに頭を抱えた。今朝のエリザベスの連絡と風花が血相を変えている事から、何があったのか言われる前から察しがついた。昨日の影時間にタルタロスに迷い込んだのは森山だ。

（何でだよ……）

「山岸、順序立てて説明してくれないか。森山に何があった？ いや……何があったと君は考えている？ 最近噂の、倒れた三人と何か関係があるのか？」

「私、倒れた人たちとは色々あって……」

美鶴が促すと、風花はいかにも話し辛そうに、言葉を選びながら訥々と説明を始めた。森山を初めとする何人かの生徒たちとの関係つまりはイジメの告白である。

「酷い……！ 何て事を！」

話が始まるとゆかりと順平は最初は驚き、やがて怒りを露わにしながら。美鶴は傍からは分かりにくい、奥歯を噛み締めているのか顎が僅かに動いている。これは相当に怒っている。そして江古田は苦虫を噛み潰している。ちなみに風花の事情を既に知っている義之は、表情をほとんど動かさない。

「十日前、体育館に閉じ込められて……」

話がここに及んだ時、義之は僅かに眉を動かした。義之は風花が体育館に閉じ込められ、それを出してやった事を誰にも言っていない。言う必要を感じなかったからだ、ここで風花の口からバラさ

れると面倒な事になりかねない。

だが――

「でも……鍵がちゃんとかかってなかったのか……出れたんだけど」

そんな義之の心配を知ってか知らずか、風花は適当な事を話した。イジメに遭った者は、その事実を隠したがる傾向がある。風花にすれば、そんな自身の気持ちを義之は慮って事情を知りつつ黙っていた、とでも考えているのかもしれない。

風花の告白は更に続く。そして義之も知らなかった事情が語られ始めた。

「昨日、森山さんに呼び出されたの……」

6月7日の日曜日の昼間、風花は森山に電話で呼び出され、ポートアイランド駅に一人でやって来た。ただし例の溜まり場ではもちろんなく、駅前の広場である。

「あんだ、昨夜何であんなトコに来たの」

「……」

「マキが倒れたの、知ってるでしょ。マキはあの日の夜、あんたを出しに学校に行ったのよ」

「！……そう、だったの……」

「マキはそれきり帰らなくて、次の日の朝に校門前で倒れてたわ。」

でもあんたは普通に登校してる……。あの夜、学校で何があったの！」

今から十日前、5月29日に風花は体育館に閉じ込められたが、すぐに義之によって出された。だが閉じ込めた当人たちはそれに気付かず、既にいない人の為に夜の学校に来てしまった。

そして学校で影時間を迎えた――

風花はこの時、怪談の真相に気付いたのだった。

「それで私、夜の学校に近付いちや駄目って……」

「そう言ったのか」

美鶴の確認に風花は頷いた。

もちろん風花は文字通りの意味でそう言ったのだろうが、森山はそうは受け取らなかった。倒れた友人を心配してか、或いは風花への意趣返しか、とにかく深夜に学校へ行った。そして学校がタルタロスに変貌するのを目の当たりにし、ちょうどシャドウの声を聞くなりした為に象徴化もせず、ふらふらと迷い込んでしまった。そんなところであろうと、義之は事情を推理した。

推理できた自分自身に対して、義之は再び頭を抱えた。一昨日の夜の溜まり場に森山が現れた事の意味を、もっと考えるべきだった。森山がいた事自体は偶然だとしても、明らかに場違いな風花がいる事を森山がどう受け取るか、それを考えなければいけなかったのだ。

更に言えば、5月31日にクラブで遭遇した事にも注意すべきだ

った。あの時、エリザベスは森山を見て何かに気付いた。今にして思えば、近いうちに失踪する事をエリザベスは分かっていたのだろう。適当に流したりせず、はっきり聞き出しておくべきだったのだ。それらをしないまま、今日という日を迎えてしまった。もっとよく考えれば、気付きそんな事であるのに。

（後の祭りって奴だ……）

そうやって義之が落胆している間、職員室では既に話が次へと移っていった。

「なるほど、事情は分かった。ところで先生。山岸が受けていたのは、明らかに……いわゆるイジメです。担任として、把握しておられなかったのですか？」

「い、いや……山岸は体が弱くてねえ……」

江古田は苦しい言い訳をした。当の本人を目の前にして言うセリフではない。

「確かにそのような噂はありますが、病院に問い合わせたところ、健康には全く問題ありません」

「……」

即座に反論された江古田は言葉を失った。額には汗が浮かんでいる。

「知っていましたね……。知ってて放置していましたか。ご自分の

クラスにイジメ問題などない、という事ですか」

美鶴は声色を低く落とし、ペルソナ能力そのままの冷氣漂う視線でもって江古田を射抜いた。もはや怒りを隠そうともしていない。ゆかりと順平も一緒になって、軽蔑の眼差しを江古田に向けている。遠巻きに見ていた教職員からも、冷たい視線が届けられてくる。中にはざまあみろ、と言わんばかりの楽しそうな視線も見受けられる。

美鶴がこの学校の母体である桐条グループの令嬢である事を、知らない者はいない。その怒りを買えばどうなるか。それはもう推して知るべし、というものである。

「この……下衆め！」

「そ、そんな風に言わなくなつて……」

『前回』と同じ下衆認定で締められた。この分では、江古田は『今回』も処分を食らわされるだろう。

（何でこうなるんだ……？）

美鶴と江古田の会話の成り行きに、義之は居たたまれない気持ちになった。とは言つても、別に江古田に同情しているのではない。

事態が『前回』と同じ状況に近付いている事が、嫌な気分を与えてくるのだ。いかなる経過を辿ろうと、必ず『前回』と同じ結果になるように事態を誘導する、運命的な強制力の存在を想起させる。それは即ち、努力が無に帰してしまうという事だ。

何をやっても結果は変わらない。全ては無駄に終わる。

まさにギリシャ神話のシーシュポスのように――

そうした徒労感は、義之の本来の性格を呼び起こす。どうでもいい、と全てを投げ出してしまいたくなる。だが江古田を一刀の下に切り捨てて、こちらを振り返ってきた美鶴の次の言葉で、義之は我に返った。

「皆、今日は寮に戻ったら作戦室に集合だ。今後の対策を考えるぞ」

（作戦室？）

『前回』はこの日の放課後、生徒会室に集合して皆で話し合ったはずである。そんな一見すると些細な違いを元に、義之の思考は動き出した。生徒会室で作戦会議を開いた、その意味は何であったか。

『前回』は生徒会室で夜の学校潜入が決定した。つまり下校する前に作戦の方針が決まった。だから昼間のうちに校舎の扉を一つ開けておく仕込みを、順平は入れる事ができたのだ。それによって、折悪く幾月が捕まらなかった今晚に首尾よく夜の学校に入れたのだ。そうでなければ、爆薬でも使う羽目に陥っていたかもしれない。では『今回』はどうか？

（運命は決まっているようで、決まっていらない……か）

もし完全に決まっているのなら、十日前に風花を体育館から出す事もできなかったはずだ。強制力なるものが存在するのかしないのか、それは分からない。だが存在すると認めてしまったら、何もできない。この状況を少しでも改善する為に行動する余地は、まだ残っているはずである。

義之は投げ遣りな方向に沈んでいこうとする自身の心を、無理矢理に引っ張り上げた。落ち込んでいても仕方がない。昼の時間に状況がどう動こうとも、今日の影時間には大型シャドウと戦わねばならないのだ。無気力症に陥っている暇はない。

（まずは確認だな）

今から影時間までの間にできる事を、義之は考え出した。

迷い人（2009/6/8）（後書き）

今更ですが、主人公の名前の由来について少し解説します。

第2話のタイトルで、この話でもちよつと触れている『シーシュポスの神話』です。

シーシュポスとはギリシャ神話の登場人物で、タルタロス（！）にある山の麓から岩を運び上げては、頂上まで辿り着くと岩は転げ落ちてしまい、また運び上げる苦行を永遠に繰り返すと言う神話です。

この『麓』からやり直しという点から、『坂本』という名字にしました。

ちなみに下の名前には、特に由来はありません。名字に合わせて普通っぽくしようと思って命名しました。シーシュポスについてエッセイを書いているフランスの作家アルベール・カミュの名前をもじって付けられないかとも思いましたが、日本人らしい名前が思い浮かばなかったもので……

勇気の証し（2009/6/8）

夕方の時間、義之は寮に戻って来た。ガチャガチャと金属がこすれ合う音を発する、大きな袋を肩に担いでいる。二階の自室には戻らず、その足で四階の作戦室に向かった。昼休みに言われた通り、森山に関して皆で話し合う為である。

扉を開けると、既に寮生は全員揃っていた。見たところ、話もある程度進んでいた模様である。

「遅いぞ」

真田が苛立った声をかけてきた。実際、言われていた集合時間は過ぎている。

「済みません。ちょっとポロニアンモールに寄ってたもので」

「黒沢さんの所か？」

「ええ」

これは一応本当である。ポロニアンモールの辰巳東交番に顔を出して、黒沢巡査から剣やらナックルやらの武器をいくつか購入してきた。これ見よがしに担いできた大袋には、それらを放り込んでいたのである。だが交番に行ったのは一種のアリバイで、実はベルベツトルームに行く事が主目的だった。しかしそうは言わずに席に着いた。

義之はベルベツトルームの存在を『前回』は最後まで皆に話さな

かったし、『今回』も話すつもりはない。話す必要を感じないからだ。『契約』をしていない皆が知ったところで、何のメリットもない。そもそも皆はあの部屋の扉すら見えないのだから、存在を証明する術がない。

（そう、だから話さないだけだ……）

決してエリザベスを皆に紹介したくないからとか、そんな理由ではない。ましてゆかりや風花や美鶴、更にはアイギスがエリザベスと修羅場を演じるのを避けたいとか、それに自分が巻き込まれるのだけは何が何でも回避したいとか、そんな理由では断じてない。多分。

思考が脱線した。気を取り直して作戦会議に意識を戻すと、ちょうど森山はタルタロスに迷い込んだと結論づいたところだった。

「単にシャドウに襲われたただけなら、他の生徒と同じように意識不明で発見されるはずだ。それが無いという事は、今でもタルタロスにいる可能性が高い」

これは美鶴の発言だ。やはり美鶴は倒れた生徒たちはシャドウに襲われて影人間になった事を、初めから分かっていた。そしてシャドウに襲われた事で肉体的に死ぬ人間はほとんどいない。その辺りの事から、美鶴は森山が『失踪』したと結論付けた。そしてそれは正解である。

「え……それじゃあ、森山さんは一晩中……じゃなくて、丸一日タルタロスにいるって事ですか!？」

「いや、丸一日とは少し違う」

ゆかりの疑問に美鶴は説明を続けた。タルタロスは影時間の間には現れない。ならば昼間の時間にタルタロスはどこにあるかと言うと、『存在しない』のだ。よってタルタロスに入った人間にとつて、通常の二十四時間は存在しない。タルタロスに入ったまま影時間が過ぎると、当人は次の影時間まで時間移動してしまう。

「つまり森山にとっては、影時間一日分しか時間が経過していないことになる」

なるほどと、ゆかりは頷いた。しかし今度は順平が口を挟んだ。

「けどタルタロスって、慣れてる俺らでも苦勞するじゃないですか。一般人だったら、五分も持ちやしないんじゃない……」

「だったらこのまま見殺しにするのか！」

救出を渋るような順平の物言いに、初めから苛立っていた感のあった真田は激して作戦室のテーブルを叩いた。高級そうなテーブルに、ひびが入りそうなくらいの力が込められている。

（おや、この辺は前と同じか）

義之は意識の向ける先を会議そのものから、真田へ移した。普段は冷静な真田の激昂。これは『前回』にもあった事だ。その時は真田の常ならぬ剣幕に少々驚いただけだったが、『今回』はそれに留めるわけにはいかない。

予期せぬ事だったが、先月に真田との間に星のコミュニティが発生してしまった。これを円滑に進める為には、真田の内面により近

付く必要がある。

『前回』の経験から判断した真田の性格は、スティックで目的意識が強く、良くも悪くも単純明快な男、である。だが現時点では目的が曖昧で、文字通りの単純なスティックさだけが目につく。それは即ち、戦いをトレーニングの一環として考える事であり、言い方を変えればトレーニングの為にトレーニングをする、という事である。

そんな調子だから、7月にゆかりが十年前の事故の件で美鶴を詰問した際、八つ当たり気味に真田も責められた。理由もなく戦っているのかと。対する真田は言葉を濁したが、あれは凶星だったと義之は見ている。10月には荒垣の死に報いる為という目的、もしくは気持ちの捌り所を得たが、今の時点では無目的に戦っているとは思えない。

だが義之はそんな真田を、悪く思っていない。そもそも真田は影時間とタルタロスの発生に何の責任もないのだから、戦う理由などなくて当然だ。それでも戦ってくれる事は、勇敢と称賛されこそすれ非難される謂れはない、と義之は考える。

だが『前回』は真田と大して深い付き合いをしたわけではない。自分が未だ知らない、真田なりに心中期するものが今の時点でもあるのかもしれない。

『前回』の状況では貴重な戦力になり得る風花を惜しんで、と解釈する事もできたが、適性のない森山の救出にまでこだわる今の様子を見れば、そうした功利的な考えの元に真田は激しているのではない。タルタロスに迷い込んだ人間を救いたいと、本気で考えている。

それは何故か――

（正義感ってわけじゃないな。これだけ感情的になるのは、何か個人的な事情がある……）

義之は真田の性格について、『前回』に感じたほど単純なものではないと認識を改める事にした。そしてそんな事を考えている間にも、真田は更に加熱していく。

「お前たちが行かないなら、俺は一人でも行くぞ！」

「真田先輩……」

そんな真田を、風花は感謝の思いを込めて見上げている。良く見れば、ちよつと目元が潤んでいる。こうなると、作戦会議の流れは決まったも同然である。

（結局こうなるのか……）

十日前から続けてきた陰謀が失敗に終わった事を悟り、義之は内心でため息を吐いた。だがやむを得ない。風花の気持ちを考えれば、森山を見捨てる選択肢は初めからない。自分とて森山を影人間にしては、荒垣や桐条武治の死に対して感じたような後悔をきつと抱く。

義之は気持ちを切り替え、昼休みから検討を続けてきた今夜の方針を改めて考えた。

（前に比べれば、この状況はいくらかマシだ）

作戦会議に遅刻するのを承知でベルベツトルームに立ち寄ったの

は、森山の居場所を確認する為だ。その結果は、ある意味で想定通りだった。

エリザベスによれば、森山はこれまで特別課外活動部が既に探索してきた階層に在るとの事だった。『前回』の風花はそれより上の階層に迷い込んでいたが、それは体育館から直接行ったからだろう。普通に迷い込めば、自分たちが行ける場所にいる。『前回』助けた何人もの失踪者は誰もがそうだった。故に想定通りなのだ。

ただよくよく考えれば、少々おかしい話である。あれだけ高いタルタロスで、どうして失踪者はいつも都合よく自分たちが辿り着ける場所に迷い込むのか。あまり考えたくないが、実のところは失踪者はもつと大勢いるのだろう。影人間の数を思えば、その方が自然だ。

そしてエリザベスが連絡してくるのは、普通に救助が可能な失踪者のみ。そしてそれは、彼女なりに気を遣っているから。『前回』の風花が失踪した際にエリザベスが何も言って来なかったのも、当時の自分たちが普通に救助できる場所にいなかったからなのだろう。

だがこの際、それはどうでもいい。とにかく森山は自分たちが普通に行ける階にいる。この偶然もしくは都合の良さを、今夜の作戦に利用させてもらうのみだ。

即ち、今夜は体育館からタルタロスに侵入する必要はない。よって捜索組がバラバラになって合流に時間を取られる事もない。そして捜索組にも風花の通信が届くので、効率の良い捜索が可能になる。

（問題はメンバー編成だ）

義之が一人で別の事を考えている間にも、作戦会議は進んでいく。

「そつだな……。このまま放置するわけにはいかん。今夜タルタロスに行つて、森山を救出する。坂本、いいな？」

最後に部長の美鶴の決定により、今夜の出撃が決まった。

「分かりました。救出に行くのは真田先輩と順平と……岳羽。三人で頼む」

「お前は行かないのか？」

順平が口を挟んだ。確かに現場リーダーの義之が搜索しないのは不自然だ。だが義之の考えでは、今日は自分がタルタロスを登るわけにはいかない。

今日出てくる大型シャドウ、エンプレスとエンペラーは耐性を変化させる特殊能力を持っている。だが変化さえ見切れれば、意外と容易い相手である。だがそれを事前に皆に教える事はできない。そして見切れないと、この上なく手強くなる。

風花がいれば耐性は分析可能だが、ある程度の時間を要する。実戦は先手必勝が基本だ。そしてエンプレスとエンペラーの耐性変化のパターンも義之は覚えている。

理想はシャドウが出現したら風花の分析を待たずに即座に弱点を突き、立ち直る暇を与えずに一方的に倒す事だ。逆に一度でも後手に回ると、戦いは非常に苦しくなる。従つて、義之はエントランスでシャドウを待ち構えるのが最善だ。

それを皆に納得させるには――

（本当は今日の戦いが終わった後で、さりげなく言うつもりだったんだが……。やむを得ないな）

義之はここでカードを一枚切る決断を下した。

「今日は満月だ」

「それがどうしたってんだよ」

義之は推論に過ぎないがと前置きした上で、怪訝な顔をする皆に説明した。モノレールで戦ったのは5月9日、寮が襲われたのは4月9日。いずれも満月だという事を。

「そうか！ 月はシャドウに影響を与えるんだっただな！」

皆の中で、真田が最初に得心した。『前回』も満月の周期に最初に気付いたのは真田だった。月齢が人間の心理やシャドウの能力に関係する事は、これまでの桐条グループの研究で分かっている。それを知っていればこそ、些細なきっかけから思い至ったのだろう。だから『今回』も割と簡単に納得した。

「むう……言われてみれば、確かにそうだ。あの時のような大物が、今日も現れるというのか……。今の時点では可能性に過ぎないが、偶然と言い切る事もできないな。山岸はエントランスに残らざるを得ない以上、護衛にいつもより人数を割く必要があるという事か」

美鶴は美鶴なりに、可能性の段階であるとしながらも思考を進めている。義之はそこへ一言添える事で、美鶴を誘導した。

「かと言って、搜索を少数でやるわけにもいきません。むしろ迅速に見つける為には、搜索組にこそ多くの人数が必要です」

「だから搜索は三人でやり、万能型の君とシャドウの探知が可能な私がエントランスに残るか。なるほど、その編成が最善かもしれないな」

「搜索の指揮は真田先輩をお願いします。戦闘はできるだけ避けて、森山を見つけたらすぐに帰還してください」

「分かった」

かくして上級生二人を誘導するのは成功した。未来の知識は情報源を明かせないだけに信用させるのが難しいが、今日に関しては簡単なものだった。

だが――

「義之……大物のシャドウって、モノレールで戦った、ああいうのだろ？ 二人で大丈夫なのか？ 俺も残った方がいいんじゃないの？」

順平が意見を言ってきた。思い返してみれば、『前回』の順平は5月のモノレール戦にて一人で先走った汚名返上の為、体育館からのタルタロス侵入に志願した。それと同じように、実績を求めている事だろうか。確かに森山の救出より、大型シャドウの討伐の方が手柄としてはずっと大きい。

「何だ、坂本が信用できないか？ それとも私がか？」

「いや、信用はしてますよ。ただ……心配なんですって」

（ん……心配？）

義之は順平の発言に引つ掛かるものを感じた。『前回』の順平はリーダーを務める義之に嫉妬して、一時期は色々と突っかかってきたりした。だが今のように、心配をされた事はない。この言動の変化は何故であろうか。

（魔術師のコミュの影響か？）

それはあり得る話である。しかし美鶴はそうした義之の推測とは、少しずれた方面へ向かっていた。

「後輩に心配されるとはな……。私も焼きが回ったか」

美鶴は微笑んでいるが、どこか含みのある笑みである。

「順平、美鶴を怒らせると後が怖いぞ」

「あ、そんなつもりじゃ……。お見それしやした、先輩！　どうかご勘弁ください！」

珍しい真田の冗談に順平は慌てた素振りを見せ、大仰に頭を下げた。その様はいつもの順平だが、義之はまだ引つ掛かった。

（本当に心配しているのなら……）

真田と美鶴は5月の満月の現場を見ていない。普段のタルタロスに出没するシャドウを大きく上回る満月の恐ろしさは、実際に経験しないと分からない。経験済みの順平ならば、上級生二人よりも満

月のシャドウを深刻に考える事もあり得るだろう。

（だがまあ、仕方ない。森山の救出だって、真田とゆかりだけに任せるわけにはいかない）

二人だけでタルタロスを探索するのは非常に危険だ。無論エントランスに待機する組も相当に危険だが、『前回』を知る義之がいれば、二人でも何とかなる。粘っているだけでも、そのうち搜索組が戻ってくるのだから勝算は十分ある。そう判断しての編成なのだ。

「大物が出ると決まったわけじゃない。可能性の段階で、三人も待機させるわけにはいかん」

最後に美鶴がそう締めて、今夜の編成が決まった。結果的に、昼休み以降に義之が考えた通りのものとなった。

「じゃあ、行ってくるぞ」

「お願いします」

真田、順平、ゆかりの三人はエントランスの転送装置を使用して、タルタロスの第二層へと向かっていった。どの階から搜索を開始するかは、義之が既に指示を与えている。ただしその根拠については、まず手始めにここから、として曖昧にぼかしておいた。情報源はエリザベスなのだが、未来の知識と同じでそれを皆に明かす事はできない。

その一方で、美鶴はバイクに積み込まれた通信機材を調整してい

た。

「よし、セッティングが完了した。これから外の探査を開始する」

風花の加入以降は持つて来なくなった特製バイクを、今日は持つてきていた。風花が来る前はタルタロスの上層フロアへと探査機能に向けていたが、今日はエントランスから外へ向けている。

「さて……鬼が出るか蛇が出るか」

「何も出ないといいんですけど」

「ふっ……全くだな」

一見すると軽い口調の義之と美鶴の会話はここまでで、それからしばらく二人は無言でエントランスの出口を見つめていた。風花はルキアを召喚し、捜索組に何か指示を与えている。

敵が来るのをただ待っているだけと言うのは、手持無沙汰なものだ。普通なら余計な緊張感が湧き上がって来て、歩き回ったり手足をぶらつかせたりするものである。

「……」

だが義之は両手をズボンのポケットに入れただけで、無言のまま眉一つ動かさない。心臓の鼓動さえ、普段通りに抑えていられる。外向きに完璧な落ち着きを装えるばかりか、内面でもかなりの深層まで冷静さを浸透させる事ができる。仮面は他人に対して付けるだけではなく、自分自身に対しても付けられるのだ。

そうやって待っているうちに、美鶴の探査に反応が出た。

「来た！ 何……馬鹿な、二体だと！？」

美鶴は目を剥いた。大型シャドウが来る事自体は美鶴も半ば以上の割合で予期していただろうが、その数までは想定外だったようだ。義之もそこまでは教えられなかったから、当然かもしれないが。

「場所は？」

一応聞いてみたが、その必要はなかった。言い終えると同時に、床が揺れるほどの振動が周囲に走った。

「すぐそこだ！」

美鶴が目で示した先、普通の時間は校門だった場所からエントランスへと近づいてくる、全長が十メートルに達するほどの巨体がある。数は二つ。一体は頂点が上を向いた三角錐を連想させる体型で、手に杖を持っている。もう一体は相方とは逆に頂点が下を向いていて、得物は長大な剣だ。恐るべき怪物でありながら、何やらトイレに良くある男女の標識を連想させる、戯画的な姿のシャドウである。

タロットの解釈ではそれぞれ母性と父性を象徴する存在でもある、エンプレスとエンペラーだ。

「坂本君……！」

風花が声をかけてきた。二手に別れた仲間のどちらを支援すべきか、迷っているようだ。

「山岸は引き続き、搜索組を支援しろ」

「で、でも……！」

「こっちは俺が何とかする」

義之は自分でも感心するほど、普段通りの声を出せた。昼間の間は落ち込んだり考えを巡らせたりと心と頭を忙しくしていたが、いざ本番となるとこうして冷静さを保ってられる。我ながら切り替えが得意と言うか、仮面が強固と言うか。この分では死ぬ瞬間においてさえ、涼しい顔をしていられるかもしれない。

その是非は別として、実戦の現場においてはこうした振る舞いは有効である。リーダーが落ち着いていれば、不安がる者たちを安心させる事もできる。

「私を忘れるなよ」

美鶴は探査用の機材から手を離し、細身の突剣を構えて不敵に言う。飽くまで平静を装う義之に吊られたか、初めて直接対峙する大型シャドウの偉容を前にしても、少なくとも外向きには動揺を抑えている。

「では、行きましょう！」

義之は意識的に大声を出し、片手剣を中段に構えた。昨日までの計画とは全く違う状況下で戦う事になってしまったが、もはややむを得ない。

二体のシャドウがエントランスに現れてから、時間にして二分が三分は経過した頃、義之と美鶴は二人だけでまだ戦っていた。

「ペンテシレア！」

義之の指示の下、美鶴はペルソナを召喚して何度目かの魔法を放つ。受けたシャドウは体勢を崩すが、黒い煙となって消滅はしない。未だ健在である。そんな中、義之は時々エントランスの隅にある転送装置に目を送るが、動く気配はない。

（誤算だ。搜索に時間がかかりすぎてる……）

義之は重大な問題を失念していた。森山に影時間の適性がない事だ。『前回』は真田と順平と合流後には、意外と早く風花を見つける事ができた。だがあれは見つけたと言うより、こちらが人間である事に気付いた風花から接触してきたと言った方が正しい状況だった。

言うまでもなく、森山にそんな事はできない。普通の失踪者と同様に、立ち上がる事もできない状態になっているだろう。結果的にサポートがあってもなお『前回』より搜索に時間がかかってしまっている。

そしてそれ以上に問題なのは――

（手数が足りない……！）

エンプレスとエンペラーの弱点はこれまでの確に突けている。だが体勢を崩したところで畳み掛けるには、二人だけでは不十分だ。一気に倒し切る事ができない。最初は冷静だった『愚者』の内心に、少しずつ焦りが生まれてくる。

（順平が正しかったか！）

待機組が三人ならば、今頃には倒せていたはずだ。そして逆に、搜索組は三人もいらなかった。元々搜索中は極力戦闘を避けさせるつもりだったし、風花のサポートがあればそれは十分可能だ。散開すれば人数の多さを有効に使えるが、今日の状況でそれをやるのは無謀なだけだ。従って、搜索組は二人でも三人でも大差はなかった。完全な編成ミスだ。

「坂本、男型が行ったぞ！」

悔やんでいる間に敵の接近をすっかり許してしまい、義之は反射的に剣を突き出した。だが手応えがおかしい。水を斬ったように抵抗がない。

（しまった！）

ミスというものは、得てして連鎖する。エンペラーは二度の耐性変化を経ると、剣などの攻撃は無効化してしまう。それは知っているにも関わらず、誤って剣で斬りつけてしまった。

接近したエンペラーが剣を振りかざしてきた。ビルの鉄骨のような長さで厚みのある剣が、緑の空気を薙ぎ払う轟音と共に振り下ろされた。無駄な攻撃を仕掛けたせいで、よける隙はない。受け止めるのが精一杯だ。

「ぐっ……」

ペルソナ使いとシャドウの戦いでは、体重や武器のサイズはほと

んど関係ない。もし何トンもの重量がある鉄の塊を現実叩きつけられれば、人間の体など一溜りもない。原型も留めずに潰されてしまっただろう。だがシャドウの攻撃であれば、何故かペルソナ使いはそれなりに耐えられる。不思議な事だが。

しかし『今回』のシャドウは強い。『前回』であればエンペラーの剣を三、四発くらい連打されても耐えられたかもしれないが、この破壊力は『前回』の比ではない。現実に鉄骨が倒れ込んできたのかと思わせるほどの、とてつもなく重い一撃だった。自分自身に対して付けた仮面ごと叩き割られそうな衝撃に、義之は膝を付いた。

「坂本！」

美鶴がこちらに駆け寄ってきた。だが何故か不自然に、左右に体を揺さぶっているように見えた。それは美鶴ではなく自分の視界が揺れているのだと気付くのに、数秒かった。

（これは……マジでヤバイ。あれを出すべきか……？）

風邪を引いて高熱を出した時のように、頭の芯がグラグラしている。そのせいか、エンプレスとエンペラーの耐性は今どうなっているのか、記憶から咄嗟に出てこない。完全に後手に回ってしまった。今から風花に分析を指示しても間に合うまい。この戦況を立て直す方法は、もはや一つしか思いつかない。

（やりたくはない。ないが……）

最後の切り札、タナトスだ。あのペルソナを使えば、敵の耐性を無視できる万能魔法の一撃で、二体とも吹き飛ばせるだろう。だが『前回』扱った全てのペルソナの中でも屈指の能力を持つタナトス

を制御するのは、今の自分では絶対に不可能だ。4月の時と同様に暴走する事は間違いない。

しかも召喚したら、また十日くらい寝込んでしまいかもしれない。下手をするとそれに留まらず、自分の命さえ手放してしまいかもしれない。だがやらなければ、負けて死ぬだけだ。

義之は目を閉じた。瞼を下ろすその動き一つで逡巡を叩き潰し、己の死を覚悟するのに似た決断を下した。

（やるしかない！）

だがやるにしても、タイミングが問題になる。いきなり召喚しては、近くにいる美鶴と風花を巻き込んでしまう。まずは二人をエントランスから逃がさなければならぬ。

そう思っ閉じた目を開けると――

「山岸を連れて逃げろ！ 死ぬのは私だけでいい！」

美鶴がこちらに背を向けて、目の前に立ちはだかっていた。巨大な足音を立てて迫ってくるエンプレスとエンペラーから、両手を広げて義之を庇おうとしている。

（馬鹿……！）

先週に美鶴が前線に復帰した時に感じた不安があった。責任感が過剰な美鶴が、自ら死地に飛び込んでいくのではと。これまでの様子を見て大丈夫そうだと思っていたが、観察が足りなかった。このギリギリの局面において、こんな事を言い出すとは。見方によっては美しい行動だが、実際には的外れだ。

十年前の事故から近い将来の世界の終わりにまで至る一連の事態の責任は、誰よりも義之にこそある。美鶴はおるか、桐条鴻悦や岳羽詠一朗よりも大きな『責任』を負っているのは、己である――

これは理屈としては間違っているし、自分でも分かっている。だがこれは一種の信念だ。『契約』がそれを裏付けている。

「それは俺のセリフだ！」

敬語を使う事すら忘れて、内心のままに言葉を発してしまった。流石の『愚者』も、事ここに至っては仮面を気にしている場合ではなくなつた。無理矢理に立ち上がって、美鶴を横手へ突き飛ばした。

「坂本……！」

「さつさと逃げろ！」

既に二体の大型シャドウは目前まで迫り、長大な武器を上段に構えている。あれが振り下ろされれば、全滅は免れない。もはや一秒も無駄にできない。ペルソナが住まう心の海の更に奥、死の化身が眠る無意識の海溝へと語りかけた。

（出番だぞ、ファルロス……！）

敵ではなく己の内面を見据えながら、召喚器をこめかみに当てた。だが引き金にかけた指に力を入れる直前、局面が急展開した。

「美鶴！」

「義之！」

エントランスの隅にある転送装置が光を発し、真田と順平が現れた。突然の増援の登場に、二体のシャドウはそちらへと仮面の顔を向けた。

「間に合った……！ 右は真田先輩、左は魔法で順平君！ 急いでください！」

すかさず風花が指示を出した。指示の内容が具体的なところを見ると、既に分析を済ませていたようだった。

「分かった！」

「任せろ！ ヘルメス！」

真田がエンペラーへと突進し、両の拳を叩き込んだ。そして順平はペルソナを召喚し、炎の弾丸をエンプレスへと放つ。それらはいずれも、シャドウの芯まで響く衝撃を与えたようだった。体勢が大きく崩れた。

大半のシャドウやペルソナは、各々が何かの弱点を抱えている。そしてそれを突かれると、威力の大小に関わらず怯んだり転んだりする。たとえ弱点を突いた一撃で沈める事ができなくても、連続して畳み掛ける好機を得られる。そして畳み掛ける際には、人数が多ければ多いほど良い。

真田と順平の加勢で好機を見出した義之は、召喚器を頭から離れた。そして僅かな余力を振り絞って、剣を構えた。

「全員、突撃！」

「行くぞ！」

「おおらあ！ やっちまえ！」

真田と順平が応じ、更なる攻撃を仕掛けていく。そして美鶴と義之も加わり、砂埃が立ち上るほどの猛攻となった。

「終わったの……？」

四人がかりの総攻撃でシャドウが消滅した直後、転送装置からゆかりが現れた。ただし一人ではなく、私服姿の少女に肩を貸している。森山だ。

「ゆかりちゃん……！」

風花は二人の姿を見るやペルソナを消し、二人の下へ駆け寄った。

「お疲れ、風花。森山さん、見つけて来たよ」

「森山さん……ごめん。ごめんね……」

「風、花……」

森山は目を開けてはいるが、意識が朦朧としているようである。そんな森山の頭を風花は胸の中で抱きしめて、何度も繰り返し謝っている。

『前回』と状況が異なる為に、謝る側が逆転している。だが結果だけ見れば、これで良かったのかもしれない。『前回』同様に森山から影時間に関する記憶は失われるだろうが、きっと二人の仲は良好になるだろうと思われた。

「手分けしてたんですか？」

義之は風花と森山の様子を確認してから、真田に尋ねた。後になつてから、ゆかりが現れた理由を聞いてみたのだ。

「いや、固まって探していたんだが、その最中に山岸からお前たちが危ないと連絡を受けてな。帰還を優先して脱出ポイントを探していたら、その少し先に森山がいるのを見つけたんだ。一秒を争う状況だったからな。確保は岳羽に任せて、俺と順平だけ先に戻って来たのさ」

真田はそう言って笑った。ちょっと得意そうな、爽やかな表情だ。

「なるほど……。正しい判断でした」

リーダーのやらかした編成ミスを、メンバーが好判断で償ってくれたわけである。情けない限りである。そう思うと、膝から力が抜けた。

今日の戦いではエンペラーの一撃しか受けていないが、それでも立っているのが辛いくらいの疲労感が既に体に出てきている。床に倒れこむ寸前で、横合いから伸びてきた手に腕を掴まれて支えられた。

「あ、悪いな……」

支えてきたのは順平だった。だがその顔を見ると、礼の言葉が途中で切れてしまった。笑顔の真田とは対照的に、順平は眉根を寄せた本気の顔をしていた。

「カッコつけてんじゃねえや……。ヤバけりや逃げろよ。勇氣出しても、死んだら何にもなんねえぜ」

勇氣――

順平は普段より低い声色で、怒ったように言う。いや、これは怒りと言うより、叱っていると言った方が正しいかもしれない。

（あ、そういう事……）

夕方の作戦室で引つ掛かった、順平の豹変の理由が分かった。先週に長鳴神社で話した、勇氣がどうこうという奴だ。あれは大嘘吐きの自分にしては珍しく、本音を語ったものだった。言った直後は失敗したかと思っただが、実はこんな具体的な形で順平に影響を与えていた。してみると、一昨日に溜まり場で不良相手に抵抗したのも、あの話のせいだったのかもしれない。

「あんま無理すんじゃねえぞ。俺の助けがいつも間に合うとは限んねえんだからな」

「ああ……」

義之は順平から目を逸らして頂垂れた。死を覚悟するような気持ちでタナトスを召喚しようとした事が、馬鹿みたいに思えてくる。義之を庇って死のうとした美鶴よりも、なお愚かな行動だった。真田と順平が戻って来ないのであれば、あの場は一旦退却するのが最

善だった。可能かどうかは別として、まずはそれを考えるべきだった。

（お前の言う通りだ。でもな、俺は勇気があるから戦ってるわけじゃないんだよ）

自分はシャドウから逃げる事はできない。だから戦う。即ち自分の戦いは、強制されているに等しい。逃げられるのに逃げない順平の方が、自分より勇敢だ。
と思っっていたら――

「あれ？ 俺って今、ゲームでありそうなセリフ言っちゃった？
うわあ、カッコいいなあ俺！」

順平は急にいつもの顔に戻った。歯を見せて笑いながら、照れたように頭を掻いている。せっかくの男前が台無しになってしまった。

「もったいない奴……」

思わず本音が声に出た。順平に関して、二度目の本音だった。

勇気の証し（2009/6/8）（後書き）

いかにして主人公の裏を搔くか。作者はそんな事ばかり考えていた、6月の満月でした。

上手くハメられましたかね？

月1(2009/6/9)

タルタロスのエントランスで二体の大型シャドウと戦った翌日の放課後、義之はコミュニケーションの活動をせず、一人でポロニアンモールまで来た。とは言え、地の性格である無気力症に陥っているわけではない。単に昨日の疲れが抜けきらないのと、今日リニューアルオープンした骨董屋、眞宵堂への顔見せの為である。

どこからか刃物や銃器を仕入れてくる辰巳東交番の黒沢巡查も謎の人物だが、眞宵堂の女主人はそれに輪をかけて謎めいている。色々と思議な効果のある道具類の取り扱いに始まり、エリザベスにも感心されるセンスの土偶を置いていたり、果てはペルソナを元に武器を作ったりする。

かの女主人は、昔は桐条グループの研究者であつたらしい。どうしてそこを辞めたのか、また辞めた後でも自分たちペルソナ使いにどうして協力するのか、能力ばかりか行動も謎の多い人である。『前回』は余り詳しい事は聞かなかったが、機会があつたら色々尋ねてみるのも良いかもしれない。そう思っていたので、リニューアル当日に挨拶に来たわけである。

ちなみに眞宵堂はポロニアンモールの奥、黒沢巡查のいる交番からベルベートルームに通じる裏路地を挟んだ反対側にある。CDシヨップやカラオケ店など、まともな店もそれなりにあるこのモールで、謎の三つの施設は固まって配置されているところなど、何か奇妙な縁を感じてしまう。エリザベスに言わせれば、噴水同様の三位一体であろうか。

そうして店の前までやってくると、店の隣の裏路地の奥が何やら

騒がしい事に気が付いた。若い男の声が何種類か重なっており、その中には悲鳴も混じっている。ふと覗いてみると、意外な姿を見つけた。

（あれは……末光！？）

「え、エマージェンシー！」

小太りの体と、英単語を口走る怪しい言動。遠目に見ただけでもそれと分かる、あからさまな特徴を備えた人物である。どうやっても間違えようがない。『前回』月のコミュニティを担ったグルメキング、末光望実だ。

裏路地の奥で、末光は柄の悪い二人の若い男に殴られては悲鳴を上げている。そしてその手前では、苦い顔の中年の男性が腕組みをして立っていた。見覚えのある出来事である。この男性は息子の教育費をカルトの入会金として末光に騙し取られ、度々返却を要求していたが話にならず、遂には実力行使に出たのである。

ちなみに末光が所属しているカルトは、後にストレガが立ち上げるニユクスの来訪を待ち望む集団とは全く別物である。どちらも終末思想を中心に据えているが、末光のそれは終末をダシに信者から金を巻き上げるだけの、俗な団体である。

（けど何で今？ 俺はまだ末光と話した事もないのに……）

取り敢えず助けに入ろうと眞宵堂の出入口前から離れると、交番の側から一人の男が現れた。夏の始めのこの時期にロングコートとニット帽を身に付けた厚着姿で、大股で裏路地へと入って行く。

「その辺にしておいたらどうだ？」

厚着の男、もちろん荒垣は、中年の男性にそう声をかけた。先日の溜まり場でもそうだったが、荒垣は揉め事や厄介事がある度に、どこからともなく現れる。そういう星の下に産まれているのかもしれない。

「チ、チミは！ はぐれのフレンド！」

腫れあがった末光の顔に喜色が差した。どうやらこの二人には、ラーメン屋絡みの縁があるようだ。

「知り合いなのかね？」

「別に……それよりあんた、訳ありなんだろうが、近くに交番もあるんだ。事件にならないうちに引き上げた方がいいぜ」

この言い方はなかなか上手い、と裏路地の入口付近で様子を見ていた義之は少し感心した。実際、すぐそこに交番があるこの場所は、例の溜まり場と違って暴行には相応しくない。

「ふん……末光君、もう金はいい。二度とうちの息子に近付くな」

そう言っただけで男性は苦い顔を更に苦くして、踵を返して立ち去った。元々堅気の人なのだろう。そして明らかに堅気でない二人の男も、荒垣を一瞥して立ち去って行った。三人とも義之には目もくれなかった。

そして末光と言えば、殴られて痛いのと助けられた感動とで、半泣きの顔をしていた。荒垣に抱き着かんばかりである。

「あ、ありがとう！　チ、チミ！　チミをグルメSPに任命する！」
「いらねえから、もう帰れ」

これは確か『前回』に義之が貰った称号のはずだが、荒垣は歯牙にもかけない。いかにも面倒そうに、くしゃくしゃな顔をした末光を表通りへと促した。その姿は、じゃれつく犬や猫を追い払う様を連想させた。

そうして末光も去って行った。裏路地の入口に立っていた義之には、やはり何も言ってこないし見ようもしない。未だ知り合ってもいないのだから当然であるが。

唯一義之を無視しなかったのは荒垣である。裏路地から出ようとしたところで目が合うと、大股に歩く足を止めた。

「どうも」

「お前か」

「さっきの人、うちの生徒ですよ。知り合いなんですか？」

荒垣は少しばつが悪そうに、視線を逸らした。人助けするところを見られて、恥ずかしいと思っているのかもしれない。

「知り合いってほどじゃねえ。ラーメン屋で何度か顔見たくらいだ」
「でも助けてあげたんですね」

「……あいつはおかしな奴だが、食い物に関しちゃ本物だ。裏メニューとか裏の裏とか考えて、店に作らせたりな。歯でも折られて飯が食えなくなったらって思うと、ちよつとな……」

歯切れの悪いセリフである。要約すると放っておけなかったの一言しか残らない。人助けをするのに一々理由など必要としないのだろう。荒垣は強面ではあるものの、いい人である事は『前回』の付き合いから分かっている。ただし言い訳は必要とするようだが。

そんな荒垣の人柄についてはいいのだが、今の一件には問題が別にある。

（末光がもうリンチされたとなると、月はどうすればいいんだ……いや、待てよ。この展開は……）

順平と真田のパターンでは、ここで続きがあった。あれに倣うのなら、このまま荒垣と別れてはいけない。少々無茶な振り方かもと思いつつ、荒垣自身のセリフを足掛かりにしてみた。

「ところで、はぐれの裏の裏メニューって何です？」

「あ？ 食いたいのか？」

「はい！」

わざと元気のいい声を出してみた。不良を演じる善人には、こういう言い方が有効であろうと思って。自由に動かせる口は、本当に便利である。

「担担タンメンって奴だ」

「そんなのあるんですか？ 見た事ありませんけど」

『前回』に末光と食べたからももちろん知っているが、敢えてこう言ってみた。

「だから裏の裏ってんだ。はぐれ井は割と有名だから誰にでも出すが、坦坦タンメンは常連にしか出さねえ。おい、何だ……」

今度は敢えて声には出さず、視線に期待を込めて見上げてみた。するとそれだけで、すっかり反応があった。

「先輩は常連なんですね？」

「……連れて行ってか」

皆まで言わなくても分かってくれる辺り、荒垣は単に善良なだけでなく、物事の気配りができる人だ。特別課外活動部に在籍していた頃は、美鶴が指揮して真田が突っ走り、荒垣が後始末をするといった役割分担だったのだろう。少し想像しただけでも、バランスの良いチームの姿が目に見えかねてくる。

もし荒垣が当初からずっと在籍していれば、タルタロスの探索も自分が来る前から少しは進んでいただろう。残念な事だ、と義之は頭の片隅で思った。思いながら、口では全く別の事を喋った。

「金は出しますよ。先輩の分も」

「馬鹿言え。後輩に奢らせられるか。ついて来な」

変なのに捕まって面倒くさがるのと呆れるのと諦めと、様々な感情が混ざった表情を一瞬だけ荒垣は浮かべた。そしてそんな自身の顔を相手から隠すように、踵を返して大股で歩きだした。その荒垣の後を、義之は素直について行った。

ここに来た当初の目的である眞宵堂に顔を出すのは、また今度にする事にした。荒垣と違って、店は逃げない。

ポロニアンモールから巖戸台商店街まで、二人でやって来た。その間に会話はまるで弾まなかった。義之は途中何度か話しかけてみたが、荒垣から返ってくるのはああとか別にとか、生返事ばかりだった。良く気の付く人ではあるが、話をするのは難しい相手だ。

コミュニティを築くには、これでは駄目だ。どうにかしてこちらに興味を持ってもらわなければならない。はぐれに向かう道すがら、義之は荒垣が食いつきそうな話を探した。

（真田や美鶴の話題を出しても駄目だろうな。興味ない、の一言で切られるのが落ちた。天田の話題を出す……のはもっと駄目だ。今の時点で俺が天田を知っているのは不自然すぎる）

やがてラーメン屋のはぐれに辿り着いた。珍しく空いていた店にはすぐ入る事ができて、荒垣が担担タンメンを二つ注文した。

「ごちそうさまでした」

二人揃って、かなりの速さで食べ終わってしまった。この店のメ

ニューは何でもうまいが、裏の裏は本当にうまい。うっかりすると、本来の目的を忘れて食べる事だけに集中してしまいそうになる。

「もう帰れ」

「ええ、帰りますが……一ついいですか？」

義之がそう言うと、荒垣は何だと面倒くさそうな視線を向けてきた。

「先月に真田先輩の病室でお会いした時、何か言いたげでしたよね？」

5月1日に真田が検査入院した際の話だ。『前回』も『今回』も荒垣と初めて会ったのはその時だったが、いずれも荒垣は病室を去り際に義之と目が合い、何かを言いかけて止めた。何かに気付く事があったのか、『前回』から少々気になっていた。

「……」

沈黙が降りた。ただ先ほどまでの、単に会話がないだけの気まずい沈黙ではない。その証拠に、荒垣の視線から先ほどまでの面倒な気配が消え、代わりに探るような色が現れた。二人の間の空気そのものに重圧をかける類の沈黙である。

「忘れてましたか？」

だが義之はそんな空気など感じていないかの風を装って、重ねて聞いてみた。荒垣は他人に対するガードが堅い。殻を打ち破るには、ある程度は無遠慮に踏み込んでいくのも必要だ。こういうタイプは

向こうから接触してくるのを待っているだけでは、何も始まらない。そして踏み込んでみれば、意外と拒絶されない事は往々にしてある。堅い殻の裏側で、実は他人が来るのを待っていたという事もあるし、拒絶するだけの気力もないという事もある。つまり話の脈絡とか段取りとかよりも、強引さが有効な場合があるのだ。

「お前、アキから聞いてるか？ 俺が昔、何したか」

（何をしたか、ね……）

案の定と言うか、殻に隠れた本心を覗かせてきた。しかも解釈の仕方によっては、このセリフはかなり意味深である。表面上は特別課外活動部の一員だった事を知っているか、と聞いている。そしてその裏で、二年前の事故を知っているか、とも聞いている。

「聞いてはいません。でも昔は俺たちと同じ事をやってたんじゃないんですか？」

敢えて裏までは踏み込まず、表だけに留めた。月日が進めばまた別だが、今の時点では荒垣の核心にまで触れるのは時期尚早だ。

実際、『今回』の真田や美鶴の口からは二年前の事故の件はおろか、荒垣が特別課外活動部に属していた事もまだ聞いていない。聞いていると嘘を吐く事はできるが、後で真田に確認されたりしては面倒な事になる。特に事故の件は真田や美鶴の性格からすれば、余程の事がない限り他人に話しはしないだろうから尚更である。

ちなみに部に属していた事を何故知っているのか、と聞かれたら病室で荒垣が言った、『遊びに付き合ってられるか』というセリフから察したのだと答えるつもりだった。

「……」

荒垣は再び黙り込んだ。その視線は探る色がますます強くなり、じつと義之の目を見つめる。義之も黙って受け止める。傍から見れば睨み合っているような数秒間の沈黙の後、荒垣が折れてきた。

「お前……何の為に戦ってる？」

「それは肯定の意味ですか？」

「聞いているのは俺だ」

どうやら荒垣は自身の事を答えるつもりはないようだ。その代わりに『前回』の9月に復帰を決めた際に発した質問を、ここでしてきた。これはつまり、先月に真田の病室で言いかけて止めた事が、これだと言いたいのだろう。

義之は気持ちを一旦切り替え、質問の回答を考えた。『前回』はいきなりの事だったので、分からないと答えた。では『今回』の自分は、一体何の為に戦っているのか――

「大切な人を守る為……ですよ」

実際のところは、自分の為なのが本音だ。ニユクスと戦って生き延びる為、つまりは自分の為だ。戦いのみならず、コミュニティの活動さえそうだ。若干の例外はあるものの、基本的には利己的な理由からだ。だがそう答えては、荒垣の共感を得られまい。

「そうか。それが誰かは知らねえが、やるんならとことん守れ」

荒垣はいかにも荒垣らしい言葉と共に、目に込める力を緩めてきた。優しげな、と言ってもそれほど間違っていない、真摯な視線が身に沁みる。

そもそもペルソナの適性が高くない荒垣が、どうして特別課外活動部に参加したのか。はっきり聞いてはいないが、察するところ初めは真田の為、9月に復帰したのは天田の為だろう。つまり他人の為だ。荒垣は利己心が全くとって良いほどない。

自分とは大違いだ、と義之は大嘘吐きな己を珍しく心苦しく思った。

すると――

『我は汝、汝は我……』

一瞬の時間停止と共に、既に慣れたあの声が響いた。自分にしか聞こえないはずの声であるが、担い手との間に横たわる空間を揺らして響き渡る感覚を与えてくる声である。そんな声が告げたコミュニケーションのアルカナは月。思った通り、担い手が末光から荒垣に移った。

（やつと来たか）

荒垣のペルソナとは違うが、真田の例もある事だから、もはや気にしたら負けというものであろう。振り返ってみれば、『前回』もペルソナは戦車のアイギスと永劫のコミュニケーションを築いていた。もう何でもありだ。

（アルカナはこの際どうでもいい。重要なのは、今後の展開だ）

変わり者だが根は単純な末光よりも難しそうな相手だが、期待できるメリットも大きい。『前回』の荒垣は、死後でさえ特別課外活動部に大きな影響を与え続けていた。『今回』は生き延びさせるつもりなので、その存在感はより大くなるはずだ。コミュニケーションで親しく接する事ができれば、一年間全体の中でも色々と有益であるう。

「それから、桐条や溜まり場に來た女どもだ。手が届くんなら、あいつらも守ってやれ。アキはその辺、頼りねえからな……」

「はい」

義之は短く答え、軽く頭を下げた。こんな誠実な人に嘘を吐いて、申し訳ないと思いつながら。そしてそんな内心を決して悟らてはなるまいと、視線を外すつもりもあつて頭を下げた。

月1(2009/6/9)(後書き)

コミュの担い手が『一周目』と異なる事に、主人公はもう驚かなくなってきました。

逆にコミュを狙って発生させる技を決めてくれました。

戦車4(2009/6/10)

義之は演技力には自信がある。ただしストーリーを自分で組み立てる監督や演出家のような仕事は、どちらかと言えば不得手である。与えられた状況に応じて仮面を使い分けるのが、『愚者』の本来のやり方である。

要は受け身なタイプの役者であるが、昨日はまさにそれが上手く嵌った。未だ知り合ってもいない末光がリンチを受けるという想定外に遭遇したのだが、咄嗟のアドリブで月のコミュニティを荒垣との間に築く事に成功した。この臨機応変さの発揮は、担い手が『前回』と異なる事態を既に四度も経験していて、慣れていたという事もある。

そんなアドリブ成功の翌日、義之は剣道部に顔を出していた。相も変わらず岩崎と二人だけだ。以前は岩崎との仲を噂にされるのはとこの状況を心配していたが、義之はもう気にしていなかった。岩崎の気持ちがどこを向いているかは、既に分かっている。よって今となつては少々噂が立とうが、深刻な問題にはならない。

そんな風に楽観的に考えていた義之と、ここ最近はまだ稽古に身が入っていない岩崎で二人だけの体育館へと、意外な人物がやって来た。

「はい！ 練習止め止め！」

扉が開かれるや、いやに高い声でそう言ってきたのは倫理の叶だった。叶は何故か剣道部の顧問を務めているが、部活に顔を出すのは珍しい。義之が入部した4月24日以来、初めての事かもしれない。

い。その意味では、義之が入部した時に叶がいたのは凄く偶然であつたのかもしれない。

そんな叶が何をしに来たのかと思って目をやれば、難しい顔をした数名の女子生徒が後ろにいた。

「聞いたのよ、ケンカしてるんですって？　そういうの困るんだけどお」

わざとなのか地なのか、叶は語尾を妙に伸ばして喋る。『前回』友近から聞いた話によると、叶は男子生徒からは人気があるらしい。実際、こうした喋り方を可愛いと思う男もいるだろう。しかし友近が言うような大人の女性のイメージとは、なかなか結びつかない。どちらかと言えば、子供っぽい印象をすら受ける。義之の目から見れば、叶よりむしろ美鶴辺りの方が大人に見えるくらいだ。

しかしそれでも、感情の行き違いで頑なになった女子部員たちを引き連れてくる辺り、単なる駄目教師ではないとも言える。やはり『前回』友近から聞いた話によると、叶が担任を受け持つ三年生のクラスは進学率が良いらしい。つまり生徒の指導そのものには、本当に熱心であるのかもしれない。

「ほら、どっちが悪いの？　パパッと謝っちゃって」

ただこうした子供っぽい、ふわふわと浮き上がりそうな軽い物言いは、付き合う人を選ぶだろう。『前回』の隠者のコミュニケーションでY子が叶に関して愚痴を零すのを聞いた事があるが、その点からも、叶は特に同性に嫌われるタイプだと考えられる。

「……」

そんな叶が取り分け嫌いであろう岩崎は、その顔を見まいとするように俯いている。対する女子部員たちは、自分たちも悪かったとは思っているようではあるが、謝罪の言葉は出てこない。

「悪かったな」

しばらく続いた沈黙を、義之が破った。本当に自分が悪いかどうかは別にして、このままでは埒が明かない。すると岩崎が顔を上げた。

「あ……坂本君のせいじゃないって。えっと……みんな、ごめんね。私、言い過ぎた。あの時だけじゃなくて、今までも……押し付けてたと思う。チームなのに……」

「じゃあ、後よろしくね」

話がまとまりそうな気配を感じ取ったか、叶はさつさと帰って行った。進学は別としても、やはり部活に熱意は持っていないようである。まして汗の臭いが酷くなる夏の体育館には、叶のようなタイプはいかにも似合わない。

それは他の部員たちも分かっているのか、叶へは誰も挨拶もしない。皆が岩崎に注目したままだ。

「何かあんだ、変わった？」

「ごめんね、恋愛はくだらないとか言って。何も分かってないのに、さ……」

岩崎は叶が去った方を見つめて言う。その視線や表情から発する雰囲気は、明らかに恋する乙女のそれである。コミュニケーションで観察力を磨いてきた義之ならずとも、一見して誰にでも分かるほどだ。

「な、何なのよ。そのセリフ……」

「まさか……」

部員たちの視線が岩崎から義之へと向けられてきた。そこに込められた色は、期待だったり賞賛だったり。もし岩崎を泣かせたら承知しないぞ、という良くある脅しの色もあった。

（あ、まずい……）

まずい。最近は樂觀視していた心配事が、意外にもここで現実のものとなりそうだ。

「坂本！ あんた、やっちゃったのね！ 岩崎のツンを打ち砕いたのね！」

「やっぱり、あの噂は本当だったのね！ 遂にデレ期が到来したのね！」

ショートカットの部員とお団子の部員が、口々に言ってきた。一部の人々の間で流行してはいてもあまり一般的とは言えないキャラクター用語を、半分ずつ分担してセリフに乗せる辺り、見事なコンビネーションである。

「ツン……とか、デレって何？」

幸か不幸か、岩崎は意味を理解していない。義之とても、あまり理解したくない言葉である。

（寒帯に属する気候区の一つで、北極圏と南極圏の一定地域が該当する……）

思わず地理の授業で習った知識を心の中で復唱してしまった。この種の話の中心に自分が据えられているとは、頭よりも心が認知しない。脈絡のまるでない理不尽な事件の犠牲者のように、眼前の光景を事実として認めたくない。

だが現実逃避をしている場合ではない。まずは部員たちの矛先を逸らさねば。

「男子の部員はどうしたんだ」

我ながら、あからさまな話の逸らし方だと感じた。こういうノリはどうも苦手だ。と言うか、こうした詰め寄られ方は『前回』の経験にはなかった。

「そんなのどうでもいいの！　どこまで行っただの！」

案の定、一蹴された。ボイコット前には岩崎と他の女子部員の間には温度差があるくらいにしか認識していなかったが、どうやら観察が足りなかったようだ。岩崎は部員たちから、実は慕われている。単に部員とリーダーと言うには、少々方向性が異なるかもしれないが。

この雰囲気では岩崎の事は何とも思っていないなどと答えては、遊びだったのか、とか話が斜め上へ発展して袋叩きにされそうだ。事が

ここまで来てしまつては、下手な小細工はできまい。もはや正面突破あるのみだ。

「俺じゃない。友近だ」

「ちょ、ちよつと!」

「友近あ!??」

どこからかタイミングよく、結子まで現れた。ひよつとすると仲直りの成り行きを心配して、扉の陰からずつと伺っていたかもしれない。

「に、西脇!? どこから聞いて……」

「友近とか、あり得ん! マジで!」

「何がどうなると友近なわけ!??」

体育館に悲鳴が飛び交った。本当に、このノリは何なのであろうか。事態は義之の経験を超え、未知の領域へと突入してしまった。

「つか、坂本でいいじゃん!」

こんなセリフまで飛び出してきた。確かに普通に考えれば、男女で二人だけの部活などそう見るのが当然だ。だから他の部員たちが戻ってくるのは歓迎だと思っていたが、時既に遅し、という奴だった。噂話を真に受けたか、部員たちの頭の中では既にカップリングが完成しつつある。

こうなつてはやむを得ない。予定より早い、岩崎を友近に引き取ってもらうでしょう。

「友近を呼んでくる。あんなの、一押しだろ」

義之は正面から切り込んだ。断固たる意志を言葉に込める、説得的な口調を意図して作りながら。

「い、いいの！ 押さないし！」

岩崎は顔を朱に染めて、勢いよく首を横に振っている。これを見れば、既に自身の感情を自覚している事が見て取れる。それでいながら、行動には未だ躊躇いを持っている。

こうした心理については、義之は『前回』の経験から似た人を知っている。女教皇のコミュニティを通じて接した風花だ。『前回』の風花は、おにぎりを作り始めた頃から義之に好意を抱いている事を自覚していた。しかしそれをはっきり言葉にしたのは、それからかなり後である。

風花は己に自信が持てないタイプである。だから告白などして気まずくなるくらいなら、と言う考えが先に立ってしまう。今にして思うと、そうして何も言つてこないままできてくれた方が、義之としては良かったのであるが。

思考が少し脱線した。要するに、岩崎は自身の想いは望みのないものだと思っている。だがそれでは困る義之は、今度は側面から切りつけた。断固とした口調はそのままである。

「お前、最近ずっと練習に身が入ってないだろう。集中力がまるで

ないぞ」

このセリフはあらかじめ用意しておいたものである。ただいずれ
叶が転勤して、友近が失意に沈んだタイミングで言うつもりだった
のだが。

「あ……分かってたんだ。そうだよね……。私、ずっと止まっていた
……」

「岩崎がそれだと、この部は本当に底辺だぞ」

「底辺って、ちょっと酷くない？」

他の部員がぼやいたが、そこは敢えて無視した。ここは岩崎に余
計な事を考える暇を与えない為、無駄な脱線をせずに一気に行かな
ければならない。

義之のセリフは詭弁である。友近への気持ちの問題を、剣道への
向き合い方へと話の方向性を意図的にずらした。だがそもそも女の
恋愛話に男が割り込むのは不自然だし、しかも岩崎は色事に疎い。
そこでこの詭弁だ。岩崎のようにスポーツに打ち込むタイプには、
部活に悪影響が出ていると言ってやった方が行動に踏み切りやす
くなる。

ついでに言うと、行き場のない気持ちを抱えたままずっと立ち止
まるのも、或いは気持ちを切り捨てて諦めるのも、一つの生き方で
はあると義之は思う。何故なら、そうして何かを諦めた人を『前回』
何人も見てきたから。例えば家族の為に剣道への情熱を封じて就職
した早瀬とか、留学を諦めてフランスに帰ったベベとかだ。

望みを持っている人は多いが、誰もが叶えられるとは限らない。だが岩崎には叶えてもらいたい。そうでなければ、色々と困る。

「勝負をやりかけにするな。決着くらいつける」

「うん……そうだね。傷つくの分かってるし、怖いけど……」

「あいつを呼び出すから、着替えてこい」

そうやって岩崎を促し、義之も携帯電話を取りに男子更衣室へ向かった。『今回』は友近と携帯番号の交換はしていないが、『前回』は何度か休日に出かけたりしたので、友近の番号は覚えている。

「私の事……ど、どう思う？」

体育館と校舎を繋ぐ渡り廊下で、岩崎と友近が向かい合っている。その様子を義之と女子部員ら、そして結子が扉の陰で見守っていた。まさに典型的、と言うか古典的な告白のシーンである。岩崎のストリートな物言いとか、野次馬も揃っている辺りが特に。

「どうって……家族みたいなの？」

せっかくの直球勝負だったのに、友近は明後日の方向を向いている。言われた意味を分かっていない。マンガ的な表現を用いれば、頭にクエスチョンマークが浮かんでいるところだろう。

「わ……私の事、好き！？」

岩崎は勇敢にも一歩進んだが、声が大きくなっている。誰か来たらどうする気なのだろうと、ちょっと心配になるくらいだ。

「え、うん」

友近は一応肯定を返すが、やはり意味を分かっていない。家族のように、との意味で答えている。

「駄目だ、あいつ……」

ショートカットの部員は早くも目を覆っている。

「頑張れ岩崎……」

（あと一歩……何とか踏み込め）

既に見切りムードが漂ってきた部員たちを余所に、結子は両手を握って岩崎を応援している。義之も手は握らないが、同じ気持ちでいた。その応援が通じたか、岩崎は更に一歩進んだ。

「ど、どのくらい好き!？」

「えーと……ラーメン並み？」

古典劇はここに至って、急に前衛的な表現が飛び出した。それを聞いた義之は頭を抱えてしまった。劇の演出家であれば、ハリセンでも持ち出して役者の頭を張り飛ばしてやるところである。

（言いたい事は分かるが、もう少し言葉を選べ……）

「はああ!？」

遂に観客からブーイングが飛び出した。結子が扉の陰から飛び出していき、ショートカットの部員や眼鏡の部員もそれに続く。

「ちょ、何!？」

「友近のくせに生意気なんだよ!」

「岩崎に何言ってくれてんの!? 潰すぞ、コラ!」

「えーと……俺、用あるから!」

突然のギャラリーの襲来に友近は泡を食い、素早く身を翻して渡り廊下から走り去っていった。友近は普段運動をしていないはずだが、逃げ足はまさに脱兎のごとく速い。数メートル追いかけた結子たちだが、渡り廊下の校舎側の扉口辺りで立ち止まり、友近の背へ向けてあらん限りの野次を飛ばした。

かくして義之の緊急企画によって急遽開演した、岩崎と友近主演の告白劇は終了した。最後まで演じられもしないまま、轟々たる非難により強制的に幕引きと相成った。

「ったく、ざけんなっつもの! ラーメン並みとか、馬鹿にしすぎじゃない!？」

「坂本! あんた責任取りなさいよね!」

結子は友近の態度に憤慨しており、お団子の部員は義之に予先を向けてくる。確かに準備期間が短すぎたとはいえ、劇団であれば演

出家の責任問題にまで発展しかねない酷すぎる結果である。

（いや、これは演劇じゃないんだから。勘弁してくれよ）

自分の行動に責任を取る――

そういつ『契約』はしたが、こんな事まで責任を負わされては堪らない。それが嫌で『今回』は女関係に気を付けていたのに、岩崎と特別な関係にされては苦勞が水の泡だ。それに義之の目から見れば、岩崎は振られたわけではない。

『前回』の友近は叶が九州へ転勤した後、はぐくめで『俺がこの町を捨てられるか』と叫んでいた。言葉面だけでは強がりにはしか聞こえないが、実はかなりの割合で本心だったと義之は思っている。何故なら友近は教師との恋愛が気に入っていただけで、叶自身にはそれほど想いはない。そもそも二人は本当に親密な関係だったのか、それすら疑わしい。

その理由は、Y子から聞いた叶の『偽物』疑惑だ。その話を友近から聞いた事はないし、匂わされた事もない。それは本物だからか、友近の優しさか、或いは見た事がないか。義之の勘だと、三番目が正解だ。友人の思い出を壊しては申し訳ないので友近にその話は『前回』もしなかったが、まず間違いない。

要するに、友近は叶に心からの感情を抱いてない。つまり叶よりもラーメンが好きなのだ。だから友近自身も未だ気付いていない本音の部分に置いては、叶より岩崎が上に置かれている。もっともラーメンと同等では恋人にはなり得ないが、将来に期待はあるはずなのだ。

そこをフォローしてやろうと思って岩崎に目を向ければ、岩崎は

意外にも穏やかで、憤る結子たちを宥めていた。

「あいつ、ラーメンが一番好きだもん」

「健気……」

「いつか一番にしてくれればいいよ」

どうやらフォローするまでもなく、岩崎は分かっているようである。幼馴染として付き合いが長いだけの事はある。演出家の失敗を役者が償ってくれたようなものだ。

「もう練習って雰囲気じゃないね……。みんなでワックでも行こうか！」

本来なら自身が慰めてもらうべきところなのに、こんなセリフが出てくるのだから大したものである。リーダーとして、岩崎は周囲がそれなりに見えている。だから女子部員たちから慕われるのだろう。そうした点を見逃していたのは、義之の失敗である。

余談であるが、この後で岩崎が提案した通り皆で巖戸台商店街のワイルダックバーガーに行く事になったのだが、そこで男の義務だとか言って義之は何故か全員分を奢らされた。今日の失敗の埋め合わせが必要かとも思っただけだったが、こうした形になるとは予想外だった。

自分の行動に責任を取るとは、何も命を賭けなければならないような事ばかりではない。そんな当然と言えば当然の事を、義之は初めて知ったような気がした。

戦車5(2009/6/12)

大量のハンバーガーを女子部員たちに奢ってから二日後。岩崎が友近に告白して以降で、最初の剣道部の活動日がやって来た。

体育館に行ってみると、女子部員たちは既にほとんどが集まっていた。部の状況が変わった事を改めて実感する人数である。だが岩崎の姿はない。どうしたのだと他の部員に聞いてみると、何やら用があつて少し遅れるとの事だった。

程なくして、岩崎がやってきた。ただし一人ではなく、何人かの男子を連れてきていた。

「あ、あいつらだ」

義之のシゴキに耐えかねてボイコットしていた、男子部員たちである。聞くところによると、どうやら岩崎が自ら声をかけて回っていたらしい。友近との一応の決着からいくらかも日数がたっていないのに、大した行動力である。

「みんな、ちよつといい？ 話したい事があるの」

戻ってきた男子部員たちを含めて、全員が岩崎の周囲に集まってきた。

「色々……今までごめんね。こんなだけど、これから私がリーダーでいいかな？」

「いいんじゃない？」

「うん。理緒しかない」

主に女子部員たちから賛意が上がり、リーダー役は今後も岩崎が務める事が決まった。続いて男子たちから、義之をどうするのだとの声が上がった。岩崎は何と言って男子たちを呼び戻したのか分からないが、皆にきついシゴキを課した義之をどうするか、何か条件があつたのかもしれない。

「坂本君には、コーチになつてもらいます！」

元気のいい岩崎の宣言に、男子部員たちの一部から文句が上がった。それじゃ前と変わらないじゃんか、とか何とか。しかし岩崎はそれを制した。

「強制はしないわ。本気で剣道をやりたい人だけ、コーチをしてもらえばいいの。坂本君もそれでいいでしょ？」

「ああ」

実際のところ、明王杯に出場する必要がないのだから、もう男子部員たちに稽古をつける必要はない。

「それじゃ早速！ また練習しよ！」

全員でウォーミングアップを行い、素振りを何十本が行い、更に打ち込みへと順序立てて練習が進む。そして打ち合いになると、岩崎は義之の前に来た。面越しに向けられる眼差しは真剣なものだった。

「お願いします。本気でね」

義之としては、もう剣道部は元々の遊び半分の部に戻ったところで全く構わない。だが見たところ、岩崎は遊びでやるつもりはないようである。

「いいのか？」

二人で部活をやっていた頃は、義之は岩崎とかなり頻繁に打ち合ってきた。しかし岩崎の技量は4月に義之が入部した頃と比べて、あまり変わっていない。一年で極められるペルソナ能力と違って、剣道は短期間でそうそう急激に上達するものではないから当然かもしれないが。だがそうした常識を差し引いても、これまでの二人の稽古は岩崎にとって意味があつたのか、と義之は思う。

自分は人にものを教える事に向いていないのでは、と義之は感じていた。例えば『前回』は剛毅のコミュニティで子供たちのコーチをしたが、主にやっていたのは結子だった。他にも図書館で千尋に数学を教えたりしたが、果たして効果があつたのか疑わしい。

つまり『前回』を通じて義之の教える側としての行動には、結果が伴っていない。特にボイコット前に男子部員たちを鍛えるつもりで課した稽古は、部の雰囲気悪くしただけで何の意味もなかった。客観的に見れば、教えられる側のレベルも考えずに無茶をやらせるだけの、駄目コーチであつたはずである。この学校に良くいる駄目教師たちと変わるところがない。

「私、これからも剣道を続けたいから」

意味の有無を悩む義之に対して、岩崎は面越しに笑みを見せてきた。裏表のない、爽やかな笑顔である。

「今年はまだ無理だけど、来年は明王杯にも出て……大学でも続けるわ。もっとレベルアップしたいの。それには強い人に教えてもらうのが一番いいでしょ？」

「そうか」

相手が望んでいるのなら、義之としても断る理由はない。互いに礼をしてから、相懸り稽古を始めた。十本やって、また十本とも義之が取った。

意外な事に、この日は岩崎の他にも何人かの男子部員が義之の元にやってきて、稽古を求められた。意味があるのかと思いつつも、義之はいずれも断らなかった。もちろん打ち合えば結果は一方的なものになるしかないのだが、男子部員たちの間に嫌々な感じは伺えなかった。そうして数時間が過ぎ、練習は終わった。

「お疲れー！」

「お疲れさん」

多くの部員が更衣室へ移動していく中、ショートカットの部員が岩崎に話しかけた。

「理緒、合コン考えてくれた？」

「んー……別にいいのに。彼氏いないし」

「友近よりいい男を好きになれ。マジで」

「……いないと思うよ」

岩崎は少々の間を置きつつも、はっきり答えた。処置なし、という奴である。

「坂本、男として何か言う事はないのか」

眼鏡の部員が義之に振ってきたが、何とも微妙な問いかけである。友近以上の男がこの世にいないのなら、人類は滅びた方が良好だろう。来年の1月に予定されている世界の終わりを、きっと誰もが未練なく受け入れられる。だが『自分の方がいい男だ』などと答えるのも馬鹿馬鹿しい。一瞬だけ考えた後、義之は素直な思いを口にした。

「どうでもいい」

友近に好きな人はいるかと聞かれて、いないと答えて以来、剣道部で口にした二度目の本音である。

「あははっ……」

岩崎は屈託なく笑っている。透徹した観察力を持つ義之から見ても、本心から楽しく思っただけで笑っているようにしか見えなかった。

そして皆が去った後、岩崎が話しかけてきた。

「坂本君ってさ、リーダーに向いてるよね」

「ん？」

「私ね、誰が何に秀でてるとか、ちゃんと見るようにしたんだ。私の見たところ、坂本君はリーダータイプだね。どんどん引っ張ってく感じ。私より本当は向いてる」

岩崎のこの評価は、特別課外活動部で現場リーダーをやっている事に由来しているのかもしれない。『愚者』にとってはそれも仮面の一つであるが、『前回』も含めれば相当に長い期間に渡って付け続けたせいだ、リーダーの仮面は特に板についているのかもしれない。

「コーチはあまり向いてないと思うが」

「そんな事ないって！ きつと名監督になるよ。加減するコツを、ちよつとだけ覚えれば大丈夫」

（監督……？）

プレイングマネージャーと言う奴だろうか。特別課外活動部に当てるなら、岩崎が部長の美鶴の役に相当し、義之は顧問の幾月の役になる。そして幾月が実は歴戦の古強者で、未熟な新兵連中に訓練を課すようなものだろうか。もし映画や演劇だったら、とても退屈な代物になりそうだ。

（何、馬鹿な事を考えてんだ……。つか、特別課外活動部に当てはめるなら俺はそのまま俺で、幾月の役は叶だろ）

いや、それは違う。幾月の役を演じるのは、叶では役者が足りなさすぎる。月光館学園の生徒から教職員まで総ざらいしても、演劇で幾月の役を張れるのはやはり義之しかない――

「私も……頑張るわ。貴方みたいなリーダーになりたい」

ふとした思い付きをきっかけに奇怪な方向へと進んでいった義之の思考を、岩崎が引き留めた。どんなリーダーを念頭に置いているのかはともかく、ある種の深淵に沈み込もうとした義之を現実に戻らせた。

そうして戻ってきた義之は、岩崎を改めて見た。憧憬の念に裏付けられた真摯な視線が、『愚者』の目に真っ直ぐ飛び込んできた。

「辛い時に一緒にいてくれて、背中も押してもらったね。ありがとう……」

そう言って、岩崎はぺこりとお辞儀をした。

「……」

岩崎は頭を下げる直前、少し恥ずかしそうな顔をしたのを義之は見逃さなかった。だがむしろ義之の方こそ、恥ずかしい気持ちを覚えた。感謝される事など、何もしていない。

礼など言っな――

そう言おうとしたその時、言葉を遮る何者かが宇宙の彼方から飛来してきた。まるで余計な事を言わせまいとするかのように、口を開こうとしたまさにその瞬間、0時にもなっていないのに時間が停止した。

『我は汝、汝は我……』

絆が生まれた時にも、謎の存在である『我』は声を投げつけてくる。だが今のこれは生まれた時より更に厳かに、元から重い声色の中にくどいほどの真実味を含ませている。これは『前回』は都合二十二回も聞き、『今回』は死神に続いて二回目の宣告である。戦車のコミュニティが真実のものとして認められた。

たえて言うなら、よくやったな、と子供が親に頭を撫でられるようなものだ。或いは全校集会で演壇の前に呼び出され、拍手喝采の中で表彰状を授与されるようなものか。

「……」

一瞬の狂いもない絶妙なタイミングの割り込みに、義之の口から声は出て来なくなってしまった。いつでも思い通りに動いてくれる便利な口が、『我』の前ではまるで役立たずである。絆を象徴するタロットカードの裏面に記された、仮面が口を塞いでしまったかのように。

そうして黙っている間に、岩崎は顔を上げてきた。とてもすつきりとした、迷いのない表情だ。感謝を辞退する機会を、完全に逸してしまった。

（何なんだよ。礼を言われる筋合いが、どこにあるんだ……）

コミュニティの担い手から感謝される事は、『前回』から良くあった。客観的に見れば、自分の手柄などではない事ばかりなのに。しかし岩崎が向けてくる視線の中には、社交辞令でない本当の感謝

の念しか伺えない。無邪気なほどに真っ直ぐだ。

義之にとって、剣道部を含むコミュニティの活動は自分の為にやっている事でしかない。ニクスと戦って生き延びる為、再び時間が戻る事がないようにする為だ。

もつとも、結末を予期しえなかった『前回』はまだ良かった。剣道部なら、膝を故障した宮本を案じる気持ちは確かにあったはずだ。それとて仮面に過ぎなかったかもしれないが、少なくとも最初のうちはコミュニティを自分の為に行っている意識は希薄だった。

だが『今回』は全て利己的な目的が初めにある。ただ絆の力を得る為だけに剣道部に入り、岩崎を利用していたに過ぎない。そのくせ異性としては想われまいと気を遣い、『前回』自分を親友と呼んでくれた友近まで巻き込んだ。

それでももし実際に岩崎と友近を結びつける事ができれば、二人にある種の幸せを与えられただろう。しかし結果は大外れだった。友近は未だ叶に熱を上げているし、岩崎の想いは報われていない。誰も幸せにしていないのに、どうして感謝される筋合いがあるだろうか。

どうしてこんな事になるのだろう。普通の人間同士の付き合いで、こんな道理に合わない事があるだろうか。

（コミュだからか？　じゃあコミュって何なんだ？）

それは道理を捻じ曲げるものかもしれない。絆を教える『我』が相手に何かを刷り込んで、義之に感謝の念を抱くように仕向けているのかもしれない。だとしたら、それはとても卑怯で、理不尽なも

のだ。人の心を弄んでいるに等しい。

（酷い話だ……。いや、酷いのは俺か）

坂本義之は大嘘吐きである。強固な仮面で真意を隠し、他人を利用してばかりいる。まさに幾月のようなものだ。そんな最低な人間が、コミュニティの担い手からは善人に見える。何という不条理だろうか。

（いや……仕方のない事だ。この世の終わりを防いで……また時間が戻らないようにする事の方が、ずっと重要だ）

たとえ嘘で塗り固めたものであろうと、既に戦車の絆は『我』に真実として認められている。認められた以上、絆は二度と壊れない。時間が戻る事によってのみしか、失われる事はあり得ない。

義之にとって、『前回』の努力が無に帰されたに等しい時間の戻りは大迷惑だ。だが他の人にとっても迷惑であろう。また同じ事をしろと言われたら、岩崎も友近も絶対に嫌がるだろう。その一点だけでも、後ろを振り返らない理由には十分である。

感傷的になる気持ちを切り捨てた。『契約』した人間に引き返す道は初めからない。自分の行動に責任を取るとは、罪悪感に浸る事ではない。その対極に位置する事だ。前に進むしかないのだ。卑怯だろうが理不尽だろうが、気にしている暇はない。利用できるものは、何でも利用するのみだ。

そしてコミュニティは極めて利用価値の高いものである。絆の力はペルソナ能力に大きな影響を与える。特にシャドウが強い『今回は、絆による能力の底上げなしでは生き抜く事さえできない。そし

てニユクスに立ち向かう為には、絆の結晶であるユニバースが欠かせない。

（それに、この結果は重要だぞ。特別な関係にならずに最後まで行けたんだ）

それは即ち、男と女に友情はあるという事だ。実例ができた以上これは大きな励みになる。しかも担い手を特定の男と結びつける必要すらない。気持ちが他の男に向けられているだけでいいのだ。

今後とも絆は積極的に結ぶべきで、女相手のものでも自信を持って進めればいい――

そう結論づけて、体育館を後にした。

戦車5（2009/6/12）（後書き）

以上、戦車コミュでした。

岩崎を友近から寝取る話を期待しておられた方、ごめんなさい。

本作の戦車コミュは岩崎本人との関係よりも、コミュとは何かという問題に主眼を置いていました。その為、話の筋は敢えて原作主人公編のままにしました。

原作では主人公はコミュの担い手から大抵感謝の言葉をもらいますが、そんなに主人公はいい事をしたか？ と、作者はゲームをプレイして感じました。担い手たちは皆それぞれ困難に直面しますが、それらを主人公が解決してやったわけじゃありませんよね。主人公の言動に影響される事はあったにせよ、困難に立ち向かったのは結局のところ担い手たち本人です。それを一々『お前のおかげ』とか言われるのは、むしろ担い手たちがお人好し過ぎないか…… と思うのです。

主人公をいい人や大物に見せる為の演出と言ってしまえばそれまでですが、ここに絆を教える『我』の存在が絡んでくるとどうなるか…… と考察した結果、この話のようになりました。

異論はきつとある事かと思いますが、本作ではコミュを一種の不条理として解釈しています（解釈と言うより設定かもしれませんが）。ちなみにこの解釈をベースにして、他のコミュでもう少し踏み込むつもりです。『我』が何者であるのか、とか。

酷い主人公はこの不条理を利用して、今後も絆をもぎ取り続ける事

を決意しますが、果たして上手くいくでしょうか……？

星2(2009/6/15)

戦車のコミニティが極まっから三日。義之は実習室前の廊下で真田と会い、一緒に下校しないかと誘われた。真田が言うには、お勧めの店に連れて行ってくれるとの事だった。どこなのかは行く前から予想はついていたが、義之は誘いに応じる事にした。

そうして学校を出た二人は、巖戸台商店街にある牛丼屋、海牛に来了。案の定である。

「知ってるか？ ここの牛丼はうまいんだぞ」

真田によると、この店の牛丼はまず何と言っても肉の量が素晴らしいそう。だが長所はボリュームだけではなく、肉に染み込むツユがまた絶妙であるらしい。

義之はラーメン屋のはぐれほどではないが、海牛にも『前回』に何度か来た事があるし、一度などは末光と共に二食続けた事もある。だが毎日のようにここに通い、テイクアウトを寮のラウンジで食べたりもしている真田には、流石に敵わない。だからとめどなく語られる熱い牛丼話に、黙って耳を傾けていた。

そうして店の前でしばらく立ち止まっていたら、自分たちに近付いてくる二人組がどこからともなく現れた。

「キヤー、真田先輩！」

髪を巻いている少女と、化粧の濃い少女の二人組だった。私服姿だが、月光館学園の生徒のようだった。たちまちにして、真田とも

ども黄色い声の間に挟まれてしまった。噂に聞く、真田明彦ファンクラブであろう。

「何してるんですかあ？」

「知ってるう。牛井でしょ？ いつも食べてますよね？」

真田の牛丼好きは、その筋の間では有名な話のようである。だからもしかすると、この二人は真田の出現ポイントで待ち伏せしていたのかもしれない。こうして見ると、真田の学園生活はなかなか苦労が多そうである。

巻き込まれては堪らないと思い、義之は一步身を引いた。だがその動きは、あまり良くなかった。真田に見咎められた。

「おい、待てよ」

「……」

義之は足を止め、無言で真田と目を見交わした。

（何とかしろ）

（自分で何とかしてください。先輩の責任でしょ）

互いに言葉を発さないまま、何か会話が成立したような気がした。飽くまで気がしただけであるが。真田とこつしたアイコンタクトをするのは、戦いの現場以外では『前回』を通じても初めてかもしれない。そんな初の以心伝心であるのに、内容が責任の押し付け合いとは何とも締まらない。

「先輩、こちらのイケメンはどなたですかあ？」

そしてそんな視線の交換が良くなかったか、面倒な事に少女の一人が義之に目を付けてきた。追いかけている人物を前にして、他の男に色目を使うとは。ファンとは言っても、意外と適当なものである。

「ボクシングの後輩ですかあ？」

「後輩だが、ボクシングのじゃない。それより、用がないならどいてくれないか。入れないんだが」

とうとう真田が焦れてきた。義之はこの状況から自らも逃れる為に、二人の少女の間をすり抜けて素早く店の扉を開けた。すると真田は間髪入れずに後に続き、扉をぴしゃりと後ろ手に閉めた。少々強引な遮断が流石に効いたか、ファンの二人は店の中までは追いかけてこなかった。

「何なんです、あれ？」

店のテーブルに二人向かい合って座り、注文を済ませてから義之は尋ねた。すると真田はいかにも嫌そうな顔をして答えた。

「知らん。たまにあやつて取り囲まれて、好きなタイプとか食べ物とか聞かれるんだが、訳が分からん」

流石は校内のアイドルである。そうした類の災難には、『前回』を通じて義之も出会った事はない。

（そう言えば、何で俺にはああいうのがないんだ？）

自慢するつもりはないが、『前回』の自分も真田にそうそう劣るものではないと義之は思っている。部活ではエースで、学業は優秀。顔もなかなか。だが『前回』の自分にファンクラブめいたものはなかったし、良く知りもしない女子につきまとわれたりもしなかった。もちろん『今回』もそうした経験はない。

何故だろうか。自分と真田の何が違うのか。

「羨ましい事ですね」

言うまでもないが、これは本気ではない。話の糸口という奴である。

「そう思うのなら代わってくれ。時々練習にまで押しかけてくるし、大迷惑してるんだ。うるさくて敵わん」

「付き合ったりしないんですか？」

「付き合う？ 名前も知らない子とは付き合えんだろっ」

（そういう問題じゃないが……）

これと似たセリフは以前も聞いた事がある。4月22日に順平と共に、ポロニアンモールの交番で黒沢巡査を紹介された日の事だ。その日の放課後の校門前で遭遇した真田は、今日のように女子連中に取り囲まれていた。だが真田はそれら誰一人の名前すら知らない。と、歯牙にもかけていなかった。

（しかし女の子の方も、名乗ったりもしないのか？ …… ああ、そう言う事か）

自分と真田の違いが分かった。真田は誰とも特別な関係を築いていない。結婚していない芸能人みたいなもので、ファンの子たちにも夢を見させるのだろう。ただし夢を見ているだけで、本当に本気なのは少数派であろう。

さっきの二人組を見ても分かる通り、真田ファンの大半は追いかける行為そのものを楽しんでいるミ―ハーに過ぎないのだろう。もちろん中にはそうでない子もいるだろうが、きっと互いに牽制し合って結局は誰も本気のアプローチを仕掛けてこないのだ。だから真田もまともに取り合わない。

そしてそんな真田と違って、『前回』の自分は五人もの女と特別な関係になっていた。しかしバレてはいなかった。いなかったはずである。多分。きっと。希望的に。

だが常識的に考えれば、校内であれだけ交際を広げて全くバレないなどあり得まい。文化祭の後片付けの際にゆかり、千尋、結子の三人で修羅場な空気を醸し出していたが、水面下では似たような事が何度もあったのかもしれない。

そんな有様だから、不本意ながら、極めて不本意ながら、『坂本と関わると遊ばれる』とかの噂が立っていたのかもしれない。

（最低だな……）

『今回』は気を付けよう。誰とも特別な関係になるまいとの決意

を新たにして、真田を煽ってみた。

「名前くらい聞けばいいじゃないですか。好きな食べ物とか聞かれ
たら、こう答えればいいです。『君と一緒に食べるものなら、何で
もうまい。君が作ってくれたものなら、きつともつとうまいだろう
』
とか」

「……」

「それだけです。先輩なら一発KOです」

もつとも実際のところは、堅物が過ぎる真田は付き合ってから苦
労するだろう。ボクシング無敗の肩書を外せば、真田は顔と体格が
いいだけの普通の男だ。屋久島でのナンパ失敗がそれを証明してい
る。だがそれは問題ではない。とにかく今は女に興味を持たせ、経
験を積ませる事が重要だ。そしてゆくゆくは、美鶴を引き取っても
らう。

だが――

「順平みたいな事を言うんだな。あいつも『好きなタイプはお前』
と云えばいいとか言ってたが……」

ガツン、といい音が店内に響き渡った。もちろん殴られたわけ
はない。思わず突っ伏してしまった義之が、テーブルに頭をぶつけ
たのだ。

ボクシングで言えば様子見のジャブから続けてボディブローへ
と繋げようとしたところで、カウンターのストレートを顔面に思い
切り食らってしまったようなものだ。実際に殴られたわけではない
のに、それよりショックが大きいくらいだ。

（ふ、不覚だ……）

言われてみれば、確かに順平が言いそうなセリフである。まずい。これでは順平と同レベルにされてしまう。

「済みません。忘れてください……」

『前回』順平と同レベルにされて悔しがる真田の姿が監視カメラに映っていたが、その気持ちが良く分かった。これは悔しい。物凄く悔しい。

「分かった。忘れよう」

テーブルから顔を上げると、何だか真田が凄く大人に見えてしまった。

「とにかくだ。俺は誰とも付き合う気はない。今はそんな事をして
いる場合じゃないしな。全て掴めるほど、俺の手は長くないんだ……」

真田はそう言って、小さなため息を吐いた。『前回』の付き合いから、義之は真田を人の気持ちに疎い朴念仁だと見ていた。だがこうしてコミュニティを通じて接してみると、意外な一面が見えてくる。

（真田は案外、早瀬や順平とかより難しいかも……）

コミュニティ以外では付き合いのなかった早瀬と違って、真田とは寮やタルタロスで身近に接している。それに加えて『前回』の一

年間がある為、真田の一面は既に把握できている。だが把握している事自体が、かえって良くないかもしれない。

人間は一つの性格だけで生きているものではない。だから今月8日の作戦室で激昂した真田を見て、普段の朴訥さは心理学で言うところのペルソナに過ぎないのかもしれないと思った。それであるから、自分が未だ知らない顔が真田にもある可能性を頭では分かっている。だが一面だけを見てきた期間が長い分、つい先入観に振り回されがちになる。その点は順平や荒垣も同様だが、先の二人より変人の印象が強い真田は特に難しい。

そうこうしているうちに、大盛りの牛丼が運ばれてきた。両手で持っても重いほどの巨大な丼に、ご飯を覆い尽くす量の牛肉が乗っている。ボクサーの食べ物としては、明らかに相応しくないカロリーが目に見えるほどだ。だがカロリーの高い食べ物とは、概してうまい。食欲をそそられる。

「待て。まずはこれを飲め」

早速箸を手にとった義之を真田は押し留め、カバンから缶詰を取り出してテーブルに置いた。プロテインである。ラベルにはプロフェッショナルとか書いてある。それに続いて攪拌用のシェイカーまで取り出した。こういうところは、やはり変人である。

「俺には合いませんよ」

食事とプロテインを並べて食べる趣味はないし、どう考えても牛丼と味が合わない。もっともプロテインと合う食事があるのかどうかは知らないが。

「む……そうだな。これは上級者用だった。分かった。今度初心者用のものを持って来よう」

「はい？」

「アマプロテインという奴だ。効果は薄いが、飲み易いぞ」

「いりませんと答えたかった。答えたかったが、敢えてまた今度、と答えた。」

そうしてようやく義之は牛丼に手を付けた。その一方で真田はまず自前のシェイカーにプロテインの粉を入れ、給水機まで持って行って水を注ぎ、音を立てて勢いよく振った。店でこういう事をするのはどうかと思うが、もはや慣れたものなのか、店員も誰も何も言っていない。

ひよっとすると真田が同じ店にばかり通うのは、こうした奇行を咎められないくらい常連になった店に、行き先が自然と限定されているからかもしれない。

そうして大盛りの牛丼を食べ終え、店を出た。すると真田は店先で足を止め、周囲を見回した。

「さっきの子たち、いなくなってるな」

流石にいらなくなっているだろう。ちょっと傷つくあしらわれ方をしたし、追いかけてようにも牛丼屋は若い女が入るには少々勇気が必要だ。

「ああいつのは困る。飯にありつけなくなるところだった。だが……惜しい事をしたかもしれん」

「何がです？」

名前も知らない子たちの何が惜しいのか。すると真田は爽やかな笑顔を見せてきた。

「あの子たち、お前に興味があつたみたいじゃないか。ああいう子たちを、まとめてお前に引き取ってもらえば良かったと思ったのさ。そうすれば俺はトレーニングに集中できる」

思わず膝から崩れ落ちそうになってしまった。こういう冗談を真田から言われた事は、『前回』は一度もない。

崩れた体勢のまま軽く睨んでやると、真田はまだ笑っていた。きつと女だったら誰でも魅了されるであろう、高原の空気のように爽快な笑顔である。そんな涼しい顔で、何気なく爆弾を投げつけてくるとは。

「勘弁してくださいよ」

こちらが美鶴を引き取ってもらいたいと思っっているのに、逆にフアンの子たちを押し付けられては本末転倒だ。

「お前なら簡単だろう。君と一緒に食べるものなら、とか言えはいだけだろう」

（この人は……）

忘れると言ったくせに、先の失言を蒸し返してきた。冗談のつもりであろうが、笑えない。しかしここで下手に嘘を吐いて適当にごまかしては、余計に泥沼にはまり込んでしまいそうだ。だから敢えて本音で切り返してやる事にした。

「俺の手だつて、そんなに長くないんです。何人も抱えてられませんよ」

先週の火曜日、荒垣と月のコミュニティを築いた時に言われた事がある。手が届くのなら、ゆかり、風花、美鶴ら女たちを守つてやれと頼まれた。その場では了承の意を返したが、あれは話の流れに合わせた出まかせに過ぎない。

自分の手は短い。過酷極まる戦いの中にあつては、一人を守りきる事さえ難しい。『契約』した人間として己の行動に責任は取るつもりだが、意地だけで何人も抱えられるほど『今回』は甘くないのだ。そして戦いではなく甲斐性という意味においても、真実を持たない『愚者』は女を守つてやる事はできない。その意味では、自分は真田以上に頼りない男なのである。

「む……そうだな。その通りだ……」

真田は目を閉じて俯いた。自身の事と比べて、思うところがあるのだろう。やがて顔を上げると、笑みが消えた真剣な眼差しを送ってきた。

「今夜、行くか？ お互い、もっと強くないといかんだろう」

「ええ。行きましょう」

余談であるが、この翌日に義之は真田からアマチュアアスリート用のプロテインを買った。『前回』同じ日に同じものを買った時は体作りに興味を持ったのか、とだけ言われてそれきりだった。だが『今回』はそれに留まらず、プロテインの使い方を詳しくレクチャーされたりした。曰く、プロテインはそもそも健康食品の一種で筋肉増強剤ではない。よって効果を上げる為にはトレーニングと合わせた綿密な計画が必要で、とか何とか。

そんな風に懇切丁寧に教えられたばかりか、これで強くなれと真顔で言われてしまった。おかげでその日は、ラウンジで真田と揃ってプロテインを飲みながら牛丼のテイクアウトを食べる羽目になってしまった。

運命の人（2009/6/17、6/21）

6月17日の放課後、義之は実習室前の廊下を歩いていた。この日から文化部の追加募集が始まるはずなので、『前回』同様に写真部に入部するつもりなのである。

既に剣道部、生徒会、ファッション同好会、『今回』はそれに加えて保健委員と、校内の活動を四つも掛け持ちしているのに更に増やそうとするとは、傍から見れば無茶な話である。だが怠けているわけにはいかない。絆の力ではできる限り集めなければならないのだ。世界の平和の為に――

などと言うと、目的の壮大さに比べて、やる事はいささか卑近に思えてくる。だが世界などと大上段に構えずに、自分が生き延びる事が目的だと思えば、友人を作る事は案外それに相応しい行動であるのかもしれない。実際のところ、義之の意識の中では使命感の類は希薄である。義務感はあるが。

そんな事を思いながら化学準備室の扉を開けてみると、薬液の臭いと共に見覚えのある光景にぶつかった。

「拙い僕について来てくれて本当にありがとう、みんな」

「部長、何か男らしくなった？」

「ほ、褒めすぎだよ！」

写真部部長の平賀慶介が、大勢の部員たちに囲まれながら、頭を掻いて照れている。そんな様を見せられた義之は、扉に手をかけた

まま一瞬固まってしまった。

「あれ、坂本君？」

平賀を取り囲んでいた部員たちの中に風花がいた。部員たちの間をすり抜けて近寄ってきたので、何があったのかと聞いてみると案の定の答えが返ってきた。

「うちの部長がね、部を引退するの。お父さんがお医者さんで、後を継ぐから医大を受験するんだって」

『前回』の運命のコミュニティの担い手だった平賀は、コンクールで入賞するほどの才能の持ち主だったが、将来を芸術家か医者かで悩んだ末、結局医者を選んだ。そしてちょうど今のように、受験勉強の為に部を引退したのだった。

（俺が何もしないうちに……。いや、別に不思議じゃないか）

平賀は元々困っている人を放っておけない性格をしているし、しかも行く先々で病人に遭遇してしまう謎の習慣がある。よって医者を目指すのは実は当然の選択とさえ言える。だからたとえ義之と接する事がなくても、自分自身でその決断を下す事に不思議はない。もつともそうした点は、平賀に限らず他のコミュニティの担い手も似たようなものであるが。

「ひよつとして……写真部に入ってくれるの？」

思考に沈みながら佇んでいた義之に、風花は期待を込めた視線を向けてきた。だが義之はその視線を敢えて外した。

「いや……ちよつと覗いてみただけだ」

平賀がいないのでは、写真部に入る意味はない。かくして運命のコミュニティは『前回』の担い手を失ってしまった。だが義之はそれほど動揺しなかった。こんな事は今まで何度もあったし、きつと別の人とコミュニティを築く事になるのだろつ。問題は、それが誰なのかだ。

邪魔したな、と風花に一言詫びて化学準備室の扉を閉めた。そしてこの日は放課後の時間をべべと過ごす事にして、隣の家庭科室へ向かった。

夜の時間、寮の自室に戻った義之は、机に肘をつきながら考え込んだ。平賀とはもうコミュニティを築けない事は間違いない。では運命は誰と築く事になるのか。

（ん？ 運命を……築く？）

運命（のコミュニティ）を築く。間に入るべき言葉を省略すると、何やら妙な響きがする。

運命の人――

平賀はいい人だが、この表現に適した人物ではない。

（何、馬鹿な事を考えてんだ。俺は……）

思考が脱線してしまった。真面目に考えよう。

（何か今までの傾向を考えると、天田やコロマルともコミュが発生しそうだよな。でもあいつらは多分、ペルソナ通りに正義と剛毅だ。結子とは結局無理だったし、千尋とは今までろくに話してもいないから、きつとそうなる。あと残ってるのは……綾時？ いや、あいつとコミュってのはないだろ。今回あいつが出てきたら、ファルロスの記憶を初めから持つているはずだ。ファルロスとは、もう死神を築いてるしな……）

当てはまりそんな人は、すぐには浮かんで来なかった。そうすると岩崎や長谷川のように、『前回』は全く接点のなかった相手とコミュニケーションを築く可能性もある。だがこの誰かも分からない人、しかもいつどのように発生するのも分からないのでは、今後の計画を立てようがない。可能な限り、既知の人物と築くようにしたかった。

坂本義之がこのように考えるのは、未来を知るアドバンテージを活用する為であった。穿った見方をすれば、陰謀が常習となった彼の思考習慣であったのかもしれない。計画的と言えば聞こえがいいが、裏を返せば想定外の事態に対応しにくくなる、という事でもある。それを俗に、策士策に溺れると言う。

人生において最も恐ろしいのは、先行きが見えない事だ。だがなまじ先が読めるというのも諸刃の剣である。いつ何が起きるか予想できれば、計画を立てられる。しかしいざその時が来ると、現実の事態は彼の想像を超える。そんな事が何度も繰り返されていながら、なおも計画なるものを立てようとしていた。

臨機応変が基本の『愚者』にとって、緻密な計画というものはそもそも相性が悪いのである。そうした根本的な錯誤を自ら犯してい

る事に、彼は未だ気付いていない。

彼にもっと自身を省みる習慣があれば、或いは出たとこ任せな無計画さがあれば、この二度目の一年間は大分違った展開を見せていたかもしれない。だが今の彼にそんな考えは浮かんでこない。頭が いいとは、試験で学年トップの成績を取る事だけではないのである。

義之は更に考える。不可避な吉凶の連環を表す運命のアルカナ。

正位置では幸運、出会い、解決。

逆位置では不運、別れ、混乱。

ペルソナで言えば、フォルトゥナ、エンプーサ、クシミタマ、モイライ三姉妹、ノルン。そしてヒュプノス――

「あ、ストレガのタカヤ!? そう言えばあいつのアルカナは運命だった!」

しかもペルソナはヒュプノス。ギリシャ神話では夜の女神ニュクスの息子で眠りを司り、死を司るタナトスの双子の兄弟だ。神話の関係で言えば、これほど自分と近い人物は他にいない。

(あいつとコミュか……できるかな?)

タカヤの思想は『前回』に何度か聞いている。過去に捕われず、未来を望まず、今この瞬間だけを生きる――

こうした考え方そのものはそう珍しいものではないし、理解できない事もない。仲間の皆は揃って反発していたが、状況が違えば分かり合えたかもしれない。いや、たとえ分かり合つのは無理でも、

もう少し話してみたかったとの思いは『前回』も抱いた。

それに加えて、タカヤは荒垣との因縁がある。『前回』に荒垣を直接殺したのはタカヤだが、何故そんな事をしたのか、どうもはっきりしない。10月の天田の復讐のまさにその日に溜り場にいたのは、偶然かもしれない。だが何故、荒垣を撃つ必要があったのか。

（こっちの戦力減を狙った……とか、そんな即物的な事じゃないよな。あいつに限って）

あの時の状況は天田から一応聞いているが、タカヤと荒垣の間にどんなやり取りがあったのか、その辺りの詳細は分からない。だがきつと、滅びや命に関するタカヤの思想の問題だったのではないかな。そんな気がしてならない。

そしてまた、チドリの死に関してもそうだ。チドリは順平に好意を抱くと共に、死を恐れるようになった。それがタカヤは気に入らなかつたのだらう。

（何にしても……やってみるべきだな）

コミュニティを築けるかどうかは別としても、やはり独自にストレガと接触を持つ価値はある。上手くいけば、荒垣やチドリを撃たないよう仕向ける事もできるかもしれない。更に上手くいけば、こちらの仲間に引き入れる事もできるかもしれない。何しろストレガの実力は折り紙つきだ。仲間にできれば、戦力の大幅な増強が見込める。

やるとなったら、最初の問題は接触する方法だ。そして会ってから何と言うか。何に利用するか。義之は考え出した。

6月21日の夜遅く、義之はポートアイランド駅外れの溜まり場に来た。ここで不良相手にケンカしてからまだ二週間ほどしか過ぎないが、絡んでくる者はいない。誰もが無関心を決め込み、仲間内だけで騒がしく喋っている。

場所の空気が前に来た時と異なっている事を、義之は感じていた。ピリピリと張り詰めた気配が消え、その代わりにどこか弛緩した無力感が漂っている。よそ者に対する反発力が不良たちから失われ、逆にそれらを恐れているかのようだ。ただし義之を恐れているのではなからう。

（奴らが現れ出した証拠だ）

夜に寮を抜け出し、0時が近くなるとこの場所に来る。そんな事をここ何日か義之は繰り返していた。だが目的は未だ達せられていない。これがあまり長く続くようだとタルタロス探索の計画に響くし、夜遊びは控えろと美鶴に咎められかねない。いい加減、今日辺りに出てきて欲しいものだと思いついていいると、影時間になった。

「こんばんは」

弛緩した空気が邪悪な緑色に変わるのとほぼ同時に、背後から声をかけられた。その口調に脅すような色はなく、ひどく丁寧なものだった。

振り返ると、上半身裸で両腕にタトゥーを入れ、ダメージジーン

ズを穿いた男がいた。服装のみならず、体格も異様な男である。ウエーブのかかった長髪と細身の体、何より目を引くのは肌の白さだ。北国の女にあるような、透き通る美しい白ではない。生まれてから一度も日に当たった事のない深海の軟体動物を思わせる、不吉な白だ。

男は一人ではなく、眼鏡をかけた知的な風貌の少年と、いわゆるゴスロリの少女を連れている。目当ての人物にやっと会えた。

「こんばんは」

相手に合わせて律儀に返答してやった。こういう誰にでも敬語で話す慇懃無礼タイプには、形式が重要だ。

「これはどうも、ご丁寧に」

白い男、タカヤはふっと息を漏らすような微笑みを見せてきた。皮肉げではあるが、極端な悪意は抱いていない事は見て取れる。取り敢えず第一印象は良いものを与えられたようだ。

「あんた、この時間に平然としとるっちゅう事は、やっぱ迷い込んだんやないな。ペルソナ使いやな」

タカヤの挨拶に続いて、知的な少年、ジンが問い質してきた。随分とストレートな物言いだ、素直に応じてやる事にした。

「ああ。あんたたちもか？」

「いかにも。私はタカヤ。こちらはジンとチドリ。私たちをストレガと呼ぶ者もいます」

「坂本だ」

「ええ、存じ上げております」

煙が消えるように微笑を顔から消したタカヤの返答に、義之は眉をぴくりと動かしした。ストレガが既に自分を知っている――

『前回』ストレガと初めて会ったのは8月6日だ。当然その前から下調べくらいはしていただろうが、6月下旬のこの時期に既に知っているとは、想定より早い。そうすると、情報が漏れている可能性がある。どこから漏れたのか、いくつか想像はつく。だがまずは直接聞いてみる事にした。

「何故、俺の事を？」

「あんた、ここ何日か影時間にこの辺をうろついたりしたやろ。迷い込んだようには見えんかったから、ちよいと調べさせてもらうた。ここはわしらの仕事場やさかいな。あんまうろちよろされると困るん」

（あ、そついう事……）

義之は思わず拍子抜けした。誰かさんが情報を漏らしているのかと思いきや、自分の動きが原因だった。確かにペルソナ使用の箇所など限られているから、ストレガの情報収集力なら調べもつくだろう。たとえ些細な事でも、『前回』と異なる動きをすればどこかで影響が出る。

「それは悪かったな」

「ほんなら、さっさと帰つとくれ」

ジンは手の甲をこちらに向けて、ひらひらと振ってきた。犬でも追い払うかのような仕種である。お前に興味はない、と言わんばかりである。

実際のところ、現時点ではストレガは特別課外活動部にそれほどの興味はないのだろう。『前回』彼らがこちらに興味、と言うか敵意を持つようになったのは、察するに影時間とタルタロスを消す方法が部の皆に周知された7月以降であらう。

そして『今回』はその方法、正確には偽りの方法は、未だ皆に明らかになされていない。昨日に幾月が寮を訪れて、満月ごとに現れる大型シャドウは全部で十二体存在し、アルカナの順に沿って現れる事が語られたばかりである。だからストレガは特別課外活動部をたとえ知ってはいても、積極的な妨害はおろか接触さえ仕掛けてこない。

だが言われるままにここで帰るつもりは、義之はもちろんない。

「そう言っなよ。一つ仕事を頼みたいんだが」

「あん？ あんた、マジで言っとするんか……？」

「ほっ……」

「……」

眉間にしわを寄せるジンとは対照的に、タカヤはその顔に再び笑

みを戻した。ちなみにゴスロリの少女、チドリはずっと無言のまま
で眉一つ動かさない。

「坂本さん。念の為に聞きしますが、我々が何の仕事をしている
かご存知なのでしょうね？」

もちろん知っている。最近ネットで話題の復讐代行だ。この辺り
で原因不明の死傷者が出たと、先日もニュースになっていた。

ここで素直に知っていると答える事はできるし、誰に復讐するの
かと聞かれた時の回答もあらかじめ用意してある。だが、これはチ
ヤンスだ。コミュニティで磨いてきた話術の勘が告げている。義之
は相手の質問に乗じて、核心を不意打ちした。

「祝祭……か？」

「んな……！」

余程意表を突かれたのか、ジンはそれまでの舐めた態度から一変
して、驚愕に顔を強張らせた。そんなジンを余所に、タカヤは笑い
出した。

「く……はっはっは！ 素晴らしい……素晴らしい答えです！」

タカヤは拍手をして、楽しそうに歯を見せて笑っている。悪意が
人の姿に化身したかのような異形の男が、こんな表情を持っていた
のかと少々意外に感じる。だがこちらとしては、好都合な意外さだ。

「正しく言えばそれは仕事ではなく、私たちの生きる目的そのもの
なのですがね。一度会っただけで見抜くとは……。貴方は大変面白

い方だ」

実際は『前回』に本人の口から聞いていたに過ぎない、言わばテストのカンニングのようなものなのだが、上手くいった。タカヤに興味を持たれたようだ。そしてその時、影時間が停止した。影時間にも動けるペルソナ使いをも停止させる瞬間が、遠くて近い二人の間に訪れた。

『我は汝、汝は我……』

（来た！）

既に聞き慣れた声が頭に響き、絆が心の中でカードの形を取ってコミュニティとして具現化した。アルカナは運命。タカヤのペルソナ、ヒュプノスと同じである。ここまでは想定通りだが、問題はここからだ。コミュニティの結論が、どこに向かうのか。

目標はタカヤに滅びの思想を捨てさせる事。そして最終的には、仲間に引き入れる。容易な事ではないだろうが、不可能ではないと睨んでいる。何故なら全く未知の人物とのコミュニティではないからだ。むしろタカヤの思想は、あらかじめ大方を理解できている。これは大きなアドバンテージだ。非常に観念的な人物である為、議論を重ねていけば論破や説得は可能はずだ。

そして何より、こちらには絆を教える『我』がついている。下手にやってコミュニティを壊してしまわない限り、担い手は必ずこちらに好意を抱く。コミュニティとは、そのようにできている。

「さて……話を戻しましょう。当然ご存知でしょうが、私たちは復讐の代行を生業としています。誰に復讐をお望みなのです？」

「幾月修司」

「あんだ……」

再びジンの表情が強張った。だがタカヤは笑みをますます深める。本当に仲間なのかと思ってしまっくらい、この二人は反応が対照的だ。

「くつくつく……本当に面白い方ですね。自分たちの元締めを殺せ、ですか」

元締め――

これではつきりした事がある。ストレガは幾月の今の立場も、義之が特別課外活動部の一員である事も知っている。それは元から知っていたか、或いはここ数日で自分を調査する過程で知ったのか。どちらもあり得るが、どちらでも構わない。大事なのは、幾月の殺害を断らない事だ。

義之が最も心配していたのは、ここで依頼を断られる事だった。可能性は低いと睨んでいたが、ゼロではないと思っていた。と言うのも、幾月とストレガが実際どのような関係なのか、いささか不明瞭だからだ。

『前回』の1月31日、タルタロスの頂上付近でジンは幾月の話をした。ジンは名前を知っている程度と言っていたが、鵜呑みにするわけにはいかない。とは言え、両者が完全に手を組んでいたとは考えられない。もしそうなら、8月や11月の満月の時に自分たちを妨害する必要はないからだ。そして幾月とストレガは思想や目的が似ているようでいて、実は微妙に異なる。

だが両者の間に多少の情報のやり取りがあっても不思議ではない。少なくとも互いの存在くらいは、今の時点で知っていてもおかしくない。と言うより、知っていないとおかしい。何しろ幾月は彼らを作ったのだから。だがタカヤの反応から、ストレガは幾月の死にデメリットがないか、あっても些細なものだと判断できる。利用価値くらいは見出しているかもしれないが、義之の依頼を優先している。（そりやそうだな。こいつらは幾月に恨みこそあれ、恩なんかあるわけないもんな）

義之は納得し、内心でにやりと笑った。もちろんそれを顔には出さず、依頼の詳細を詰める為に淡々と言葉を連ねた。

「ただし条件がいくつかある。まず、理由は聞くな」

「構いませんよ。私たちはいつも理由を聞きません」

「やる時期は、俺が改めて指示を出す」

幾月を今すぐ殺しては、色々とまずい。最低限、屋久島に行つてアイギスを起こしてもらってからでないといけない。

「良いでしょう」

「最後に、依頼した事はもちろんだが、知り合つた事も誰にも言うな。もし他人がいる所で会つたら、知らない振りをしてくれ」

「ふむ……それは難しいかしれませんね」

「秘密は当事者だけで共有すべきもの、だろ？」

絆にも色々な種類があるが、それらの中でも『共犯』は最も強力な繋がりの一つである。

「そうですね。努力はしましょう」

とんとん拍子に話が進む。順調すぎて怖いくらいだが、これも道理かもしれない。順平や真田もそうだが、コミュニティを通して接してみると普段とは異なる一面を見る事ができる。

タカヤはこうだ。実は物分かりがいい——
と思っていたら、落とし穴が仕掛けられていた。

「さて、それでは報酬の話に移りましょうか」

（あ……しまった！）

突然やってきた不意打ちの返礼に内心で狼狽が湧き上がり、表情に出さずにおくのかかなりの労力を使った。いや、これは不意打ちではない。単にこちらが迂闊だったただけだ。仕事を依頼するのだから、当然報酬が必要だ。

「いくらだ？」

タルタロスには何故か金が時々落ちているので、財布の中身は普通の高校生よりはる。だが殺しの相場とはどれくらいの額なのか、ちよつと想像がつかない。

「普通は金で払ってもらうのですが、貴方には金よりも払って欲し

いものがありますね」

タカヤはそれまでの楽しそうな微笑みから、笑顔の種類を変えてきた。獲物に狙いを定めた爬虫類系のハンターの笑みか、或いは新入りに通過儀礼を与える教導者のそれか。いずれにせよ一筋縄ではいかない類の表情である。

コミュニティの分岐点が早くも訪れた気配を感じて、義之は腹に力を入れて次の言葉を待ち構えた。だがタカヤがそれを投げかける前に、乱入者が現れた。

「おい……てめえら何してやがる」

荒垣だった。夏の初めのこの時期でも、いつもと変わらずロングコートとニット帽を身に着けている。ただ帽子のすぐ下から覗く目は、いつもより鋭い。元から不気味な影時間の空気が、更に緊迫の度合いを増した。

（あ……これはちょっとヤバイ）

本日二つ目の迂闊だ。場所が場所だけに、鉢合わせする可能性は当然あった。それをあらかじめ考慮に入れておかなかったのは失敗だった。事前に周囲を見回して荒垣がいるかどうかくらい、確かめておくべきだったのに。

「やあ、先輩」

「やあじゃねえよ……」

硬質化した空気を少しでも和らげようと、わざと軽い口調で言っ

てみたのだが、荒垣の表情は変わらない。咄嗟の軽い口調は、あまり効果がなかった。

「帰れ。こんな奴らとツルんでんじゃねえ。火傷じゃ済まねえぞ」

「ふっ……三つ目の条件、早速破れてしまいましたね」

「ちっ……」

片目を瞑るタカヤに対して、荒垣は舌打ちする。そして義之の肩に手を置いて、強引に後ろを向かせた。

「帰るぞ」

「どこから聞いてました？」

溜まり場を出て裏路地を歩きながら尋ねてみると、荒垣は足を止めた。そしてこちらの質問に直接的には答えず、目を覗き込むようにして尋ねてきた。

「薬か？」

（ああ……なるほど）

荒垣はペルソナを抑える制御剤を使っているが、その出所はストレガだったはずだ。義之もあれが必要でストレガに頼んでいたのでは、と早合点したわけだ。

だがこんな質問をしてくるといふ事は、荒垣は今の会話をほとんど聞いてはいなかったという事である。ならばそうそう大きな問題にはならない。今の時点では、たとえ荒垣でも幾月殺害計画を知れるとまずい。報酬の話を打ち切ってくれた分、むしろ良いタイミングで現れてくれたと考えるべきかもしれない。

「何の薬ですか？」

ストレガと接触していた理由として、薬欲しさというのは一応筋が通る。だがそう言い訳しては、特別課外活動部を抜けると荒垣なら必ず言ってくるだろう。たとえそれをこの場で断ったところで、後で真田辺りに言われたりすると話がややこしくなる。

「違うなら、いい」

荒垣は一言だけで追及の手を収め、再び歩き出した。

（おや、あっさりしてるな……）

薬でないなら、何を頼んでいたのだと突っ込んでくるかと義之は少し心配していた。突っ込まれたら、仲間にならないかと誘っていたのだ、と事実の一部を交えて言い訳しようと思っていいたくらいである。だがその必要はなかった。

荒垣は基本的に善人だし物事の気配りもできるが、他人の事情に深く踏み込む事は避けるタイプだ。そうしたところが、ここでは幸いした。この分では、今日の事を真田や美鶴には黙っていてくれと釘を刺す必要もなさそうである。

「帰れ。もう来るな」

駅前まで辿り着くと、荒垣はそれだけ言って去って行った。まだ影時間は明けていないが、義之は溜り場には戻らず、モノレールが動き出すのをその場で待つ事にした。

運命の人（2009/6/17、6/21）（後書き）

遂にオリジナルのコミュを出しました。これがやりたくてコミュとは何か、という話をくどくど語ってきたようなものです。

タカヤは非常に強烈なキャラクターですが、原作での扱いは今一つ小さいです。最終戦の前座という感じですね。それは原作主人公の最大の敵は、ニクス及びニクス・アバターだからなのでしょう。だから主人公自身はタカヤと個人的な因縁は特になく、因縁があるのは順平、真田、天田、荒垣とストーリーの本筋に直接に関わらない人たちにしているのでしょう。

極端な言い方をすれば、主人公の仲間はゆかり、美鶴、アイギスの三人だけでもP3のストーリーは成立し得るでしょう。穿った見方をすれば、主人公以外の男性陣に活躍の場を与える為に、ストレガが生み出されたのかもしれませんがね。

しかし本作では、タカヤを主人公と大きく関わらせていきます。

ちなみにこの話のタイトルを『運命1』としていないのは、運命コミュは他と異なり、本編の中で語っていく予定だからです。原作での愚者や死神コミュと同等の扱いだと思ってください。

遊びの代償（2009/6/23）

夜の時間、荒垣は巖戸台商店街にあるラーメン屋、はぐくれで夕食を取っていた。連れはいない。

ここの常連となって久しいが、大抵は一人で食べている。だがこの日はいつもと勝手が違った。二口三口と箸を動かした頃、新しく来た客がわざわざ隣の席に座ってきたのだ。何だと思って目をやれば、見慣れた顔だった。

「良く飽きもせず同じものを食べるな」

孤児院時代からの友人、真田だった。自分とはアキ、シンジと互いしか使わない名で呼び合う仲でもある。だが親友かと問われれば、微妙なところだ。腐れ縁、という関係が最もしっくりくる。

そしてそんな腐れ縁の男が言う通り、自分の前には魚介系スープの濃厚な香りが漂う特製ラーメンが置かれている。自分はこれを毎日のように食べている。単純に好きな味というのもあるが、他に店を開拓するのが面倒というのもある。例えばここの商店街には、ラーメンよりずっと体に良さそうな料理を出す定食屋もあるが、そちらに行った事はほとんどない。

だが自分としては、別にそれで良いのである。そもそも健康に気を遣う必要など、自分にはないのだから。そして何より、眼前の男が言うべきセリフではない。

「飯とプロテインを並べて食う奴に言われたくねえぜ」

ちょうどアキは早速とばかり、プロテインの缶をカバンから取り出していた。だがアキはちよつと得意そうな顔になった。

「ふん……。俺だけがやっていると思うなよ。最近、この食い方を覚えた奴がいるんだ」

「んだと……？」

思わず義憤を感じてしまった。料理が可哀想になるあの食べ方を、他にもしている奴がいると言うのか？　それが本当なら、そいつは床に正座させた上で説教の一つもくれてやらねばなるまい、などと埒もない考えが浮かんでしまった。だがプロテインの話はそれ以上続かなかった。

「まだ迷ってるのか」

そちらの話だった。二年前に特別課外活動部を抜けて以来、復帰を誘ってくるのはこれが初めてではない。

「今年になって、新人が一気に四人加わった。俺たちの活動は、お前がいた頃とは様変わりしているんだ。あそこの探索は苦労も多いが……着実に進んでいる。戻ってこい、シンジ」

「……」

すぐには答えず、少し考えた。今月の上旬、ポートアイランド駅外れの溜まり場にやって来て、不良どもとケンカして帰った四人組あゝの連中が加入した新人であろう事は、容易に察しがつく。色々と甘い奴らだと、今後が少し心配になった。当の四人もそうだが、あんなガキどもをアキと桐条に任せておいて大丈夫なのかと。

昔からアキは単純馬鹿だし、今も変わっていない。桐条はアキよりはいくらかマシだが、似たようなところがある。要するにガキがガキを面倒みているようなもので、先行きに不安を抱かせたのだ。理事長は大人だが、裏方が守備範囲の顧問は現場にまで手が届かない。

だがそれから三日後、町中で新人の一人と偶然会って少し話をした。坂本というあの男――

（あいつは……切れる）

他人と関わらないようにしている自分の柄ではないが、坂本には若干の興味を覚えた。頭がいい事は少々の話だけで良く分かったし、心構えもなかなかのものだ。あいつがいれば特別課外活動部はそうそう酷い事にはなるまいと、その時は思った。

だが――

（あの野郎、何してやがった……）

一昨日の影時間、坂本は溜まり場でストレガと何かを話していた。話の内容は聞いていないが、あんな奴らと関わらせてはいけないと思つて強引に坂本を去らせた。我ながら甘い事だと思う。だが気になる事があつた。

「新人に坂本つて野郎がいるだろう」

「ん？ ああ、なかなか大した奴だぞ」

「そいつ、ちゃんと呼べてるのか？」

自分も使っている、あの薬が坂本は必要なのかと。もしそうなら、坂本は特別課外活動部を抜けた方がいい。薬は自分から回してやればいい。不安定なペルソナ召喚は本人だけでなく、周囲にも多大な危険をもたらす。最悪の場合、自分の二の舞になってしまう。

一昨日に本人に聞いた時は、何の薬かと問い返された。あの場では話をそこで終わりにしたが、坂本は頭が切れる。平然とした顔で嘘を言っていたのかもしれない。そこで単純馬鹿に改めて確認してみたのだが――

「もちろんだ。部で一番上手いくらいだぞ」

アキは何の淀みもなく、至極簡単に答えた。

「そうか……」

単にアキが気付いていないだけかもしれないが、坂本の目的は本当に薬ではない、という気がしてきた。そもその話、特別課外活動部の現役メンバーが薬をストレガに頼むのは不自然だ。自分はレールを外れたからあの薬をストレガから買っているが、レールに乗っている坂本がそうする必要はないはずだ。薬がいるなら、桐条か理事長辺りが対処するだろう。

だとするなら、坂本は連中と何を話していたのか。条件がどうか言っていたので、何かを頼んでいた事は確かだ。ストレガがする事と言えば――

ここ最近、シャドウの仕業とは思えないものの、影時間が関係しているらしき不可解な事件がいくつも起きている。昨晚もあの場所

で、常連の不良が重傷を負う事件が起きた。

坂本は、実はとんだ食わせ者かもしれない。ここでアキに警告しておくべきだろうか。そう思ったが――

（いや……それこそ俺の柄じゃねえ）

ストレガが関わっている事だ。どうせろくな事ではあるまいが、自分が干渉する筋合いはない。先輩面して余計な世話を焼いたところで、何がどうなるわけでもあるまい。これはプロテインがどうかの問題ではないのだ。そもそも言ったところで、アキが信じるとは限らない。逆に藪蛇になる。気になる事があるなら自分の目で確かめるとか言つて、この場で寮に引きずって行きかねない。

「その力、無駄にするな。俺たちには必要だ」

考え事をしている間に、アキは話を戻してきた。だが自分の答えは考えるまでもなく、とうに決まっている。

「無駄でいいんだ。俺は力を捨てたんだ。戻る気はない」

これまで復帰を誘われる度に、自分はこう言つて断ってきた。あの事故があつて以来、二度と力は使うまいと固く誓つたのだ。ケジメをつける事さえできないのだから、長生きしない事だけが自分ができる償いだ。

そして何より――

「てめえの遊びに付き合つてられっかよ」

5月の病院でも言つた事を繰り返し、席を立った。

自分もそうだが、アキも影時間やタルタロスの発生には何の因縁もない。詳しい事は聞いていないが、あれは桐条の身内が生み出したもので、それ以上でも以下でもない。忌々しいとは思うものの、結局は自分たちと無関係の代物だ。そんなものに関わるのは、遊び感覚だからできる事だ。自分が抜ける前、アキが一人で熱を上げて突っ走っていた頃を思えば、それが良く分かる。

そしてそんな自分たちの遊びの為に、巻き込まれて死んだ人がいるのだ。それでどうして戻る事ができようか。

「おい、待て！」

店を出ると、アキが追いかけてきた。強引に振り向かせて、左手で胸倉を掴んできた。そしてこちらを真っ直ぐ睨みつけてくる。

「俺は遊びでなんかやっていない」

(?……)

「俺は命を賭けてるんだ！」

アキが激するのは別に珍しくないが、少々意外に感じる類の剣幕だ。トレーニング感覚でシャドウと戦っていた二年前の姿からは、なかなか結びつかない物言いである。

自分がいた頃はタルタロスを本格的に探索した事はなく、主に相手をしていたのは外で暴れるイレギュラーのシャドウだった。だが人数が増えて戦いが本格化した分、アキも本気になったという事であろうか。もっとも、本気になるなど今更の事だ。遅すぎるくらい

である。

「ふん……。だから何だってんだ」

そもそも特別課外活動部のやる事は実戦なのだから、命を賭けるくらい当然だ。そんな事を改めて言う方がおかしい。そして命を賭ける事は、別に特別ではない。免罪符にもなりはしない。

「命賭けるだけなら、バイクで峠攻めたりすんのと変わりやしねえ」

「何だと……？」

世の中には遊びで命を賭ける人間もいる。遊びでないのは仕事でやるプロか、譲れない目的がある人間だけだ。例えばプロの研究者である理事長とか、身内の後始末の為に戦っている桐条とかだ。そしてアキは、そのいずれもない。

敢えて言うなら、孤児院の火事で死んだ妹を助けられなかった事の代わり、という考えがアキにはあるかもしれない。だがそれは単に過去を切れないというだけの話で、戦う目的にはならない。

胸倉を掴んだアキの左手首を握り、ゆっくりと離させた。アキの腕に込められた力は強くはなく、簡単に外れた。

「てめえも俺と同類だろうが」

今度こそ背を向けると、アキは追いかけてこなかった。

遊びの代償（2009/6/23）（後書き）

荒垣の視点からの話でした。

本作は基本的に主人公視点で、時々第三者視点を混ぜて書いていますが、今後は主人公以外の視点も少しずつ増やしていく予定です。

隠者2（2009/6/30）

義之は保健委員である。しかしこれまで委員会の仕事は、ほとんどして来なかった。

『今回』は何故か順平はネットゲームをくれず、代わりに担任の鳥海から押し付けられる形で、『前回』は全く縁のなかった委員会に入る事になってしまった。そうして年上の同級生である長谷川と隠者のコミュニティを築いたのが、5月8日だった。

それ以降、義之は度々保健室に顔を出していたが、保健委員の活動日である火曜と木曜以外の日に来る事が多かった。目的は保健室の主である江戸川と話す事である。タルタロスに行った次の日に疲労が抜けなかった時などに、怪しい薬を貰うと共に江戸川を引き留めて話をするのが、これまでのパターンである。ちなみに江戸川の薬は臭いこそ強烈だが、別に体に害はないので義之はいつも平気な顔で飲んでいる。ただ体に良いわけでもないので、疲労が回復したりはしないのだが。

これまでの江戸川との話題は、タロットに関する事が多かった。『前回』から総合学習の授業で学んできてはいるが、『今回』はより深く話を聞いていた。二十二枚の大アルカナのカードのそれぞれの意味の学び直しから始まり、最も一般的なマルセイユ版とウェイト版やトート版タロットの解釈の違い、更にはシャッフルの仕方なども学んでいた。コミュニティを進める上で役に立つ事があるかもしれない、と思ったからである。

そのようにかなりの頻度で保健室を訪れながら、委員会の活動日は意図的に避けていた。コミュニティの担い手である長谷川と特別

な関係になってしまったら困る、という考えがあつたからである。

そして長谷川の方も、義之が来るのを期待している様子は希薄だった。休み時間に廊下で偶然会つた時などは、今日は来るかと聞かれる事もあつた。だが無理だと言つても、長谷川は嫌な顔をしない。元々保健委員は一人でもこなせる程度の仕事しかないので、暇で暇でどうしようもない時だけ来てくれればいい、などと言って笑つていた。

そうした言葉は本心とは限らないが、それに甘える形で義之はこれまで委員会に本腰を入れてこなかった。しかし岩崎と特別な関係にならないまま戦車のコミュニティを極められた事などもあつて、そろそろ隠者も進める気になつていた。

『前回』はなかつたコミュニティだけに、隠者は今後の展開が読めない。だが今更それを言つてはいられない。一度発生したコミュニティは取り消しがきかないのだ。何とか上手くやっていこう、くらの気持ちで義之は委員会に顔を出した。

保健委員は基本的に暇である。主が怪しすぎる事を原因として、保健室を訪れる生徒は元々少ない。そして皆それを分かっているから、義之に限らず保健委員はサボつてばかりの生徒が多い。この日に出てきた委員は、義之と長谷川の二人だけだった。江戸川はいるが、怪我や病気の生徒が来ない限りは奥の小部屋に籠っているので、二人きりも同然である。

「新聞？」

そんな中で、この日は珍しくやる事があつた。何でも学級新聞に

保健室から記事を掲載する事になったらしい。

「そうなの」

長谷川の担任で図書委員の顧問も務めている化学の大西から、正しい手の洗い方とか、風邪の予防方法とかを書けと話があったとの事だった。

「先生が書くのか？」

「江戸川先生には任せないんだって。黒魔術……？ の実践方法とか書くから駄目って、大西先生が却下したんだって」

（黒は書かないと思うが……）

江戸川はいわゆる黒魔術に代表される邪術に対しては、否定的な見解を持っている。総合学習の最初の授業でも、邪悪な者は無力になるか破滅するかのと通りしかないと断言していたくらいだ。故に江戸川からすれば大西の言い分は本意だろうが、敢えて擁護はしない。

「それがいいだろうな」

黒ではなくとも魔術に関する事は絶対に書くだろう。『抜いの歴史と実践について』とか題して、消毒とは異なる意味での清めに関する文章くらい書きそうだな。

余談だが、江戸川の授業によれば黒魔術とは古代ギリシャに起源を持つオルフェウス教の信者たちが、神話で語られる行為を実際に行おうとした事に端を発するそうである。そしてそうした乱痴気騒

ぎをオルギアと称するのだとか。

そんな他愛もない（？）話をしていると、突然乱入者がやって来た。

「長谷川いる！？」

保健室の扉がけたたましく開けられ、派手な女子生徒が乗り込んできた。顔を真っ赤にした、かなりの剣幕である。

「人の彼氏に手出してんじゃねえよ！」

「彼氏……？」

「とばけてんじゃねえよ！ マー君言ってたんだから！ 長谷川に誘惑されたって！」

女子生徒は何やかやと大声で喚きたて、遂に手を振り上げた。長谷川はそれを見て肩をすくめ、目を閉じた。

だが――

「その辺にしとけ」

どこかで聞いたようなセリフと共に、義之は女子生徒の手首を掴んで止めた。ただの女子生徒の平手打ちくらい、ペルソナを使わずとも止めるのは難しくも何ともない。

「何よ、あんだ！」

「俺は保健委員で、ここは保健室。怪我や病気なら先生を呼んでや

る。そうでないなら帰れ」

派手な女子生徒は睨んでくるが、こちらも瞬きせずに睨み返す。こつした周りを見ずに騒ぎ立てるタイプには、無言のプレッシャーが一番だ。そうして数秒間が過ぎて、やがて女子生徒の腕から力が抜けた。義之も手を離れた。

「まったく、ババアのくせにイキがんなよ。男漁るなら、こいつにでもしとけて」

そんな捨てゼリフと共に、女子生徒は出て行った。扉は後ろ手で乱暴に閉めた。

（余計な事を……）

女子生徒が出て行った後の扉を見つめながら、義之は顔には出さないながらも内心で苦々しい思いを感じた。騒ぐのは勝手だが、一言余計だ。これはフォローしてやらねばなるまい。

「何なんだ、あいつ？」

視線を保健室の扉から長谷川に戻すと、そこには意外に落ち着いた表情があった。ただ本心まで顔と同じとは限らないが。

「うん……」

話によると、少し前の委員会の活動日、義之が来ていなかった日に長谷川と同じクラスの男子生徒が保健室を訪れて、カラオケに誘ってきたらしい。長谷川は高岡という名のその男子の事は良く知らないらしいが、誘いは受けたとの事だった。

「馬鹿な奴らだ……」

そこまで聞いて、義之は大体の事情を察した。先ほどの女子生徒は高岡の彼女で、カラオケに行った二人の姿を目撃した。もしくは人づてに聞いて、後で男を問い詰めた。そして男の方は、誘われたと言いついた。そんなところであろう。

「悪く言わないであげて。彼氏を信じているのよ。それに……私にも下心あったし」

「下心？」

聞き返した義之に向けて、長谷川は弱弱しく微笑んだ。

「同じ年頃の子を好きになれたら……って思ってたから。駄目だったけど」

「……」

同性相手ならともかく、異性に対して自身の恋愛話をするのは、なかなかある事ではない。まして義之と長谷川は、ともに会話をするのも初めてに近い関係である。それでいながら、こんな事を言うのは何故だろうか。

表情こそ平静なもの、いきなり怒鳴り込まれて流石に動揺しているのか。それとも助けられた感謝の気持ちと共に、義之に急な親近感を抱いたのか。はたまた絆を教える『我』が、裏でまた何かしているのか。

普段の義之であれば、長谷川のそうした心の動きの原因を探るところである。だが何故かこの時は、長谷川の発言そのものだけに意識が捕われた。

（まるで年の離れた人を好きでいるみたいな口振りだな）

年の離れた人――

世の中には少年を偏愛する女もいる。そうした女の間では、きつと天田のような少年は大人気を博す事であろう。

（長谷川はそういうタイプじゃない……気がする。すると年上か？）

年上好きと言うと友近のようだが、長谷川はあれとはタイプが全く異なる。ファッション感覚の友近と違って、本気で好きな年上の男がいる。だが何かの事情があつて、報われる事はないと半ば諦めている。そこまで推察した。

「無理してないか？」

これで相手が男ならば、察した事をぶつけてみる手もあるが、女相手なので流石に自重した。すると長谷川は笑顔の種類を僅かに変えてきた。

「私ね……自分なんてないの。引っ張ってくれる人がいたら、喜んでついていくわ」

（喜んで……か）

何とも受け身だが、こうした考え方は理解できる。長谷川の人との接し方は、義之のそれと通じるものがある。ただ『愚者』の義之

と違って、隠者を象徴とする長谷川は相手に完全に同調はできない。だがそれは言い方を変えれば、実は自分を持っているという事だ。それも普段は穏やかな表情に隠されている分、かなり強烈な代物を持っていると見た。

隠者のアルカナ――

タロットの解釈では、隠者は愚者と深い繋がりがある。簡単に言うと、隠者は愚者の先輩だ。愚者が当てのない放浪者なら、隠者は放浪を終えて帰ってきた人物だ。放浪の旅から、果たして何を持ち帰って来たか。

『前回』の担い手だったY子はインターネットの住人という意味で隠者だったが、長谷川は内面においてそれだ。少ない言葉の裏側に自然と寄り添うように、理解が進んでいく。理解が行き過ぎて、うっかりするとこちらが好意を抱いてしまいそうになる。

（注意しないとな……）

長谷川は自身に好意を寄せる男が現れたら、全てを捧げてでもその男を愛するタイプと見た。男がその気持ちに十分応えられれば問題ないが、応えられないと大変な事になりそうだ。

もし『今回』の女関係で何かしら失敗して、長谷川を含む複数の相手と特別な関係になってしまったら色々危険だ。世界の終わりを生き延びておきながら、女に刺されて死ぬという間抜けな結末を迎えてしまうかもしれない。何しろ『愚者』は相手の気持ちに対して、真実でもって応える事ができない。

「もう新聞とかの気分じゃないな。続きは明後日にしよう」

そう言つて義之は長谷川を促し、帰り支度をした。既に時刻は放課後の遅い時間になっている。

「ん、そうね。ごめんなさいね。貴方にも嫌な思いをさせてしまつて……」

「構わないさ」

義之は何気なく答えた。口を動かす前に何も考える事もなく、勝手に言葉が出てきた。

女相手のコミュニケーションを安全に進める為には、誰か別の男に引き取ってもらうのが最善である。たとえそこまで行かなくても、担い手の気持ちが他の男に向いているだけでも良い。『今回』の戦車の顛末から、義之はそう判断している。だから長谷川に好きな男がいるのなら、歓迎すべき事である。

それでいながら、義之の心に喜ぶ気持ちは何故か湧いて来なかった。その代わり、自分自身に注意を払っていた。次の活動日にまた委員会に顔を出す事を、さりげなく口にしながら。

隠者3（2009/7/2）

保健室に女子生徒が殴り込んでくる騒動があつてから二日後。委員会の活動日に、再び義之は保健室にやって来た。二日前に話に上がった、手の洗い方などの記事を学級新聞に掲載する仕事を行うのである。ただこの日の放課後には、長谷川が既に文章の大方を作り終えていた。それだから義之がした事は、文面の見直しと体裁を考えるくらいだった。

そうして新聞の仕事を終えるまで、保健室を訪れる生徒は一人もいなかった。ちなみに二人以外の保健委員も来ておらず、江戸川も奥の部屋に閉じこもったままである。

そんな中、廊下に通じる扉が開いて女子生徒が保健室に入ってきた。しかし長谷川と目が合うや、回れ右で戻って行った。

「……帰っちゃったね。今日暇なの、私のせいかな。やっぱり」

「いつも暇だろう」

「そうなんだけど……私、ちょっと浮いてるみたい。何て……それこそいつもの事よね」

長谷川は弱弱しく微笑んだ。既に何度か見ているその表情で、最近の状況を口にした。クラスでも誰にも話しかけられず、挨拶しても返ってこないらしい。ただ直接何かされるわけではないので、イジメとは違うと思う、とも言い添えた。

「凄く……遠くにいる感じよ」

生徒の中で最も年上である事を原因、或いはきっかけとして、長谷川は周囲に馴染めていない。それがここ最近になって、より顕著になったようである。

（この間の件か）

一昨日の騒ぎの事だ。あの時の女子生徒が高岡という男子生徒が何か言いふらしたかして、良くない噂が立っているのだろう。長谷川はイジメとは違うと言うものの、それは言い繕いだ。イジメとは以前に風花が受けていたような、直接的な行動を伴うものばかりではない。無視を決め込まれるのも、十分に辛い事である。

「あ、貴方も私といると変な噂が立つかも」

そんな辛さを隠して、こんな事を言ってきた。対する義之は何も答えなかった。

「……」

それは困るな、と冗談めかして言う事はできる。実際問題、誰とも特別な関係になるつもりのない義之は、長谷川との仲を噂にされるのは迷惑なはずである。或いはフォローのつもりで、構わないと敢えて答える事もできる。

自由に動かせる口を持つ『愚者』は、どんなセリフでも望むままに言える。それにも関わらず、どうしてか何の言葉も出て来なかった。そればかりか、心の中でも言葉が浮かばなかった。

とは言うものの、何の感慨も抱いていないわけではない。長谷川

が言葉の裏側に隠している辛さを察する事ができている。だが察していながら、応じる言葉が浮かんでこないのだ。心の中では何かが確かに動いてはいるが、外へ向ける為の明確な概念や言葉の形になっ
てこない。

顔の周りに空気はあるのに、息の仕方を忘れた。そんな気分である。胸の辺りが痺れて苦しくなる。

そうしたどこか不自然な沈黙が夏の暑い空気をやや冷たくする感覚の中で、再び保健室の扉が開いた。今度の訪問者は回れ右をせず、そのまま遠慮なしに入ってきた。ただし生徒ではない。長谷川の担任でもある、化学の大西だ。

「ああ、いたいた」

大西はそう言って、保健室の二人の間の奇妙な感覚を一息で吹き飛ばすように、無遠慮に話を始めた。例の学級新聞のスペースが予定より余ってしまったので、追加で何か書いてほしいとの事だった。

「何を書きましょう?」

「長谷川が書きたい事、ない?」

「ないです」

即答である。自分なんてない、などと言う長谷川らしいと言えるらしいが。

「あっそう。じゃ、恋愛相談でも書いてくれ。お便りと回答、適当にな」

図書委員の生徒を中心に、読みたい記事を調査した結果がそれだったらしい。

「恋愛相談……ですか」

「低俗だよな。けど読みたいってんだから書いてやれ。スペースはキツチリ埋めろよ。江戸川先生に変な事書かせないようにな」

大西はこの学校の教師たちの中では比較的まともな部類に属するが、堂々と生徒にヤラセをさせようとする辺り、やはりいい加減なところがある。しかも恋愛相談が保健委員のところに舞い込んでくるのは不自然なのに。保健室の主である江戸川の事を思えば尚更だ。

ついでに言うと、非科学的なものを信じない大西はオカルティストの江戸川を疎ましく思っているようである。だがそんな二人であるからか、逆に実は良い仲なのでは、との噂も一部の生徒の間ではある。本当かどうかは義之も知らないが。

それはさておき、大西は新聞の原稿を長谷川に渡して去って行った。追加の仕事を押し付けられてしまったわけだ。

「こんなに書けるかしら……」

大西が去ってから、長谷川は不安げな声を漏らした。見てみれば、スペースはかなり余っている。

「恋愛相談か……。どんな悩みだと本当っぽいかな？」

彼氏ができない、彼氏がしつこいとか色々思い付くが――

「彼氏が浮気している……とか？」

義之の口から、どうしてかこんな言葉が出てきた。思わず我が身を省みてしまったのかもしれない。

「そういうものなのかな？」

「……知らん」

知らない。と言うより、知りたくもない。『前回』は学級新聞なるものに目を通した事はなかったが、もしかすると特別な関係になった誰かが、実際にそうした相談を投稿していたかもしれない。そう思うとぞつとする。

そんな身から出た錆に恐れを抱いた義之から長谷川は視線を外し、保健室の机に向かった。そして原稿のスペースを見つめながら、何か書こうとしている。だが考え込む仕種が続くばかりで、ペンは止まったままである。そのまましばらく時間が経過してから、長谷川は振り返ってきた。

「駄目、全然書けないわ。記事の見出しとか体裁は私が書くから、中身書いてもらえる？」

（書きたくないな……）

書きたくない。後ろ暗い事が山ほどあるだけに、浮気問題など書きたくない。文章の中に無意識的に事実を紛れ込ませてしまいそうだ。恐怖を知らない『愚者』でありながら、何だか猛烈な不安感を自分自身に感じてしまう。

「私よりずっとマシだと思うわ。私、全く分からないから」

「……」

「……」

義之は沈黙を続け、長谷川もしばらくは言葉を重ねなかった。そうして視線の交換を数秒間行った後で、長谷川は急におかしな事を言い出した。

「私の経験なんて、クソの役にも立たないもの」

「……何か言ったか？」

耳を疑う、とはこういう事を言うのであろう。思わず聞き返した義之に、長谷川は声を上げて笑い出した。

「ふふっ……あははは！」

耳に続いて、目も疑ってしまった。笑うにしても悲しむにしても、常に何かを隠している長谷川のこんな表情を見るのは初めてだ。もちろん付き合いは長くはないが、奇妙なほどに意外に感じる笑い方だった。

「ごめんなさいね。一度悪い言葉を使ってみたかったの。どうだった？ 似合ってた？」

「……全然」

実際のところ、全く似合わないと思う。例の怒鳴り込んできた女子生徒じゃあるまいし、長谷川が悪い言葉を使っても不自然なだけだ。これがもし役者であれば、何を言わせるんだと監督や脚本家にクレームが行くだろう。

「はあ、おかしい……。言いたい事を言うのって素敵ね。心と言葉が同じって、何て気持ちいいのかしら」

「……」

長谷川は腹を抑え、目に涙まで溜めながら笑っているが、対照的に義之は再び沈黙した。ただ動こうとしないのは口だけで、その裏側の内心では急激な葛藤が湧き上がっていた。

心と言葉が同じ――

今まで考えた事もなかった。

もし『前回』常に心のままに喋っていたら、どのような一年間を送っていただろうか。コミュニティをことごとく壊してしまつて、猛烈な悪評を校内にまき散らしていただろうか。それともかえって好感を持たれて、より良い結果を得られただろうか？ 例えば卒業式の日を越えて生き続けたり、そもそもニユクスの来訪を未然に阻止できたり。

（ちょっと待て……何かおかしいぞ。どうして俺はさっきから自分の事ばかり考えているんだ？）

長谷川の近況を聞いてもフォローの言葉が出てこなくて、胸の辺りに苦しさを覚えた。『前回』の女関係の不誠実さを意図せず思い起こして、ペンを握る事に恐れを抱いた。相手を目の前に置いたコ

ミニニティの活動をしていながら、自分自身の内面ばかりを見てしまっている。だが長谷川の次の言葉で、平手打ちを頬に食らったように全ての葛藤が張り飛ばされた。

「貴方を見ててそう思ったの。きっと羨ましかったんだわ」

聞いた瞬間、義之は呆れた。思わず顔に出してしまいそうになるくらい、本当に呆れた。

（何を言っているんだ、こいつは……）

大嘘吐きの『愚者』を捕まえて、何を言っているのだろう。イゴールに褒められるほどの仮面を使い分ける名人を正直者などと評するのは、ファルロスが陰険だとか、綾時が真面目だとか言うのと同じくらい間違っている。

正直者の坂本義之――

それは言葉の矛盾とさえ言って良い。乾いた水と同様にあり得ない。

ミニニティとは道理に合わないものである。『今回』の戦車でそれを悟ったが、隠者においても一つの裏付けを得た気がする。善人と評するよりもなお間違った印象を、相手に与えるとは。

（どんな仮面を見てたんだか……。まあ、どうでもいいか）

自分が今まで何の仮面を付けていたのか、意識するのを忘れていた。だから彼女は自分の何を見て羨ましいなどと思ったのか、想像もつかない。だが理由がどうあれ、こちらに良い印象を持ったのなら、ミニニティを進める上では有益である。そのくらいで義之は

思考を停止させ、それと共に己の内面ばかりを見つめる視線も切り捨てた。

「分かった。俺が書くよ」

義之はそう声を出して己の沈黙を破り、机に置かれた新聞の原稿を手にとった。そしてスペースを何で埋めようか、改めて考え出した。冷静さを取り戻したので、自分のペンももう恐れはしない。やろうと思えば浮気問題でも書けるだろう。

（でもこれは高校生向けだからな。あんまり不穏なものは書けないな）

クソの役にも立たない彼女の恋愛経験とは、どんなものなのか知らない。だが学級新聞に載せられる類のものではないのかもしれない。自分の経験とて、浮気問題は新聞には載せられない。だがそれ以外にも書くネタはある。

（ただ……紀貫之で書いた方がいいな）

平安時代は女が使うものとされていた仮名文字で日記を書いた人、鳥海が言うところのネカマになる事にした。何しろ保健委員に男は義之しかいない。男の視点で書いてしまつては、この記事がヤラセである事を大西が漏らしたりしたら、作者がバレてしまう。そうやって話の元ネタを人から追及されたりしたら面倒である。

そうして義之は『彼氏が遠くにいて寂しい』というお便りを書いた。今は遠く南の島にいる女性、正確にはそれに近い存在を思い浮かべながら。

（まあ、もうすぐ再会するんだけどな）

そんな近い将来に予定されている事を思いつつ、義之は『寂しいなら会いに行け』という主旨の回答を書いた。そちらも女の視点で。

隠者3（2009/7/2）（後書き）

同じコミュを二話続けました。ですがこれにて一区切りで、隠者の続きはかなり後にお届けする事になります。

実は本作の隠者は、コミュとしては運命の次くらいに重要な位置付けをしています。うまく表現していけるかどうか……。

傾向と対策（2009/7/7）

七夕の夜が来た。影時間の開始と同時に特別課外活動部は全員が作戦室に集合し、ペルソナを召喚した風花を見つめている。その中には幾月もいる。そして程なくして、ルキアの探査に反応が出た。

「見つめました！ 市街地に大型のシャドウ反応！ 場所は白河通り沿いのビルです」

大型シャドウが満月ごとに現れる事は、既に皆に周知されている。一応今までは仮説の段階だったが、今日の出現にて裏付けが取れたわけである。

「白河通りか。なるほどねえ……」

出現場所を聞いた幾月が意味ありげな笑みを浮かべた。満月が近づくごとに影人間は増えていくのはいつもの事だが、今月に限っては男女の二人一組で発見されるケースが多い。その点から幾月は察したのであろう。

もつとも幾月が今日のシャドウについてたった今理解したのかどうかは、微妙なところである。月に一度の出現周期のみならず、シャドウが町のどこに出現するのも、事前に知っていた可能性はある。例えば十年前の事故の際に散らばったシャドウが飛んで行った方角とか、タロットカードの解釈などを根拠にして。

「……そういう事か」

「ああ、ホテル街ね」

幾月の真意は別にして、美鶴も同様に察したようである。そして順平も察しただけでなく、口に出して言ってしまった。それを聞いて、ゆかりは嫌そうな顔をした。

「何か今日は嫌な予感がする……。行くの止めようかな……」

（大当たり）

義之は内心で同意した。実際のところ、ゆかりの予感は正しいのである。まさしく女の勘という奴である。

この日の前から、義之はメンバー編成に少々悩んでいた。『前回』はゆかりとホテルの一室に放り込まれて、事の寸前まで行ってしまったのだ。今にして思えば、あれはゆかりが自分を意識する原因の一つであつただろう。ゆかりと特別な関係にならないようにする為には、あれが起きないように仕向けたい。もちろん美鶴とも起きないように。それには男三人だけで行くのが確実である。だが『前回』は、ここで順平が――

「こらこら。どんな予感が知らないが、理由もなく外れる事はできないぞ。編成を決めるのは坂本だ」

「分かってますよ……」

（おや……）

意外にも、順平ではなく真田が口を挟んできた。上級生に窘められる格好になったゆかりは、僅かに口を尖らせつつも大人しくしている。そして順平は黙っている。

『前回』はこの時に順平が余計な事を言った為にゆかりが頑なになり、前線入りを予約してしまったのだった。だが『今回』はそうならなかった。魔術師のコミュニティの影響で順平が大人になっているからか、或いは星のコミュニティの影響で真田が戦いに真剣になっているからか。はたまた予約などと言えるほど『今回』は甘くない事を、ゆかりも理解しているからか。

いずれにせよ、これなら三人だけで前線に出る事も可能である。だがそれはそれで問題がある。

「山岸、今日は一体だけか？」

「待つてください」

本当は聞くまでもない事であるが、敢えて聞いた。すると風花は目を閉じ、探査を再開した。すると割と早く答えが返ってきた。

「あ……大きな反応が二つあります！」

作戦室がざわついた。先月の満月では二体同時だったから、今月もそうなる可能性は当然あった。だから数そのものに驚いてざわついているのではない。シャドウに脅威を感じているのだろ。少々不貞腐れた感のあったゆかりの表情にも、緊張感が強く現れている。そしてそれは他のメンバーも同様である。表情に変化がないのは、義之と幾月くらいである。

「今日は五人で行きましょう」

そんな幾月を目の端で確認してから、義之は美鶴に向けて言った。

「そうだな……大物が二体だ。全戦力を傾けなければ、対抗できないかもしれない。分かった、五人で行こう。山岸はここからサポートを頼む」

風花のサポート能力は、階数が二百を超えるタルタロスのどこにいても届くほどだ。タルタロスの外でも、作戦室にいながらにして町中どこにでも届く。だからこの場所からでもサポートは可能である。

男三人だけの編成にしなかったのは、単に戦力的な問題があるからである。事が起きるのを防いだところで、力不足でシャドウに負けたら何の意味もなくなってしまう。実戦と事のどちらが重要かなど、考えるまでもない。

そして四人ではなく五人で向かう事にした理由は、三つほどある。最大の理由は、五人での戦いを試したいからだ。

二つ目の理由は、四人編成では自分とゆかり、もしくは美鶴が組にされてしまうと推測しているからである。と言うのも、『前回』は自分、ゆかり、真田、順平の四人で向かい、ゆかりと組にされたのだった。同じメンバーで行けば確実に同じ組み合わせになるだろうし、ゆかりの代わりに美鶴を入れても駄目だと思われた。『前回』は美鶴とも特別な関係になってしまった事を思えば、そうなる可能性はかなり高い。ちなみに『前回』真田と順平の二人に何があったかは聞いていない。聞きたくもない事である。

そして三つ目の理由は――

（運次第だな）

五人編成だと、男が一人余る事になる。運が良ければ自分が余りになるだろう。或いは順平辺りが一緒になって三人で、となるかもしれない。あの状況でも二人きりでなければ、ゆかりが自分を意識する可能性は低くなる。また運悪く『前回』と同じになっても、余った人（多分順平だ）を煽って軽く茶化してやれば、冗談のネタにってしまう事もできるだろう。何とか上手くやっていこう、くらいの気持ちで義之はいた。

風花と幾月を寮に残して、五人で白河通りまでやって来た。そして目の前にはラブホテル、幾月に言わせるとアミューズメントホテルのシャン・ド・フルールがある。フランス語で花畑を意味する言葉である。喫茶店やケーキ屋にありそうな名前だが、『頭の中が花畑』という表現も世の中にはあるくらいだから、考えようによっては適切なネーミングかもしれない。

ホテルに入ると、廊下をうろついているシャドウに出くわした。ただし大型ではなく、タルタロスにも出現するものだ。

「狭いですから、落ち着いていきましょう」

義之は皆に注意を促した。五人で戦うのは、これが初めてである。『前回』からタルタロス探索でも満月でも前線に出るのは三人か四人だったし、『今回』もそうしてきた。

その理由は二つある。人数が多すぎると、リーダーとして全員に目を配るのが難しくなる事が最初の理由。そしてタルタロスは概して通路が狭く、五人以上になると道が混雑して戦力を上手く活用で

きなくなる恐れがあるのが、二つ目の理由である。

だがそうした消極的な事は、いつまでも言ってはられない。これから日を経るごとに戦いは激化する一方となるのだ。『前回』より遥かに手強い『今回』のシャドウに立ち向かう為には、五人以上の戦いもできるようにしなければならない。そして今日の戦いは、実は多人数の指揮を試すのに適した条件が揃っているのである。

群がるシャドウを蹴散らしながら、義之たちはホテルの三階までやってきた。ホテルの廊下はタルタロス同様に狭いが、現れるシャドウは数が少ない。そしてその種類も既に皆がタルタロスで戦った経験のあるものばかりなので、効果のない攻撃を仕掛けてしまう恐れも少ない。よって初の五人による戦闘は、危なげなくこなす事ができた。

「その部屋から、大きなシャドウの反応があります。気をつけて！」

三階の最も奥にあるスイートルームのドアの前で、風花から通信が入った。先頭に立っていた義之は、一度振り返ってメンバーに視線を素早く走らせた。皆が一樣に緊張感を持っている事を確認してから、ドアノブに手をかけた。

「行きましょう」

法王の間と銘打たれた部屋に突入した。部屋の中央には、はち切れんばかりの巨体を小さな椅子に無理矢理めり込ませるようにして座っている、人間の姿のシャドウがいた。左右に十字架、と言うより紙で作った人形のようなものを配し、背後にはサンゴのような奇怪な頭部と人間の女の体を持った怪物を立たせている。五番目の大

型シャドウ、ハイエロファントだ。

場所からすれば、見た目は比較的まともである。だがそんな些細な事は誰も気にしない。もっと気になる事が、義之を除く誰にとってもあるからだ。

「一体しかないのか？ 山岸、もう一体はどこだ！？」

眉根を寄せながら部屋を見回した美鶴が、少々高くした声を通信機に向ける。返答はすぐに返って来たが、美鶴を満足させるものはなかった。

「済みません……。建物のどこかにいるはずなんです、反応が弱くて、はつきり捕えられないんです」

「ぬう……」

「バラバラに出てくるなら好都合です。もう一体の探知は後回しでいい！ こいつの解析を頼む！」

義之は美鶴を制し、風花に指示を出した。もう一体のシャドウ、ラヴァーズはハイエロファントを倒した後に出現する事は、『前回』の経緯から分かっている。そして風花に解析を指示したのは一種のアリバイで、本当はするまでもない。だから結果が出る前に他のメンバーにも指示した。

「前衛は左右に真田先輩と順平、攻撃は打撃のみ！ 桐条先輩は俺と中衛、攻撃は魔法中心！ 岳羽は後衛で防御と回復に専念しろ！ 攻撃はしなくていい！」

「え、それでいいの？」

「人数が多いから、やり過ぎると同士討ちの危険がある！」

ゆかりは疑問を口にしたが、義之はそれも制した。ハイエロファントは電撃を多用する為、それに弱いゆかりは極力攻撃させない方がいいのだ。風花の解析は未だ終わっていないので、その事は言えないが。

「行くぞ、順平！」

「うつす！」

最初に動いたのは真田である。人形の十字架をかわしてシャドウの左側面へ飛び込み、左右のパンチを叩き込む。続いて順平が右側面から接近し、大剣で斬り付けた。

「私も行くぞ！」

更に続いて美鶴がペルソナを召喚し、氷結の魔法を放つ。狙いはシャドウの正面である。それを見届けて、義之は内心で頷いた。

（よし。やっぱりこれだけ広い場所なら、人数を有効に使える）

この部屋はホテルの他の部屋と比べて倍以上に広い。五人の人間と大型シャドウが居座っているのは流石に見た目には狭く感じるが、それでもタルタロスの通路などに比べればずっと広い。よって複数のポイントから、波状攻撃を仕掛ける事が可能になる。こちらの手数は大いに越した事はない。よって今後も特に満月の戦いでは、五人以上で臨む方針で行くべきだと義之は思った。

だが敵も黙ってはいない。椅子に座ったまま唸りを上げ、それと共に周囲の空気が帯電を始めた。

「岳羽、気をつける！」

義之がそう叫んだ一瞬の後に、影時間の緑の空気が炸裂した。こちらの前衛から後衛まで、瞬きする間に白い稲光が駆け抜けた。ハイエロファントが得意とする、電撃の魔法である。

「うわっ！」

「ぐっ……！」

『今回』のシャドウの攻撃は、いずれも恐るべき破壊力を秘めている。電撃をともに受けた順平と美鶴は一発で膝をついたが、平然としている人が二人いる。

「ふん、この程度でやられるか！」

一人は電撃に耐性のある真田である。いかにシャドウが強いと言っても、耐性は有効である。だから真田は無傷とは言わないが、大して効いていない。だから真田は防御に気を遣う必要がほとんどなく、特に活躍が期待できる。死神のように圧倒的に上の存在が相手の場合はまた別であろうが、今日のハイエロファントくらいなら、そこまでこちらとかけ離れた能力はない。

なお、ついでに言うと『前回』はこの時期に既に死神と遭遇していた。だが『今回』は義之が常に気を配っていた為、未だ遭遇していない。説明だけは皆が美鶴から受けているが。

そして義之には今の攻撃は完全に効いていなかった。今日の敵の攻撃手段は初めから分かっていた為、電撃を無効化できるペルソナをあらかじめ用意しておいたのである。

「真田先輩は攻撃続行！ 岳羽は回復！」

「おう！」

「うん！」

二人揃って即座に返事が返ってきた。唯一の不安要素であったゆかりも、攻撃をさせなかった事が功を奏して電撃を回避できていた。

やがて義之とゆかりの回復魔法で立ち直った順平と美鶴も、攻撃を再開する。そうした数度の攻守の交換の後、ハイエロファントは再び唸り声を上げた。だが空気の帯電はない。

（来るな）

予期した次の瞬間、奇怪な幻影が目の前に現れた。枯れ木が所々に立っている荒涼とした丘陵地に、墓石らしきものがいくつも置かれている。冷たく乾いた風が虚しさを込めて吹き流れ、遠くの方からカラスの声まで聞こえてくる。古典的な墓地の風景だ。

「な、なんだあ！？」

「ぐ……や、止める！」

そして皆の様子が一斉におかしくなり始めた。ハイエロファント

が電撃以外に得意とする、恐怖心を与える精神攻撃だ。これにかかると理性的な行動が取れなくなり、勝手に逃走を始めたりもする。

「ペルソナ」

そんな中でただ一人、義之だけは冷静なままだった。何の感慨もなさそうな普段通りの声でペルソナを召喚し、周囲の仲間たちへ淡い光を纏わせた。

「あ、あれ……？」

光が体に吸い込まれていくと共に、皆が夢から覚めた。瞬きをしながら、きよろきよろと周囲を見回している。

「ボサツとするな！」

義之はそんな皆を一喝し、態勢を立て直させた。この種の精神攻撃は相手を直接傷つける力を持たないが、場合によっては直接的な攻撃よりも厄介なものとなり得る。最悪の場合、メンバー全員が罹患して一気に壊滅してしまう事もある。しかも仲間の皆は、誰もこれに対する耐性を持たない。

だが義之が扱えるペルソナの中には、耐性を持つものもいる。更には耐性を付加する装備品を『生み落とす』ペルソナもいる。ただ精神攻撃は受ければ確実にかかるというものではなく、運次第という点が戦略的に少々難しい。労力を費やして耐性を手に入れても、場合によっては無駄になる事もあるのだ。

月に一度の周期で現れる大型シャドウに備える為に、与えられた時間は有限である。取り得る選択肢の中で、どれを選ぶか。義之は

しばしば悩まされてきた。

そしてこの7月の満月に備えて取った選択は、防御重視の戦略である。ハイエロファントの電撃と恐怖、そしてラヴァーズの魅了。一ヶ月の時間を一杯かけてこれら全ての耐性を用意し、義之は守りの役割を担う。そして攻撃は他の仲間に任せる。それが今日の作戦だった。敵の能力をあらかじめ知っていればこそ、限られた時間を少数の対策に集中する事が可能となり、成立し得る戦略である。

そしてそれは成功した。苦勞して耐性を身に付けた事は、無駄にならなかった。

（今後もこれで行くか）

5月の満月のように一秒を争う状況下では防御重視は不利に働くが、今後の戦いにそうしたものはない。一年間全体を見据える上で今日の戦いは試金石になりそうだ。

「フィニッシュ！」

義之が今後の事を考えている間にも、戦いは継続している。そして終始元気な真田が会心のコンビネーションを叩き込んだ。ジャブ、ストレート、アッパーに続けて放った四発目の左の大振りのパンチがクリーンヒットし、ハイエロファントは椅子から転げ落ちた。体勢を大きく崩している。

「全員、突撃！」

「この瞬間を待っていたぞ！」

「剣の錆にしておけ！」

義之の号令と共に、五人全員による総がかりを仕掛けた。『前回』を通じて最も多数人数による総攻撃は、まさに絶大な威力を発揮した。

「法王シャドウの反応、消失しました！」

黒い煙となってハイエロフロントが消滅すると共に、風花から通信が入った。だが誰も気を抜きはしない。

「もう一体はどこにいる？」

「その部屋のどこから、反応があるんですが……。済みません、曖昧な言い方しかできなくて……」

美鶴が通信で風花に呼びかけたが、正確な答えは返ってこない。申し訳なさそうに言う風花に、義之はフォローを入れた。

「気にするな。寮からじゃ仕方ない。部屋に怪しいものがないか、皆も探してくれ」

実際のところは、たとえ風花がホテルの前にいようとラヴァーズの位置を正確に測る事は不可能だったはずである。『前回』の経緯から、それは明らかだ。だから今のセリフは単純にフォローのつもりで言ったものである。だがそうは受け取らない人がいた。

「むう……タルタロスの探索はともかく、満月の作戦で山岸を現場近くに連れて来れないのは痛いな。山岸の護衛に一人か二人を割いた上で、前線は五人以上で臨むのが理想か。今後はより多くの人員

が必要だな……」

「そうだな……」

「……」

美鶴は部屋を探りながら呟き、真田がそれに答えた。そしてゆかりはそんな二人に一瞬だけ目を向けたが、すぐに逸らして部屋を探し回るのが再開した。そして部屋に備え付けられた大きな鏡の前で、足を止めた。

「あれ、この鏡……何か変じゃない？」

ゆかりが疑問を口にすると同時に、鏡から光が放たれた。

傾向と対策(2009/7/7)(後書き)

主人公がしていた対策とは、ヤマタノオロチとナルキッソスを受胎させて大蛇の目とナルシスフラワーを入手し、更に電撃無効のタケミカヅチ辺りにメディアやメパトラを継承させていた、という事です。

心の在り処（2009/7/7）

人の姿が映らない鏡。そこから発せられた眩しい光を目にした次の瞬間、義之はベッドに寝ている自分を発見した。意識を失う前にいた法王の間ではない、ホテルの別の一室だ。『前回』同様に、強制的に瞬間移動させられたわけだ。

（やっぱりこうなったか。まあ仕方ないな）

ハイエロフロントを倒した後、そのままラヴァーズとの戦いに突入できれば最善だったが無理だった。だが仕方のない事である。重要なのは、仕方がないと冷静に判断できた事それ自体である。つまり目覚めると同時に、すぐに理性が働き出している。

『前回』はこの状況でラヴァーズの声を聞き、夢うつつの状態がしばらく続いた。おかげで自分を取り戻すまで少々時間を要し、ゆかりの接近を許してしまった拳句に頬を叩かれたりした。だが『今回』は即座に意識がはつきりしてきた。ハイエロフロントの恐怖対策と同様に、ラヴァーズの対策として魅了に耐性のできる装備品を用意しておいた事が功を奏したようだ。

ペルソナの中には装備品を産み落とすものもある。そうした現象をイゴールは『受胎』と呼んでいるが、いかなる理屈で精神的な存在であるペルソナが物質を内に宿すのか、さっぱり分らない。しかしこの際、それはどうでもいい。この通り役に立っているのだから、苦労してペルソナに物を産ませた甲斐があったと言うものだ。

ベッドに寝転がったまま耳を澄ますと、誰かがいる気配を感じた。その数は一人だ。今日の戦いに五人編成で臨んだのは、ここで余り

の一人になる事が、或いは三人で放り込まれる事を期待していたのも理由の一つだった。だが無駄に終わったようだ。

（運が悪かったか）

またしてもゆかりと一緒になくなってしまったか。『前回』は頬を叩かれたが、『今回』はどうだろうか。叩く手をよけるなりブロックするなりして、さっさと服着てこいと冷たく言い放ってやるか。もし美鶴だったらどうだろうか。噂に聞く処刑をどうやって掻い潜るうか。

などと、義之は暢気に考えていた。ホテルの一室に放り込まれる事は、実戦ほど深刻な問題ではない。理性が働いている限り、いくらでもやりようはある。そんな気楽さを持って目を開けて上体を起こし、気配のする側に視線を向けた。

だが――

（！？）

そこにいたのはゆかりではなく、美鶴でもなかった。『前回』の自分が本当の意味で心を許した、ただ一人の女性がいた。正確に言えば女ではなく、それに近い存在だが。

（馬鹿な……何故だ！？）

しかもいつもの武装ではなく、学校の制服も着ていない。バスオルを一枚巻いただけの姿だ。先日保健委員で学級新聞の記事を書いた際にも、彼女の事を念頭に置きはした。まさか誰かさんがそれを読んで、余計な気を遣ってくれたとも言うのだろうか。

『汝、今まさに快樂の扉の前にあり……』

ここでシャドウの声が聞こえてきた。まずい。非常に危険な状況だ。魅了に耐性のできる装備をしているが、そんなものはもはや意味がない。うっかりすると、理性が飛んでしまいそうだ。

彼女はバスタオルに手をかけた。その手は、肩は、足は完全に人間のそれだった。タオルの下も、ひよつとすると――

（違う……彼女がここにいるはずがない！ 今はまだ屋久島のはずだ！）

義之は急いで首を横に回し、目を背けた。その直後、はらりとタオルが床に落ちる音を聞いた、ような気がした。首から下の体思わず反応して、視線を戻せと言わんばかりに震え始めた。

見てはいけない――

全力で目を閉じた。見てしまつては、うっかりしなくても理性が永劫の彼方へ吹っ飛んでしまう。

（もう叩かれても処刑されてもいいから、ゆかりか美鶴と交代してくれ！）

『何故に抗う……』

力の限りに瞼を閉じた暗黒の中で、再びシャドウの声が聞こえてきた。とてつもなく狡猾で陰湿で、邪悪な声だ。マグマのような感情の塊が暴れ回り、頭が芯から溶けていくようだ。そして頭以上に体が収まらない。赤熱した何かが心臓より下の体の奥で沸騰し、背骨を駆け抜けて脳髓を揺さぶっている。

「違う！ お前はアイギスじゃない！」

言う事を聞かない体に刃物を突き刺すような気持ちで、あらん限りの叫び声を腹の底から上げた。そして目を開くと、アイギスの姿は消え去っていた。床に落ちたバスタオルも消えていた。

「はあ……」

義之は大きなため息を吐き出し、ベッドから転げ落ちるようにして床に膝をついた。粘りつく汗が額に浮かぶと共に、猛烈なだるさが襲ってくる。事をしていないのに、事の後のような疲労感だ。機械だったら回路がショートして、白い煙を発しているところだろう。

「やあ」

そんなオルギアモード終了のオーバーヒート状態の中で、予告なくファルロスが現れた。少年らしい無邪気な笑顔を浮かべている。

「お前か……」

「疲れてるみたいだね。大丈夫？」

「……」

ファルロスはいつも通り親しげである。だがそれは言い方を変えると、馴れ馴れしいとも言える。普段の義之であればファルロスを決して邪険にしないが、この時ばかりは勝手が違う。何か物凄く恥ずかしいところを見られたような気がしてしまう。基本的に淡泊な義之は、この種の行為を滅多にしないから尚更である。

もちろん本来的には、そもそもファルロスに隠し事はできない。
『前回』の一年間を含めて十年前から人生の全てを共にしてきた、
まさしく自分自身と不可分の存在なのだから。ファルロス相手には
プライバシーなど初めからないも同然である。だがそれでも、もの
には限度がある。だから何も答えず、無言で立ち上がった。

（一応……確認しておこう）

部屋を出る前にバスルームのドアを開けてみた。だが誰もいない。
誰かが使った形跡もない。ついでに言うと、石鹸の香りもしない。
当たり前の事ではあるが。

「今のは本物の彼女じゃないし、他人のそら似でもないよ。ただの
幻さ。ラヴァーズは君の思い出を取り出して見せたんだね。精神攻
撃が得意なシャドウだからね。こんな事もできるんだろう」

「あんな思い出はない……」

『前回』は彼女の部屋で長い時間を過ごした事もあったが、あの
ような状況にはならなかった。何故なら彼女の体は、今見たような
人間のものではないから。

「じゃあ君の妄想……いや、願望かな？」

「うるさい、黙れ」

遂に八つ当たりをしてしまった。ふつふつと滾るような怒りが湧
き上がってきて、早足で部屋を出た。

「ちょっと役得？」

「言ったら絶交だからね！」

「処刑だ！」

「ま、待て！ 俺は見えてない！ 何も見ていないぞ！」

廊下に出ると、近くの部屋から怒声や悲鳴が漏れ聞こえてきた。状況が目につかぶようだ。組み合わせで考えると、ゆかりや美鶴と一緒にいなかった自分は運が良かった事になるのだろうか、結果としては最悪だ。まさかここでアイギスの姿を見せられるとは。こんな事なら、素直に四人で来れば良かった。

「みんなお盛んだねえ」

振り返ると、ファルロスが廊下にまでついて来ていた。何やらとても嬉しそうに、にっこりと微笑んでいる。その笑顔を少年らしいと言って良いのかどうかいささか迷うところだ。

「まだいたのか……。早く戻れ。お前の存在は、まだ皆に知られたくない」

「大丈夫だよ。僕の姿は他の人には見えないから」

確かにそうである。もしファルロスの姿を他人が見れるようなら、『前回』のどこかで風花の探知にでも引っ掛かったはずである。

「見えるとしたら、君の愛しい彼女だけだろうね」

それもあり得る話ではある。一目見ただけで綾時の正体に無意識的にも気付いたアイギスなら、ファルロスも認識できる可能性はある。だがそれは今話すべき事柄ではない。しかも一言余計だ。

「……いいから戻れ」

「戻ってもいいけど、ちょっとそれを落ち着けてよ。君がその状態だと、僕もそわそわするんだ」

ファルロスは義之の体の下の方を指差している。それで思い出した。『ファルロス』という言葉の意味を。一体こいつはどういうつもりで、こんな名前を名乗っているのだろうか？

「……ちよつと待て。お前は普段、俺の体のどこにいるんだ？」

本当は聞くまでもない事かもしれない。と言うより、聞いてはいけない事かもしれない。だが聞かずにはいられなかった。

「僕は君の心の中にいるよ。心が体のどこにあるのかは……まあ、察してよ」

ファルロスの姿は十歳くらいに見える。もし実際にそのくらいの年齢の人間の子供がこんなセリフを吐いたら、尻でも引っ叩いてやるところだ。

「馬鹿言っな！ 心の在り処はここかここだろう！」

叩きこそしなかったが、声を荒げて頭と胸を指差した。心はそこにあるはずだ。多分。

「ふふ、そうだね。他の所に心がある男は、みんな駄目になっちゃう……」

そう言っつてファルロスはようやく姿を消した。少年らしいかどうかはともかく、微笑みは最後まで張り付けられたままだった。

「……」

ファルロスが消えた辺りの空間を見つめながら、義之は腕が震えるほど剣の束を強く握った。そして先ほどとは違う意味で、体が熱くなっつていくのを感じた。今ここで鏡を見てみれば、頭の頂上から湯気の一つくらい上っているのが見えたかもしれない。こういう激しい感情を抱くのは、『前回』の一年間を通じても滅多になかった事だ。もし心の振り幅を測る事ができるのなら、メーターの針がとうに振り切られているだろう。

「殺す……。絶対に殺す……」

『前回』のゆかりはラヴァーズを前にしてやたらと気合が入っていたが、その気持ちが良く分かった。今なら一対一でも、軽く八つ裂きにしてやれそうだ。小賢しい戦略や戦術など、もはや必要ない。

その後の経過は、敢えて詳しく述べるまでもないだろう。ただ頬を腫らした人と、氷の破片を髪につけた人の会話を記すに留めておく。

「あいつ、どうしちゃったんでしょうね」

「……」

「ゆかりツチと桐条先輩はまあ分かったとして、何であいつまでブチ切れ待なんでしょう……」

「……」

「あ、あれかな。独りモンの僻み？　せつかくホテル来たのに、何の役得もなかったもんだから……」

「役得……？」

「ど、どしたんすか？」

「あれが……あれが役得なものか！」

「……」

「寒い……寒いぞ……」

氷の破片を髪につけた人は自分の身を抱え、熱病に罹ったようにガタガタと震えだした。一体どれほど恐ろしい目に遭ったのか。頬を腫らした人はある程度察しつつも、敢えて聞かないでおいであげた。

少々の曲折がありつつも、法王と恋愛の大型シャドウは滅び、この世から消えた。その戦いがあったホテルから、道路を挟んだ向かいのビルの屋上。緑の空気と巨大な月に非常な親しみを感じている、

二人の男と一人の女が眼下を見下ろしていた。

彼らの視線の先では、今まさに五人の男女がホテルから出たところだった。その五人はいずれも頭上の三人に気付いていない。

「素晴らしい見世物でした。彼はやはり興味深い……」

ストレガのリーダー、タカヤは特別課外活動部に拍手を送った。正確には、その内のただ一人に。

（特に法王との戦いは見事でした。しかしあれば、相手の能力をあらかじめ知っていなければできない戦法……）

他の面々はともかく、彼だけはシャドウの攻撃をほぼ完全に防いでいた。いかに複数のペルソナを操る特殊能力を持っているとはいえ、戦いの最中に敵の攻撃を見切って反射的に付け替えを行っていたわけではない。彼は今日現れるシャドウの情報を事前に得ていて、準備を済ませていたとしか考えられない。ならばその情報源はどこか。

（普通に考えれば幾月……。しかし桐条らが情報を得ていたようには見えませんでした。死神が彼に教えた、と考えるべきでしょうね）

「んな事言つとる場合すか？ あの坂本っちゅう奴、桐条の娘と同じ穴のムジナとちやいますんか？」

後ろからジンが声をかけてきた。振り返ってみれば、酷く不愉快そうな顔をしていた。

「貴方は彼が嫌いなようですね。何がそんなに気に入らないのです

「？」

「気に入らなくて……！」

思えば彼と初めて会った時から、ジンは良い顔をしていなかった。そして彼について調べれば調べるほど、より快く思わなくなっているようである。

「少なくとも、彼は他の偽善者たちとは違いますよ。チドリ、死神の存在は確認できましたか？」

「何とか……。彼と話をしていたみたい……」

「話の内容は？」

「良く分からなかった。死神の声までは、メディアにも聞こえない……」

チドリはいつもそうだが、外界の事象に関心を払わない。彼についてもそれは同様である。ジンと違って彼を嫌ってはいないが、特別興味も持っていない。しかしチドリの探知能力は、対象への興味の有無とは無関係である。今日の戦いの間、ずっと彼と彼の内に住まう存在を見つめ、探れる限りを探っていた。その上で、結果は期待していたより曖昧なものに終わった。

「そうですか……。まあ、それも良いでしょう」

今日のチドリの調査結果は、決して悪いものではない。ある意味では、逆に期待以上とさえ言える。

「間違いありませんね。彼は自分の中に死神がいる事を知っている。そして恐らくは、十二のシャドウを倒せばどうなるかも……」

並のペルソナ使いならば表も裏も容易く見通せるメーディアをもつてしても、声さえ聞こえない存在である死神。それは即ち、死神はペルソナ以上の深さで彼の中に根を下ろしているという事だ。もはや彼と不可分の存在となっている。

タロットの解釈では愚者と死神は同一人物とされるが、まさにその通りである。即ち死神の存在意義は、彼自身の存在意義だ。両者は互いに会話ができる程度には分離しているが、それは問題にならない。魂が同じで自我を別々に持つ事は、何もおかしい事ではない。

死神と同一人物――

それほどの人間ならば、自分たちの本質を一目で見抜くのも道理である。そしてまた、自分のペルソナであるヒュプノスは死神と深い縁がある。自分にとってヒュプノスは知らぬ間に背負わされた力であったが、今となってはまさに運命によって与えられたものだと確信が持てる。

「くつくつく……これは面白い。幾月の妄想など及びもつきません。最高の祝祭になりそうです」

普段は滅多な事では波立ちさえしない、凍りついた心が昂ぶって仕方がない。ジンの発案で復讐代行を始めた時もなかなか面白かったが、これはそれを超える。どうやら残り少ない命が尽きる前に、史上最大の生の輝きを見届ける事ができそうだ。

「ジン、情報収集はこれまでに以上をお願いします。幾月はもうしばらく泳がせますが、所詮あの男は前座に過ぎません。いつ復讐の実

行を頼まれるか分かりませんね。今のうちに、調べられる事は全て調べてしましましょう」

「分かっとなりますよ……」

明らかに不満な顔をしてはいるが、ジンは自分の言う事を決して無下にはしない。今はそれで良い。彼と自分の運命が重なり合う日は、近い将来に必ず訪れる。その日が来れば、ジンもまた己の運命を理解するであろう。

「ところであいつ、一人で部屋に放り込まれたんやろ？ その割には何や騒がしかったようやけど、何があったんや？」

ジンは自分から目を逸らし、チドリへ話を向けた。確かにジンが言う通り、恋愛の攻撃で飛ばされた時の彼の反応はいささか奇妙だった。

「金髪の……女」

「女？」

「幻だった……」

「何や、あいつの嫁か？」

「分からない。これまでの情報にはない……」

「ふむ……女ですか。祝祭にオルギアは付き物ですが、彼が夢に見るとは。どんな方なのでしょうね……」

彼について、死神について。或いはまた、金髪の女について。まだまだ調べなければならぬ事は多い。遠からず訪れるであろう祝祭の日に向けて、準備を整えなければならぬ。その日その日を楽しむだけの生活は、そろそろ終わりにせねばなるまい。

「忙しくなりそうですね……」

心の在り処（2009/7/7）（後書き）

ちよつとだけR15な、7月の満月でした。

本作では残酷描写は基本的にありませんが、あっち方面の表現は時々出てきます。この話のように、控え目なものではありますが。

それはさておき、また少し独自解釈が出て参りました。

ファルロスの姿は他人には見えず、風花の探知にも引つ掛かりません。チドリは存在のみ感知できますが、姿を見たり声を聞いたりする事はできません。アイギスに見えるかどうかは……そのうち明らかにします。

太古の日々より（2009/7/11）

「みんな、いつもご苦勞様。今日集まってもらったのは、朗報があらってね……」

七夕の戦いから四日が経過した。今日はあれ以降で幾月が初めて寮を訪れ、全員が作戦室に集合している。

夏の暑さが夜にも浸透し始めるこの季節にあっても、幾月はスーツを綺麗に着こなしている。ウェーブした長髪に縁どられた顔には汗が一つも浮かんでおらず、まさに紳士然とした佇まいである。そんな穏やかな大人の雰囲気醸し出しながら、集まった皆に向けて話を始めようとしていた。

『前回』のこの日の会合では、幾月の話に先立って美鶴が7日の戦いのあらましを報告していた。しかし『今回』は前線メンバー全員で白河通りのホテルに向かい、風花は作戦室からサポートを行っていた。そして幾月も作戦室に残っていた為、戦いがどのようなものだったのか、リアルタイムに見聞きしていたはずである。従って報告の必要はない。

だから幾月は最初から本題に入ろうとしている。だがそれを遮る人がいた。

「待ってください。この際なんで、桐条先輩に聞きたい事があります」

ゆかりである。何事かと皆の視線が集中し、義之もそちらを見た。ゆかりは『前回』もこのようにして、幾月を遮っていた。いつも強

気な彼女であるが、今日は取り分け気合が入っている。ある種の決意が漲っている、と言っても良い。

「ずばり聞きますけど……先輩、私たちにまだ大事な事言っていないんじゃないんですか？ 例えば影時間やタルタロスの事、分かんないみたいに言っていましたけど……。あれって、十年前の事故と関係あるんじゃないんですか？」

「ゆ、ゆかりちゃん……」

前置きもそこそこに、いきなり踏み込んだ。風花は心配そうにしているが、ゆかりに止まる気はないようである。

6月の終わり頃、この二人は作戦室で何か密談をしていた。義之はその内容を『前回』も『今回』も聞いていないが、大方は察しがつく。今から十年前、ゆかりの父である岳羽詠一朗が死んだちょうどその頃、月光館学園の生徒が一度に何十人も不登校になる事件があった。ゆかりはそれが本当に不登校であつたのか疑問を持ち、シヤドウに精神を奪われた影人間と結びつけて考えた。その裏付けを風花に頼んだのであろう。そしてその推測は正解だつたわけである。

「ちゃんと説明してください！ あの日、本当は何があつたんですか！？」

「……」

「あの、ちよつといいすか」

美鶴が沈黙する中、『前回』のこの会合では特に発言のなかった順平が口を挟んできた。重い雰囲気嫌う順平だが、その表情にふ

ざけた感じはない。

「十年前の事故とか、俺は分かんねえっすけど……何か隠し事してるってんなら、止めて欲しいっす。俺だって命賭けてんすよ」

「……」

「つか、みんな一緒っすよね？」

順平は作戦室の一同を見回した。美鶴は俯き、真田は僅かに眉を顰めている。そして彼らとは対照的に、幾月の表情には何の変化もなかった。

「そうだな……君の言う通りだ。命を賭けさせて、隠し事するのはフェアじゃない。分かった、全て話そう」

美鶴は顔を上げて話し出した。義之は既に知っている事だが、この日ばかりは改めて耳を傾ける事にした。

「シャドウにはいくつも不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にさえ干渉するものらしい。私たちは敵と思っているからあまり意識しないが、もしそれを利用できるとしたら……どうだ？ 何か大きな力になるかもしれないと思わないか？」

「え……？」

一見すると関係のなさそうな事から始まった話に、ゆかりは怪訝な顔をした。だが美鶴の告白は続く。曰く、今から十四年前にシャドウの利用を実行した人物がいる。桐条グループの先代にして美鶴の祖父、桐条鴻悦である。

鴻悦がシャドウを利用して何をしようとしていたのかは、美鶴も詳しくは知らない。だがとにかく鴻悦は研究者を雇ってシャドウを大量に集め、その能力を研究させた。しかし十年前、計画の最終段階で暴走事故が起き、実験は失敗に終わった。その時の痕跡として残ったのが、影時間とタルタロスである。

集められたシャドウは飛散して姿を消した。満月の度にやって来るのは、この時のシャドウである。そしてタルタロスが月光館学園に現れるのは、そこが十年前の実験の場所であつたから。当時の生徒が大量に不登校、ではなく入院したのも、事故が原因である。

そこまで話が進んだところで、ゆかりは核心に噛みついた。

「それじゃ、この部の活動って……無関係の私たちを使って、その時の後始末って事？」

（ゆかりは無関係……だな）

義之は口には出さなかったが、内心でゆかりに同意した。彼女の父親は事態の中心に極めて近いところにいたが、彼女自身は無関係である。そして順平、真田、風花は完全に無関係だ。

「……騙したんですか？」

「……」

ゆかりは怖い目をして美鶴を睨む。だが美鶴は再び俯いて答えようとしなない。するとゆかりは矛先を転じた。

「真田先輩だつて知ってたんでしょ？ これじゃ私たち、都合よく利用されてるだけじゃない！？ それとも先輩は、戦う理由なんてどうでもいいって事なんですか？」

「……理由か」

真田はゆかりから目を逸らした。だが黙り込みはしなかった。

「理由がなければ……遊びと同じなのか。目的がなければ、流す血に価値はないのか？」

（おや……？）

『前回』の真田はこの時、理由ならあると言っていたはずである。ただいかにも歯切れの悪いもので、ゆかりの非難は凶星だったと義之は見ていた。だが今の真田は大量の苦虫を噛み潰しながらではあるが、前と異なる事を言い出した。

「明彦……！ お前は何も悪くない。黙っていたのは、私の意思だ」
すかさず美鶴が真田を庇った。美鶴は美鶴なりに、責めを自ら負うつもりでいる。

「隠す気などなかった。だが筋道よりも、君らを確実に引き入れる事の方が、私には大切に思えた。理不尽だろうと、戦えるのはperlソナ使いだけ……。世界で私達だけだからだ」

「今さら……！」

（確かに、今さらだ）

ゆかりの怒りはなおも収まらない。だが当然である。ほぼ全ての真相を知っている義之の目から見ても、この件の非は美鶴にある。ただ隠し事を非と言うならば、美鶴より遥かに大きな非が義之にはある。それを自覚している義之は、視線を床に落としてゆかりを見ないようにした。

もし自分の隠し事を知ったら、ゆかりはどんな顔をするだろうか

もちろん『前回』の存在そのものは誰にも伝えるつもりはないし、発覚する危険があるとも思えない。だが万が一自分の真実を彼女が知ったら、きつと今以上に激しい怒りを見せるだろう。

（済まないな……）

『前回』の事を明かさないのは、到底信じられる話ではないから、というのが最大の理由である。しかし『前回』得た知識を元にしてゆかりと美鶴の仲を取り持てやるくらいはできたはずである。何しろ二人の性格と立場は、本人以上に理解できていると言っても過言ではないのだから。

それにも関わらず二人を放置していたのは、いずれ特別課外活動部の主導権を義之が握る為だ。もし二人が早々に和解してしまったら、部全体の人間関係が大きく変化する事は間違いないし、今月下旬に予定されている屋久島での出来事も『前回』と様変わりしてしまう可能性がある。そうなると計画が狂う。

もちろん義之が部を掌握する事それ自体も、『前回』にはなかった事だ。だがそれを実行に移すのは、もう少し先の予定なのだ。それまでは可能な限り、部の状況を『前回』と同じにしておきたい。

もつとも今日の順平と真田のように、既に変わってしまった点もあるのだが。

そしてそんな部の中で、言動が『前回』と変わっていない男がいる。幾月だ。

ただ変わっていないのが良いのか悪いのか、義之は時々迷う事があった。コミュニティで磨いてきた観察力をもつてしても、幾月に裏を伺わせる点を全く見つけられないのだ。『今回』初めて顔を合わせた4月20日以来、幾月が寮を訪れる度に観察を重ねてきたが、善良な仮面の下の本性がどうしても見えない。

『前回』の11月に風花とアイギスが言っていたが、幾月の振る舞いは演技だとすれば完璧すぎるのだ。普通の人間は嘘を吐くとか何らかのサインが必ずどこかに出る。暑くもないのに汗をかいたり、視線が不自然に泳いだりする。美鶴が良い例だ。だが幾月はそうしたところがない。もしかすると、この幾月は『前回』とは別人で実は本当に嘘を言っていないのでは、と疑ってしまう事さえある。

そんな幾月は、やはり『前回』と同じセリフを口にした。

「岳羽君。罪は過去の大人たちにある。そして彼らは、みんな自らの行いによって命を落とした。今はもう当事者はいないんだ。謂れない後始末なのは、みんな同じなのさ」

「でも……」

正論である。実際には当事者は何人が生き残っているが、それでも正論である。幾月の本性を考慮に入れてさえ、言っている事そのものは正しい。むしろ子供を諭すような見識のある言葉に、流石

のゆかりも怒りを飲み込んだ。

「事故から十年……シャドウたちがどうして今になって目覚めたかは、本当に分からない。でも目覚めたって事は、見つけて倒せるって事でもある。これ、どういう事が分かるかい？」

ゆかりが大人しくなった隙を突いて、幾月は本題を改めて語り出した。沈滞した部屋の窓から外の風が流れ込むように、作戦室の空気が急激に入れ替わり、全員の注目が幾月に集中する。

「あの十二体こそ、全ての始まりなんだ……と言ったら、分かるかな？」

「奴らを全部倒せば……影時間やタルタロスも消える？」

皆の中で真田が最初に気付き、目を見開いた。

「その通り！」

幾月は笑顔で宣言し、皆が一斉にざわついた。本当かと確認の聲が飛ぶが、幾月は自信を持って頷いた。確証となる記録の類もあるらしい。

「事情はどうあれ、人を守る為なのは変わらない。シャドウたちは、段々力をつけている。待っているだけじゃ勝てない」

「……はい」

かくして作戦室の雰囲気は完全に変わってしまった。こうなっは、戦いを降りるとは誰も言い出せないだろう。『前回』と若干の

違いがありつつも、全体の流れは変わらなかった成り行きを見守っていた義之は、内心で頷いた。

（今日のところはこれでいい。どうせ十年前の真相や影時間とタルタロスを消す本当の方法は、俺の口からは言えないんだ。色んな意味で……な）

そうして集まりは解散となった。ゆかりと美鶴に気まずい感じは残ったままだが、決定的な対立には至っていない。それぞれ黙って自室へ移動して行った。順平は話の全体像を今一つ理解しきれていないようで、風花に改めて説明を頼んでいる。真田は誰とも目を合わせず、足早に出て行った。そして幾月は悠然と席を立った。

義之は作戦室を出るとラウンジには行かず、二階の自室に直行した。そして椅子に座って机に肘をつけて両手を組み、思考の海に潜ってみた。今日の会合はかなりの長時間に渡って行われた為、既に夜は更けている。普段であれば床に就く時間帯だが、この日は考え事を続けていた。

（あの時、俺は何をしたんだろうな……）

影時間とタルタロスを消す方法である。今日の会合で幾月が語った方法は嘘だ。だが消す方法は実際に存在する。存在するのだが、その具体的な中身は義之にも分からない。と言うより、覚えていない。どうやってニユクスに立ち向かえば良いのか、『前回』の1月31日に自分は何をしたのか、未だ思い出せていないのである。

だが覚えていない事それ自体は、それほど深刻に考えていない。

いざその時が来れば、必ず分かる事だからだ。『前回』は何の成算もないままその日を迎え、それでいて実際に何とかできたのだからならばたとえ記憶を取り戻せなくとも、再びユニバースを得てニユクスと直接対峙すれば改めて気付くはずである。

問題なのは、方法が直前まで分からないままでは、卒業式の日に死んでしまった『前回』と同じ結果に終わる可能性が高い事だ。どうすればあの日を越えて生き続けられるか。この『今回』最大の難問に対しては、ずっと解答が見つからないままにいる。

（そもそも解答なんかないのかもな。でもまあ、シーシュポスにさえならなければ、まだ許せる……）

もちろん生き延びられれば、それに越した事はない。だが時間が再び戻りさえしなければ良い、という考えもあるのだ。時間が戻った原因も不明だが、『前回』の一年間に後悔を感じていた為ではないかと思っている。そちらへの対処は、今のところ順調に進んでいる。現在進行中の計画と今後に実行予定の計画が上手く運べば、荒垣と桐条武治、そしてストレガの三人は助けられるはずだ。そうなれば、たとえ卒業式の日に再び死んでも、この世に残す未練は『前回』よりずっと少なくなる。

（もつとも、ニユクスが来るまで生きられたらの話だが）

唯一の問題は、ニユクスの来訪前にシャドウとの戦いに負けて死ぬ事だ。『今回』の戦いにも、少しずつ慣れてはきている。だが油断はできない。たった一つのミスが命取りになるほど苛烈なのだ。そして負けてしまったら最後、もう誰にもどうしようもなくなる。この世の終わりが静かに訪れるのを、黙って見ている事しかできなくなる。

(いよいよとなったら……ファルロスと心中するしかないな)

組んだ両手を解き、机の引き出しから召喚器を取り出した。拳銃を模した無骨なフォルムのそれを目の前に立て、じっと見つめる。普段は指一本で回せるくらい軽いのに、どうしてかやけに重く感じる。

もしシャドウとの戦いで完全に追い詰められたら、取れる手段は二つ。タナトスを召喚して目に映るもの全てを皆殺しにするか、或いはファルロスを殺して自分も死ぬか。どちらもやりたくない事だが、覚悟だけはしておかねばならない。ただし、それとて11月3日までの期限付きの手段だが。

そんな事を改めて考えている間に、0時になった。

「こんばんは」

一日の間に隠された神秘の時間は、每晚必ず訪れる。だがその原因となった存在は、毎晩は訪れない。何か伝える事柄がある時か、注意を促す時だけである。そんな究極の神秘に包まれた少年は『前回』のこの日は姿を現さなかったが、『今回』は現れた。

「ああ」

義之は召喚器を机にしまい、椅子を回転させて座ったままファルロスの側に向き直った。たった今、最終手段として殺す事を考えていた当の少年に。そんな義之の心中を知ってか知らずか、少年はいつも通りの笑顔だった。

「懐かしい話だったね」

「そうだな。お前が生まれた時の話だもんな」

作戦室で語られた、美鶴の告白である。ファルロスは通常の二十四時間の間にも、義之の目を通して外界の事象を認識できる。ただし何から何まで全部見ているわけではなからうが。

「ねえ、ちょっと話したい事があるんだけど」

「何かまた思い出したのか？」

『前回』の明日の影時間では、思い出した事があったと話をしていた。曰く、『終わり』が来る原因は十年前にある、との事だった。今にして思うと、ファルロスが要所ごとに語ってきた思い出話は、一連の事態の核心に関わる事ばかりだった。

「いや、前から知ってた事だけど……。前は言いそびれていたけど、ひよっとしたら大切な事かもしれないと思って」

「何だ？」

「シャドウって何なのかって事。君は知ってる？」

「ニユクスの復活だろ」

『前回』の12月2日、ムーンライトブリッジでアイギスを半壊まで追い込んだ綾時は、シャドウの正体についてこう言っていた。

「そうなんだけど……それは目的だよ。そもそも何者かって事」

「タルタロスから湧いて出てくる化け物だろ」

「違うよ。みんなそう思ってるみたいだけど、それじゃおかしいでしょ。僕が生まれる前からシャドウはいたんだから」

「……」

現時点での特別課外活動部は、シャドウはタルタロスから生まれる謎の怪物だと認識している。今日の集まりの後で風花が順平におさらいをしてやっていたが、タルタロスがシャドウを生み出す、とそこでも話していた。そして実際のところ、シャドウはタルタロスでは無尽蔵に出現するから、それは間違いではないはずである。

だがファルロスが言う通り、十年前にタルタロスや影時間が発生する前からシャドウは存在した。そうして集められたシャドウによって、ファルロス即ちデスが生み出されたのだ。よってタルタロスはシャドウの起源ではない。繁殖地ではあるかもしれないが。

「興味ない？」

「いや……続けてくれ」

「簡単に言うと、シャドウはペルソナと同じものだよ。同じだから倒せるんだ」

人間は誰しも無意識の下に抑圧された精神を持っている。それは己の暗部であったり、こうなりたくないと思う姿であったりする。そうした精神的な存在を意識的に制御したものがペルソナであり、制御を離れて出て行ったものがシャドウ。ファルロスの話を総合す

ると、大体このようなところだった。

「すると何だ。毒をもって毒を制すって事か？」

「そうだよ。僕を生み出した人たちなんかは、それを知ってたはずだけどね……。君たちは聞いてないんだ？」

幾月なら知っているだろうが、そうした話は一度もなかった。恐らくは美鶴も知るまい。だが知ったところで、今現在の戦いそのものにはあまり役立たない。シャドウは倒すしか対処のしようがないのだ。正体を知ったところで、特別課外活動部のやる事は変わらない。変わるとしたら、戦いの意義だ。

「という事は……ニクスを何とかして影時間とタルタロスを消しても、シャドウは絶滅するわけじゃないのか？」

「しないね。数は少なくなるだろうけど」

「それは……参ったな」

少々憂鬱な気持ちに襲われた。それでは『前回』命と引き換えにやった事は、一体何であつたのかと。

「仕方ないんじゃないかな。人間がいる限り、シャドウはいなくなるらないよ」

人間がいる限り――

真理である。災いは常にあるもの、とストレガのタカヤは8月の満月で言っていたが、それと同様に真理である。残念な事ではある

が。

「そうか……。まあ、犯罪と同じようなものか」

悪がこの世からなくなる事はありません。神ならぬ身には悪の根絶など夢物語に過ぎず、現実には絶対に不可能だ。人間にできる事といえば、悪の数を減らす事くらいである。ただ時代によつては、過去より悪が増える事もあつただろうが。

「要するにシャドウは大昔から存在して、将来もずっと存在し続ける。それこそ人類の歴史と共にあるわけか」

「そうだよ」

「するとシャドウは昔からニユクスを呼び続けていたって事か？十年前どころか、何千年も前から」

「まあ、そうだね」

母なるものニユクスの復活こそが、シャドウの目的。そして太古の昔から連綿と受け継がれてきたシャドウの系譜。タカヤに言わせれば、人類の歴史とはシャドウの歴史。そして歴史そのものの目的が、もう間もなく果たされようとしている。ニユクスを呼び続けた声が、まさに今この時に実を結ぼうとしている。それこそが『祝祭』である、とても言うのである。

「何と言つか……。ご苦労様ってどこか。月に恋したって、降りてくるわけじゃないのにな」

『Cry for the moon』という英語の慣用句があ

る。意味は『不可能を望む』。大昔からシャドウは月に向かって吠え続けていた。しかしその行為そのものには、何の意味もなかったはずだ。意味があるなら、とうにニユクスはこの世に舞い降りていたはずである。望むのは勝手だが、望んだからといって叶うわけではない。信仰がいくらあっても、山は動かせない。動かす事ができるのは、宣告者だ。

「うん……ニユクスを呼ぶのは僕だよ。僕だけだ……」

ファルロスは表情を沈み込ませた。『前回』はただ無邪気だった少年は、『今回』は己が何者であるのか初めから知っている。自身の意志ではなく、ただ存在意義として世界の終わりを呼ぶ者。人の心を持つ死神とは、それ自体でどれだけの悲劇であろうか。

「……」

真実を持たないはずの『愚者』の心に、痛みを伴う何かが湧き上がってくる。それが何であるのか、慣れない義之にははつきりとは分からない。

「ごめんね……。僕は生まれて来なければ良かったんだ」

義之は椅子から立ち上がり、悲しむ少年の元へ歩み寄った。そしてその小さな肩に、そっと片手を置いた。『前回』を通じて初めて触れたファルロスの体は、意外にも暖かった。普通の人間より高いくらいの温もりが掌から伝わってくる。

「いいんだ。責任は俺が取るから」

床に膝を付き、両腕を子供の背中に回して抱き締めた。

太古の日々より（2009/7/11）（後書き）

シャドウとペルソナは本質的に同じものである事を、綾時及びファルロスは知っていたのかどうか。原作の言動からだけでは、ちよつと判断しづらいです。綾時は12月2日に、シャドウの正体を知っているのかと美鶴に問われていますが、何故か話がシャドウの目的にすり替わってしまいましたし。

しかし本作ではこの通り、知っているものとしています。シャドウの正体について、作中でそろそろ語りたかったもので。

鏡（2009/7/13）

十二のシャドウを倒せば、影時間とタルタロスが消える――

戦いの『真相』が告げられた次の日は、特別課外活動部の面々は誰も浮かない顔をしていた。苛烈な戦いの終わりが見えてきたというのに、それを喜ぶ雰囲気はまるでない。バラバラに町に出かけたり部屋に籠ったりで、皆で協同して困難に立ち向かおうとの連帯感すらなかった。

そして更に次の日、7月13日の月曜日。この日の夜は一階のラウンジに全員が集まっていた。しかし互いの間に会話はなない。ゆかりと美鶴はため息を何度も吐いて、風花はそんな二人を交互に見比べている。

「真田先輩」

「ん？」

この日の雰囲気は『前回』と同じで、それを打ち消してくれる人がもう間もなく現れる事も、義之には分かっている。だから部全体の雰囲気を心配してはいない。だがそれとは別に少々気になる事があったので、真田に声をかけてみた。

「腹でも減ってるんですか？」

「いや……」

『前回』のこの時、真田は二日前の重さから既に立ち直っていて、

今のような空気詠み人知らずを放っていた。しかし『今回』は何故かまだ影を引きずっている。

（この人、一昨日も前と違う事を言ってたしな。星コミュが関係してるのか、それとも月コミュが絡んだ荒垣と何かあったのか……）

いずれにせよ、真田との関係は色々難しいところがありそうである。単純明快な朴念仁にしか見えなかった『前回』の顔は、何であつたのかと近頃思う。

「順平、夏休みの予定とか立ててるか？」

続けて一昨日に『前回』にない反応をしたもう一人、順平に振ってみた。

「ん？ いや……特にねえな」

『前回』の今頃と比べてみると、順平は真田以上に言動に変化が起きている。寮でも学校でも嫉妬心から突っかかってくるような事は一度もなく、関係はずっと良好なままである。それは良いのだが、何か思い悩んでいるようでノリが悪い。ここで今日の雰囲気をかき回してもらえないのは、いささか困る。

（仕方ないな。俺から話を振るか）

本意ではないが、道化師の仮面を使う事にした。文化祭の後片付けで友近と漫才をして以来、久々の着用である。

「何か今年は雨とか全然降らないみたいだしな。せつかく夏休みなんだから、どこか行きたいな」

「そ、そうですね！ 坂本君は何しようとか、考えてますか？」

素早く風花が反応した。重苦しい雰囲気にならなくなっていたが、助けを求める期待感がありありと声に出ている。そこに乗りかかる形で、にやりと擬音を発しそうな表情を作って風花に見せた。

「そりゃまあ、やっぱり海だな。ビーチに水着に、ひと夏の思い出ってな」

顔に合わせて意図して作った軽い口調でもって、『前回』の順平のセリフを借用した。普段は使わない仮面だけに、風花だけでなく、ゆかりや美鶴もぎょとした顔でこちらを見ている。彼女らとはまだコミュニケーションを築いていない為、今まではリーダーの仮面しか見せていない。それだけに、この物言いはちょっとした罅罅である。

「おお！ ひと夏の思い出！ いい響きだな、おい！」

やっと順平が食いついてきた。先ほどの深刻さが、口も頭も軽い仮面にすっぽり隠れている。両手で大仰に頭を抱え、中空へ向けて吠えた。

「ああ、気晴らしにどっか海とか行きてえ！ 何かこう、南の方のメチャクチャ透き通ってるっぽいところ！」

「いいな、それ。沖縄とか行ってみたいな」

「沖縄じゃないけど、屋久島って選択肢ならありかもね」

道化師と魔術師のふざけ合いが一段落したところで、筋金入りの

道化師が寮の玄関に現れた。もちろん幾月だ。

「理事長、いらしてたんですか」

「いや、前を通りかかったんで、来週の予定をちょっと知らせにね。桐条君、お父上は今年の休暇を、屋久島で取られるつもりらしい。試験が明ければ君らは休みだろ？　どうだい、ここらで気分転換でも？」

美鶴が立ち上がって幾月を出迎え、幾月は『前回』と同じセリフでもって答えた。それを聞いて、義之は内心で大きく頷いた。

（よし、上手くいった）

この展開に繋げる為に、海がどうと話を振ったのである。無論幾月は初めから皆を屋久島に連れて行くつもりだったはずだから、義之が話をせずとも幾月が場を誘導した可能性は高い。だが万が一にも屋久島に行かないような事があつては、非常に困るのだ。だから道化師の仮面を使ってまで、幾月が来るまでの話の前振りを『前回』と同じようにしておいたのである。

「マジ！？　それ、旅行って事っすよね！？」

順平が素早く反応した。だが美鶴の齒切れは悪い。

「しかし、お父様もお忙しい方ですし、せつかくのご休暇をかき回すわけには……」

「はは、珍しく弱気じゃないか。ご息女が顔を見せに来るというのに、お父上は迷惑がると？」

上手い言い方だ、と義之は思った。父親に対して通り一遍でない気持ちを抱えている美鶴には、特に有効な言い方である。コミュニケーションで鍛えた経験から話術には義之も自信があるが、幾月には敵わないかもしれない。これは一日の長というものであるうか。

「先輩！　お願いしやっす！」

「分かった、分かった……。気分転換は必須事項のようだ。行こうじゃないか」

最後は順平の懇願に折れる形で、美鶴は屋久島行きを承知した。それを見て、幾月は善良な微笑みを浮かべた。誰の目から見ても、いい人にしか見えない笑顔である。

だが――

「飛行機やフェリーの予約は僕が手配しておくから。ん……？　予約……。これは！　閃いちゃったぞ！」

いい人は道化師へと急に变化した。それと共に幾月はスーツの内ポケットから手帳を取り出し、メモを書きつけた。だがそれを口にする前に、道化師の仮面を着けていたもう一人が機先を制した。

「屋久島行きを、ヨヤクシマス、ですか？」

もちろん義之である。このシャレは前にも幾月が言っていて、それを覚えていたのだ。一年間の出来事をほぼ完全に覚えている抜群の記憶力は、こんなところでも発揮された。

「おおっと！　僕のダジャレを先読みか？　手強いライバルの出現

だな！」

幾月は事あるごとに下手なシャレを飛ばすが、聞かされる側はいつも呆れるか愛想笑いしかない。そんな不遇の中にあつて珍しい相方の出現に、幾月はとても楽しそうに笑った。そして義之も笑った。ラウンジに道化の笑い声がステレオで反響する。

「今日の坂本君、ちょっと変じゃないですか？」

「そうね……。理事長が二人いるみたい。顧問とリーダーがこんなんで、大丈夫なのかしら……」

「ま、まあ……。あれが理事長の数少ない楽しみなんだ。相手ができる人がいて良かったじゃないか」

（ん……。？ 幾月が二人？）

女性陣の眩きを耳にして、呵呵大笑する顔の裏側の頭に閃くものがあつた。義之は演技を得意としているし、特にコミュニケーションの担い手に対しては完璧に同調できる自信がある。だが幾月との間にコミュニケーションはない。それにも関わらず、極めて容易く合わせられた。

（そうか。こいつを恨めしく思わない理由が分かった）

『今回』初めて幾月と顔を合わせた4月20日、特別課外活動部への加入を求められた時の事である。諸悪の根源に等しい幾月を見ても、何故か怒りや憎悪が湧いてこなかった、その理由が分かった。

幾月は義之なのだ。幾月はペルソナ能力を持っていないが、もし目覚めたらアルカナは間違いなく愚者であろう。幾月のようなタイ

プは、『前回』を通じたコミュニティの担い手たちの中にもいない。裏の顔は無論の事、表の顔とさえ似ている人はいない。それも当然である。愚者は他のアルカナと一線を画す存在だ。

計画と無計画の両立。愚行と計算高さの共存。相対立する概念を頭の中に同時に住まわせて、平然としていられる。言い方を変えれば、それは自分自身というものを持たないが故に、何にでもなれるという事だ。善良な大人、物腰柔らかな紳士、優秀な研究者、世慣れた管理職、冗談好きの道化、破滅の思想家、月に祈りを捧げる救世主、そして『皇子』として世界に君臨せんとする妄想を抱いた狂人。これだけの仮面を完璧に使い分ける人間を、単に演技が上手いだけなどと言うのは断じて正しくない。

幾月修司もまた『愚者』である。

まさに鏡に映った、己の姿のようではないか――

自分自身であるからこそ、諸悪の根源でありながら恨む気にならないのだ。世の中には同族嫌悪という言葉もあるが、この場合はそれに当てはまらない。幾月は親兄弟よりも、もっと近いところにいる。神話では双子とされるタカヤよりも近い。幾月と同じ距離感の人物と言えば、ファルロスと綾時くらいしかないだろう。

そしてまた、コミュニティとしての特別課外活動部のアルカナが愚者である事も暗示的である。愚者のコミュニティの担い手は部全体ではなく、実は幾月一人であつたのかもしれない。そして幾月の死後、初めて義之自身のコミュニティとなる。それは即ち、義之が未だ部を掌握していない現状では、幾月が部を所有しているという事だ。

特別課外活動部の中心に座っているのは幾月である。一昨日の会

合で激昂したゆかりを赤子の手を捻るように抑え込み、今日も美鶴を容易く説得した事を見ても分かる通り、その影響力は甚大だ。幾月に比べれば、義之さえ駒に過ぎない。他のメンバーなどは言うまでもない。

義之は笑いを止め、ラウンジの駒たちを見回した。彼らは道化どもを無視する事に決めたようで、それぞれ旅行話に花を咲かせている。

幾月が何者であるか、駒の皆は誰も気付いていない。いや、気付く事などあり得ない。『前回』同様に掌で踊らされて、しかも踊らされている事にも気付いていない。この状況を脱する為には、やはり幾月を除くしかない。

（さて、どうするか……）

どうやって幾月を排除するかは4月以来ずっと考えてきたし、既に案はいくつかある。例えば幾月を締め上げて、全てを吐かせるとか。だがそれは下策である。たとえ拷問したところで、絶対に口を割らないだろう。『愚者』の仮面を甘く見てはいけない。下手に幾月を攻めては、自分が立場を失うだけの結果になる。

最善の策は、幾月の裏を何かの証拠によって示す事だ。それが義之自身の『前回』の記憶の他に何もないのでは、話にならない。

（いや、証拠はあるにはあるが……手元にはないからな）

そして次善の策は、外部の人間を利用する事である。例えばストレガだ。どの策を採用するか、そろそろ決断しなければならぬ。

特別課外活動部の屋久島行きが決定したその日の夜遅く、ポートアイランド駅近くの溜まり場で荒垣は一人道端に座り込んでいた。周囲には常連の不良たちがたむろしているが、誰も話しかけてはいない。

夕方から夜にかけてのこの界限は、大抵騒がしい。二年前は堅気の家族が住む家があったのだが、例の事件があつて家屋はなくなり、新しいものが建てられる事もなかった。そんな宙に浮いた空き地に、不良たちが居座るようになってしまった。だから鬱陶しい笑い声が始終響きっぱなしである。

己の罪の現場であるここが、吹き溜まりと化しているのは遺憾である。と言うか、腹立たしい。不良どもを一人残らずつまみ出してやりたいくらいである。

だが自分にそんな資格はない。そう思い定めているから、二年の間に頻繁にここを訪れながら、自ら揉め事を起こした事はなかった。もつともケンカを吹っかけられる事は往々にしてあるし、他人のケンの仲裁をやる事もあるのだが。ただここ一ヶ月ほどの不良たちは騒がしくはあるものの、揉め事を起こす事は少なくなった。元の常連たちより遥かに格上の悪党が、頻繁に現れるようになったからである。

そんな事を思っていると、ラジオの電源を落としたように周囲の喧騒が闇に溶けて掻き消えた。0時になったのである。

「……」

影時間の緑の空気は目に毒だ。だが普通の人間は棺桶で眠り、車や電車も動かなくなるこの時間は至って静かなものである。この時間そのものは忌まわしい限りであるが、静寂が訪れる事だけは有難いと思っている。しかしそんな不吉な静けさを破る、より不吉な足音があった。

「こんにちは。お元気そうで何よりです」

無表情な白い男と不機嫌そうな眼鏡の男。そしてより無表情な女。ストレガだ。この溜まり場の雰囲気を変えた張本人である。

「……」

最近のこの三人は、影時間でない普通の時間にしばしばここにやって来る。詳しくは知らないが何かヤバい事をやっているらしく、情報集めの為に不良どもから話を聞いて回っているようである。不良は最初こそ相手にしなかったが、やがて三人の桁外れなヤバさを感じ知らされたのか、素直に喋るようになっていった。そして最近では三人を恐れ、姿を現した途端に逃げ散るようになっていく。

そんな連中が影時間にやって来るのは、自分に薬を渡す時である。そして今日はその日だった。

「ジン」

不機嫌そうなジンが手提げ袋を投げて寄越してきた。受け取るとプラスチックがこすれ合う音が袋の中からした。手触りからして、頼んでいた薬のカプセルだとすぐに分かった。だが量が多い。

「こんなに頼んだ覚えはねえぞ」

いつもは十日分程度の量しか渡されないが、袋の中身は両手に余るほどだ。半年分はありそうだ。

「私たちはこれから忙しくなりそうなのです。今までのように、決まった時期にお会いする事はできなくなるかもしれません。だからまとめてお渡ししておきます」

「こんだけの金は、すぐには用意できねえぞ」

「いつでも結構ですよ」

タカヤは金に執着がない。今まで支払いを滞納した事はないが、たとえ少々遅れてもきつと何も言って来ないのだろう。

「お前も忙しくなるんとかやうか？」

関西弁を繰るジンが口を挟んできた。

「知つとるで。戻ってこいって、誘いが来とるんやろ」

「……このストーカー野郎が」

どこで調べているのか知らないが、ジンは情報通である。アキが復帰を誘ってくるのは今まで何度もあったし、その度に周囲の耳目に一々注意したりもしなかった。しかしだからと言って、何故こんな個人的な事を知っているのだろうか。謎である。

「貴方が彼らと行動を共にするなら、別に止めはしません。ですが……貴方はご存知ですか？ 月が真円を描く度に宴に繰り出し、あ

の塔にも頻繁に出入りしている、彼らの目的が何か。何の為に、そんな事をしているのか……」

「……」

「知っておくべきだと思いますよ？」

「満月の敵を全てやれば……影時間やあの気味の悪い塔が消える。そう聞いている」

ちょうど昨日の昼にアキが来て、その話をしていった。だが消す話はどちらかと言えばついでのようなもので、アキは昔話をしに来たのだった。単純馬鹿のくせに珍しく弱気になっていたものだから、こちらの調子が狂うくらいだった。だからさっさと追っ払ったので、それ以上の詳しい事は聞いていない。

「それは話が早い」

タカヤは唇の端を持ち上げて、にやりと笑った。猛烈な嫌味を込めた笑い方である。顔を見ているだけで、腹の辺りがむかついてくる。だが幸いにも、タカヤは首を回して顔をこちらから背けた。その視線の先は例の塔だ。

「ご覧なさい。滅びの塔は今宵も美しく聳えています」

「あ？ 滅びの塔だ……？」

タカヤは誰に対しても敬語で話すが、それに留まらず今のような芝居がかった物言いを時々する。しかも普段の無表情がうって変わって、やたら嬉しそうに恍惚と言うのだから、聞かされる方は堪ら

ない。

「あの塔こそは、まさに人類の希望……。人々の願いを乗せて天上へと至る、蜘蛛の糸です。ふふ……。あれを消す！ 果たしてそんな事が可能なのでしょうかねえ？ 運命がそれを許すのでしょうか？」

「何が言いたい」

タカヤはタルタロスから視線をこちらに戻してきた。その顔はいつもの無表情に戻っていた。

「力の使い道は持ち主が決める事です。好きにやればよろしい。ですが人には誰しも、器というものがあります。望んだ結果を必ず得られるとは限らない、という事です」

「……」

やれるものならやってみろ——
そう言っているかのようだ。

レールを外れて初めて見えるようになったものはある。例えば世の中には筋金入りの悪党もいる、とかだ。何の理由もなく、ただ退屈だからというだけで人を殺す事だってできるような。その点、タカヤは自分の知る限りで最悪の悪党だ。退屈で人殺しどころか、爆弾テロでも平気でやるだろう。

「あいつらとやり合う気か？」

「心配ですか？」

「……るせえよ」

そんな悪党が忙しくなるとは、何があったのか。何か余程面白い遊びを見つけたのであろうか。特別課外活動部とやり合うつもりでいるなら、それは何より面白いと考えるかもしれない。

「ご安心なさい。彼らと戦うつもりはありません。今のところは」

だが意外にも、否定の言葉が返ってきた。限定つきではあるが。あの部以外でタカヤが興味を持ちそうな事と言えば、思い当たる節が一つだけある。

「てめえ……坂本に何を頼まれた？」

「ふ……それは言わない約束ですから」

タカヤは再び唇の端を持ち上げた。こういう類の人間には、何を言っても無駄である。話にならないのだ。ストレガが何をするつもりなのか、気にはなる。そしてアキや坂本が心配かと問われれば、正直に答えればやはり心配である。だが心のままに振る舞う事は、自分には許されないのだ。

「ところで……普通の人間と違い、ペルソナ使いは影時間に起きた事を忘れない。何故でしょうか？」

「知るか」

「目を背けられなくなるのですよ。ペルソナは使う者の鏡です。故にペルソナ使いは、己の真実から逃れられない。嘘や偽善は通用しません。彼らも、そして貴方も」

そう言って、タカヤはようやく踵を返して溜まり場から去って行った。後の二人もそれに続く。

「てめえの真実……ってか。ふん、んな事言われるまでもねえ……」

この場所こそが、己の真実だ。目を背けたくても背けられない。頭よりも体が忘れてくれないのだから。ここを居場所として、死ぬまでこうしているしかないのが自分の真実だ。

鏡（2009/7/13）（後書き）

原作では荒垣とストレガの会話は7月23日と25日ですが、本作ではその日に重要なイベントを予定している為、この日に持つてきました。

本作の主人公の性格を設定するに当たりまして、実は幾月をモデルにしています。11月にアイギスが言う『幾月は表と裏の顔を完璧に使い分けており、これは全く常人離れした業』というセリフがそれです。その点、コミュごとに仮面を使い分ける主人公も近いものがあるな……と思ったのです。ただ主人公は相手を思いやる気持ちも、それなりにありますが。その点、『愚者』としては主人公よりむしろ幾月の方が格上かもしれませんね。

さて、そんな幾月の正体に主人公が気付いたこの話を持ちまして、第1章は終了となります。全体のおよそ三分の一程度まで来ました。ここまでは導入部として原作から外れ過ぎないように進めて参りましたが、第2章では乖離が少しずつ大きくなって行きます。

主人公は『一周目』で得た知識を元に色々と陰謀を巡らせていますが、果たして乖離にどこまでついていけるか……。きっと様々な想定外に遭遇しては、失敗するでしょう。でも失敗を重ねるうちに、真人間になっていくはずです。多分。

読んで下さり、ありがとうございました。

分岐点(2009/7/20)

一学期の期末試験を終えてから二日が経った。『前回』同様、今日から三泊四日で屋久島旅行である。

ちなみに試験を終えたその日は、やはり『前回』同様に校門前で初等科の生徒、天田乾を幾月から紹介された。天田本人にはまだ知らせていないが適性の見込みがあり、それを見極める為に夏休みの期間中に巖戸台分寮に仮入寮するとの話だった。

そしてゆかりと順平は既に天田と面識があり、真田は常になく動揺した素振りを見せていたのも同じだった。

今にして思うと、真田は天田と何らかの因縁があるのだと、この時点で気付いておかなければいけなかったのだ。それなのに『前回』は何も気付かないまま10月の復讐の日を迎えてしまい、取り返しのつかない事態になってしまった。あれは『前回』の一年間に残っていた種々の後悔のうち、最大のものの一つだった。

だが『今回』は違う。あの日の前に対処を済ませておき、荒垣の死は必ず回避するつもりでいる。そしてまた、これから屋久島で会う予定の桐条武治も同様である。武治は荒垣より事情がかなり入り組んでいるが、それでも死なせないつもりでいるのは変わらない。

坂本義之が彼らの生存にこだわるのは、単純な善意もある。だがそれ以上に、この二度目の一年間に後悔の種を残さない為、という理由もある。悔いを残したままでは、死後にまた時間が戻ってしまうのでは、と思っっているからだ。もっともその根拠は極めて薄弱な

のだが。

飛行機とフェリーを乗り継いで、南の海に浮かぶ屋久島にやって来た。港には桐条家の迎えの車が待つており、特別課外活動部の面々は荷物と共にそれに乗り込んだ。ただ引率役の幾月だけは他にいく所があるとの事で、港で別れた。

そして車に揺られる事数分で、桐条家の別邸に到着した。別邸はヨーロッパの古城風の重厚な佇まいで、何かのテレビ番組で紹介されそうな代物だった。慣れている美鶴を除く面々は、玄関口だけで呆気にとられていた。既に見ている義之さえ、少々驚かされる高級感である。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

玄関の向こうで一列に並んだ出迎えの使用人たちが、一斉にお辞儀をした。日頃から訓練しているのか、声も拳措も全員が完璧にシンクロしていた。

「今日から短い間だが、よろしく頼む」

「メイドって実在してたんだな……」

ようやく再起動を果たした順平が一声漏らした。順平は『前回』フェリーで一人大騒ぎしては空回りしていたが、『今回』は何故か大人しくしていた。しかしこれまで喫茶店でしか見た事がないであろうメイドの本物を目にしては、流石にいつもの調子が戻ってきたようだ。

その時、奥から数名のSPを従えた紳士が現れた。ただし紳士と言っても普段の幾月のような温和なタイプではない。無言のままに周囲を圧する重量感、いわゆる威厳を放つ、黒光りした鋼鉄を連想させる人物だ。特に右目を覆う眼帯が、彼が一方ならぬ過去を持っている事を示していた。

「お久しぶりです」

「……」

美鶴が挨拶するが、鋼鉄の紳士は一瞥しただけで無言のまま通り過ぎた。

「あ、あの人つてもしかして……桐条先輩のお父さん？」

桐条家現当主で、桐条グループ総帥の桐条武治。特別課外活動部をシャドウ対策の組織上の末端とするなら、武治はピラミッドの頂点に立つ最高責任者だ。

「だな」

風花の呟きに、義之は短く答えた。だが口の裏の頭では、考えを色々と巡らせていた。

（難しそうな人だよな……）

『前回』こうして会った時の第一印象もそうだったが、難しい人物だと義之は感じた。桐条武治とまともに付き合おうとしたら、絆を教える『我』が間に立ってくれでもしない限り無理だと思う。だが残念ながら、タロットの大アルカナは既に過半数でコミュニティ

を構築済みである。『今回』は『前回』と担い手が異なるケースがいくつかあるが、残っているアルカナも既に予約が入っているに等しい状況だ。

（女三人のあれって事は、性別からしてあり得ない。正義と剛毅は多分天田とコロマルになる。審判は……前と同じだろう。あるとしたら太陽だが、神木とはもう顔を合わせてるし、多分ないな）

こうして指折り数えてみると、アルカナの数しかコミュニティを築けないというのは存外に不便なものである。トート版を含めるなら調整、欲望、技と三つも残っているが、それもないだろう。極めて特殊な永劫のケースが、他の人物でも起きるとは考えにくい。

もし武治とコミュニティを築けたら、今後の為に非常に有益だと思う。だがやはり無理であろう。同じ助けたい人でも、荒垣やストレガとは事情が異なるのだ。

「……おし！ 行こうぜ義之！ 早速ビーチに突撃だ！」

そんな事を考えている間に、急にテンションが上がった順平が肩を組んできた。すぐには準備できないとぼやく女性陣を振り切つて、メイドの案内で部屋へと向かつて水着に着替える事になった。

幾月に言わせると体が灰になる夏の太陽が眩しいビーチに、男衆だけでやって来た。日本の本土とは明らかに密度が違う濃厚な緑を背後に、細かい無数の粒で点描された白が足元に配置されている。そして前面の手前側はエメラルドで装飾され、奥は無窮に続くマリンブルーが広がっている。同じ海でも人工的なポートアイランドのそれと違い、自然美がその本領を存分に発揮している光景だ。

「んー、このピーサンに足の指の付け根が食い込む感じ……。ようやく夏実感だぜ！」

「沖に目印になるような物はないな。泳ごうかと思ってたが」

順平と真田はそれぞれに、普段は目にしない自然に感じるものがあるようだ。しかし義之は自然と人工を差別しないようにしているので、巖戸台にある景色と比べて特別な感慨はない。

「だぜ、じゃねーっつの」

そうこうしているうちに、女性陣がやって来た。もちろん水着姿である。それを男衆は特に発言がないまま出迎えた。発言が起こったのは、三人が十分近付いて来てから。

「おい、お前ってどのタイプが一押しよ？」

順平が肘で脇腹をつつきながら、さりげなく難問を吹っかけてきた。正常な神経の男から見れば、いずれ菖蒲か杜若。軽く一晩くらいは悩みそうである。だが義之は全く悩まない。

「どうでもいい」

この三人の中で誰が一番、などと言う事はできない。彼女たちは三人とも等価である。ついでに言うと、千尋と結子も同じように等価である。しかも博愛精神でもって彼女ら全員を平等に愛しているわけではない点が、よりたちが悪い。博愛でも酷い話だが、そうではないのは最低である。自覚はあるが、どうしようもない事である。人が己の意志で情欲を抑えきるのは至難の業だが、無理に掻き立て

るのも同じくらい難しい。

「んだよ……海といえばビーチに水着にひと夏の思い出たる？ 自分で言ってたじゃんか」

ちょうど一週間前、ラウンジで放言した道化師のセリフだ。『前回』は順平が言っていたが、『今回』は訳あって義之が代行していた。

「あれはお前の真似をしただけさ」

「ひでえな！ お前って俺をそんなナンパな奴だと思ってたのか？」

「お前は部で一番の男前だよ。お相手は頼む」

「そ、そうか？ オッケー！ 俺に任せとけ！」

『前回』の順平はこの時、セクハラ発言を連発して女性陣から煙たがられ、翌日に別行動を取られてしまっていた。しかし最近の順平は妙に大人になっている。実際、今日のフェリーでも一人で騒いだりしなかったし、未だ女性陣の水着を論じたりもしていない。だが義之としては、明日は彼女らと別れておかないと困るのでこう言っただのだ。

ただ部で一番かどうかはともかく、順平が男前であるというのは嘘ではない。それを自分で台無しにしまっているのが残念なだけ。

「いやあ、目の保養ですなあ。ゆかりツチのは、想像より強気なデザインですなあ！」

順平はここでもようやく水着を熱く語り出した。だが褒められた（？）三人は三人ともに引き気味である。それを見届けてから、義之は一步身を引いた。すると真田が話しかけてきた。

「坂本、知ってるか？ トライアスロンの選手も、プールより海で鍛えている選手の方が強いらしいぞ」

どこかで聞いたようなセリフである。順平もそうだが、真田も『前回』と微妙に言動が変化している。絆を教える『我』が真田の無意識に何かを刷り込んでいるのか、義之に熱い友情を感じているかのようだ。それ自体は構わないのだが、プロテインやトレーニングに付き合わされるのは少々迷惑である。

「いえ……そんな事より、先輩の水着。岳羽が目のやり場に困りますよ」

言動と違って、水着の種類は『前回』と誰も変わっていない。真田のそれは目に毒なブルーメランタイプである。

「ん？ これはな、水の中での抵抗を少なくする為の……」

「なるほど。ではそう説明してあげてください」

そうやって真田を女性陣へと押し付けて、義之は密かにビーチを引き上げる事にした。目印もない沖へと向けて、いつ終わとも知れない遠泳に付き合わされては堪らない。ペルソナ能力はともかく、普段の体力では真田に敵わないのだから。

義之を除く皆が一通り海を楽しんだその日の夜、美鶴から集合がかけられた。場所は別邸の応接室である。屋敷全体と同じく古典的なヨーロッパ風の装いで、前世紀的な調度品が群れをなす豪勢な部屋だ。雰囲気としては寮の美鶴の部屋と似ているが、それを何倍も広くした感じである。ただそうした部屋の基調から外れた要素として、正面奥に大きなスクリーンがかけられている。

集められた皆はそれぞれソファに腰を下ろし、何かと訝しんでいる。ちなみに幾月はいない。そこへ奥の扉が開き、桐条武治がやって来た。そして特に前置きもなく、いきなり語り出した。

「美鶴から大体は聞いているな。全ては我々の……大人の罪だ。私の命一つで贖えるなら、とうにそうしていたところだが……今や君らを頼る他にない」

（我々の……ね。まあ誰の罪だろうと、責任は俺が取るしかないんだが）

続けて武治は、先代鴻悦がシャドウの力を利用して造り出そうとしたものとは『時を操る神器』である、と話を進めた。皆は驚いたり訝しんだりしながら耳を傾けているが、義之は契約者としての己を振り返っていたので、特に注意して聞きはしなかった。

やがて武治はリモコンを操作し、スクリーンに酷く荒い映像が流れだした。誰かが映っているようだが、顔はほとんど見えない。

「この記録が……心ある人の目に触れる事を願います」

映像と同様に荒い音声でもって始まる、十年前のビデオ記録が皆

に開示された。顔の見えない語り手に曰く、忌まわしい実験によって未曾有の被害が残るであろう事、しかし世界の破滅を回避する為にはやむを得ない。集めたシャドウは爆発によって飛散した。悪夢を終わらせる為には、それら全てを消し去るしかない、と。11日に幾月が寮で語った、十二のシャドウを倒せば影時間とタルタロスが消えるとの話と一致する主張である。

「全て……僕の責任だ」

語り手が己の責任を口にした時、義之はスクリーンに目を向けた。

「全てを知っていたのに成功に目が眩み、結局はご当主に従う道を選んできました。全て……僕の責任だ」

セリフを言い終えた後の一瞬だけ、映像が鮮明になった。四十歳くらいの、少々気弱げな印象のある男性だった。そしてビデオは終わった。『前回』見たものと一言一句変わらない、全く同じ内容だった。

「お父さん……」

「お父様、これは……!？」

「彼は岳羽詠一朗……当時の主任研究員だ。実に有能な人物だった。その彼を見出して利用し、こんな事件まで追いやってしまったのは、我々グループだ。詠一朗は……桐条に取り殺されたも同然だ」

（取り殺された……。まあ確かに。とても他人事とは思えないな……）

岳羽詠一朗の背景、行動、心情。今のビデオ記録と、『前回』の11月に聞いた本当の詠一朗の両方に思いを馳せながら、義之は不思議な共感を覚えた。死者に対しては仮面を付けられないが、それでも『愚者』の心に共感が湧き起こった。

そんな中、ゆかりが立ち上がった。信じていたものを一息に突き崩された、足場を失った人間の悲劇さを込めて。

「つまり……私のお父さんが、やったって事？ 影時間もタルタロスも、たくさんの方が犠牲になったのも……みんな、お父さんのせいって事？」

義之は目を閉じて、ゆかりの苦悶を黙って耳に入れた。隠し事をしていたのもこれが理由だったのかと、自身を慮って父親の罪を隠していたのかと。いささかあらぬ方向性でもって、美鶴に矛先を向ける。

（美鶴は詠一朗の事を知らなかったはずだ。だが知っていても……やっぱり黙っていただろうな）

真実を明らかにする事が、常に正しいとは限らない。知る必要のない、或いは知っても意味のない真実というものはある。『前回』得た知識をこれまで皆にほとんど明かしていない義之にとつて、それは一つの信条と化している。その点で、心の準備をさせる間もなく『真実』をいきなり開示する武治のやり方は少々拙劣である、と義之は感じた。一切の欺瞞を許さないとも言わんばかりの、武治らしい厳格さの表れであるのかもしれないが。

「かわいそうとか、やめてよ！」

ゆかりはそう叫んで、ドアを乱暴に開けて出て行った。

「行ってきます」

美鶴に頼まれる前に、義之は席を立つた。

別邸を出てビーチまで行くと、やはり『前回』同様にゆかりはいた。三日月が中空で僅かな光を放つ暗い夜の海を前にして、一人で佇んでいる。悲しいやら悔しいやらの感情が熱帯の夜の気温をも下げるようで、失意の気配が目にも見える。

「岳羽」

「坂本君……」

声をかけると、ゆかりは振り返ってきた。既に涙を零していたように、目元が赤い。

「覚えてる？ 前に病院で話した事……」

4月19日に病院で語った身の上話だ。『今回』のその時は時間が戻った事をまだ理解していなかったので、何故今さらこんな事を話すのだと訳が分からなかったが、話の内容そのものは覚えている。

「お父さんは主任だったから、世間から目の敵にされてさ……。でも私、ずっと信じてた。お父さんは悪くないはずだって……」

『前回』のこの話の流れでは、信じていた事は無駄だった、と少々自暴自棄になるところである。だが義之は敢えて先手を打った。

「信じてやれよ」

「あんなのを見ても……まだ信じて言うの？」

「お父さんは責任感が強い人だったんじゃないか？ 自分の責任じゃない事まで、背負ってしまったんじゃないかな」

言いながら、ファルロスとイゴールに言われた言葉を思い出した。

自分の行動に、責任を取る――

ベルベツトルームの客人が、等しく背負う宿命であるらしい。岳羽詠一郎はペルソナ使いではなかったはずだが、もしペルソナを得ていたら、あの部屋に招かれる資格をも得られたのではないだろうか。だがそんな事を知るはずのないゆかりは、目を剥いて怒鳴ってきた。

「勝手な事、言わないでよ！ 貴方、お父さんの事なんか何も知らないくせに！」

「……」

君の父親の事は、良く知っている――

そう言いたくなるのを抑えるのに、義之は意外なほどの労力を必要とした。

岳羽詠一郎が背負った『責任』を思うと、身につまされるものを感じる。今見たあのビデオは幾月の手により改竄されているはずだが、全ては己の責任であるとのあのセリフは、実は詠一郎の本心を期せずして言い当てていたのではなからうか。

彼は実験を強制的に中断する事で、滅びの訪れを十年遅らせる事に成功した。だが実験の主任として、彼は現在の事態に大きな責任を負っている。たとえ実験が本意でなかつとも、だ。もし誰かが彼に『貴方に責任はないのか』と問えば、全人生を懸けた決意を込めて、『ある』と答えたはずである。

「……ごめん。ありがとう……。なんか私、君には助けられてばかりだね」

ゆかりは未だ涙が乾ききらない瞳で、無理をして微笑んでいる。ちよつと良い雰囲気が漂うのを感じて、義之も微笑みを返した。

「はは……私たち、何か変な感じね」

（全くだな）

義之は指を眉間に当てる仕種を作り、微笑を隠した。このビーチでの会話は、『前回』のゆかりが自分を意識し始める決定打であった事だろう。『今回』は真実を知っている為に話の流れを少々変えたが、それがどう影響するか。ひよつとすると、より強く意識させる結果になつたかもしれない。

ゆかりと特別な関係にならずにいる為には、良くない手だった。だが仕方あるまい。『前回』と全く同じ事を言つたり、冷たく突き放したりするには、岳羽詠一郎には共感するところがあり過ぎる。屋久島行きが決まつた際に、ひと夏の思い出がどうか言つて顰蹙を買つた事と相殺されてくれれば、ちよつと良いのだが。

「おーい！」

そうこうしているうちに、順平がやって来た。

「どうした？」

「ああ、もうすぐ影時間になるからさ。早いとこ戻って来いって」

「あ、そうか……。影時間って、場所とか関係ないんだよね」

「あのさ、ゆかりツチ。お前の気持ち分かったか……。んな事、俺には言えねえ。でもな、桐条先輩の事……。あんまキツく言わねえでやってくんねえか。先輩も辛いんだ……。先輩の親父さんもな」

「うん……。分かってる。ありがとう……」

（おや……）

義之は少々驚いた。順平にしては、なかなか良い事を言う。ゆかりと美鶴、それぞれの父親と自身のそれを比べて、思うところがあるのかもしれない。

『今回』は『前回』と勝手が異なる点がいくつかある。仲間同士の関係も、『前回』と全く同じようにはなっていない。順平と真田との間にコミュニティが築かれた事が、主たる原因であろうが。そしてそれらは今のところ良い方向に向かっている。そんな風に互いの間の空気が少々変わっている二人と共に、義之は別邸に向かって砂浜を歩いた。

「桐条先輩のお父さんは……。十年前の当事者なんだよね。生きてる人も辛いんだよね……」

「……」

歩きながら、ゆかりはぼそりと呟いた。それと共に義之の思考は回転を始めた。桐条武治とどう向き合うか。これは非常に大きな問題だ。

この屋久島旅行は一年間全体の流れの中で、大きな分岐点の一つだ。桐条武治と話をする機会は、11月4日以前ではこの時だけだから。明日か明後日の時間を使って、武治に真実を話す事はできる。『前回』の武治の死には後悔を感じたし、美鶴の事を思えば死なせたくはない。当の本人に対してどのような印象を抱こうと、その点是不変わらない。後悔とは理屈ではないのだ。

（だが、どこまで話すか……）

幾月に裏がある事を、武治に信じさせる方法は既に考えてある。だがどこまで真実を話せば良いか。それが問題だ。

十二のシャドウを倒せば、デスが復活してニユクスの来訪が宣告される。デス即ち綾時、即ちファルロスの意志とは関係なく。それを話す事はできる。だが話せば、デスを復活させずに事態を收拾する事を武治は考えるだろう。残る六体のシャドウを倒さずにおくのは、4月にファルロスと話し合って確認した通り無理だ。そうなるに残る方法は、ファルロスを殺すしかない。義之はそれを選ぶわけにはいかなかったが、武治ならどうするか。

（やるだろうな……）

己一人の命で贖えるなら、とのセリフに現れているように、桐条

武治は十年前の事故に過剰なほどの責任を感じている。なればこそ、事態の解決に手段は選ばないだろう。タルタロスを探索させる為に、百人もの孤児を集めてペルソナを植え付ける実験をしたくらいだ。ストレガを生み出したその実験を主導したのは幾月であろうが、目的と規模を考えれば武治が承知していなかったはずがない。それくらい非情になれる人物であれば、行動は自ずと読めてくる。

坂本義之ごとく、デスを殺す――

桐条武治が全ての真実を知れば、十中八九その方法を選ぶだろう。もっとも義之を殺したところで、デスの復活を防げるとは限らない。いや、単純に殺しただけでは九分九厘防げない。不完全体のデスが死んだ義之から分離して現れるだけだ。綾時を殺せるのは義之だけだったように、今のデス即ちファルロスに殺すには、義之が自らのペルソナを使って自殺する以外に方法はないだろう。

だが単純に義之を殺しさえすればいいと、武治が判断する可能性は高い。或いは自殺させる必要がある事まで分析し、薬でも何でも使ってそうさせる可能性は、より高い。

（殺されないようにしつつ、利用する……。難しいな）

最も簡単なのは武治に何も話さず、このまま成り行きに任せる事だ。そうすると11月4日に幾月が本性を現す。『前回』はアイギスが幾月に操作された為に不覚を取ったが、あの事態を防ぐ事は難しくない。何でもいから理由をつけて、アイギスを自分の傍から離さないようにすればいいだけだ。

確実を期すなら、11月を待たずに幾月を殺してしまえばいい。何しろこの屋久島旅行が終われば、幾月を生かしておく意味はほと

んどなくなるのだ。幾月に利用価値があるのは、早ければ明日まで遅くとも8月の天田の加入までだ。それ以降ならストレガに依頼の実行を指示すればいいし、自分でやる事だってできないわけではない。

（よし、やっぱりそうしよう。桐条武治には何も話さないでおこう）

義之は決断した。実はここまでの事は、かなり早い時期からずっと考えていた。6月にストレガと接触したのも、11月4日より前に幾月を除く方法がないかと考えた上での事だったのだ。ただ自分の手を汚すのもストレガにやらせるのも危険があるので、できれば桐条グループにやらせたいと思っていた。

だから決断を先延ばしにしていたが、今日に武治の人柄を確認して、ようやく踏ん切りがついた。あのように責任感が過剰な上に厳格が服を着て歩いているようなタイプは、下手に接近しては自分が危険になる。コミュニティを築けばまた別だが、築ける可能性は低い。

（これって完全に陰謀だな。俺も腹黒くなったもんだ……）

ゆかりと順平と並んで歩きながら、極々僅かな笑みを義之は浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464u/>

ペルソナ3 滅びの意志

2011年11月17日10時11分発行